# 女學世界定期増刊

第壹巻第八號

明治三十三年十二月廿五日第三種郵便物認可
明治三十四年六月十五日發行（毎月一回五日發行）

# 花あや錦



# 『花あやめ』目次

## 和歌



## 新躰詩





## ◎名流雜俎



## 雜錄



周宮房子內親王殿下

# 名流筆蹟



柳原權典侍　　閑院宮御息所　　中島歌子女史

彫塑會作品



微風

(靑木外吉作)



穩和

(水谷鐵也作)

山村の首夏



故小林鐵次郎君遺稿
小林鍵太郎君編述

# 圍碁全書

全六冊和装上製

第三編

## 圍碁定石

全壹冊和装正價拾五錢郵税四錢

定石を圍むことを得るに至れば聊早本道に歩を進めたるものなりされど〻邪路に踏入り其正式を誤まること兎に角此時に多し本編詳に其法を示して最も懇切を極む讀者之に依て自得する處多かるべし

既刊

第一編 圍碁入門 正價拾五錢郵税四錢
第二編 圍碁初步 正價拾五錢郵税四錢

續刊

第四編 圍碁珍瓏
第五編 圍碁布石法
第六編 古今名家手合集

發兌元 東京 博文館

# 新編發行廣告

野崎左文君著

# 日本名勝地誌

本邦無比の漫遊案内書

（製本出來）

## 第十編 西海道之部

◎正價三拾錢 郵税八錢

本誌全部十二冊既刊下記の通〇六冊一圓七十五錢〇十二冊三圓四十錢〇外に一冊郵税八錢宛

本編載する所は西海道九州及び壹岐對馬の名勝舊跡にして口繪の寫眞銅版は九州の名勝を選びて眞影を見るが如く記事詳細にして筑紫の太宰府より天下の絶勝耶馬溪を紹介し津々浦々の果までも世に知られ人に稱へられたるものは網羅して遺すことなし彼の肥後熊本の名城は以て西南戰役の當時を思遣られ阿蘇の噴火を望みて本道第一の活火山なるを知り薩摩隼人の名殘として城山に英雄の蹟を訪ふ是れ本會の特色なり……

第一編 畿内之部
第二編 東海道之部上
第三編 東海道之部下
第四編 東山道之部上
第五編 東山道之部上
第六編 山陽道之部
第七編 北陸山陰道之部
第八編 南海道之部
第九編 北海道之部

發兌元 東京日本橋 博文館

●京にしき

この品はづゝう、めまい、すりきずに特効あり

づゝう早なをし薬

定價一枚一錢郵送料二錢

東京本石町二丁目角 博愛堂

# 治肺新法

附錄 肺病全快實歷談

此書は拙者肺病全快に付其實地經驗の方法を詳記したる物郵券三錢封入申込者に無代施本致べし

東京下谷上根岸町百十一

(電話本局二一二五九番)

藥學得業士 金澤巖

竹柏會は我國風なる短歌、及新體詩美文等を研究せんとて、佐々木信綱氏主任となり、東久世伯萬里小路伯等幹事となりて起せる會なり。竹柏會は。あまねく會員を募集し、歌文の添削質疑に應じ又歌會を催し、會誌を頒つ。入會を希望せらるゝ諸氏は郵券二錢を投ぜられよ。速に規則書を呈すべくなむ。

東京神田小川町一番地 竹柏會

糸登美子著

新案衛生 **婦人化粧法** 袖珍美本 定價拾錢

開けて嬉い此本は小野の小町や揚貴妃が化粧の法を種として專衛生を主とし從來有觸たる中毒を構はぬ樣な比にあらず又女子一般の衛生法を附錄とす

發行所 東京市神田區西小川町貳丁目 三育舍

女子高等師範學校附屬幼稚園内フレベル會發行●每月一回五日發行



●婦人教育の指針●幼兒教育の燈明●唯一の家庭雜誌

第壹卷第七號 七月五日發行豫告

要目

子とも欄に例に由りて愈面白かるべく●家庭欄には神門とも子女史の家庭の愉快ぶみ子氏の過ぎたる躾方は共に近來有數の文字、其他長瀬鑑學士の看護法の他更に坂井錮子の海水浴の衛生は時節柄是非一讀すべきものたらん●學術欄には磐水生の英語俚諺及東海生の蛙の話出づべく●史傳欄の鄧越生のローランド夫人は巧に慘たる巴里の恐怖時代を目前に髣髴せしめ下村教授の朶東尼はこゝに本號にて完結すべく其他子とも●文苑●談林●寄書●雜錄●彙報等例に依りて益々趣味あり尚本號には米國婦人バラッド選。我國女子教育家庭教育等に付きて精密なる觀察談を掲載すべし

第一卷第一、二、三號三版出來第四、五號既刊

一冊拾錢 郵稅壹錢

六冊前金郵稅共六十三錢●郵券一割增

發兌元 日本橋區本石町三丁目 金昌堂

(甲の二)

女子之友臨時發刊第九十二號 六月三日發刊

# 第四才媛詞藻

定價金貳拾錢 無送料

**口繪** 寫眞版二十四頁●東京市内各女學校長職員(伯爵土方久元君、男爵細川潤次郎君、高嶺秀夫君、渡邊龍聖君、篠田利英君、林吾一君、伊藤貞勝君、小山作之助君、成瀬仁藏君、吉村寅太郎君、麻生正藏君、西田敬止君、水谷直孝君、棚橋絢子刀自、鷲山彌生刀自・●大日本婦人教育會役員●下田義天類先生肖像並に筆蹟●熊本市九州女教員會●華族女學校、女子高等師範學校卒業生●日本女子大學校開校式●長野縣師範學校女子部●名古屋高等女學校卒業生、京都少女唱歌會長並に會員●松下禪尼(福地帝國圖案社主畫)●山内一豐夫人(渡邊幽香女史畫)●杉浦玉舟、同小蓮、金原霞汀、安井耕圃諸女史書●鈴木秋子孃書簡●女子高等師範附屬高等女學校、東京女學館、成女學校、女子職業學校生徒書●朝鮮、布哇婦人風俗●懸賞募集當選書畫●小説友千鳥挿畫(速水不染畫)

**記事** 二百餘頁●名家歌文、募集歌文、學生詩歌文など何れも妍を爭ひ芳を競ひ明治昭代女流文學の精華を蒐め燦爛たる大觀人目を眩すの●附錄に理科大學八木奘三郎氏の「韓國婦女譚」津田梅子女史の「渡米當時の懷舊談」安井哲子女史の「歐米に於ける婦人の俱樂部談」鈴木さむしろ女史の小説「友千鳥」等を掲げ有益多趣一讀手を放つに忍ばざらしむ

普通**女**子の友定價一册十錢六册金五十七錢同臨時發刊共六十七錢無郵稅

## 婦人必讀書目

- ●はなかたみ 金三十五錢 郵稅五錢
- ●玉くしげ
- ●才媛詞藻
- ●第二才媛詞藻
- ●第三才媛詞藻 以上各二十錢 無送料
- ●東洋女訓叢書 一册四十五錢 郵稅六錢
- ●語學叢書 一册一圓四十五錢 郵稅十二錢
- ●女學校用算術教科書 上卷五十五錢下卷五十錢郵稅各六錢
- ●歷史兒談 一册八錢 郵稅二錢
- ●ジャンダーク 金二十錢 郵稅四錢
- ●明治才媛文集 金二十五錢 郵稅四錢
- ●明治才媛歌集 金二十五錢 郵稅四錢
- ●小兒の行爲 金二十五錢 郵稅四錢
- ●初學昆蟲採集法 金十五錢 郵稅二錢
- ●地理寫眞帖 特別一峡二圓上製一圓四十錢並製八十錢

詳細目錄郵券五厘封入照會あれ

(甲の三)

發行所 東京市神田區鎌倉町三番地 東洋社

大賣捌所●東京堂●北隆館●東信
社●田中屋●盛春堂●大阪盛文館

# 警察監獄全書

## 既刊

第壹編 ●監獄學 法學士 谷野格君著

第貳編 ●司法警察手續法 法學士 中小路正雄君著

第參編 ●警察學 法學士 宮國忠吉君著

全壹冊 洋裝菊判 三百餘頁

第四編

## 衛生法

法學士 責中佐兵壽君著 （六月下旬發行）

正價上製金五拾五錢郵税拾錢●並製金四拾錢郵税八錢

疾病の流行は社會の災危なり其人口を減少すること數萬の多きに達し其公費を費すこと數百萬の多きに達す、震災海嘯如何に甚だしと雖も未だ以て疾病の災害に若かざるなり豈寒心すべきにあらずや、是を以て曩に傳染病豫防法の發布あり次て海港檢疫法の發布あり爾來衛生の事務は疾病と共に愈々其繁激を加ふ而して半億の國人中其豫防に關し又其行政との干係に關し斯法の蘊奥を究めたる者果して幾千人ぞ、國人の衛生思想に缺乏する夫れ斯の如し是れ本書の著者が多年研究の結果を社會に發表せる所以なり

## 續刊

第五編 ●行政警察法 法學士 中小路正雄君著

第六編 ●日本監獄法 糸井仙之助君著

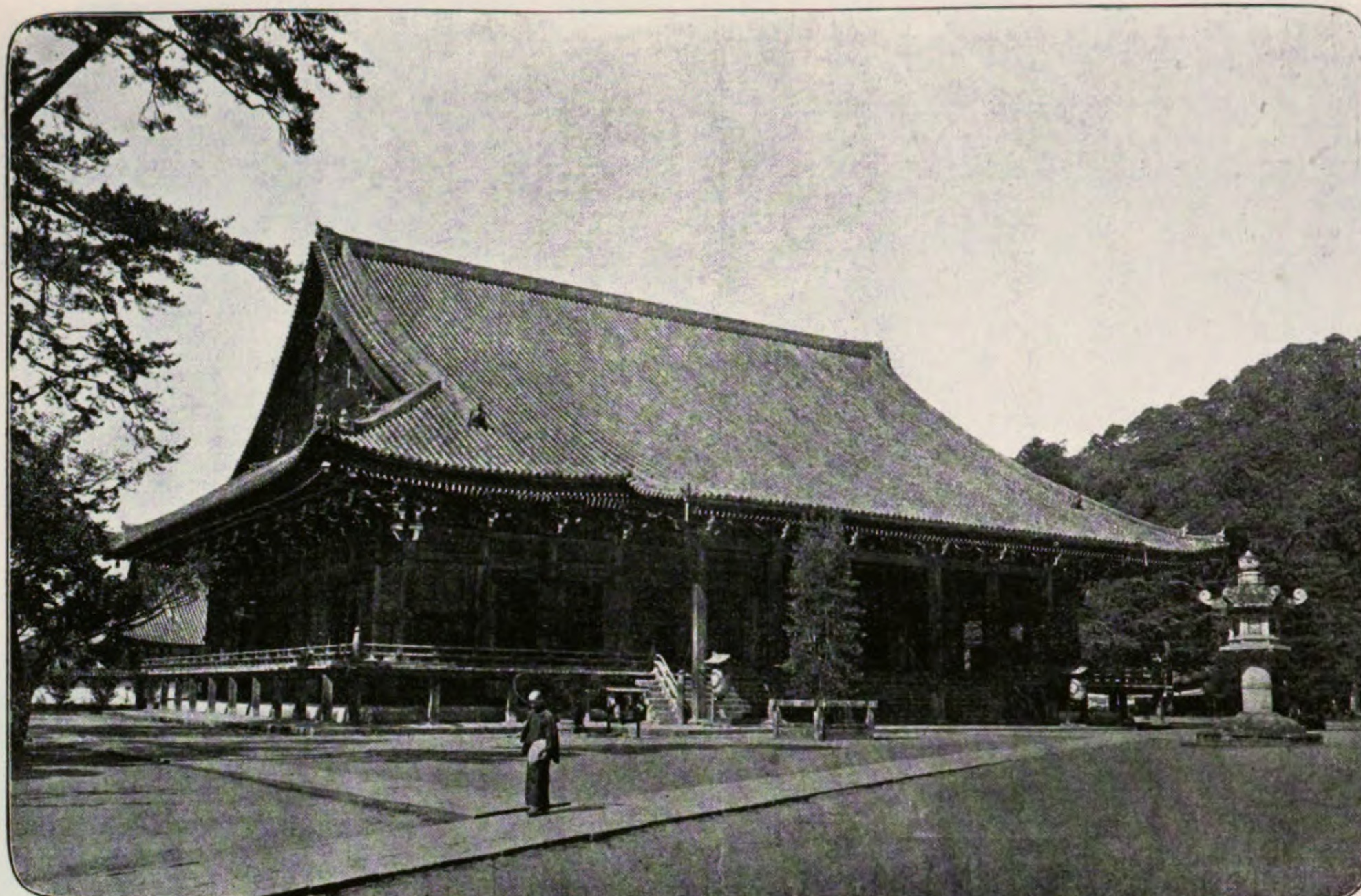
●警察監獄全書正價（全部六冊）●上製壹冊五拾五錢 ▲六冊前金三圓拾錢 ▲郵税壹冊拾錢 ●並製壹冊四拾錢 ▲六冊前金貳圓拾錢 ▲郵税壹冊八錢

發兌元 東京 博文館

（甲の四）



下田歌子女史



京都智恩院大本堂



母と小兒



竹柏會員婦人部

# 奇書出版廣告

文武堂藏版

田口卯吉君序　金井啓一君著

## 世界一大奇書　權謀學

全壹冊洋裝袖珍　クロース金字入　正價三拾錢　郵税四錢

所謂權謀なる者を科學的に解釋分類して其秘蘊を發揮し、其妙理を闡明したる者是れ此の權謀學なり、而して附錄には模範權謀學として古今東西の英雄豪傑が功を建て難を解きたる妙計奇策より市井小人の狡計猾策に至るまで無慮數十則を網羅せり故に此書を精讀する者は神機妙算權變自在の大策士たるを得て、天下の事意の如くならざるものなかるべし、請ふ一本を購ひて此言の妄ならざるを知り賜へ、

發賣元　東京日本橋本町三　博文館

發賣元　東京神田表神保町　東京堂

---

◉有効目藥 **晴光水**　定價一瓶拾錢　送料貳錢

如何なる眼病も一度用ゆれば全治請合の妙藥なり

◉目藥 **眼清膏**　定價一貝五錢　送料貳錢

◉虫歯妙藥 **九仙散**　定價一袋九錢　送料貳錢

蟲齒に苦しむ人之を服用せば四時間後に必治の特効ある無類の靈藥なり

◉注意＝爲替は最寄局へ振込郵劵代用壹割增

調劑本舖　越後刈羽郡石地町　名達半十郎

特約取次　東京京橋區大鋸町十一　野口竹次郎

---

◯奏効確實 器械不要 **簡易複寫インキ**

蒟蒻版寒天版及び其他の印類又は器械藥品等を要せず此のインキ一品にて簡便迅速座上立どころに同一の文書圖畫數十百枚を印刷し得べし◯即ち此インキを以て書したる原稿より直接他の白紙へ字痕を透徹する者にして一枚の原稿より凡七八十枚宛を寫し一瓶のインキにて原稿百數十枚を作り複寫壹萬餘枚を得るものなり

（使用法說明書を附す）

◉本品は既に諸官衙及郡區町村役場等の御用品なり

◉定價二オンス堅裝瓶入　送料共金四拾錢　爲替神田郵便電信局郵劵壹割增

發賣元　神田區末廣町三十八番地　中村屋商店

---

◉廣告大取次　東京神田千代田町　博報堂

（乙の三）

## 文藝倶樂部 增刊第七号

# 親こゝろ

五月十五日發行
正價 貳拾五錢
郵稅 貳錢五厘

### 口繪

◎意匠畫(精彩石版)……中村不折畫
◎親こゝろ(精彩木版)……富岡永洗畫

### 小說

◎親こゝろ……廣津柳浪君
◎六大洲の發見……長田秋濤君
◎女夫心中……廣津柳浪君

廣津柳浪氏の親こゝろに添ふに長田秋濤氏の『六大洲の發見』尙柳浪氏の『女夫心中』を以てす一は奇怪の物語一は濃艶の說話以て『親こゝろ』の缺點を補ふて餘りありといふべし讀者諸君幸に愛讀を賜へ……………

### 雜錄

◎藝妓の花見姿(アートペーパー)
◎美人と俳優(八頁)
◎食客……藤本藤蔭君
◎古水兵……岩田鷗夢君
◎浦づたひ……太田玉茗君
◎鷄助集……有本樵水君
◎朧夜物語……德田秋聲君

發兌元 東京本町 博文館

## 女學世界 春季增刊

# 壷すみれ

第四號

三月十五日發行
正價金廿錢
郵稅貳錢

口繪(◎北白川宮御母堂殿下◎御殿場長原の富士◎パッテンベルグの王女殿下◎信濃善光寺◎跡見花溪女史の書◎華族女學校◎奈良高等女學校◎東京女學館卒業生◎愛敬女學校生徒◎米澤高等女學校卒業生◎其他名家寄書)

才媛諸君の投稿に係る——◎小說◎國文◎消息文◎普通文◎和歌◎新體詩 何れも絢爛錦繡の文字にして 文苑雜俎には知名の文士才媛の寄稿を集載せり

名家談叢(附錄)◎幼年時代に於ける自己の感化(三輪田眞佐子)◎清韓遊歷所見(奥村五百子刀自述)◎書談(野口小蘋女史述)◎日本の女子教育(棚橋絢子女史述)

發兌元 博文館

(乙の四)



東京裁縫女學校卒業生

# 名流墨蹟

（跡見花蹊女史筆）

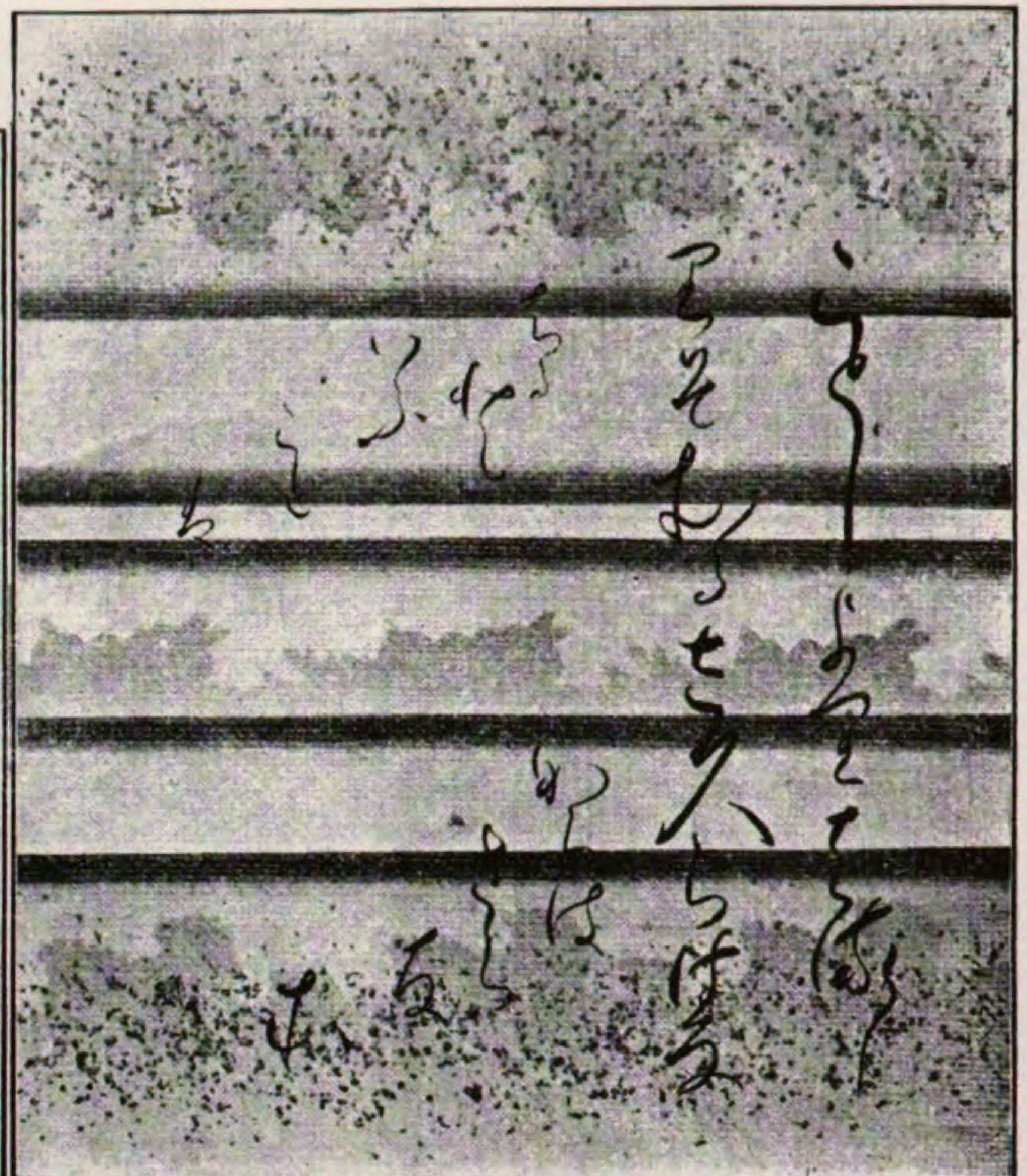




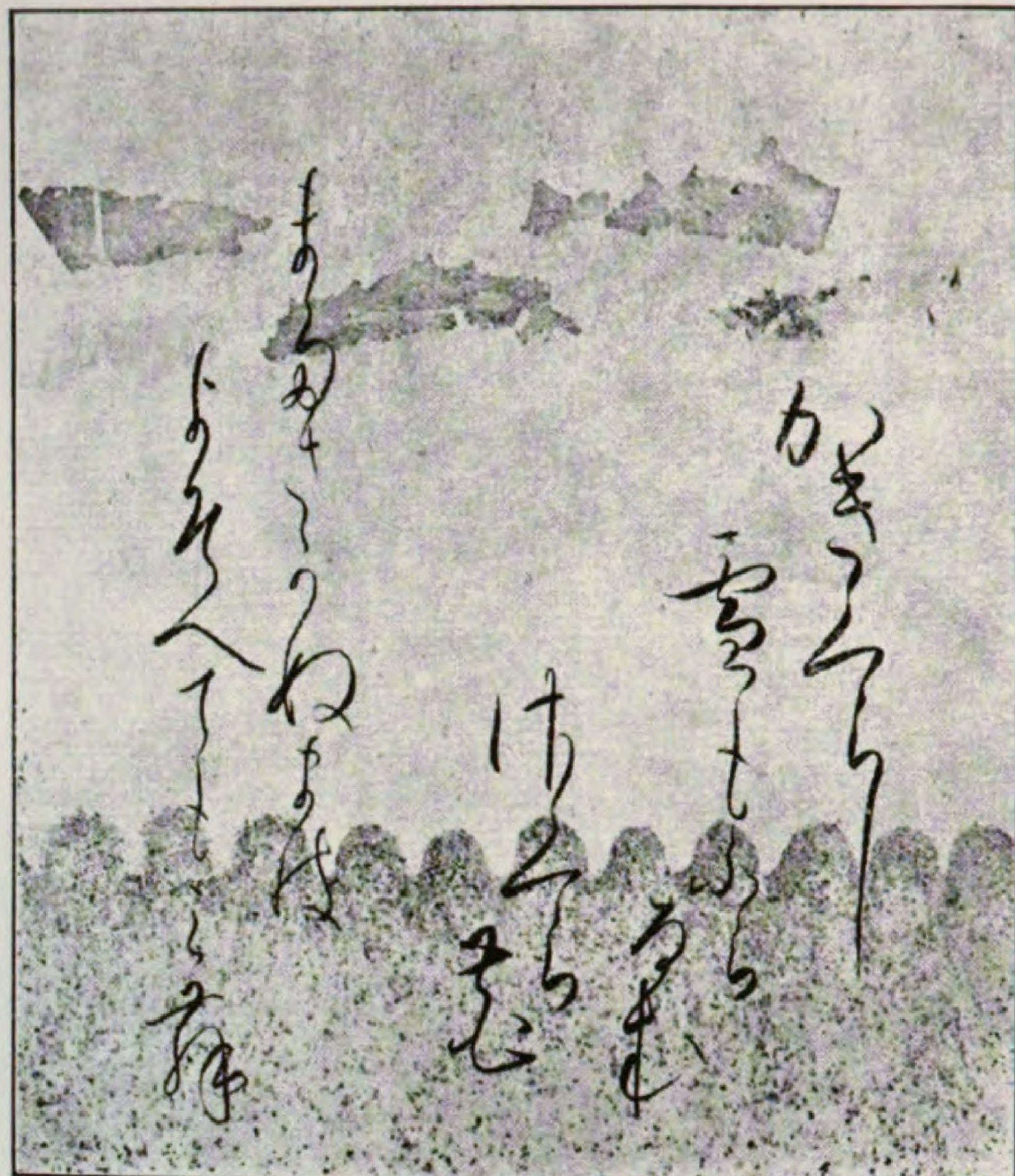

（斯波滋子の筆）



（齋藤松野の筆）



愛敬女學校卒業生　須田はつ子



同上　廻ひで子



故湘煙女史中島俊子君



博文館諸雜誌廣告取次

京橋區尾張新地

弘報堂

●速記法 自宅獨習生募集

二ヶ月卒業 月謝三十錢

○規則入用者は郵券二錢を投ずべし

東京市下谷區徒町三丁目九拾五番地 ●速記學專修所

●議員召集●

議事錄

每月一回 見本七錢

學生雜誌一月以來續刊

機關

議員制 青少年 筆戰場

規則申越次第 進呈

東京神田區千代田町二 帝國少年議會

總裁小松宮大妃殿下

副總裁鍋島侯爵令夫人

大日本女學會發行（東京麴町區土手三番町二八）



第五號發兌

第壹號以下再版出來せり

定價金拾五錢全國無遞送料

東京神田神保町三

（卷首挿畫）後閑菊野子筆歌かるた（論説）吾等の良友安井女子高等師範敎授●婦人と社會事業高島女子大學敎授（學藝）心理學大意島村抱月●星の話小此木隱花●論語解題丸井文學士●美術一斑紀淑雄●女子服裝の沿革下田歌子●構文上の一用意五十嵐力●作文批評今泉定介●作歌批評大口鯛二（修身）婦人の天職三輪田直佐子●獨逸人の儉約船越男爵（齊家）園遊會夜會の禮法津田梅子●家政上注意すべき罰令談法學士HT●割烹石井泰次郎●家庭遊戲西川政憲（世務）帝國議會ハ話岡戸文學士●紙幣の話伊藤秋南●山林の話柴田林學士●產業の實況（史傳）英女皇傳下田歌子●國史上の婦人（譚草）暗流水谷不倒（詞藻）喪兩女記●みやび會員詞藻（雜錄）通俗地理談喜田文學士●露國近世の女子敎育石黑定美●媒酌訓言●新聞記者としての經驗松岡もと子●圖案武村千佐子（彙報）十數件

大賣捌 東京堂

家事衛生

醫學博士三宅秀先生著

大日本女學會發行

總クロース綴金文字入り

定價金六十錢郵稅金六錢

大賣捌 東京神田一ッ橋通町七 有斐閣

此書は醫學の泰斗たる元醫科大學長醫學博士三宅秀先生が文部省の囑託に由り各府縣師範學校高等女學校の女敎員方を集め夏期講習會を開きて講義されたる者を此度大日本女學會より發行せられたるなり書中衣服●飲食物●住居●育兒●看病の五篇に別ち細密に其衛生法を示し我國一般の民度に應じて實行し易き樣に說明せられたり家政を主る人々に取りて此上なき有益の良書たるは勿論敎育の任に當る人々にも缺くべからざる參考書也

（丙の一）

# 黃表紙

●安永自四年至八年出版ノ部

金々先生榮花夢
高慢齋行脚日記
鼻ヶ峰高慢男
桃太郎後日噺
親敵討腹鞁
紅皿缺皿社古噺
三幅對紫曾我
辭闘戰新根
於竹大日開帳由來
通鳬寐子美女
夢中の印噺
運附太郎左衛門
楠無益委記
怪談豆人形

春町畫作　同畫作　喜三二作 春町畫　同畫作　同畫作　同畫作　同畫作　文阿彌作 清長畫　春町畫作　同畫作　逢來山人作 [illegible]畫　習山堂作 豐[illegible]畫　春章畫作　吟野畫作　春町畫作　文溪堂作 [illegible]畫

豐前豐後兩國名取
夫從以來記
此奴和日本
浦山大郎兵衛龍宮卷
八代目桃太郎
壽御夢想妙藥
莫切自根金生木
江戸生浮氣蒲燒
元利安賣鋸商
大悲千錄本
三國傳來無匂線香
間に合嘘言曾我
鳩八幡豆ト德利
茶歌舞妓茶目傘
龜山人家妖

春林盛畫作　万象堂作 [illegible]畫　四方山人作 政美畫　政[illegible]畫作　三二郎作 [illegible]畫　三[illegible]畫作　同畫作　三和作 千代女畫　京傳畫作　好町作 千代女畫　全交作 政演畫　京傳作 政[illegible]畫　[illegible]長畫作　好町畫作　全交作 政美畫　三二作 政[illegible]畫

世上洒落見繪圖
盡用而二分狂言
京鹿子娘泥鰍汁
直讀見臺萩
唯心鬼打豆
桃太郎發端話說
山入桃太郎昔噺
浮世操九面十面
白髭大明神御渡申
福德果報兵衛傳
世上廻親子錢獨樂
年寄冷水曾我
金々先生造化夢
天道浮世出星操
全交法師常々艸

京傳畫作　菊亭作 大榮山人畫　豐國畫作　金交作 [illegible]畫　同畫作　柳郊畫作　京傳畫作　重政畫作　同畫作　同畫作　作者未詳 [illegible]畫　菊舟作 金交畫　豐國畫作　同畫作　同畫作　京傳畫作　重政畫作　三和作 [illegible]畫　政美畫作　全交作 [illegible]畫　豐國畫作　京傳畫作　重政畫作　三馬作 [illegible]畫　豐國畫作　全交作 [illegible]畫　重政畫作

幸堂得知君校訂

●續帝國文庫第卅四編發行廣告

（六月中旬發行）

# 校訂 黃表紙百種

全壹册

洋裝總クロース
背皮金文字入上製
正價金六拾錢
郵稅拾六錢

幸堂得知翁古書を藏せらること世の知る所今回本館の需に應じて黃表紙の內より其傑作百種を撰抜し精密なる翁の校訂を經て世に紹介す滑稽諧謔を宿替せしむるあり趣味豊饒卷を蔽ふ能はざるあり短篇の妙、妙文の精以て文士凡上の珍となり以て夏日の好讀物たるべし

（丙の四）

# 百種總目次

●天明(自元年至八年)出版ノ部(前頁より續く)

近頃島巡り
憎口返答返し
本能見世物
化狐通人
松茸賣親方
金銀先生再寐夢
鏡入七人化粧

●天明(自元年至八年)出版ノ部

一粒萬金談
當世大通佛開帳
通一聲女暫
通僧安宅關
御存商賣物
景清百人一首
四天王大通仕立
五郎兵衛商賣
通風伊勢物語
長生見度記
啌多雁取帳
三太郎天上巡り
間違狐女郎買

御年玉
色男十人三文
文武二道萬石通
悅最負蝦夷押領
時代世話二挺皷
海中箱入娘
復讐後祭禮
齡長尺桃色壽主
夫者德奢玉得

●寬政(自元年至十二年)出板ノ部

孔子縞于時藍染
拜壽仁王參
天下一面鏡梅鉢
心學早染草
染直大名縞
京傳憂世醉醒
照子淨頗梨
玉磨青砥錢
本樹眞猿浮氣噺
新吉原聖賢繪圖
盧生夢魂其前日

志わみうせ藥
怪談筆始め
堪忍五兩金言語
一狂言狐書入
作者根元江戸錦
鶯將軍勘略ノ卷
人間萬事塞翁馬
甘哉名利研
春遊七福會我
貧福蜻蛉返り

●享和文化出板ノ部

敵討蚤取眼
人心兩面摺
敵討記乎汝
這奇的見世物語
萬福長者榮花談

●附錄 參考物ノ部

稗史憶說年代記
煙草戀中立
地藏の道行

第卅五編 ●校訂 俳優全集 續刊

博文館編輯局校訂

續帝國文庫 正價（全部五拾冊毎月一回發行壹冊六拾錢●六冊前金三圓五拾錢●十二冊前金六圓九十錢●貳拾五冊前金拾三圓●郵稅壹冊拾六錢）

發兌元 東京日本橋區本町 博文館

(丙の五)

# 再版出來報告

左記の各書籍は一時品切の爲め高需に背き居候處今般何れも再版澤山出來致候間續々御購讀被成下度又々品切に相成候ては遺憾に付此段御報申上候

| 版 | 書名 | 冊數・定價 | 郵税 |
|---|---|---|---|
| 廿五版 | 新撰明治字典 | 全壹冊 金參拾五錢 | 郵税八錢 |
| 十九版 | 五經（全十一冊） | 金貳圓貳拾錢 | 目方八百匁 |
| 十六版 | 書法詳論 | 全貳冊 金四拾錢 | 郵税六錢 |
| 十五版 | 詩法詳論 | 全貳冊 金四拾錢 | 郵税六錢 |
| 十版 | 增訂帝國史略 | 全壹冊 壹圓五十錢 | 郵税貳拾錢 |
| 廿版 | 六中等教育日本歷史（上） | 全壹冊 金五拾五錢 | 郵税拾錢 |
| 十二版 | 帝國六法全書 | 全壹冊 金九拾錢 | 郵税拾四錢 |
| 四版 | 日本歷史 | 上製五拾錢 並製卅五錢 | 郵税拾錢 郵税八錢 |
| 五版 | 近松時代淨瑠璃 | 全壹冊 金六拾錢 | 郵税拾六錢 |
| 五版 | 近松世話淨瑠璃 | 全壹冊 金六拾錢 | 郵税拾六錢 |
| 五版 | 高僧實傳 | 全壹冊 金六拾錢 | 郵税拾六錢 |
| 四版 | 通俗三國志（下） | 全壹冊 金六拾錢 | 郵税拾六錢 |
| 三版 | 四大奇書（下） | 全壹冊 金六拾錢 | 郵税拾六錢 |

| 版 | 書名 | 冊數・定價 | 郵税 |
|---|---|---|---|
| 三版 | 商業實踐法 | 全壹冊 金七十五錢 | 郵税拾貳錢 |
| 八版 | 劒舞術教範 | 全壹冊 金拾八錢 | 郵税四錢 |
| 八版 | 家政學（下） | 全壹冊 金三拾錢 | 郵税六錢 |
| 十版 | 一勤學と處世 | 全壹冊 金廿五錢 | 郵税六錢 |
| 八版 | 育兒と衛生 | 全壹冊 金廿五錢 | 郵税六錢 |
| 九版 | 俳諧獨學 | 全壹冊 金廿五錢 | 郵税六錢 |
| 十版 | 二旅行案内 | 全壹冊 金廿五錢 | 郵税六錢 |
| 七版 | 圍碁と將基 | 全壹冊 金廿五錢 | 郵税六錢 |
| 三版 | 商家書翰文 | 全壹冊 金廿五錢 | 郵税六錢 |
| 五版 | 就學案内 | 全壹冊 金廿五錢 | 郵税六錢 |
| 三版 | 相撲と芝居 | 全壹冊 金廿五錢 | 郵税六錢 |
| 七版 | 記事論説文範 | 全壹冊 金廿五錢 | 郵税六錢 |
| 十版 | 八實用料理法 | 全壹冊 金廿五錢 | 郵税六錢 |

（丙の六）

發兌元 博文館
東京日本橋區本町三丁目

| 版 | 書名 | 定價 | 郵稅 |
| --- | --- | --- | --- |
| 五版 | 作文錦囊 | 全壹冊 金三拾五錢 | 郵稅六錢 |
| 再版 | 星學 | 上製 五拾錢 / 並製 卅五錢 | 郵稅拾錢 / 郵稅八錢 |
| 五版 | 農學楷梯 | 全壹冊 金七拾五錢 | 郵稅拾錢 |
| 三版 | 東西二十四傑 | 全壹冊 金卅五錢 | 郵稅六錢 |
| 六版 | 日本お伽噺 最明寺 | 全壹冊 金六錢 | 郵稅貳錢 |
| 六版 | 日本お伽噺 高千穗 | 全壹冊 金六錢 | 郵稅貳錢 |
| 拾版 | 二增鏡 | 全壹冊 金廿五錢 | 郵稅三錢 |
| 九版 | 大石良雄 | 全壹冊 金拾貳錢 | 郵稅四錢 |
| 三版 | 家事要訣 | 全壹冊 金卅五錢 | 郵稅八錢 |
| 五版 | 女子普通禮式 | 全壹冊 金卅五錢 | 郵稅八錢 |
| 三版 | 農學汎論 | 上製 五拾錢 / 並製 卅五錢 | 郵稅拾錢 / 郵稅八錢 |
| 再版 | 氣候及土壤論 | 上製 五拾錢 / 並製 卅五錢 | 郵稅拾錢 / 郵稅八錢 |
| 十二版 | 增訂農學入門(合本) | 全壹冊 金卅五錢 | 郵稅八錢 |
| 十四版 | 增訂農學入門(三) | 全壹冊 金四拾五錢 | 郵稅四錢 |

| 版 | 書名 | 定價 | 郵稅 |
| --- | --- | --- | --- |
| 十九版 | 和洋禮式 | 全壹冊 金廿五錢 | 郵稅六錢 |
| 十七版 | 茶の湯と生花 | 全壹冊 金廿五錢 | 郵稅六錢 |
| 四版 | 母親の心得 | 全壹冊 金卅五錢 | 郵稅八錢 |
| 七版 | 芭蕉全集 | 全壹冊 金三拾錢 | 郵稅六錢 |
| 再版 | 俳諧論集 | 全壹冊 金三拾錢 | 郵稅六錢 |
| 七版 | 世界歴史譚 釋迦 | 全壹冊 金八錢 | 郵稅貳錢 |
| 六版 | 世界お伽噺 世界の始 | 全壹冊 金八錢 | 郵稅貳錢 |
| 三版 | 世界お伽噺 鬼婆と少女 | 全壹冊 金八錢 | 郵稅貳錢 |
| 再版 | 世界お伽噺 驢馬姬 | 全壹冊 金八錢 | 郵稅貳錢 |
| 再版 | 日本昔噺 八頭の大蛇 | 全壹冊 金五錢 | 郵稅貳錢 |
| 五版 | 源氏物語 | 巻の一 金廿五錢 | 郵稅三錢 |
| 七版 | 明治閨秀美談 | 全壹冊 金拾貳錢 | 郵稅六錢 |
| 四版 | 改正小學校令 | 全壹冊 金拾錢 | 郵稅貳錢 |
| 八版 | 日本歴史譚 楠公 | 全壹冊 金八錢 | 郵稅四錢 |

(丙の七)

第二高等學校敎授 理學士 安田篤先生著（六月下旬發行）

# 植物學汎論

全壹册洋裝
菊判上製金文字入紙數大凡八百ページ

本邦從來中學課程以上の高等敎育植物學敎科書に缺くる所あるや久し、本書は聊か之が欠を補はんが爲めに編述したる者にして、併せて植物學の初歩を修め、更に其專門に入らんとする獨學者の楷梯たらしめんが爲めに纂著したる者なり。抑も植物學は實驗的の學問なれば、之を學ぶに徒らに文章の暗記、字句の解説を以てするが如きは、到底之を領會するの道にあらず、况んや其趣味を覺知するに於てをや故に著者は此書を編述するに當り、勉めて各處に例證を擧げ、讀む者をして直に實物と比較對照せしむるの便を得せしめ、殊に毎編の終には一般に關する實驗の方法材料を揭げ、以て斯學を實習する者の便に供せり、冀くは此指針に依て、肉眼的並に顯微鏡的の觀察實測を爲し、以て斯學の眞味を覺ることを得ば、思ひ半に過ぐる者あらん。

發兌元　東京日本橋區本町　博文館

（丙の八）

# 女學世界定期増刊 第壹巻第八號 花あやめ 才媛詞藻 夏乃巻



小説

## 特賞 浮世

（賞品婦人用時計壹個）

和歌山 藤田いさを

### 上 うれしき遺言

あゝなつかしき友よ、花も實もなき昔語り、かたれとか、さらば語らんき、たまへ。

幼き時の事は語らじ、それは我家の事共親しく知りたまひし君なれば。

たゞ我れに一人の兄様、春雄の君とて、世にも哀れなるみなしごの、親にのこされたよる者なく、あはれ路頭に迷ふべかりし所を、父上のなさけの糸につながれて我が家にそだてられ居し兄様ありけることを思ひ出でたまへ。

君に別れ參らせしは、三年昔の花さく春なりき、その年の秋の暮れよ、ゆうかぜ窓にさはがしく、桐の一葉の散りしとき、あはれや我が父君も無常の風にさそはれて歸らぬ旅に逝き給ひぬ。その臨終の時、あたりの人を退け我れと春雄の君とを枕邊近く呼び給ひて通へる息の虫の聲も細くかなしげに、我れはこたびこそはよもたすかるまじ、最早今宵かぎり此の世を去る身なれば、後の事は知らん樣なし、たゞそちら二人に呉々も云ひ遺

し置くことは、我れの死せしのち行く〴〵は夫婦となりて仲睦まじく此の家をして末長く幾千代かけて榮えしめよ、我が死元より天命なれば、汝等我れ死せりとて心な痛めそ、身をすくやかに、いよゝますます心の玉を研き、世に出でゝ後人々に耻かしめられず、老ひたる母上にも孝養せよ、と云ひ終りていと苦しげに見え給ふ、我れは今更のごときかなしみに、たゞ御手にすがりて泣くのみにて詮術知らざりしが、春雄の君は涙の雫を手もてのごひつゝ、日頃の鴻恩の萬分の一をも返しまつらぬ内に別れ參らするくやしさよ、いざ世の上は御遺言に隨ひ、亡き後御家の爲めよろしき樣謀らひ申すべし、御心やすくと答へ給へば、おゝよくとのみの給ひて、早や事きれたり、夢かとばかりはかなくも。

## 中　うきよの涙

其の年もかなしみの内に暮れはて、迎へし年もいつしか過ぎ去り、我れは二九の、春雄の君は二十二の春をぞ迎へける、父がいまはの時の事など思ひ出しては、獨り涙にそでしぼるも、行末春雄の君の事ども思ひ浮べては、そゞろうれしく、我れしらずほゝと笑むことさへあり、實に我が絶えぬ空想の内には、悲喜こもごも小さき胸に湧きてあらしふかねど波うてるなり。

うたてやこの思ひに増して、心にかゝることの我が家に起りしよ、嵐はらめる憂ひの雲は棟の上近くさまよひ、平和の神の住み家とも見えし我か家に、おだ波のたちそめける、そも今の我が身となりしも、此の事の爲めにてありけるよ。

母上の御兄にて我れの叔父樣に當れる人ありける、心正しからずして行ひ惡しく、其の職業も高利貸とやらにて人の血を吸ひ取るに等しき家業、世間よりは惡魔と呼ばれ、もはら財を守ることをのみ己が義務と心得居たり、されば我が父上と心合はず、在世の内は彼れが家とは義絶なし其の出入を差しとめてありしが、父上のみまかりてより、日毎我が家を訪ひ來りて、何彼につけ母をいたはり慰めければ、心の中におそろしきたくみのありとも知らで母上の、只管に眞心より出でし心づくしと思ひたまひしこそうたてけれ。

折々は額をあつめて終日話したまふことさへあり、されば春雄の君も心ひそかに憂ひたまひて、或日折をはからひ母上に、叔父上の事心に合はずと申しけるに、母上はたゞ其方どもの知りし事にあらずとて取り合ひ給はず、春雄の君も強ては問ひ給はざりけり。

叔父は結句それをよき事にして、いよゝ邪心つのりて

のごろは我が家の財政にまで干渉するらしく、算盤取り出して何か熱議することさへあり、これを見たる春雄の君は心いよ〳〵安からず思ひ給ひて、叔父が平素の非道を説き、強く母を諫めしも其の甲斐なく却て、父上この世にありしときは、其方もかゝる我がまゝ者にてはあらざりしも、女のわれなればとて侮りてかと怒りの色あらはし給ふなり、春雄の君も無念の焔もえもゆる胸を握りつめたる拳もておさへつゝ已みき。

或る夜の事よ、我れはかなはぬ用事ありて家出し、四日の月西山に沈む頃歸りぬ、門に入らんとするに何事の起りしにや、怒りふくめる聲々高く戸外にもれたり、あやしみながら耳そばだつるに、たしかに叔父の聲なり、さては又かと心にうなづきつ、態と表より入らずしてうら口へと廻り、枝折戸そとあけて母上のいませる室の前にたゝずみぬ、障子にうつれる三つの影まさしく母上と叔父と春雄の君となり、我れは息を殺してうかゞひつ。

春雄の君の聲して、最早かくなりし上は母上とて叔父上とて、何申すとも聞き入れ給はざるべし、いざ我れ去らん、母上よ、幼き時より蒙りし御惠みは此の春雄も人なるからは、よも忘れ奉らじ、何時かこの海山に啻ならぬ鴻恩に報い奉るべき時もありなまし、みまかりたまひし父上に對しくも遺言にそむく不孝の罪いとおそろしけれど、已を得じ、さらばよ叔父上さぞ本望ならん、はや立ち出でしかその影消えたり、我れも等しく走り出でぬ、心は夢うつゝの間をさまよひて、およづれごとゝのみ信じつ。

春雄の君も年來住みなれし我が家を去るなれば、さすが心の殘りてか、はた我れの逐ふを知りてか、つと立ちとまり給ふに、兄樣とばかり聲もふるへわなゝく手もて袖にすがりぬ。

おゝ梅子か何處にありしぞと、我が肩に手をかけ給ふに、兄樣、母上叔父上には我れより如何程の御詫びもなし奉らん程に、今一度かへられよと言へば、否とよ我が事すでに已みぬ、今宵の事理しらぬそなたにはいぶかしく思ふかは知らねども、いづれ後より分るべし我れも男なり今更女々しく歸り得べきや、そなたも身を大切にせよ、えにしの糸未だ絶へずあらば、また面見んこともあらん、されどそれもいと覺束なし、これこそ今生の別れとなるも知れず、されば何か形見としてそなた

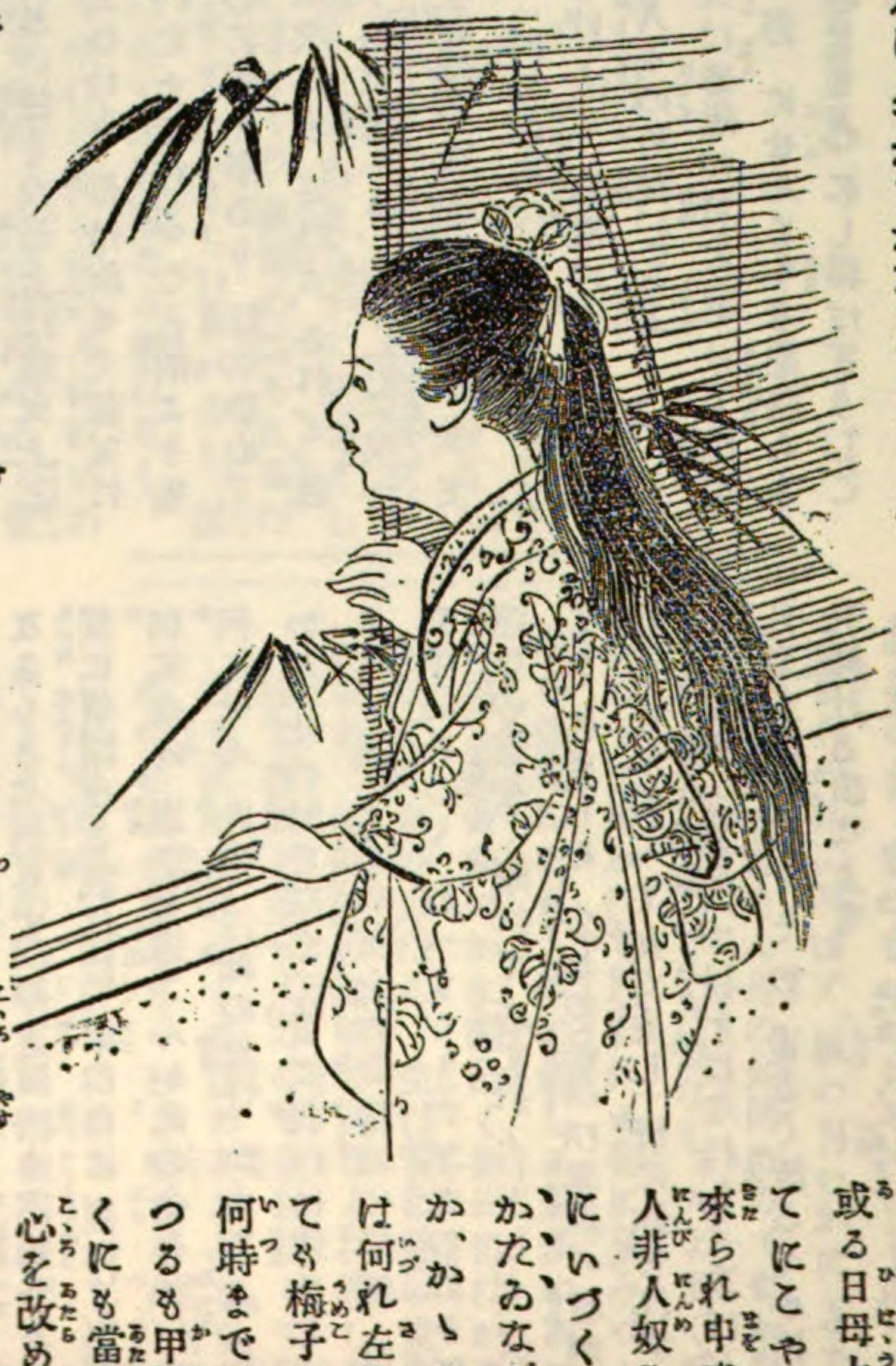
に殘し置かんと思へど、生憎何も持たじ、おゝそれよ短刀一口我が室の手函に藏めあり、彼れは我が家傳來の寶なれば、我れには大切の者ぞかし、そをそなたに與へん程に、縁ありて又遇ふまで持ちて居よとの給ふ、兄樣に別れ參らせて花月に何の樂しみあるべきや、强てと仰せらるゝならば我れも共にと云へど否さることならじ、我れの此の家を出でゝは何處を住よしと思ふ里のあるべきぞ、行方定めぬ身の、朝は百舌鳥鳴く野邊に、露ふみわけて野菊の香を慕ひ、夕はうしほ花さく海邊の入日に笠傾けて、いとも遙けき行てをのぞみつゝ此の一生を送るとならば、いかに此の世の面白からん、塵の浮世をうちすてゝ、身を行方さだめぬ雲水にまかし、授けられたる天命をたのしくうれしく暮し盡して其の上、野末の床に病みて死し、なき父上の御跡を逐ひ奉らん、されど梅子よ、朝に咲かん朝顔の花を見ば、曾て束の間の樂しかりしことを思ひ出でよ、夕に散らん落葉の、そが窓に音信れしならば、そこにも我が心は通ふと思へかし、さらばよ、さきくあれと、縋れる袖より我れをふり拂ひたまふに、はなさじとかたく握りしむれば、はなせと一聲きゆると共に早やすがたは暗の内にかくれぬ、呼ばんも聲なく、追ふも及ばず、おゝ如何にせん。

## 下　かなしき別れ

はかなき人の心を頼みて傷けられしこの心、いつ癒ゆべくも覺えぬ身のあぢきなさよ、行末夫とたのみ妻と呼ばるゝ者と思ひ居し人の、如何に母上は無理なればとて、又いかに叔父上は邪しまなりとて、亡き父上の遺言にそむき、心ゆるせし我れまで捨てゝ、立ち去りし心のにくさよ、鬼か蛇か、日頃やさしかりし心に比べては、かくも變り果てたる行爲の、さても分らぬ事や、これもあだし人の頼みがたき心の常か、さらば我れこそ愚かなりけれ、されど、されど、母上叔父上はかの夜いかなる言を云ひしか、母上に問ひ參らせても只かゝる人非人に身をまかさゞりしは、そなたの幸なれば、心殘すな氣を靜めてあれとのみにて語り給はず春雄の君とて男なり、忍ぶべからざる罵り言をうけては、などて怒り給はぬことのあるべき、血氣の若者はやる心にまかせて、かく仕給ひしかも知れず、さすれば我れは惡みまつるべき理由なし。

かく捨てられしかあらずかの念は、心に戰ひ果ては炎となりて小さき胸をこがしつ、涙のたゆる時なく、流れ

てしげき思ひに、日毎我が室にこもりて、三度の食さへ食はぬことありき、夜はにくゝもいとしき春雄の君に逢ひしに驚き、おとさけびて起くれば、あゝ夢なりき、ほのぐらき燈火の光かすかに、我がすがたをてらし、壁にうつれる影細くおぼろなるに、床の間には父上の我が爲めにとて掛け給ひし常盤御前の圖、夢の如くあはく見えて、いとゞ哀れを加へかなしさまさりて、眠らんとするも涙しげき目は合はず、遂に曉まで泣きあかせしは幾夜ぞ、生きて此の憂さを見んよりは一思ひに淵川へなりとも身を投て、死なん方心安からんと思へど、春雄の君は未だ此の世におはすなり、まこと捨てられし身ならば、早やこの世にのぞみなき身の死なんもやすし、されど未だ捨てられざりしならば、今一目遇ひまつりて心のうさかなしさを語らんこともあらざるかなど、いともはかなき露の身の、細くかすかなる一條の、望みの光りにてらされて殘りしなり我れの此の地に來りしも、此の望みの爲めにてありけるよ。



或る日母上は日頃にましてにこやかに、我が室に來られ申すやう、春雄の人非人奴も今頃は、いかにいづくに居るならん、ゝ、かたゐなどしては居らぬか、かゝる不孝者の行末は何れ左あらん、それ〵てゝ梅子よ、斯かる者何時までも操とやら、つるも甲斐なし、又くにも當らぬぞ、今よ心を改め、よき婿なりともむかへて我れの心を安めよ、それに就ては叔父上の息子武雄殿は本人も承知にて叔父上も許さるゝとやら如何に貰ひうけん心はあらぬかと、我れは日頃みだれ

みだれし心の今又思ひ設けぬ母の言葉に、殆んど息絶えんとせり、拒みぬ、拒みぬ、いかでかゝることのなし得べき、心にあらずとて熱き涙にこめて辭りぬ。されど母の心はいと固く、其の後また母上は叔父上と共に來りて、我に前の如く云ひけり、母は涙もて叔父は怒りのこゑもて、只管に我れをすゝむること前よりもいと嚴しかりき、われ固く心に思ふ事あり、諾なひぬ、諾なひぬ、母よろこべり叔父笑へり、されど、されど、彼れ等の去りし後我れは、冷やかに笑へり、冷やかに笑へり、かほどの事もといかでにくき〳〵叔父の子を夫として心の操破るべき。

はや定まりし上は善はいそげとて、惡魔の子の我が家に來らん準備に走り廻れる人々の可笑しさよ。此の頃世の人はもはら、叔父は春雄の君を退けて己が子を入れ、我が家の財産を恣にせんとする惡謀ありと傳へぬ、されど母上はそれをも心にし給はざりしそかへす〳〵も口惜しけれ。

撰びに撰びし黄道吉日は早や明日となりぬ、我れは住みなれし故郷を去り、何れの山里何れの海邊にても、春雄の君の此の世におはすかぎりは、尋ね出でんことを思ひ立ちぬ、されど。

頼るかたなき一人の母を殘して家出せんこと不孝の罪いとふかし、さりとて家にあらば心にもあらぬことをなさゞるべからず、あゝ惑へりな惑へりな、孝と貞との間に煩悶せる我れは、親の命に從はんか此の思ひを如何にせん、思ひを遂さんか此の命を如何にせん、あゝ如何にせん、此の命、此の思ひ、かねて心に覺悟はありしかど、此の時となりて實に我れは迷ひしよ。

されど其の夕方。父上の奧都城に詣で、はふり落つる涙を手向けつゝ、かへす〳〵の不孝の罪を詫びせしとき、迷ひの雲全く晴れて心すが〳〵しく、いよ〳〵立ち去ることに決しぬ、少しの品及び春雄の君が殘されし短刀などとゝのへて身支度し、母に知られず里人にもさとられぬ樣、家を出で村をはなれしときは、早や十六夜の月まどかに光りそめ、ゆるく流るゝ小川の水にそが影を碎ける頃なりき。

あはれそれより此の都へと志しも、知らぬ人のみにてたよる親戚もなく、いと困じはてしが、ふと君の事を思ひ浮べてかくも不意に訪ひ參らせしよ。

おもしろからぬ昔し語りに、さぞや飽き給ひぬらむ、夜

もいたく更けたらん樣なるに。　　（おはり）

月に叢雲花に風、恨み多きは人生の常とは言ひながら、流石に其描きさま拙からず、文に誠こもりて同情なか〳〵に深し（撰者）

## 甲賞（賞品圖書切符金三圓）

# 玉章

麹町區飯田町三丁目二三番地前田氏方　河村君子

心のまゝならぬ世にありて何に面白かるべき。花を見てうつくしと喜ぶ人も、月を眺めてたのしとほむる人も、心のまゝになりてこそ面白けれ。豫想は現實とたがひ現實は豫想と反し末は斯くとぞあきらかに定まりしことも、其の塲に至らばくさ〳〵の事情の爲めに思はざる方のいできて心のみをくるしましむるが多し、誠に人の命ほど面白きものはなく不思議なる者はなし。人の運命の生れ落ちしより知れ居りしならんにはいかに面白きか。いかに不思議なるか。此の複雜なる人世にありて運命の神に支配され悲しむ人も、超然眞理を知りし人より見れば如何におろかなるよ。戀なりと泣き慾なりと笑ふもたゞ一時の夢たるにすぎず、義理といひ人情といふもまた夢の世の掟たるにすぎず、此の夢の世に夢さめん時や誠に死の世に光明の影を見ん時なり。嗚呼人よ早く死の世に行け。死は汝を待ちつゝあるなり。春の花いかにめでたしとほむるも神のもてる百合の花に及ばず、秋の月いかにさやかに照るも月の世界より眺めん月の如何にめでたからん。戀なく慾なし、はた義理なく人情なし。人よ早く死の世にゆけ。神の手に抱かれてねむれる世に夢みつゝ戀に泣き慾に笑ひ義理におき人情に走しる幾多のあはれなる罪の子を司る運命のいかに面白く如何にはかなきかを見よ。またなにをか云はん。生は實に夢の世なり。苦しみの世なり。死は誠に光明の世なり。樂しみの世なりと。

梅よ櫻よと兎角人の心も空になりて騷ぎし春もいつのまにか過ぎ去りて藤の花のみうらめしげに、若紫の匂ひに名殘をとゞむる頃しも久々にて一筆かきはしらせ申候。御許樣にはなにがしの學校を卒へ給ひてより教育の御事業に御從事遊ばされ居り候よし屢々新聞紙の上にて御名前を拜見致し其の御立身の程女ながらうらやましく候。妾も御存じの通りこの家へ去年の睦月嫁つぎてよりはすこやかに暮し居り候

ものゝ、世の中のこと何となくうるさく死なんとまでも思ひつめしこともあり侍れどやすくして難きは自らの命を亡す事に候て、一月と過ぎ二月と去り面白しといふ日は一日もなく、たゞ涙に涙をそへて繼母の殘酷を恨み果敢なき世を厭ひ、夫に嫌はれて離緣沙汰に及かしと念じ居り候ものゝかくても不如意なる世の中は妾か筆にて御知らせ申すゞ耻かしく候へ共何時かは誰にか御聞き遊ばさるゝもの過ぎし二月の始つ方、男の子を生み今は妾が身はこの家に縛られしと同然、かゝる夫の傍に一時も居らまじと思ひ侍れど、無邪氣なる我が子を見る時はいかでこの家を去るやうなる勇氣も女の身にては出でず、善き思案もなく、定めてむかしは許嫁とまで呼ばれしに誠の母がこの世を辭してなさぬ母親に育てられしとはいへ、かゝる輕薄なる女なりしかと御思召さるゝは妾の覺悟の前に侍べれど思へる事ども云はんは腹ふくるゝ業に侍べれば心のまゝにすゝまぬ筆、御察し給ひて妾が世の中は憂きものと定めし心の歎きいでやしるさん、汲み給へかし。さてとや、思ひかへせば御許樣と妾は男同志ならば竹馬の友、女同志ならば追羽子の友、生れ落ちて物心覺えし頃よりの幼馴染、家は垣一重の隔てを置き、隣なれば學校へ通ふも家に遊ぶも、朝より夕まで二人ならぬはなく御許樣の病氣なりとて學校缺席さるゝに就きても妾も子供心に何にとなくさびしく互に缺席したるなど兄弟もたゞならぬ親しさに親もかくまで睦まじければ末は夫婦にと忘れもせぬ御許樣が十二歲妾が十一歲の夏の暮、許嫁の約整ひしが其よりは今までより更にまさる親しみ、雛祭なりといひては妾の雛互に飾り、節句なりといひては御許樣の人形まつり、春は親に連れられて二人の物見遊山、秋は同じまとひに月を眺め、彼よ此よと皆同じことのみして侍りしが小學校を卒へて御許樣はさる中學校に妾はある女學校にいりて十二三歲の頃よりは互に疎きやうに離々になりしかど心のみはむかしにまさる物思ひいつしかあやしき戀路に迷ふ頃となり侍り候。とかく戀てふほど奇しきものは無之物思ひにくるしみ、あたら月日も早くすぎ去れかし早く御許樣には學校を卒へ給へかしなどゝ思ひてもかなはぬ思ひにもだえくるしむ胸のつらさ、落花の夕の思ひ雪の朝の歎きも皆御許樣を慕ひてたどる戀路さればとて御許樣に御遇申してもむかしながらに話さんとする事さへも扣へ勝

ち、かはりやすきは男心もしや御許様にはなどてあらぬことに心をくるしめはかなき涙に袖をぬらし自分勝手の物思ひに餘念なかりしが十七才の春の暮、雁さへ盛りの花を見捨てゝ故郷に殘しゝ子を慕ひて歸へる時節、いとゞしき我が子を捨てゝ、妾が母はかくれ給ひ侍り候。年頃の女にとりて母親に別れしは雨に風にあらされし青海原、舵なくしてたゞよふ船の如く御許様の卒業さるゝまでは如何なる憂き目をや見ん。もしや父上に繼母の來りて妾をくるしめやせんと思ひしにちがはず、我が父は萬事に不自由なりとて、さる方より後妻をむかへしが始じめのうちこそよくまことの母にもまさりて子供等の取扱ひいと丁寧なるが父は公務にて常に外出勝ち、是れを仕合としての繼母の我儘されど妾には他の子供のやうに我儘をもいはず、いと親切に取扱ふに妾とて氣味あしく如何な



る巧にや、妾は兄弟の一ばん年重なれば父に告げんことをおそれてかなど思ひて母上よ母上よと妾もなき母にまさるやうに表面のみうやまひしかど、心は互に隔てを置く垣七重八重、如何なる下組のありて妾のみをかくまで親切に取扱ふかとの疑と繼母には露も心ゆるされまじとの念は我が身より去ることなく、世間にては秋山家の繼母ほど繼母にも似やはしからず生みの母のやうなりと噂せしならんが、妾さへくるしき胸をおさゆれば敢へて人に惡評を立つるに及ばじとこらへこらへて其の日其の日を送くりしが繼母の妾をいと丁寧になす下組に感心致せしと申すより外に言葉なく侍り候。妾に知らせず父上をば能く說き付けての上許嫁なりし御許様との緣を破談して、この家へ嫁げとの仰せ此の時ほど妾の心ぐるしかりし時は無之、もしや御許様故鄕にありなんには此の事を御告げ申して何にかよき御考を願んと思へ

ども既に御許様には都の地へ御遊學なされし後、兄弟とてまだ年わかく親戚は皆繼母の世になりてより我が家を顧みず、たゞ妾のみ人しらぬ我が思ひにむせび我が歎きにくるしみ男ならば腕をかためてさへも繼母をたゝかねまじきに女の身の如何程人を恨みたりとてなすべき酬もしらず、かく不甲斐なき女の身になど生れざりせばかゝる歎きはあらまじと男の身の上うらやましく相成申候。まいてや繼母の嫁げといひしこの花房家、妾の今夫と仕ふる人は御許様にはさぞかしはるけき都の地にゐたまひて詳しく御知りあそばさざらんが、繼母の兄の子にて早くより都にありてさる法學校を卒業し今ま判決のいかゞで生死の定まる裁判官、境遇は其の人を造るのさとしの如く妻の身としてかゝる事申上げんにはお轉婆の嘲をうけんが何となく夫の性質沒趣味にてさる方のみならず裁判官てふものは御承知の如く其の人の判決によりて一方の人には喜ばれ他の人にはにくまるゝ職、妾のやうなる氣質とはなでうむつまじく日を送る事の望みなしなど思へば更にまさる嫌氣、丁度御許様に屢々御手紙差上しは此の時海山千里遠く隔たゝりしことの不自由さに確とした る御返事もなくまたかくなりてより御許様には未だ學籍にありし身のことゝて遙なる故郷に歎く妾を助け給ふ仕方のとるべき道なきは勿論かく泣く〳〵日を送りし揚句、繼母の心のまゝに定めし縁談の日せまりて妾は其の日となりて逃げんかと思ひしに父上を思ひわかき弟さては物心さへ知らぬ妹を見捨てゝ世の人にはとやかくの評をうくることのうらめしく嫁ぎて後またの分別と落す涙を人に見られじと隱くす心の刹那さ、何の因、何の縁にて人しらぬ胸のくるしみをなすか、縁付しあくる日よりは舅姑への朝夕の仕へ、是れは女の道のふむべきものなればとやかく申さんもあらぬ業なれど、繼母の無理にすゝめし縁談、敵の家にある心地して今日は離縁されよかし、明日は離縁されよかし、高砂の松の操の千代八千代と祈ることそ嫁にゆきしものゝ本意なれ。誰とて妾のやうに離縁されよかしと願ふものやあるかと自分ながらおかしく妾の一生を苦しめて下さるゝかと思へば繼母のうらめしさ、世の中はほと〳〵厭氣のさして勝氣を振廻しても仕方のなき事。殊に女の勝氣に見えのよきものにあらず、くるしき胸を手におさへて諸事を心得、何事も云はず日をくらせば夫の氣障りになりて離縁さ

るゝならんと待ち構へしはみな水の泡、何時になりても夫は平氣、離縁するやうな言葉も出でず、離縁するやうな氣もなき有樣、御許樣の申譯に身を捨てゝ御斷をせんかと思ひしは一度ならず二度三度、とかくするうちなくもがなと思ひし男の子は生れ出で一日一日にひだつ我が子を見てはよもや見捨てゝ此の世に亡骸を殘すことも出來ずこの家を逃げて行くも末を思へばまた此の子の罪、成人してよりこの子は我が母は無殘にもなどて我を捨てゝ他へ嫁つぎしか母さんこの家に居りて呉れゝば我も繼母の手にかゝりてかくは難義をせまじものをと恨みはせぬかと今の妾が身の上に引きくらべて彼を思ひ此を思へば妾が身は一時もやすらかに此世に居る心地もせねば、妾は御許樣には人情をかきかゝる家に嫁ぎて埋木となるも皆むかしよりの因果とあきらめて此の儘歎きをふくみてくるしき胸にうき月日を暮らし、もしや病にかゝりて此の世を去る時はあはれなる妾を神樣佛樣の助け給ひし時と諦め侍ればうつし世の義理人情は御許樣に對して缺き侍れど此處見逃がし給ひてよ。御許樣には早く嫁御樣御迎へ給ひて松のみどりの色かはりなく暮し給ひてよかし。申してもかなはぬ女の悲しきくり言、御許樣の處へこの文とゞかれし時はいかに、はた此の文開かれて讀まれしときは如何に、義理人情をも知らぬ女よとさげすみ給ふは勿論、かはりやすき女の心を頼みて今までかくも迷ひしかとの御憤りも無論、遠くへだちし妾の目の前に見ゆるやう、あゝ、憂きものは世の中に候。妾とても生れしよりの難義人の知らぬ程、また紙にしるされぬ程に侍れば、いづれ命のみぢかきは火を見るよりもあきらかに侍れば此の手紙御許樣の御前へとゞきし時ははや妾は此の世にあらぬものなりと思ひ給ひてこの心のまゝをあからさまに認めし手紙の心汲みとり給ひなば、手向の水と花一枝にてもめぐみ給へかし。先は此の世にての御別れ早くより申述べ置き候かしこ

五月二十日　　花房綾子より

山崎謙二樣
　　御許へ

實に運命の神の手にもてあそばるゝ人ほどはかなきものはなし。心は其處にあらざるも運命の神の手にかゝ

りては如何ともすること能はず。我が心を我が心に制していつしか厭世の心は樂天の志に勝つのみ。あゝ悲慘なるは人世なるかな。死は誠に光明の世界を照らせり。さるになどて人は死をおそるゝや。此の世に生けるもの誰か悲しみを知らざるものやはある。悲しみを知りて死をおそる、あゝ不思議なるは人世。人はこれを知りつゝも纒綿たる愛情にひかれて、我かくるしき胸を我が手におさへてやすらけき死を願はず泣く〳〵運命の神の奴になることそ可笑しけれ。恨めしきは世の運命、悲しきは人の身の上なるよ。

玉章は一篇の情詩なり、その懐をのべ、不遇を訴ふあたり悽婉にしてうらみ深し、まことに才筆といふべし（撰者）

## 乙賞（賞品圖書切符金二圓）

## バイオリン

德島　濱　美耶子

### 上　綠陰のバイオリン

滴るやうな綠りの葉の、簇がる葡萄の棚、涼やかな蔓に、深紫の濃醬湛えたる實は、露に濕めりて、薄き光りを帶びたるが、幾筋も垂れてゐる。

其下に今沐浴を了へたばかりの、廿歲恰好の美人が、身を少し斜めに椅子に凭つて、高尙い葡萄の香の薰する、そよ風を受け心地快げに、涼を採つてゐる。

躬には白い浴衣を纒ふて、藤色の博多帶を上品に締め、黑い髮は艶々と夜會に卷いて、精巧な薔薇鼈甲を挿し、白い華奢な手には、紫水晶の指環が耀いて、黑塗りの柄に、流蘇の附いた、吾妻打團を悠るやかに持てゐる。』

前には紫檀の卓子が据えられて、それに白絹、浮模樣のある、卓子掛を蔽ふて、上に金文字の詩集の譯されたのや、樂譜の附いた、書物が置かれて、側に風琴バイヲリンなどの、樂器が列べられてゐる。

今打團を横たへて、流蘇を弄りながら、眸はうつとりと足元の庭靴に灑いでゐると、微風が頸首をなでゝ、そよ〳〵吹き渡るに、那處からか可厭な、香水の匂ひが幽かに傳えて來る。

後の方から人の勢氣、靴の跫音がしと〳〵と次第に近くなる。

美人は誰ならんと、衝と振り顧ると、金緣の目鏡が此方を射透したから、靜に椅子を立つて、其人の近よるまゝ

に會釋した。

廿二三でもあらうか、漆のやうな髪を、佛蘭西刈りにして、香水を附けたのが黒々と光つてゐる、眉宇の間に才氣が溢れて、當世流の才子肌で、何處やらに輕薄な、處も視えられるが、中々に好男子である。

英吉利西ネルの單衣に、白縮緬の兵子帶を結んで、片手を帶に挾みつゝ、歩み寄つて、莞爾と辭誼を返した。

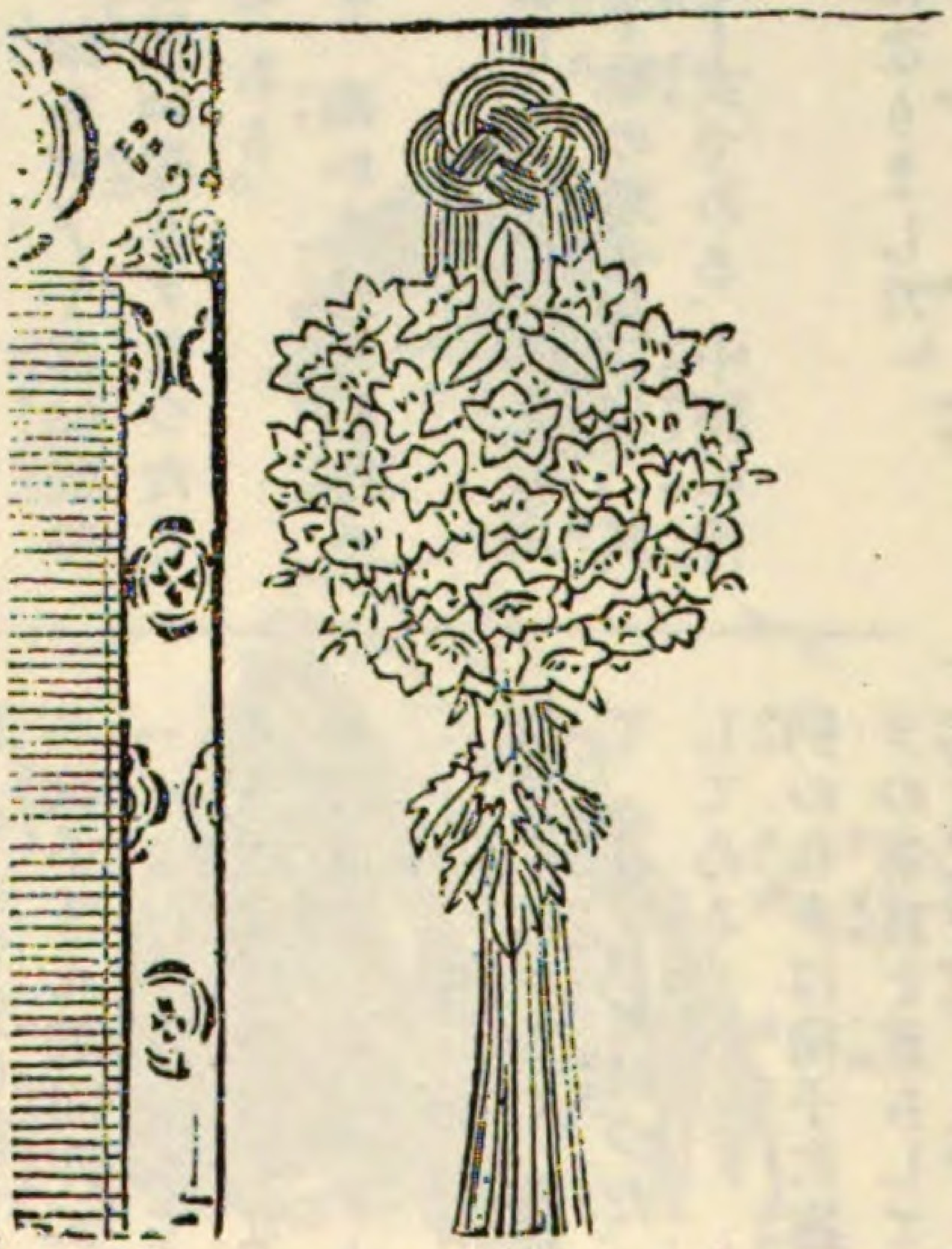
「柳子さん爰にお涼みでしたか、別に用つて有りませんが、先つきから尋ね廻つて居ました！」

「あー爾うですか、和多さんまあ其處の椅子へ、お掛け下さい」

「はあ有難う」と和多は卓子の下の椅子を椅せて腰を下した。

柳子も淑やかに椅子に凭つて、視るとも無しに葡萄を視上る。

「大へんに葉が茂つて、葡萄が大きくなりましたですなー」



謂ひつゝ和多は一遍見廻した。

夕風がさや〳〵木梢に囁やきを與えて、棚の下までは來ぬが、重さうに葡萄の蔓が、ゆら〳〵動いてゐる。

和多の卓上の樂器に眼を就け、

「あのー柳子さん、怎うかバイオリンをお聞かせ下さい」

「はア」何處やら柳子は冷やかに輕く答へた。

「えゝ怎うか」頗る熱心に謂ふ。

「はアお耻づかしいのですが、短いのを一ツ奏て見ましよう」と柳子は鷹揚に椅子を離れて、白い手にバイヲリンを奉上げた。身體を繕ふて徐ろに弓を添えつゝ、奏し初めたのである。

幽かに調子をならし乍ら、次第に強くなり勝さるので、優しい樂器の響きは、人の心に泌み入るやう。

和多は聞きとれながら、目鏡越しに昵と柳子を覩仰げる。

眸の冷やかな、眉の長い、刻んだやうな鼻、朱唇のくつ

きりと締つて、身動きもせず奏してゐる樣の上に翠りは、大理石のやうな容貌に映えて、少し青みを帶びてゐるが、其高尚い姿は、恰ど希臘古代の尊い女神のやうである。

和多は其神々しさに、想はずも半ば眼を垂れて、清い澄み切つた音を一心に聞いてゐる。

琅々洋々の響きは妙手に涼へて、知らず〳〵其仙樂の境に曳き入れられて了ふ。恍惚身體が覺えずなつたと想ふと、音樂は靜に奏し畢つたのである。

耳底にはまだ嫋々の餘音が殘つて、幽かな弦きを傳へてゐるやう。

柳子はバイオリンを卓子の上に置いて、椅子に凭らんとする時、背後から、から〳〵駒下駄の跫音がして、其處へ來たのは、銀杏返しに結ふた下女である、中腰に佇んで、

「お孃樣、音樂の先生樣が御出になりました」

「あー爾う」少し周章たやうに、恁う謂つて眸は優しく輝いた。

「あゝ今參ります、お前先へ此バイヲリンを持て居てお呉れ」

「ハイ」下女は大事そうに、搴り上げて刻み足に、彼方へ持つて行つた。

柳子は椅子を片づけて、

「和多さん先生が參りましたから、失禮致します」

「あー左樣ですか」夢から醒めたやうに瞢然謂ふ。

柳子は葡萄の棚を出でゝ、蓮步輕く步を移さんとするに、和多は急に椅子を離れて、

「柳子さん御同伴に參ります」

「ハイ」と躊躇ふて少の眉を顰めてゐる。

もう園邊は薄暗くなつて、植込みの色も文なく、彼那邊の玻璃窓から、パツと電燈が反射した。

### 中 バイオリン師

部屋中は明るく、花形の掩ひのある、電燈は赫奕と耀いて、今稽古を終つた、柳子は美はしく紅淡つた貌を照らしてゐる。

例の和多は椅子に靠れて、膝を交叉せながら、口にマニラの卷莨を薰らして、斜めに柳子を眺めてゐる。

闥が靜に開かれて、下女が茶器菓子器などを運んで來た、卓子の上には葡萄枇杷夏桃の果實類が、一ぱい手籠に箝められてある。柳子はそれを片寄せながら、茶腕に茶湯を灑ぎ、菓子器を差出して、

「先生怎うかお一ツお食り下さい」

「あー」と輕く默頭いたのは、四十前後でもあらうが、貌の白く光つた、眉の濃きわたりなどは若々しい、淡鼠の夏洋服を纒ふて、頬髭の美はしいのが、非常に氣品の高く視えて、時に無邪氣な微笑を洩らすのは、此人の常である。

まだ柳子が此花園町から、近い上野の音樂學校へ通ふてゐた頃よりの師で、柳子は其時より師の沈着なる風采、優しい面影などの何となく慕かしく、亦非常に音樂を好んで、美の大なるを感ずるものから、益々斯學を極めんとしてゐるので、師とは能く意氣の相ふので、心窃かに先途の希望をも共に成たいと想つてゐるのである。師の名は杜川重雄、先年米國に留學して、彼地に堪能の聞こえ高く、殊にバイチリンに勝ぐれたもので、今は東京音樂學校に聘せられて、敎諭の鞭をとつてゐる、不幸にも師の夫人は若い時に逝くなられて、今は獨身で居られる――



柳子は和多にも、茶湯を入れて、少と菓子器を寄せ乍ら

「貴郎御隨意に」

「はあ有難う」和多は辭宜して、茶を啜つた。

暑そうに柳子はハンケチを煽り乍ら、椅子を離れて、玻璃窓を啓き涼しい夜風を躬に入れた、松はざわざわ上下に搖いで、其間罅からは眞如の月が覗ふやう、廣い庭は一様の色をなして、一種の靜謐さが滿ちてゐる。和多は葉卷の灰を、鐵皿に落し乍ら、杜川に向ひて、

「先生怎うも音樂ほど、優美なものは無いですな—」

「あゝ左樣です、もう奏じてゐる間は何もかも忘れて了まつて恰ど春のやうな暖かひ、感情がして樂しさが心の底から湧いて來ます、私は想ひますね—樂しいも悲しいも無限で、實に音樂は美の最上なるものと信じて疑はないです」

「あゝ爾うですかな—私等の大學生などでは、誰れも

眞に音樂の趣味などを、味はふものは有りません、それに—」何か和多が謂はんとするに、再び闥の戸が啓かれて、下女が這入つて來た。

「あの和多樣、旦那樣が呼んで彼在います」

「あー爾うですか」可厭そうに重く立つて、窓に凭つてゐる柳子の後姿を瞬間見ながら、杜川に會釋して出て入つた。

和多はまだ文科大學生で、此頃は夏期休暇でもあるし、亦心に或野心を持つてゐるので、柳子の内とは少しの知合ひから平常出入してゐる、そして父母は才子流の和多桂次を、未來の婿とせんと樂しんでゐるのであるが、柳子は何やら輕々しい桂次を少しも好まぬ。

桂次の後を見送つて居た柳子は、靜に硝子窓を締め、椅子にも凭らず其處に佇んで、昵と師の方を見た。

杜川は遲々立ちながら柳子に、

「貴婦今日の處を能くお復習してお置きなさいよ、私もう是でお暇まします」そろ〳〵出でゆかんとするに、

柳子は周章て、師の肩に縋りながら、

「あゝ先生、何日やらの悲曲をもう一度、お聞せ下さいねーいゝでせう、月も涼へて居ますからお庭の方で—」

## 下　月下のバイヲリン

月光は芭蕉樹の、茂みを隈どつて、上葉冷やかな光りを帶び、露に沾ふて重く地に垂れてゐる。

側に二ッの人影が佇んで、其處に妙なるバイヲリンの音が聞こえ初めた。

唯視る、奏者の月光を浴びた、蒼白い沈着とした貌には、例の微笑を浮べて居る。

纎い琅々の調べは、兎の毛ほどの弛みもなく、あたりの靜寂を破つて、幽ながらも、凛々と響き渡つてゐる。とは有名なる音樂作家、ミル氏が悲曲の一節失戀の歌。

傍に柳子は身動きもせず、愛らしい眸を或物に据へて懷しそうに打目戌つてゐるので、

調は彌々冴えて、澄み切つた妙音は、此無言の内を漂ふて、坐ろに聽く人の心を醉はしむる。

奏者は天空の心ゆくばかりなる月を仰いで、高尙い眸は耀やき、悠々と奏してゐる心は、もう絶對無限の境に入つてゐるのである。

柳子は情が迫まつて、堪えられぬやう、優なる音樂の音は、心に染み入つて、燃ゆる想ひの胸に徹して行くのである。

衝と師の肩に縋つて、幽かに切なる息を洩らし乍ら、眤と眼の處を矇めてゐる。

夜風はやはら〳〵芭蕉の葉を靡びかして、冴へ切つた樂器の音までも打震はして、調べは次第に切に、絶え〳〵に消えてゆく。

奏者の眸は沾みを帶びて、尙も幽かに續くる、響きは縷々怨みを述べてゐるやう。

悲しい歌の餘まりに、身に迫まつて、多感なる兩人は身を顫はしつゝ、遂に眸を閉ぢて了つた。

あゝ漸し音樂の、妙音に乘て他界にふは〳〵漂ひ行くやう。そこに美神現はれて「われは汝が今宵の汚れなき妙なる調べを、悠久に此世に傳へん」謂ひ捨てゝ縹々何處ともなく——。　　（おはり）

叙事巧妙、大方家の歩趨あり（撰者）

丙賞（圖書切符金壹圓）

# 老尼物語

信州松本町東之丁　小岩井愛子

## 上

櫻も桃も既に散り果てゝ、世はおしなべて青葉に移るの頃、我は僅の病を得て、醫師の勸めにより暫し世に遠ざかりて、此の戸塚の里に靜養するの身となりぬ。月日には更に關守もなく、隙行く駒の足早み、思へばはや一月餘りを此の草庵に過しつるよ。其後、病氣も漸く癒えぬれば、貴重なる光陰を徒らに打過ごさんも勿體なければ、明日は立たん明後日は歸らんと思へども、住み馴れし此の草庵の捨て難くして、なほ一日二日を過しゝが、さてあるべき事ならねば、いで明日は歸らんと思ひ定めて、さては老尼の部室を音づれしなり。

『色々お世話樣になりましたが、愈々明日は出立うかと思ひまして……』

『愈々明日？マア左樣ですか、漸くお馴染になつたばかりですに……併しそれも御尤な事で』

『ハイ、何だかお名殘惜う御座いますが、お陰樣で病氣も餘程癒えましたし、それに、學校の方も久しく缺席んで居りますので』と話し居る老尼の室へ、あはたゞしう馳せ來りしは下働の吾助なり。

『マア此紙を御覽なされ』と差し出したるは一葉の新聞紙。

『ハア、武彥樣も愈大臣にならしつて……』

『エッ、あの月島樣が……』引つたくる如く老尼は、

吾助の手より新聞紙を取りしが、如何なる秘密のこもれるにや、默讀し行く老尼の眼には涙の充つるを認めぬ。

吾助は、膝に突き立てたる握拳に力を入れて、默然として頭を低れて俯し居たり。

我は何やら絕て了解らねば、たゞ不思議の思をなして默し居たるが、此事につけて必ず何等の秘密の潛める樣なるに、我の僻とて、根掘り葉掘り聞きしかば

『さらば、今更何をお隱し申しませう、お別れに一寸お話し申しませう程に、せめてお歸りのお土產ともして、御退屈でも暫時お聞を願ひます、此所を御覽なされ』と新聞紙を指し

『此所に海軍大臣に月島武彥と有るでせう、お話しは此の方に就いて……』と言ひつゝ傍の急須を取りて、茶を注ぎしが

『これは大層冷えまして……』

「イエ、お關ひ下さるな、それより早く其のお話しと云ふのを……』

『マア御急性な、未だ日は高う御座いますよ、ホヽヽヽ』

一杯の茶を喉を潤ほし、さらばとて語り出てたる一篇悲慘の物語！

＊　＊　＊　＊　＊

此處は逗子の海濱、波打ち際より松の並木を通りぬけ、更に細道を左に曲れば、前は遙に松原越しに、靑海原を眺めて立てる、左程宏麗と云ふにはあらねど、先れ高貴の方の別莊とも見ゆる一軒の家あり。

打ち繞らしたる黑塀より內を窺へば、左程廣しと云ふにはあらねど、家の立住ひ、庭の有樣、先づ賤しき人の住家とも思はれず、道に敷きつめたる砂は、夜目にも白く、玄關の方に連なれり。左手は泉水にもや、筧の音夜の寂寞を破りて、皷の如く絕えず響けり。

宵の內より人の往來も絕えて、夜は寂然として物靜かに、只時々、女の高笑の聲の外に漏るゝばかり。それも暫時にて、塀の裡は寂として靜まりぬ。

三日月は鎌の如く、黑塀の上に出でたる老松の梢に淋しくかゝりぬ。

高き靴の音に四邊の寂寞を破りつゝ、此方に步み來たる一人の壯者あり。夜目にはそれと確かに分らねど、年の頃は二十五六か、風采何となく淡然として、動作の自から快活なるを見れば軍人か。身には海軍大尉の軍

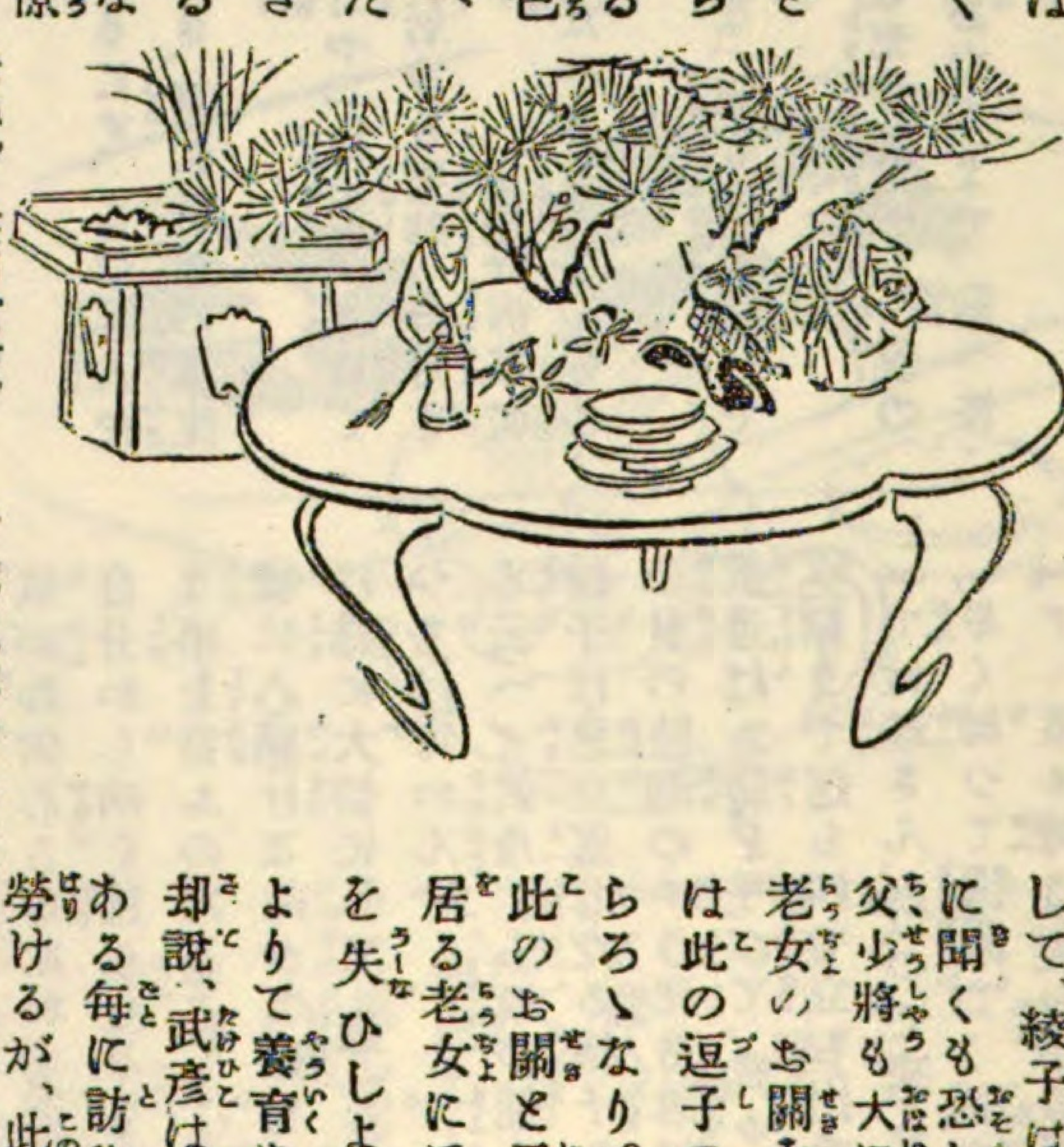
服を着けたり。

壯者は、足を止めて內の樣子を窺ひしが、裡の寂寞は前にも增して、たゞ幽に漏る丶琴の音！

『あ丶琴を調べて居るなァ……』

壯者は泫然として暗涙に咽びしが、はふり落つる涙を雙手に拂ひ、靴音高く門內に步み入れり。

此の壯者と云へるは、名を月島武彥と云ひて、目下、橫須賀鎭守府に在勤せらる丶、此年の春大尉に昇進せられたる方なり。背高くして骨格逞ましく、色は飽くまで黑く、如何なる事にも堪へ忍ぶべき色は、明に眉の間に顯はれたり。其の才智と云ひ、德行と云ひ、若き者には稀に見る所、他日に望を矚さる丶天晴れ有爲の人物にて、その樸直なると、その親切なるとは、常に彼の同僚間に敬愛を得るの主因となれり。さるを昨年の春、良媒ありて吳少將の令孃綾子と、目出度華燭の典を擧げぬ。連理の契淺からず、琴瑟相和して常に春の如く、愛は一家に滿ち渡り、『樂しき家庭』を形造り、平和、神は此家のみを治めすと思はれたり。武彥が常に妻を『綾さん』と呼ぶの僻は、彼の同僚間の話の種の一なりき。



されども兎角、世の中は如意ならずして、此の春頃よりして、綾子は苟そめの病が因となり、遂に聞くも恐しき肺結核に變ぜしかば、父少將も大に驚き打捨て置てはとて、老女のお關を添へて此處に送り、さては此の逗子の別邸にありて靜に療養せらる丶なり。

此のお關と云ふは、久しく忠實に仕へ居る老女にて、嘗て綾子の幼くして母を失ひしよりは、一に此のお關の手によりて養育されたるなり。

却說、武彥は橫須賀に在ること丶て、暇ある每に訪ひ來りて、綾子の病氣を慰勞けるが、此度、遠洋航海の命を蒙りて不日出帆の取運びとなりしかば、そを一應綾子にも語り、併せて少時の離別を惜しまんとて、さては今宵しも訪ひ來れるなり。

## 中

洋燈の光眩ゆき迄に照りわたれる一室に、相對して座せるは武彦と綾子となり。お關は湯など沸すらん、次の室へ下りぬ。

武彦は、今回遠洋航海の命を蒙りたること、こは軍人たるもの、大に面目とすることを説き、更に綾子の養生に就いての注意を繰り返せり。

『マア左樣云ふ譯なんだ、併し一月や一月半は暮して見れば早いもんさ、綾さんと別れて居るも暫時、一月と經てば直ぐ歸つて來るんだからなァ　僕等海軍に身を委ねた者の大に光榮とする所だから、綾さんも心弱く思つては可かんよ』

『ハイ、健全で行つて入らつしやいな、何も修業の一ですから……』

『左樣だ、何も修業の一さ、綾さんも充分養生して僕の歸る頃には元の通になつて、横須賀あたりまで、迎へに出て貰はうや、ハ、、、』

殊更に笑ひたる武彦の眞面目に歸りたる時、談話は暫時、斷絕たり。綾子は急に思ひ出したる如く

『貴方癒りませうか』

『何が』

『私の病氣が……』武彦は半言はせず

『それだから可かん、一體病氣は氣の持ち樣で如何にもなるんだ、心さへ丈夫に持つたなら、些少ばかりの病氣が如何わるもんか、それだのに、そんな事を思ふのは自分から病を重らせるも同樣だ、エ、綾さん、何故そんな事を言ふのだ、それより藥でも服んで、早く全快する樣に心懸けなくつては可かんではないか、僕の留守中は殊に大切にして、迎へにでも出る樣に快くならなくつては可かん』

と云へど武彦すら涙の催されぬ。

綾子は思ひ返したる樣子も見えず。何となくこれが此の世の訣別のやうにも思はれて！

武彦はお關を呼びて、呉々も留守中を托し、綾子お關に玄關まで送られて立ち出でたり。

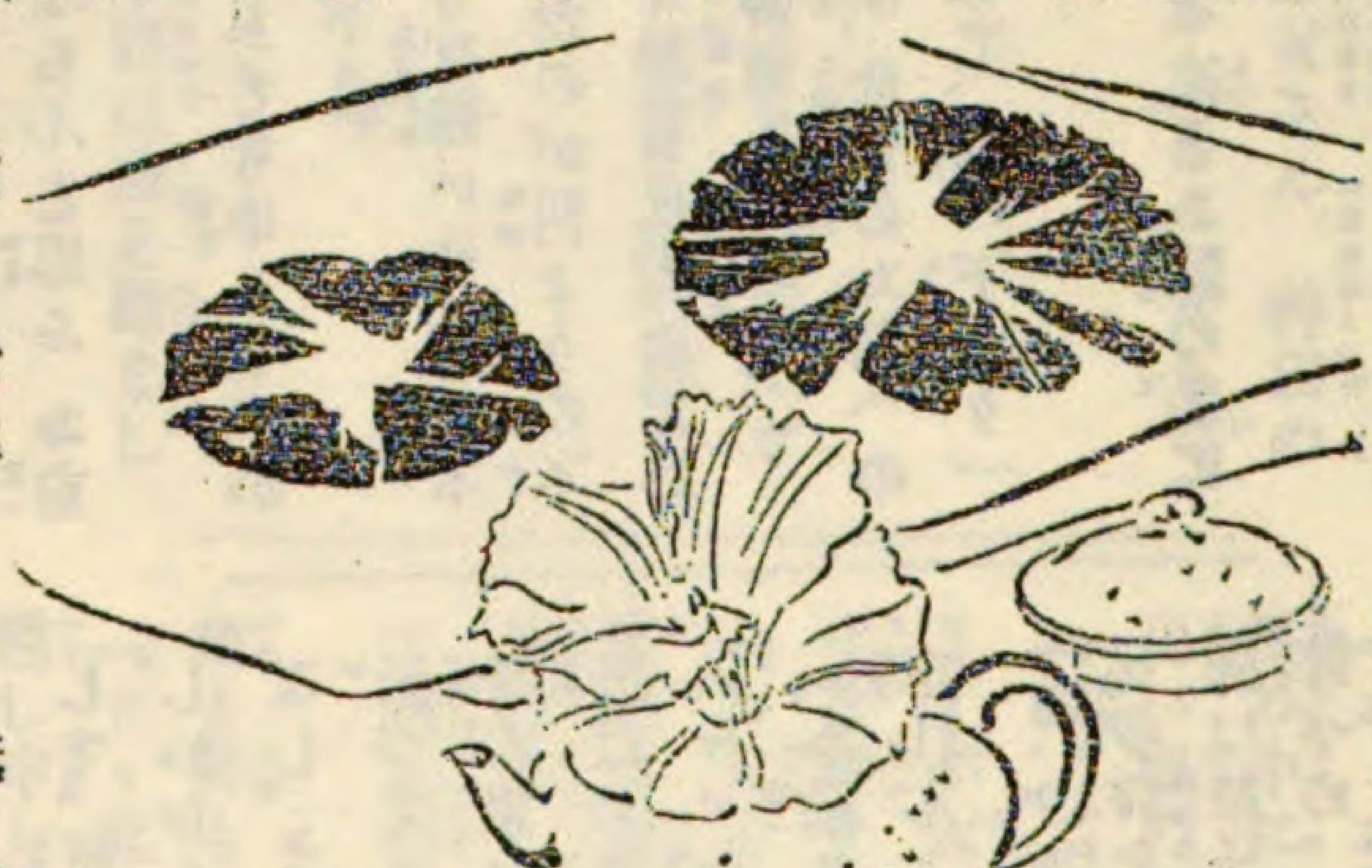
『では綾さん、行つて來るよ』

『早く歸つて頂戴』

『アヽ直き歸るよ、何も案じる事はない、……ア、訖度買つて來るよ、綾さんの嗜好なのを』と更にお關に向ひ

『では今云つたことは何分頼むよ、お前にも澤山お土產を買つて來よう、ハヽヽヽ』と武彦は靴音勇ましく

歩み出でしが、綾子は急に
『貴君』
『ツ』不審と共に二三歩もどりしが
『何か用でもあるのか』
『早く歸つて頂戴！』武彦の胸は張り裂けんばかり、ア、最愛なる此の病妻にと思へば、熱き淚は譯もなく流れ出でしが、私情を以て公務を缺く武彦にもあらざれば
『ナニ綾さん、直ぐ歸つて來るよ、それより綾さんの病氣が大切さ、僕は一日も早く全快を祈つて止まんよ、では行つて來るよ』
再び武彦は歩み出でたり。その門を出でんとせし時、更に『早く歸て頂戴！』の聲は後より咽び來れり。武彦は膓も寸斷する思にて、黑塀に沿ふて足を早めしが、道を右へ曲らんとせし時、何となく後より引戻さるゝ心地して振向けば、片破月は今しも山の端に落ちなんとして、暫し庭の松の梢にかゝり、獨り淋しき光を放てり。



# 下

効々しからぬ綾子の病氣も一時その効見えて、此位ではと人々も漸く安き思をなしたりしが、武彦の出帆せし翌日の夕よりして、又一時に發して血をはく數度に及び今は既に危く見えけるなり。

醫師の唯ならぬ盡力により暫し其の効見えて、灯ともす頃より病人はすやすやと寐入りければ、お關のみ殘して一同出で行けり。お關は獨り病人の枕元に、惝然として夢に非ざるかと疑ふばりに座し居たりしが、見るとしもなく病人の顏を窺へば、いたくも憔悴れ果てたるよ、愛嬌ありし眼は閉ぢて開かず、笑の上りし口は〆つて動かず、之を見たるお關は更に胸塞がりて、淚は譯なく流れ出づ。

『水を、水を』

病人は僅に唇を動かし

『ハイ』と聲に應じて、お關は病人の口に洋盃を當てた

るに、病人は力なき眼を懶そうに見開きて、お關を眤と眺めしが

『お關かい、アヽお前にも長々御苦勞をかけて眞實に濟まないよ、併し此度は到底快くはならんと思ふ、お前の心盡しは決して仇には思はんよ』

『マアそんな事を……病氣は心からとも申しますから、決して弱い事を仰しやらずに……』

『イヤ、お前のそう云つて呉れるのも有難いけれど、不治の病と云はれる、此の病氣に罹つたのが何よりの不幸、それに阿母さんも此の病氣で亡くなられたのだから、私も快くなる見込はない、此度がお前との訣別、……イヽエ私は最早諦めて居るよ、それ故、此世のお前への頼み、何卒此れを』と力なき手を伸して、床の下より一通の手紙を取り出して

『私の亡くなつた後、此をどうか……』とお關の手に渡しぬ。

『ハイ訖度お屆け申します、アヽ武彦樣も今頃は何處にお在でなさるのか、定めて私共へのお土產でも買つてお在でなさるだらうに、若し此を御覽なすつたら、マア何と思召でせう、成らう事なら武彦樣にもお歸り遊ばして、一目でもお目にかゝりましたら……其他何ぞ御用は……』とそつと淚を拭ひぬ。

（二二）

『もう言ひ遺す事はないが、私の亡い後まで丈夫に暮して、阿父さんに能く仕へてお呉れ、阿父さんも嘸ぞ淋しからうに、私の亡い後は、私に代つてお慰め申す人はなし、それを思ふと私は決して死に度はない、併し今更云つても及ばぬ事。たゞ頼みにするはお前ばかり、何卒後の事は一切頼むよ、此の綾が斯樣して』

叶はぬ手を合せんとするに、お關は辛くも制して

『マア勿體ない……』

『お前も隨分體を大事にして……お前の恩は決して忘れんよ、此れが此世の訣別……後の事は何分頼むよ、……アレもう可けないよ、早く阿父樣を呼んで……』

父少將を始めとし醫師、叔母、姑も皆枕元に集へり。醫師は綾子の手を執りぬ。人々は綾子と醫師との顏を見競べぬ。

醫師は久しくして頭をあげず默然たり。一座肅然として水を打ちたる如し。父少將は堪へかねて

『明日まで保てませうか……』

なほ醫師は默然として頭をあげず。

遂に醫師は憮然として綾子の手を放ちぬ。之を悟りたる少將は綾子の枕元近よりて

『これ綾、確かりしろ、綾、爺さんだぞ、分るかい』

威あつて猛からぬ、戀しき父の聲に、半眼を開き、

『お父さん、お名殘惜う御座います、お父さん、神田の……叔母さんは未だ……ですか、お父さん、もう可けません……』

眼は既に閉ぢたり。

『綾ッ、叔母さんは此處に居るぞ』

『綾さん、氣を丈夫にして、綾さん、私だよ、叔母さんだよ』力なき眼を見開きたる綾子は、昵と叔母を見つめしが

『叔母さん……』

叔母は何事をも云はず、枕元に泣き沈めり。

姑は更に枕元近くより

『綾さん……』呼べど答はあらず、少將は聲を勵まし

『これ綾、姑さんだぞ』

『私だよ、綾さん……』視線は姑の顔に注ぎしが、少時ありて

『姑さん、御免遊ばして……』泣き沈み居たるお關は、此時つと寄り確と綾子の手を握り

『お名殘惜う御座います』

熱き涙は綾子の顔に降りかゝりぬ。

『オヽお關か、左樣なら……』

眼の中には奇しき光のかゞやきぬ。お關は只首肯きぬ。

再び眼の閉ぢんとするに少將は

『綾、これ綾ッ、爺さんだぞ』

さすが父の聲とて、綾子は更に眼を見開きしが、少將の手を確と握り

『お父さん、もう可けません……』

醫師は更に綾子の手を執りぬ。

月は時しも前栽の松の梢をはなれ、一道の幽光を放ちて涙に汚れたる綾子の顔を照しぬ。

＊　＊　＊　＊　＊

語り終りて老尼は、そつと涙を拭ひぬ。

『ア、其の後の事は多くお話し申しますまい、何をお隱し申しませう、その老女のお關とは、斯く申す拙尼で御座います、せめて亡き後を吊はうと思ひまして、此の姿になりましたので……ハイ人の運命ほど測り知られないものはありません……ア、飛んだ愚痴を申し

まして、嘸ぞ御退屈でしたでせう。明日お出發とあらばドレ行つて御馳走でも仕ませう』

悄然として老尼は立去りぬ。

我は人生の敢果なきを思ひ、運命の定め難きを悲しみ、一種の感にうたれて、默然として頭を低れて閣き居たりしが、フト頭をあぐれば、暮色既に窓前に迫り、遠近の里には、はや燈火の二ッ三ッ輝き初めたり。

（をはり）

遠征のますらを、病孽のなさめ同情なきにあらず、されど父の少將といひ、大尉の武彥といひ、病婦のあや子といひ、いづれも彼の芦花生とやらの不如歸中のものに似かよひて飽かぬ心地ぞする惜むべし（撰者）

丙賞（別撰）（賞品圖書切符金一圓）

# 取り替へ玉

芝琴平町三　吉澤清子譯

## 上

ルビー君とゴールド君が彈正家を訪ねた時に侯爵は丁度在宅で、直に其居間に通されたか、兩人が部屋に這入つた時、侯爵は寫字臺の前に立つて居た

「何か御用がお在りなさるのですか」と云はれたのでゴールド君が自分に應接役を引受けた

「御前、今日は其少々妙な事でお伺ひ申ました」

侯爵は首を傾けて自分も椅子に掛けた

「侯爵夫人が今朝手前共の店にお出で下さいました」

「奥が？」「奥方が！」

ゴールド君は默つて仕舞つた、此人は此事は妙な事だと自覺してるのだ

「奥方が店からお歸りになります時にお間違へで……」

ゴールド君は此詞に殊更に力を入れて倘繰返へした

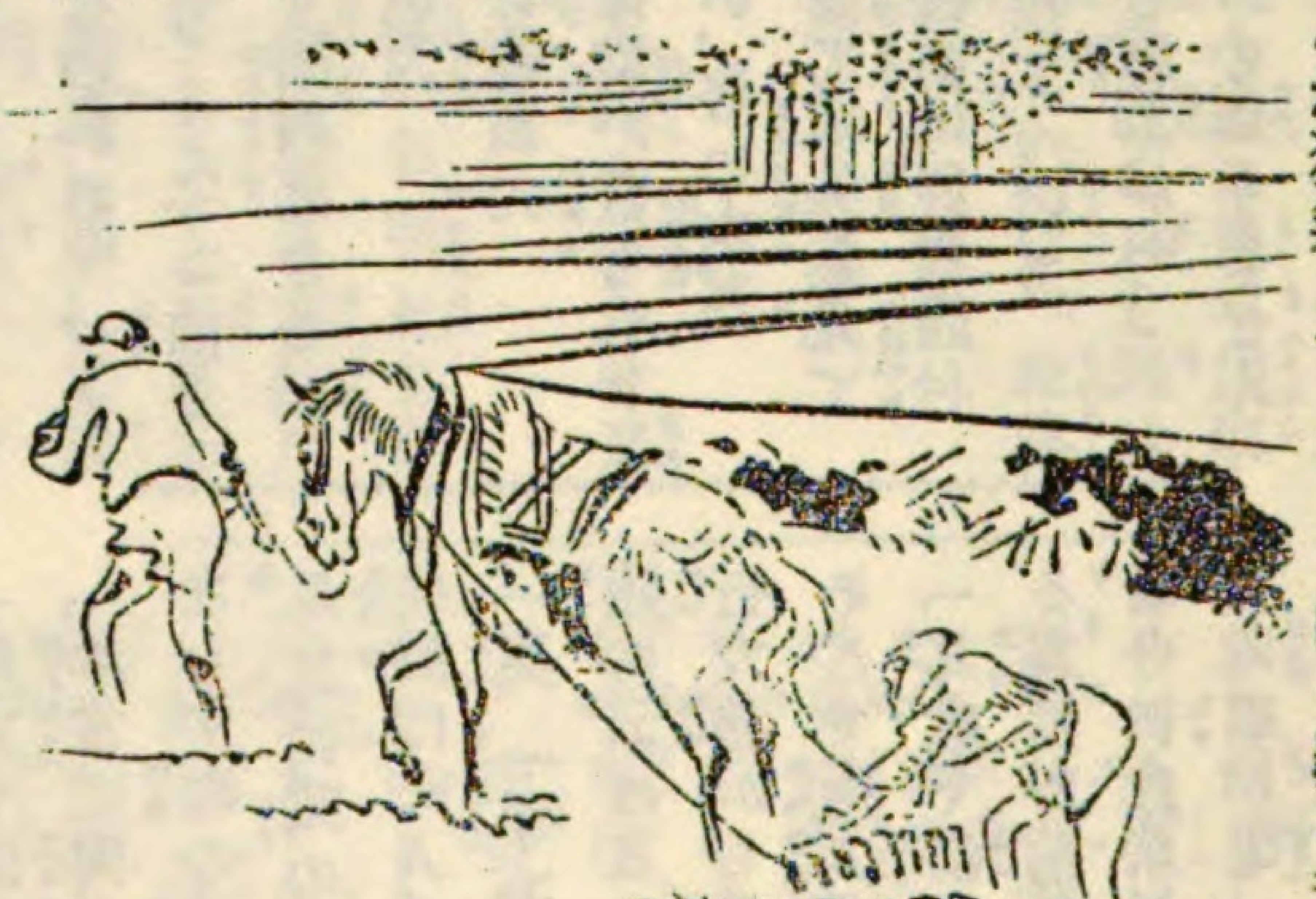
「お間違へで御所持の品をお忘れになりまして手前共の品をお持歸りになりました」

「ゴールドさん……」侯爵は眼を見張つて

「私には一向分らんが」そこでゴールド君は萬事平つたく云つて仕舞ふと決心して

「御前、手前は極平つたくお話申上ましよう、今朝奥方が手前共の店からお歸りになります時に、廿萬圓計の價値を致します金剛石を數個お持歸りになりました……まだ餘計わり升が能く分りませんけれ共、私共も未だ能く品物を調べませんで只荒方の見積で御座いますが

……それから其代に糊細工の似せ物をお殘しで御座いました」侯爵は立上つて振へて居る、多分怒つたんだろう
「ゴールドさん、ワ……私はお前さんが狂氣してるとしか思へない」
「御前、譯は只今申上げました通で、テ……ルビーさん今申上た通ですテー」ルビー君は貴人の前に出て非常に尊敬を表はす時は何時も、、、、マゴック癖があるが、此度も手巾を取出して額を拭きながら
「ゴールドさん、ワ……　私は左樣思ふ樣です、御…　御前、手前共は其ヒ…　非常に困難をカ…　感じませんければケ…　決してお邸にお伺ひイ……致しませんと云ふ事をお察しを願ひます」
「ルビーさん、辯解は止して貰ひましよう、それよりも事情を能く了解したい者ですが、お前さん達は彈正・…彈正侯爵夫人……」自分にもそんな大罪の事を信じられないで、侯爵は自分に自分の詞を反響して



「お店の寶石を盜んだと云罪をお着なさるのですか」
「お許を願ひまして平つたく申上ますれば、別に何方にも罪を着せると申樣な譯では御座いませんので、只御前がお邸の御勘定の内に寶石の値段を書上げますのをお許にさへなりますれば夫で宜いので御座います」
「お前さんが無なつたとお云ひの寶石の値段はいか程だつたかね」
「其處の所は手前共でも未だ明細に取調べ致ませんので御座います、御前、明白に申上ました方が宜敷御座いますからお耳に入ますが、何も彼品は以前から少し宛無くなつて居た者だろうと思はれ升ので、一時間許前迄は無なつて居樣などと云ふ考は少も無かつたので御座います」
「そうすると詰り奥が仕入の爲めに盜んで居たとお云ひなんだね」ゴールド君は默つて仕舞つたが、此樣質問には特別の手段で胡魔化して仕舞のが上策と考へて

「御前、買人に依て買物の仕方が違ふと云事をお考へ下さい、まあ一寸Aの夫人の、B令嬢と皆な其買物の仕方が違ひます、奥方にも亦奥方のお買物の仕方がおありなさいますので」

「お前さんは奥を盜人根性だとお云ひなのかね」ゴールド君は默つて居る、デ、重ねて「ゴールドさん、お前さんは其樣な非度い事を私に云ふのは餘り面白過ぎるだろうじやないか」丁度其時誰か戶を叩いた

「其處に來たのは誰だ」女の聲で外から尋ねた

「這入ても宜う御座いませうですか」侯爵が許もしかい内に女が獨這入て來た、丈の高い、若い、好い女だ

「御用がおありなさるのですね」と云つて兩人を見て尋ぬる樣な眼付で侯爵の方を向いた、侯爵は妙な顏付で夫人を見て見たが

「私はお前が此方達を知つてるだろうと思ふが」

「私が？私は知つて居なければなら無かも知りませんけれ共、何も見覺えが無い樣で御座います」ルビー君は丸でお辭義、それから微笑とも、み手で出來上つた人の樣な鹽梅で頻に其展覽會を始めて

「手前は今日迄此御婦人にお眼通を得ました事は御座いませんで御座います」侯爵は眼を見張つて

「會つた事は無い……ソ……夫じや何してド……盜人だと云ふのです」

「奥方で御座いますか」と兩人一時に叫び出した

「本當に彈正侯爵夫人！」二人は青くなつた、青いのみならず虹の樣に一時に幾色にもなつて、自分共の眼に見、耳に聞のを事實と信じられ無者の樣に眼を見張た、侯爵は夫人の方を向て戶を開けてやりながら

「奥、一寸お前は彼方に行て居て下さい、私は是非此人達に云はなければならない事があるから」夫人が出て行た後から侯爵は其戶を閉めて其前に突立つて居る、そこで兩人共餘り氣味が能くない

「其處で何した者だろうね、お前さんは奥が盜人をする爲にお前さんの店の常得意となつて居たと云ふ罪を着せに此所に來ながらィ　今更、實際一度も確に見た事がないと云ひますね」

「併し御前……」ルビー君はせき込んで

「ソ・夫はワ・　私共の店にキ・　來て自分に彈正侯爵夫人と名乘つた女と違ひます」

「宜しい、而して夫が私に何な關係があるとお云ひな

んだ、私はお前さんの店に自分から侯爵夫人と名乘て行く奴に皆な責任を負はなければなら無だろうかね、ルビーさん私はお前さんに忠告するがね此から其樣不注意な難題を云ひ掛くるには、前以て自分の所で眞僞を搜ぐるのが適當だろうよ、お前さん達に最早用事はないから歸て宜しい」侯爵は案內顔に廣く戸を開けた、ゴールド君は連の人が未だ要領を得ない內に、此案內に從ひはしないかと思つて相手の袖を引いた

「御前、御前に申上度い事がも少し御座いますが」侯爵は又戸を閉めた

「それはお云ひなさい共、併し成るべく私を困らせ又お前さん達ぬ赤恥をかゝない樣な鹽梅に子」

「御前、手前が先刻申上ました事、又此から申上ます事は只御前が御關係のないと云ふ事を明にする爲計だと云事を御信用を願ふて置度者で御座います、夫にお邸は以前から手前共の上等のお得意で御座いまして決して手前共の零落をお喜びになる樣な事は御座いませんと信じまして」

「ゴールドさん私は奥の名譽を傷けられたのゝ幾倍もお前さんが零落するのを寧ろ願ひます」ゴールド君は躊躇したが、侯爵の答へ振が面白く無いと見て

「ルビーさん、お前さんから何卒私共が其女を自分から名乘て來た樣に侯爵夫人だと信じた譯をお話申上て呉ませんか、勿論御前は何か理由がなければ私共が夫を信用しないと云ふ事は御承知でお出なさるから」

ルビー君は連から宛れた役目の意味を充分味ふ事が出來無かつたらしい、デ話す事は話たけれ共寧ろ不完全だ「御前、テ……手前共が少く共一目なりと英國其他の貴族樣方〃御家內は承知致して居ると云事は御存知で御座いませう、併し御前が御結婚になります時は丁度手前は外國に參つて居ますし、ソ……夫に奥方は井……田舍からお出で御座いました」

「ルビーさん、私は自分が誰と結婚したと云ふ位の事は覺えて居るよ」

「御前、全く……全く左樣で只其……只手前が何故奥方のお顔を御存知申上ないかを申譯致します爲で、夫で御當家の御紋の付いた二頭立の馬車で手前どもの店に……」

「自家の紋の付た馬車で？」

「御紋の付ました馬車で」ルビー君が倘語を續け樣と

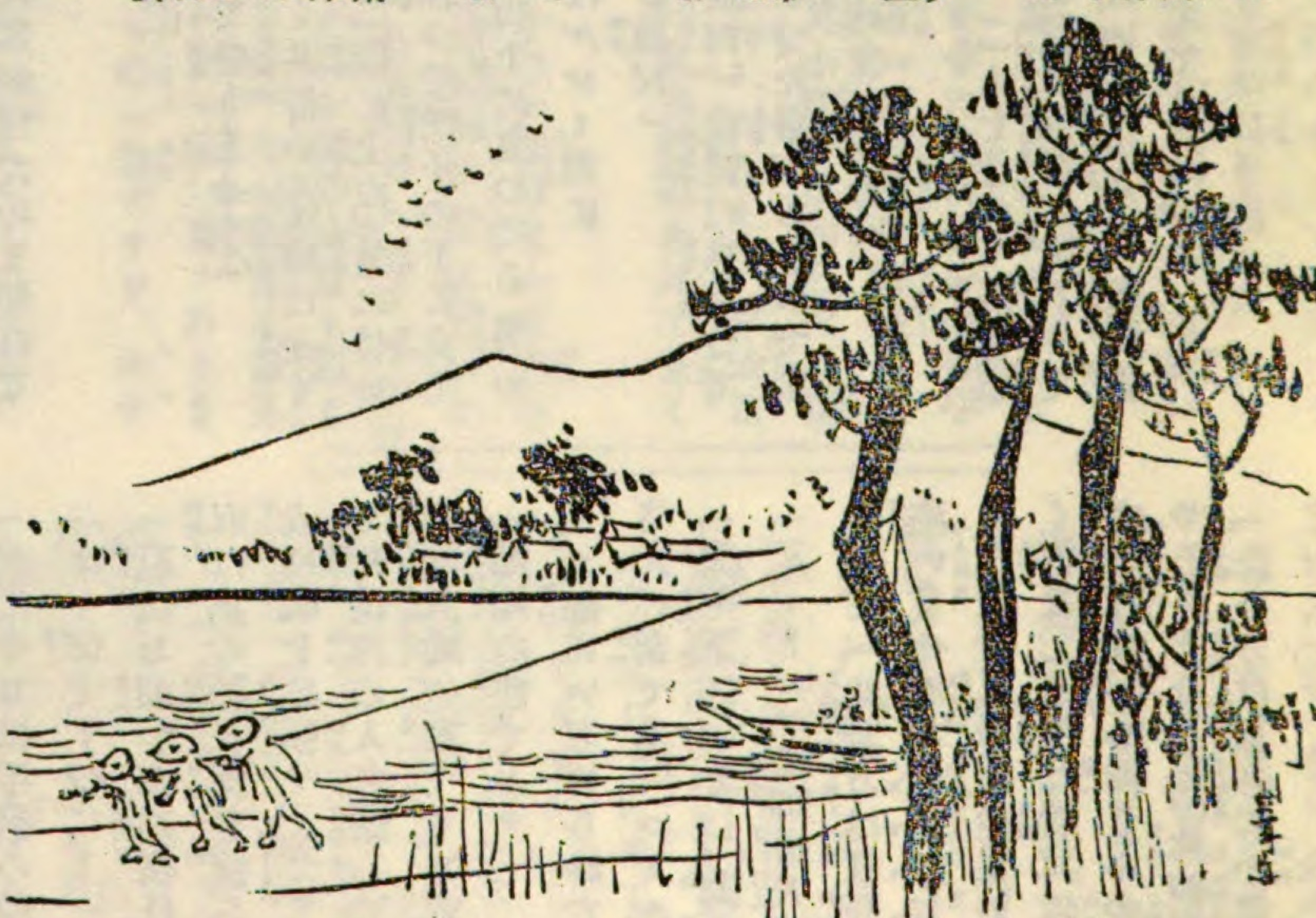
した時に侯爵は困つたと云ふ風で舌打ちをした
「(妾は彈正侯爵夫人だが夫が此方は古くからの得意だと云ひました)手前は御前が古くから御ヒーキになつて居たと云事を御注意下さつたので奥方をお迎へ申ますのに非常に難有思ひました、(夫が此方で買物をする爲に此小切手を呉ました)左樣仰やつて紙入から小切手をお出しになりましたが、コーツ宛の御前のお小切手で、金壹萬圓也右ノ金額ルビー及ゴールド商會又は代理人へ御拂渡可有之候也とあつて御前の御署名が御座いました、其女は壹萬圓の買物をして其小切手で拂ひを致しました」
「貴方は其小切手を受取たでせうね」
「手前共はコーツに仕拂を請求しまして直に拂つて貰ひました、其樣譯で御座いますから少しも疑ひませんで御坐いました」侯爵は室内を運動しながら聞いて居たが、少し不安心な風をして居る
「私は其女が私の小切手で買物をしたからつたつて必ずしも其人を侯爵夫人とは思はない」
「手前共は前申上ました通り特別の事情がある場合だつた者ですから信用致ましたので、少く共其方に餘計想像が傾いて居りました、手前は誰に御前の小切手をお渡になりましたかを承はる事は出來ますまいか」
「聞くのは好いけれ共、私は何故夫を云はなければならないか分らない、夫は最早仕拂ひが濟んだんだから不都合はないじやないか」
「手前は左樣思ひません、御前も少しお考へになりましたらばお分りになるで御座いませう、若し御前の小切手と云ふ確な證據が御座いませんければ決して手前共も幾萬圓の者を盜まるゝ樣な事は致ません」侯爵は彼方此方に絕す不安心相に歩て居る、兩人は夫を見守つて居たが、遂に寫字臺の方に行て其處の椅子に腰を掛て、足を前方に蹈出して手をズボンの隱しに入ながら
「私は充分其事を打明やう、お前さん達は此事を口外しない樣に願ひ度い」兩人は頭を下げた、彼等は實に其要點に達しつゝあるのだ、打明樣と前置はして置きながら侯爵は頗る話兼て居る、
「私が結婚をする前に或婦……婦人にチ……近附があつた、結婚をする時に其關係は切たんだが最後に會つた時に、其婦人がお前さんの所に壹萬圓寶石代の借があると云ふから其小切手を遣つたが、其借を返へすか何かを知る爲にお前さんの店宛の小切手にして置いた

のだ　私は夫が一番上手なやり方では無かつたらしいと今は思ふが……併し又今私が云た婦人は物を盗むなんぞと云事は無と信ずる種々の理由があると云ふ事を承知して置て貰ひたい」

「何か其御婦人のお名前と御住處を承知致度者で御座います、尚只今から御一緒に御足勞を願ふ譯には參りませんで御座いませうか」

「八ケ間しい事を云ひ出すんですねー、私にはそんな必要はないと思はるゝが」

「左樣願になければ警察に願出すより外に仕方が御座いません、左樣しますと御前、惡い噂が立つかも知れませんぜ」侯爵は實に胸を刺された、彼はゴールド君を見、ルビー君を見、床を見、



自分の靴を見、而して又ゴールド君を見て立上て着物の振を直す樣な風で少し身振ひをして遂と決心して

「ゴールドさん、私は惡評を好んからお詞の通にしませう……全く行く値打があると思ひますお供しませうが直にお出になりますか」

「御前がお宜ければ直に」侯爵の向ふにはルビー、ゴールド兩君を相並んで載せた侯爵家の馬車は奇麗なセント、ジョン森の內で尤も風景の好い所にある宏壯な別莊に引入れられて、案內を乞ふたが玄關番は居なくつて御者服を着た品の好い、全く下男とは見え兼ぬる若い好男子が出て來た、此男は戶を開けて見て驚いた、此男が驚いたのみな

らず兩人も亦驚いた、侯爵は此に氣が付たかも知れないけれ共氣にも止めなかつた
「マンスフイールド孃はお宅かね」
「多分お宅だと思ひます、一寸見て參りませう」
「私が自分に行て見樣、案内しなく共好い」侯爵は全く能く案内を知つてる、兩人を連て二階に上た、男は付いて行くべき者だろうが何うかと思つて梯子の下に立て居たが、皆が梯子を上りきつても尙下に立つてる男の見えなくたつた時にゴールド君はルビー君に
「彼の男は何處かで見た事がある樣だ」
「私も左樣尋ね樣と思つて居た所だ」侯爵は立止つて
「彼の男を何處かでお見掛けになつた事があるのですか、話がそろ〳〵分らなくなつて來ましたね」

## 下

全く侯爵は能く案内を知つてる、二人を連れて或部屋の前に行て一寸戸を叩いて直に奇麗な部屋に這入つて行つた、二人も付いて行つたが、好い女が居る、若い美人で向側の長椅子から立上つて「オヤ」と云つた
「マンスフイールドさん」
「何うしてお出になりました」
「私は今日は手品の種を習はうと思つて來たんだが」
「オヤ何ですつて?」侯爵は戲談は止して眞面目に
「私はお前から其樣仕返を受る程惡い事をしたかね、私は奥の顏に泥を塗らるゝ程の事をお前にしたかね」
女は眼を見張て「妾には仰る事がちつ共分りません、丸で月世界の人と話してる樣ですもの」
「此人達の前でもお前は其樣事を云ひますね」
「誰達の前でゞす」
「お前にいぢめられた人……ルビーさん、コールドさんの前でも」コールド君は二三歩進み出て
「御免下さいまし、御前夫は此お方では御座いません」
「エー?」「此御婦人ではないので」「何の婦人ではないのだ」「此お方は自分で侯爵夫人と仰つたお方では御座いません」「ソレヂヤ何んな奴の事を云ふんです、全く二人で私に用のない詮索をさせ樣とするのだね、全く當なしの捜し者だ……お前さん達は私が小切手をやつた女がお前さんの店を惠んで吳た奴だと云つたぢやありませんか、此が私の小切手をやつた女だ」
「此お方は私共に小切手をお渡になつた方では御座いません」「ソ……夫じや何奴が吳れた」「御前、其處が

肝腎の處で、此お方に二つ三つお尋ね申上ても宜しう御座いませうか」「イクラ」でも女が口を出した
「此人は五十でも五百でも尋ねませうけれ共、御前が何した譯だかお話下さらなけりや、一つでもお答へするのが氣掛ですねー」「ゴールドさんまあ私にお任せなさい……、マン子お前は私がやつた壹萬圓の小切手を何した、壹文も借もしないで店から非常に催促するなんぞ私に云つたじやないか、其小切手を何したか話して見ろ」此云ひ草が女の急所を押へたらしい、女は色を變へて口を結んで何も蔑んだ風で侯爵を見て暫く默つて居たが遂と口を開いた
「私はそんな事を云なけりやならない事はないと思ひます、私が夫を何したからつたつて貴下に障はないじやありませんか、私は夫を貴下から貰つたんですもの」
「夫が私に關係があるんだ、オマケにお前の身にも關る事だから夫を何したかお云ひなさい」女の眼元と口元の抵抗の色は倘增して來た、「チットモ話し度アありません、何して云ふ者ですか、ソリヤ私の物ですワ、モウアルフレッドに與つちやつたワ」
侯爵は絶叫した、「アルフレッドにて其アルフレッドてーのは誰の事だ」女の鋭氣は益增して來た
「アルフレッドつて私の情人だワ」侯爵は面喰つた
「ソレジヤお前の好きな奴に與る爲に私をだまして壹萬圓取つたんだナ、夫で皆な分つたが、アルフレッドは夫を誰に與つた」「誰にも與りはしませんワ、銀行に拂つたつて云つてたつけ」「ソレジヤアルフレッドが叉嘘吐いたんだ、其男は何處に居る」
「ア……彼れはあの……彼れは此處に居ます」
「此處？此部屋に？何處？椅子の下？窓掛の後？」
「何、此家の內に居るんですよ、今下に居ます」
「何時から下に來て居るんだ……マア其樣事は聞かなくつても宜が、何しろアルフレッドを此所に連て來て貰ふ譯には行かないかね」鋭鋒當るべからずと云ふ女が急に泣出した「妾は御前がお笑ひなさるだらうと思ひますワ、屹度お笑ひなさるに違ひないんだもの、併し妾しや元から上等の女じやなかつた事ア心得てます……夫で彼の人は大變可愛んですのホンノ……ホンの下男ですけれ共」「下男？ソレジヤ先つき取次に出た男かい」ゴールド君が叫出した此は實に絶叫するに足る事だ「分た、占めた、私は其顏に見覺えがある、何處で

見たか思ひ出せなかつたが……彼奴だ、御前、彼取次に出た男を呼んで下さいませんか」
「ゴールドさん其呼鈴をお鳴しなさい」女が口を出た
「イ、エ、鳴らしてはいけません、妾は呼び度ありません、彼に何か用事があるんですか」「一言三言尋ね度事があります、若しアルフレッドが正直な者なら私共に辯解するのが其男の爲です、又悪い奴ならば貴女は夫を御承知になるのがお得です」此理由が承認されてゴールド君が、ベルを鳴した、併しちつ共返事が無い、二度三度鳴しても返事しない、「可笑いなア、下に降りて捜したら宜いだろう」侯爵の此動議を實行し樣とする時に戸が開いた、アルフレッドではない、全く男でもない、赤つ顔の下女が開けたのだ
「アルフレッドを此方にお呼び」「何處にも見えましねーだ、何處かオツ走つたんだんベー荷物ウ何にも無えだ」「逃げた？」「何處に？」「何處行たゞか分んねー、妾イ部屋ア行て見たゞが居りましねー、夫から此處ん處の前に此樣な者う落ちて居ましたゞがね」
下女から紙包みを受取つて侯爵が見たが
「ルビー及ゴールド商會御中、此はお前さん達宛だ」でゴールド君の手に渡されたが、此は長い青い狀袋で下女は皆が居る部屋の前で拾つたのだ、中からは長い板紙に寫眞を三枚張つた者が出て來た、第一は好男子、間違もなくアルフレッドだ、第二はアルフレッドが全く女の髮に結つてるので、第三はアルフレッドが女の帽子を冠つてウエールを下げて好い女に化てるのだ、板紙の下の方に優しい女風の字で（彈正侯爵夫人より）と書てある、マンスフイールドは泣きながら
「妾は彼の人が女の風をするのが上手な事は知てましたけれ共、此樣事を仕樣とは思はなかつた」

＊　＊　＊　＊　＊　＊

金剛石の代金は彈正侯爵が拂た相だ

秀逸

# 夜渡月

近江高島郡安曇村　三井素麻子

（上）

お孃樣、お嬉しう御座いませふ。」と妾の前に衣縫ふ仲勞の花は云ふ。如何で嬉しいろべき。彼の君との結婚ならば、問はれざるも押し匿されぬ喜びに狂ふなるべし、されど此苦しき結婚。千々に言を盡して幾度とな

く御諫り申上るとも露聞き入れ給はゞこそ、女子の身として、生意氣者よ生ト學問させしが過りと敦ち給ひ。天にも地にも唯一人の娘、何條惡しくははからふべき。唯々何事も云はで此母に隨ひれ。よく〳〵考へても見よ、春野樣は此里にても一と云ひて二と下らぬ御家柄、御本人は去年大學を卒業し給ひ、世に持てはやされ給ふ才子。此方より願へばとて容易く得らるべき御方ならぬに、如何なる幸か汝は世に又なく思はれて斯くも日出度事とはなりしを。と繰り返し繰り返しのたまふ。日頃優しき母上の、何も〳〵幸あれかしとされんト給へばなり、などて恨み參らすべき。されど其御心盡しもなか〳〵に妾に取りては仇なりや。

秋雨の空曇り初めてより我袖は涙し乾く暇もなく、日を經るまゝに思はいとゞ增鏡映る姿の衰へ。最早日も定まり半月とはあらぬをいかにせん。せめて嬉しき友の在さば心强からんものを。あはれ妾ばかり幸薄き者は世に非トかし。まだ難波江の草のよしあし知らぬ時より、はゝそばの母に別れ、うきふししげきよに生ひ出でゝ、やう〳〵西東覺え初めしに又もや頼みに頼みし父上は五年の昔、妾の十四の春の暮、時鳥の一聲に誘はれてはかなくも黄泉の客となり給ひぬ。殘るは今の母上と幼き弟と妾と唯三人。妾十才の時定め置き給へる夫の君はありながら、岩にせかるゝ瀧川の暫し別れて又の逢瀨を樂しみに、鳥がなく東の都の學の林に奧深く尋ね入り給ひ世に秀でたるざえの光の著るしく、去年の春譽ある花をさへ手折り故郷に錦飾らせ給ひし故、妾の嬉しさたとしへなく、とく〳〵約束を果たさんことをのみ願へりしになほあかず思され、今ましばし世の外に假棲して、眞理てふ寶求めんとて、比叡の麓のさる御寺に哲學とやらを定むべく定めて遁れ出でたまひぬ。かまへてかまへて、いかなる事のありとても我志をさぐる迄は、浮世とのゆききは絶えてあらしの松の風のみを友とせせん、汝も忍びて待ちれ、やがては嬉しき夢も結ばんを。とてふと家を出で給ひしより、露音づれもせさせ給はず、妾も彼の君の爲家の爲なればとて燃ゆる思ひを冷たき比翼の片羽に包みて夢驚かし奉らざりしが、此の程の苦しさに堪へやらで、良き工夫を數へ給へと、空行く雁のつばさに、涙に染めし水莖のあと持たせしを、包み紙をも解かで返し給ひし御心强よさ。何事のあるとも知らで封をも切り給はざりしなるべし。されど一度中の言葉を見給はゞつれなく見えても御心の中はいふにもまして妾を情々しく覺し給ふ君り、いかで一言の返しもせでいますべき。かゝる世に嬉しき君をよそに、他し人に嫁がるべきか。まいて操は女の寶と聞くものを、よしや未だ三つの盃廻らさすとも、かたみに許す妹脊山、吉野の川の流るべしやは。長の年月學びの道をたどりしは何が爲ぞ、貞烈は机の上の論のみにて止むべきものか。さは云へど孝といふ字は人の第一に守るべき道、萬の行も之れよりと學びしにはあらずや、今世に便り少き母君を捨て參らせせの君に從ひなば、生の親にも勝る母上、襁褓の中より、浮世の荒き風にもあてず、朝夕はぐくみおほし立てたまはりし御惠を、萬分の一も報い奉らざるのみか、情あふるゝ御心に逆らひ奉るさる鬼々しき事の出來得べきぞ。さらば御言葉のまゝにならんか、世の常の少女子の身なりせば一言も云はでまかすべし。されど……されどままならぬ妾が身。あゝ如何にせばや。しのぶもちづれ君ゆゑに亂初しをあはれとおほせしたはしの君。

重盛公の其昔思ひやられて貞と孝との二道に迷ひ入るこそ悲しけれ。詮すべなければ、淵川に身を沈めなむか、捨てゝかいある命なりせば、さら〳〵惜しまれど、妾なき後に、かの君の、かくと聞し召さばいかに口惜しうも歎き給はん、一言もつげ參らせで果てなば、不孝の上不孝を重ぬる理なり。斯くては死するも協はざる妾が身。あはれ父上の世にましまさばかゝる歎きはあらざるべきに。此世には神はいまさずや、佛は

あわれと覺し給はぬか。明日は叔母君の御宅にて佛事營み給ふとて母君は弟の清と共に物じ給ふべければ、この折を過さで戀しきせの君許訪れ行き、思のたけをつげ參らさばや。

（中）

夕日花やかなりし野も山もいつしか暮れて、薄墨を流しゝが如く、袖の時雨ときほひ顔なる露置く草ふみしだきつゝ、日吉の御社の鳥居もはや過ぎて左に行けば、いさゞ小川の流れさゝやくが如く恨むが如く聞ゆるも心なしにや。邊は晝ならば血しほ染めなす紅葉も、夜目には幾本の影小暗し。月は上りて鳰の海の小波にきらめけど、さらでだに曇り勝なる空あひ、涙に霞みていよゝ見えわかず。世に嬉しき身なりせば、をかしとも愛でんものを、今はなか〳〵に月こそ物思はする種なれや。

元より慣れぬ野路の夜歩みに、つまづきつまづき行く足もとのたど〳〵しさよ。裾は露。袖は涙に打しほれ、安けく眠むる鶉の床の草むらに立ち迷ひて、絲より細き蟲の音に、覺束なくたどり行く。をちこちに聞ゆる諸寺の鐘の音、心ある身には一しほあはれなり。

思ひし事の坂本も、いつしか果てとはなりて、月に鳴く猿の聲ぞ物すごき。彼の君の在す、妙蓮寺てふは、此所らあたりと聞きしを、何らならむ。杜を漏るるかすかなる燈火はそれなるべし。いざとく行きてむ。さはれ、何と云ひて世を隔てし門を叩かむ。切なき思ひを、如何なる言もてつげまゐらせむ。もしや契たがへしとて、御言葉交させ給はざりせば、如何はせん。又もや思ひ亂るる胸の中。しかすがに心の後れて、家を出し時の雄々しさ、今更に我ながら怪しまれつ。されど雁の言傳をつれなくし給ひしをこそ恨め、などて妾よりたぢろぐ事やあるべき。

身はいつしか御寺の門迄に佇みぬ。八重葎とぢはてたる庭の面に落葉さへ積りて、はかなき竹の袖垣にまつはる蔦かづらあはれに、蟲の音いさしげし。

朧なる月影にすかして、斜にかゝれる額、打ち見やれば、あはれ嬉しや、文字は正しく妙蓮寺と讀まれぬ。訪ふ人もなき心安けさは、門の戸つと押せば、直に開きて、妾を迎へ顔なり。打ち入りて、君や何處と見廻すほど、御堂の後より燈火の光さして人の聲す。障子に映つる二つの人影、左なるはまがふ方なき戀しの君。今更に胸とゞろきてさながら早鐘を打つ如し。

さるにても、再び浮世の風に吹かるゝ迄は、妾にも人にも逢はじとのたまひしを、主人の法師とも覺えぬ、いま一つの影の客人は、何人なるらん。われとわが胸押し靜め、しばし覗へば、中にはそれ知らばこそ、憚かるさまなき聲音に、話續けて

「……そうして非常に煩腦を惱まして居つたのだ、所が幸に良い月下氷人があつて、萬事都合よく行つて、いよ〳〵この月の二十八日に結婚の式を擧る事に定めたから、何たか心急しくつて、彼の事に着手する暇がないが、何れ來月の中頃から調べに掛らうと思つて居るのだ。」

「ふむ、そうかい、そらあ何より賀すべしだね。それぢやお暇を得てやり給ふのだね。僕も少しく得る所があつたから來月限り此寺を出やうと思つて居るのだ。すると君の結婚の式は二十八日かい、ぢやあ僕もそれ迄に歸宅して其式にも連るよ。」

あゝこの清く涼しき御聲こそは、夢に現に、露忘れやらぬなつかしの君。二十八日とは妾の式擧ぐべき日なり。その少女子は、いかばかり嬉しかるらむ。あはれ羨ましきよ。同じ日に同じく身を定むべき祝して、上と下とに變り多きぞうたてき。かくていつまでもあるべきにあらねば、震ふ聲かみしめて。

「お頼み申します。」

と音なふ。中には驚きたる氣色して

「誰方です。」

さて我夫の君は、前なる紙障子開き給ひつ、怪しげに、燈火にすかして、

「オヤ、綾さんぢやないか。」

「あ、秀雄さん。」

妾は覺えずまろび上り御膝に取りすがり身を悶へつゝよゝとばかりに泣きふしぬ。

「綾さん、何しに來たのです、今時分。」

答せんとすれど、怪しう咽喉ふたがりて、

「困るぢやないか、あれだけ約束をして置きながら然もこの夜中に、餘り女子として大膽過るね。」

と鋭く云ひ放ち給ふに、いとゞ苦しさやる方なく、漸漸に顔振り上げ

「はい、約束も存じて居りますし、御勉强の妨にもなり、お叱りを受ける事はよく承知して居ながら、女の身としてつゝましくもなく、三里もある此山奥に尋ねて參りましたのは、例へどれだけお叱りを受けても、身をきざまれても、申上ればならん事が有りましてゞ御座ります、どうぞ暫く浮世の身と思し召してお耳をお汚し下さいまし。」

常にもあらで亂るゝを哀れと思し給ひてか、少しく和らぎ給ひし御有樣

「どうしたのだね、云つて御覽。」

いと嬉しうて、云はんとせしが、今迄思ひ亂れて、客人の在すてふを忘れ居しに、床柱背にして、はしたなき妾が姿見つめ居給へるに心付き、今更面目なくて、唯口つむぎしまゝ頭下げて禮をなし、ふと見定めば、ひが目かあらぬか、この客人こそは、妾が苦しみの源なる春野の君にぞありける。餘りのゆくりなさに後ざきにどうと倒れぬ。折しもこゝの小法師入來り、何やらん云ひしにつれて春野の君は出で行きましぬ。

（下）

やゝ起き上れば。

「綾さんどうかしたのかい、今倒れたぢやないか。」

「あの……今こゝに居らつした方は春野樣ぢやあ御座いませんか。」

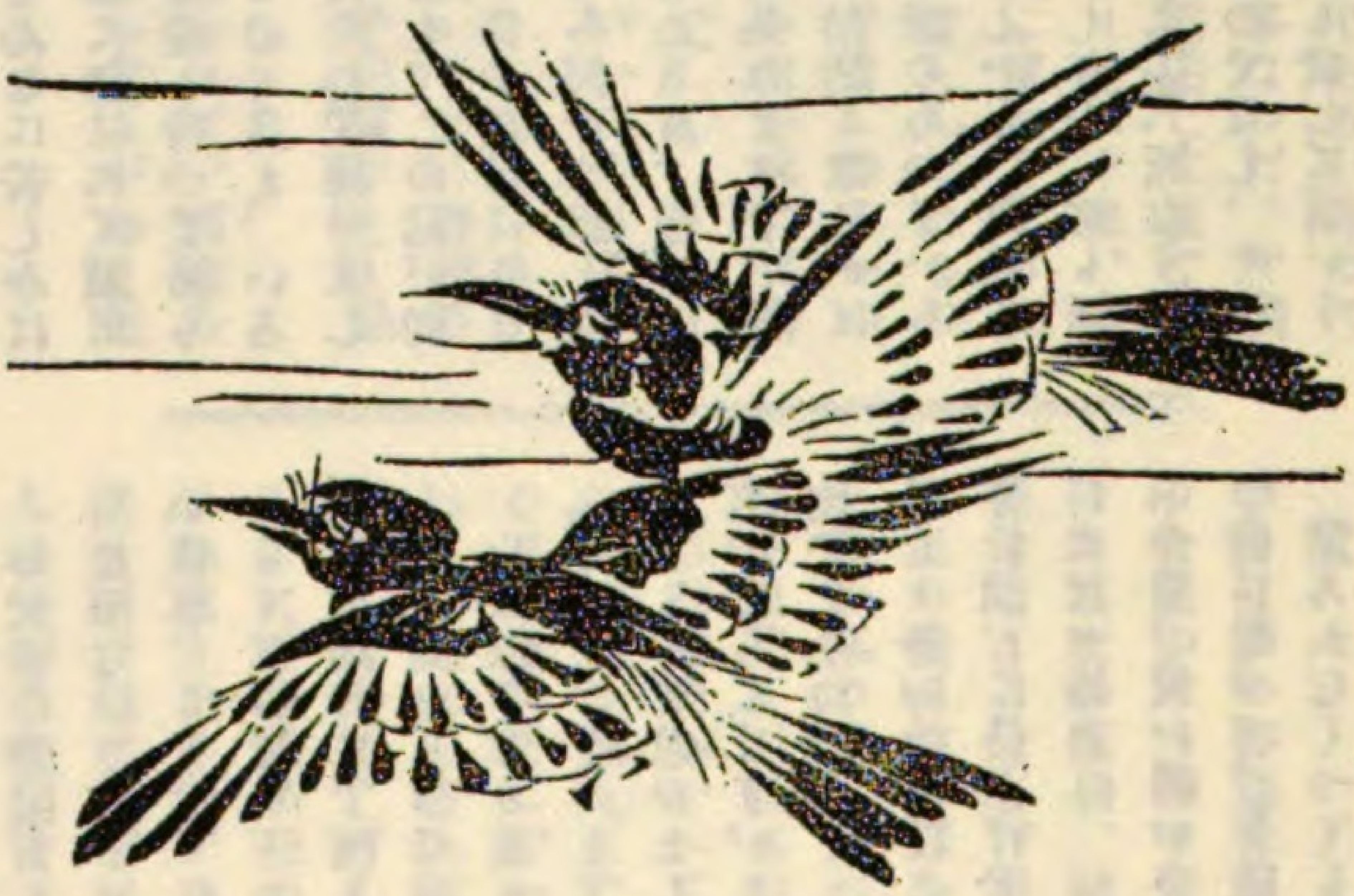
「そうだよ。」

「それではやつぱり春野樣でゐらつしやいますね貴郎、彼の方と御懇意なのでございますか。」

「あれやあ、僕の大學での同級で無二の親友なのだよ綾さんはなぜそんな事を聞くのだい、それよりは早く用事を云つて早くお歸りなさいよ。」

さばかり强くしたまはずともよきものを

「私がこんなに夜を犯して參りましたのも、あの方故でござります。」



エ、と驚き給ふ。

「はい秀雄さん、先程この外で聞いて居りましたら、あの春野樣が御結婚遊ばすつて云つて居らつしやいましたね、そ、その奥樣と云ふのは、わ、私で御座います。」

せきくる涙止めかねて又も袖ぬらす小夜時雨
「何、春野君の今度結婚する其妻は綾さんだつて……それを綾さんは承知したのかい。」
いさ急しげに問はせ給ふ。
「どうしまして承知が出來ませう、それを諾う位ならこんなに苦しみはしません。恰うど八月の初でございました、森の叔母に誘はれて瀬田川に納凉に行きました時、同じやうに舟を流して春野樣も行つて居らつしやいまして、孫て叔父さは御懇意でありましたものさ見え、いろ〳〵お話などなすつてゐらつしやいましたが、其日はそれで歸りまして十日程たつてからの事でございました、叔母が來ましてこの話が初まりましたので御座います。それからさ云ふものは、母や叔母は毎日〳〵幾度さなく私を說き進めます、けれども他の事なら何一つ厭と申した事は御座いませんが、もはや私には心許した夫のある身、種々に言を盡して斷りましたけれども、どうしても聞入れて吳れませず、日頃優しい母がどうしたものか無理强に强ひてとう〳〵結納も取りかはしこの二十八日には式を擧げる事に定めました、私は話のあつてからはたゞ泣いて計り居て誰に相談するものも御座いませんから、御言に背むくさは知りながら、思ひ切つて手紙をさし上げましたのに封も切らずにつき返され、私は悲しくつて悲しくつて、いつその事、死なうかさまで思ひましたが、今死んださて何の役にも立つものでなし、それよりは一度貴郞にお目に懸つて御相談申し、良い考へも貸して頂かうと思つて、幸ひ今夜から明日へかけて、母も留守でございますから、二時の舟で上りましたのでございます、秀雄樣、どうしましたら良うございませう。」
深く思ひに沈み給へる夫の君はいさ除ろに頭をもだげつゝ
「そらあ困つたね、さぞつらかつたらう……然し母樣だつて決して惡く思つてなさるのでないから……僕の如な貧書生にくれるより、春野さいへば天津でも屈指の財産家だし、敏夫君は世に多く得られない才子だから、そんなにお進めなさるのも無理はない……だけれどもお父樣の御遺言もあるから僕だつて綾さんを人に嫁させるさいふ事は出來ない……どうせは良いのだらう。」
「貴郞、もう近々に御用事はお濟み遊ばすのでございませう、そうしたらすぐお歸り下さいますかー。」
「一週間計りで濟ます心算だから多分十八日頃には歸るがね、歸つて何さか僕からお母樣に話して見よう、それまで綾さんは何も云はないでお母樣の仰る通りになつて待つて居なさい。」
「そうでございますか、それじやあ十八日には必然ね、私本統に何うしようかさ思ひまして。」
蔦かつらよりすがるべき松の一本を得し嬉しさ、覺束なけれど何さなう胸安まりぬ。
今しも春野の君はこの室に歸り給ひ妾の對ひに座を占め給ふ、妾、恥しさに顏だに得上げで、膝なるハンカチーフ指の先に弄ひつ。君は夫の君に向はせ給ひ
「先程、僕が湯から出て此所へ來たが何だか入り難くかつたから、暫く傍に居つて、失敬だつたが二人の話を殘らず聞いたよ……そんなに驚ろかなくつても良いからまあ聞き給へ、君に云つた僕の約婚者は全くこの綾子樣の事だ、僕は今の今迄君さ綾子樣さかゝる關係のあるさいふ事は知らず、唯世の普通の令孃ださ思つて種々の空想を描き希望の花も咲かしたのだ、が已に主ある花を手折つて何させう、君さ綾子樣さは幼時からの許婚であるのだらう、もはや運命の定まつたる妾等

をして今更其運命に逆ひ僕の願を満たすさならば即ち自然に背むくのだ、自然に背むき、其進まない心を迎へたとて到抵圓滿なる愛の光の輝く例はない、それのみか、最も敬愛する莫逆の友の妻を取るのだ、かつ貞操無二のこの綾子樣をして其淸い操を破らしむるに忍びない、今、僕は君等のこの關係を知つて一面には悲しむべきであるが却つて大に前途の爲、はた君なり綾子んさのために賀すべき事なのだ、で僕は今迄のはかない望は斷然絕つてしまつたから、明日歸宅して直ぐ破談を申込む事にしよう、君等は樂しく理想の家庭を作り給へ。れ、綾子樣、長らく貴孃を苦しましめ煩悶さしました罪は實に偉大ですけれども、僕は夢にも秀雄君との事も知らす、勿論貴孃の苦しんでゐらつしやる事は知らなかつたのですから何卒お許し下さい。僕も幸に一つの經驗を積んで悟る所がありました。貴孃の、お母樣や叔母樣には御得心なさるやうに取りはからひますから御安心なさい。」

露恨み給ふさまも見えぬ仇を情の情の御言葉のふし〴〵いかにくるしかるらん。

あはれ妾は夢かさばかりにて嬉しさも嬉しきものからしかすがに春野の君のみ心の中推し量りまゐらすればせきくる淚止めあへず。喜びとも悲みさも分かで、唯唯、答へ申べき言もなくのみ。

折しもみ空高くなく雁におどろかされて、ふさ雲井を眺むれば、淚含みし如く曇りにし夜渡月はいつしか雲間を出てゝ妾が行末を守るが如く光りも淸く冴え渡りていよゝまどろなり。

筆のはこび健やかにして才思滾々さして盡くる處なし、されど其の趣向は平凡なり、今一しほの工風あれかし(撰者)

~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~

## 秀逸

# 薔薇花

信陽東筑摩郡波多村三原屋方 すみえ子

半日は夢の容器さしたる此身も、纔に眠り足りて身を起したる時、擔端の合歡の木に蟬の音絕えて、日除外れし西のまどには、落かゝる樣に見ゆる富士の高嶺、輪廓正しう黑々さ夕燒の空に立てり。

襟元しと〳〵と汗の流るゝに氣味惡く、海風に頭の重さを輕うせんさ、跣足の儘に波打際を辿りしが、不圖昨日遠くより眺めあかせし一本松の土佐の某の筆に成れるが如き、なかしき風情あるを、測近うめでばやさ思ひ出でゝ、波に足をば、洗はせつゝ、沙の上をばひた走りす。

松の姿の向なかへて、いよ〳〵面白う見ゆるあたりに、せゝらぎや小川の水の玉を流して、路は絕えたり。渉りて行かんは易けれど、今海に注ぐ可き際にだに、一點のちりをさへ浮めぬ此水を濁らさん事の心苦めてわれは流れに沿ふて、橋あるさころまでさ、遡る。

一歩毎に小松しげくなりて、小川は其の中に入りつ、そこに土橋あり、下には河骨二つ三つ咲く、其岸の右方に細逕あり、丈低き夏草の中を蛇の如くうねりて、奧にかき茅屋根の見ゆ、われは坐ろ心になりて其路を進めば、網代戶半は開きし門ありて、その門の中には、夕顏の宿にはあられど、ほの〴〵と夕ぐれの空に白く、薔薇の花庭面に溢るゝばかり咲き匂ふ。

こゝは海近く波迫りて、一本松はなかへりて遠く見らる、彼の流れのあたりさ、松のあるさころは小き潟形をなせるなりけり、松は次第に黑み渡りて、そがかけをなしたる暗きさころに、女の童の立てるが見ゆ、わが
~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~

思ひなしなるべし。

波打際に薔薇の園生、いつれ倭繪師の筆には上るべくもあられど、西の國の海濵など思ひ出てられて床しく、夕風そよ／＼と立騒く花の波、香のある雪のこぼるゝ心地す。我は何ぞとはなく、その一枝に手をかけて、折らむとする時、彼方にかなし氣なる聲ありて「その花折らせ給ふな」ととがむる。

はしたなかりしわが身の、今更に心躁ぎて、咎めし人の方打見やれば、其處に十八九と見ゆる美しき女一人立てり。夕暮の色立こめて、下草匂やかに煙れる處、手に薔薇の花束を持ちて立てる其人の姿、宛らに名工の手に成れる石像にも似たり。

女は語をつぎ「花折る御身が風雅心を妨げしとて怒り給ふな、花を惜しむにはあられど、こゝは亡せにし娘が爲めにとて植えにしなれば」聲はかなしう打戰ふて、松の雫かはら／＼と其袖にそゝかゝりける。

我にもあらず、花盗人となりし身のいとも耻かしくて、宿へかへりても暫時は人にも打出でざりければ、かの人の語りし言のなにとなく心にかゝりて、其夜宿の媼が茶をすゝめに來りし時、ありし事ども語り出でゝさては彼の人はとたづぬれば、媼の目は早やうるみて、彼の君ばかりあはれなる方はあるまじ。

彼の君の彼處に別莊建て給ひしは、六年前の夏の事なりけり、夫なる人と共に東京より來り給ひしが、程なく彼處にて美しき女の子をば産ませ給ふ、夫なる人は太く喜びて、此花の如く美しかれとて、その御子の産れ給ひし後、幾日ならで、薔薇の花をば植え給ひしなり、誠に父君の祝し給ひけん如く、その御子の美しさ、色白々とふくやかに、その眼光の冴々しさ、そが上におく露とも見ゆめり。翌る年の夏こゝに來給ひし折には、父君は共ならざりし、半年ばかり前支那の國にて戰死し給ふ、軍人にて在せしなるべし、

かの君は唯垂籠めてのみ在して、人に面をあはせ給ふ事稀なりき、たゞ月明き夕、かの御子を抱きて、薔薇の花園に佇み給ふ美しの姿をば見とといふ人も折にはありき、冬になりても彼の君は都へはかへり給はざりき、波の間にだに櫻見捨ふ春も過ぎ、沖の小じまの蔦かつら紅葉しぬべき秋ともなれど、彼の別莊を去り給はで、また三年か過ぎ給ふ御子は三才となりぬ、園生の薔薇の花も此の御子の美しさには似るべくもあらずと、知れる限りは一向に稱へつ。

時は秋、冴けかるべき月の雲に呑まれて、冲の方は唯一色に黑く、その眞正中に青く白く一條の光りの蛇の如く、右より左、さて左より右に走る、彼處ぞ地平線の果てなるべし、波の音、つれならず高まりて、その打つ際に青き燐の見えつ、かくれつ遠くの磯に船引上げんとてか、漁夫たちの罵りさはぐこえ喧し。

其夜臥床に入りたる御子の、何とかしけむ、母上、父君のかれを迎へ給ふに、いざ海べにおり立たんとて、母君が戒むるを肯入れで、花ぞのゝ薔薇一枝手に持ちつゝ、恐ろしき夜の牛の下に立ちぬ。

母君は太く打案じ給ふて、後よりつゞきて波打際より程離れて、彼の御子をば押へ給ひけるが、御子は波の彼方にこそ父君の立ち給ふに、かしこに／＼と打さけぶ。

風一としきり荒れて、浪の碎くる音すさまじかりき。

御子が手なる薔薇風に誘はれて、ころ／＼と波打つかたに轉び行く、黑き夜を白き花の轉び行くさま、夜見の國の廣き野を、死靈の人を導くにも以たり。御子は母君が慈愛の手をすべり抜けて、花をば追ひ行く。

風更に強うなれり、波の勢ひ恐しう、轉べる花を呑去らし時、御子の姿も共に消え去りぬ。

母なる君は其處に倒れつ、波の音は今更らに笑ひさゞめくかとも思はれつ。

明くる日より母君は病の床に臥し給ひけれど、その枕邊に泣き叫ぶ御子の聲をきかんやうはあらざりき、御子の骸は長へに波の中に呑まれたりき。

それより後、かの君は夕暮毎に彼の薔薇の花を摘みて、海濱に立ち給ふ、夕日眩ゆく四方の山々煙り行く頃、かしこに行きて見給へ、彼の君のその花束高く差上げて、波の間に投入れ給ふ、彼處を御子の墳墓と覺し給ふなるべし。

媼は涙に咽びぬ、今迄は明かりし月俄に擴ごりし雲に呑まれて、夜の海の色はいと凄かりし、彼母君は今夜を如何に過し給ふならむ。

あくる日の夕暮、われは又海濱に下り立つ。今日は樒ある方を辿りて、本道を一本松の方へと進む時、不圖目に入りしは、かの母君なり、例の花束もちし手を揚げて、何やらん呟きて、それを海原めがけて投げ入れ給ふ。

夕日に照りはへて、ひら〳〵と飛行く花束は白衣の童の神の御空に舞ふ樣に見らる、投げ去りて母君は沙の上に轉びぬ。

さても大なる墳墓よ、女のは童海のいづくに此花をめでつゝあるならんか。

情景兩つながら筆到つて詩趣饒なり



秀逸

## 胸の思ひ

福岡市荒戸町　山脇わか

今までさやかに見えわたりし谷間の櫻も早や晩靄の中につゝまれ鬱蒼と茂りし森の傍に三ツ二ツ並み居る藁屋の屋根の上に夕の星淡くかゞやきぬと見るまにやうやう數まさりはるかに聞ゆる歌の聲は今歸り行く馬子にやあらん麥畑の中を縫ひつゝ流るゝ小川は琴の音にや通ふらん潺々とたゆまず流れ末はいづゝの淵にや落つらん岸の櫻の二ひら三ひら浮び居る樣あはれと見ゐる間にやうやう影も消えたど空の上に雲雀の奏する樂の音のみ聞えわたりしが日も亦かき消す如く世はやうやう暗うなりゆく頃鳥の鎭守の森をさして歸り行く。今まで茜色に染なされし向ふの山の端も薄墨色にかはり山も森も川もみな夕の色に包まれたど小川のささやき聲のみ聞えわたりぬ。げに靜けき春の夕暮の景色よ見なれし色も今日は一しほにぞ覺ゆる小川の水のきらめくに見上ぐれば月は今かすみつゝ鎭守の森の上に上れり吹くとしもなき夜風に傍の櫻二ひら三ひら片々と袖の上に散りかゝるに見し故郷の花の色香さへ面影に立ちそひて心はいよよ亂れそめ例の思ひはいさゞ高まりぬ。

あゝ思ふまじ思ふまじとは思ひながらもなほ忍ばるゝは彼君の上よ此頃

はいかにゝ過し給ふ都も春の色深からん昨日今日花の本にてすみ子の君と華燭の式を擧げたまひしかあゝ思ふまじ思へばいとなみだの種なるも君が身にさへ幸多からば妾はいかなる苦しみをもいとはぬものを。あゝされどされどかゝる春の夜の朧月夜に對してはたゞ古への事のみぞ忍ばるゝ思へば年波の流れ早くてはや十とせ餘りの春秋をや過しけん今宵の如き月の夜半妾は乳母と友に隣村よりの歸り道ゆくりなくも彼君にあひぬ父なく母なき哀れなる身の上ましてや今宵より住むべき家さへなき哀れなる身の上妾は堪えで我家へと伴ひまゐらしぬあゝこれぞ今日の憂をます基なりしよ。其後君は我父の　さけにより中學を終へ進で高等學校へと入りたまひぬ野路にかくれし撫子のやうやう色香あらはれ君が美しき心其麗しき筆のわざはやう〳〵匂ひ出で俊才のほまれは高くあがりぬそを聞きし我父の喜び妾の喜びげにしくものもなかりしよ。思へばいとど忍ばるゝ昔の春よ君と友にめでにし軒端の櫻も野邊の菫も今年も色香かはらず匂ふらんあがる雲雀もなく鶯も今年〻折をたがへざらんあゝされど變りはてしは人の身の上よ

庭の梧桐落ちてより秋の色やう〳〵深く叢にすだく蟲の音恨をのふる頃父はかりそめのいたつき重りて日影に消ゆる朝露と共にはかに黄泉の客とはなり給ひぬ早く母君に別れまゐらしゝ身のはゝそばの恵の露にうるほはんすべもなくたゞ父君をのみ杖とも柱ともたのみまゐらしゝを此後ははた誰をかたのまん幽明道遠ゝして呼ども答へず御魂は蓬來神山の裏にや入り給ひけんさけべども歸らず賴む木陰に雨洩りし悲しさよ。其時妾は未だ浮世慣れざりき妾は浮世の恐ろしさを知らずはた人の心の賴みがたきをさへ知らざりきあゝさるにても恐ろしきは人の心よ。情け深う慰めらるゝに闇に迷ひし蟲夏の光を選ぶ隙もなく萬づ賴みし其人の浮世慣れざる妾を欺き家の物は云ふも更なり田畑まで皆奪ひ己が榮華を貪りつなほ闇にまよへる妾を捨てゝ顧ず。あゝ此時妾は初めて人の心の恐ろしさをさとりぬ妾は初めて人の心のはかなきをさとりぬあゝされど浮世には移ろひやすき花染もあれば千とせ變らぬ松のみどりもありけり歎の中にたゞ變らぬは文雄の君の御なさけのみ父君の一週年に君は歸り給ひぬ。げに苔の下道暗き林の中にたゝ妾が宿る木陰は君の御袖のかげのみ。君もまた妾の便りなきを哀み給ひ其折遂に未來を約し侍りしよ。思へばいと恥しや。されど其後君の學びの料は絶えぬ我家より送りまゐらしゝなれば。鬼のみはなき世なりけり君が親しく出入し給ふさる貴顯の人は君の前途を思ひて學資を給したまへり。君は恙なく學びの道をたどり給ひぬ。妾は日々小學にかよひ西も東もわかぬうなひ子の手を取りつゝ教へ導き君のわざを終へ歸り給ふをのみ待ちぬ。あゝ日頃の心づくしも今は仇なりや去年君はめでたく優等をもて大學を卒へ給へり妾の喜びはそもいかにあゝされど嬉しかりしはたゞ一時なりしよ樂に連るは苦しみの常なりけり。あゝ

君に學資を給したまひし其人は一人の愛娘をもち給へり姿かたち世にめでたう才かしこく學秀で志さへ世にありがたき人なりとか。父の君は我娘をして前途多望の文雄の君に配せんとの下心やありけん。君の業を卒へ給ふやいなや直にそを迫り給ひぬされど君は天さかる鄙の野邊の朝顔を捨て給はば一度はいなみたまひしかど聞かざりしとかや今まで永の年月かけし恵を報ひさるもいとほいなしとて一度ちぎりし事はいと重し獨立獨行せずして徒に人によりし事の口惜さよ。あゝ我心極りぬと告げこし給ひし時の妾の驚きはそもいかにいと麗しう造りなされし園の中に色香めでたう爛漫と匂ひ出たる櫻の花と顧る人もなき片山里の葉がくれにはかなく咲きし姫百合の花といかでいかでくらぶる事の叶ふべきやは。才もなく學もなき賤しき妾のいかでいかで彼の貴くやさしき澄子の

君に及ぶべきやは。はた文雄の君は我國最高の學校を優等に卒へられしめでたき君なり妾ごとき賤の女の夫とたのむべき人にはあらざげに峯の櫻と谷間の菫よあゝ君よ文雄の君よ君は妙に美しき澄子の君をめとりて一生幸福に國家の爲に盡させ給へ。妾はたゞ一生薄命に獨身に終らんのみ君を置きて我夫は誰かあらんげに誠其人を愛する心にも協ふべけれ。思へるまゝを書き送りてよりは浮世に用なき己れ世の交りもなか〳〵に物むづかしういとゞ人目もうとき此山里にさすらひ來りしも早や半年の昔とはなりぬ。思ひ絶ちにし事とは云へ猶蘭燈ほの暗き閨の中などにては獨寢の淋しさなか〳〵ち夢もまさかならず枕に露の泣き添ふもいと恥しや甲斐なき我身と自ら叱れどいかんせん君の面かげは我心を離れず。あゝ無量の感慨に沈みし時月はやう〳〵中空高く物の忍ふはいよゝ亂れ過ぎこし方のいよゝこひしうつく〳〵と打ちながむる時何處の誰かすさびにや哀れに忍ぶ笛竹の音いよゝ身にしみわたる。

あゝ君が幼き時植ゑ給ひし故郷の軒端の櫻は此頃は如何にか匂ふ主なき宿を守りてか昔を思ひ行く末を思ひ人のなさけを思ひはては萬斛の憂に沈みしか月の光はいよゝ靜かに笛竹の音はいよゝ哀れに空しく孤客の腸を斷つ。夜もやう〳〵更けぬらん、春としもなき山風は薄き衣の袖をはらひぬ思へばこひし故郷の空自ら思ひ立ちにし旅衣ながら猶忍ばるゝは故山の景色よ。

評、是亦一篇の抒情詩也、深閨の怨、綿々として絶ゆる時なし。文章またすら〳〵としてよし



# 秀逸 むらしぐれ

阿波國麻植郡中枝村
野々脇鑛山内
松村ふじ子

（上）

お松さん明日若様がお歸へり遊ばすつてソシテ奥様もご一しよだつてれ、青山家の女中部屋に、春とはいへど未だ肌寒きに火鉢をかこめる二人の上女中の一人はかくさゝやきぬ、お松と呼ばれたるは當家に年久しく召し遣はれたる婦人なり少しうつむきて火箸もて灰をかきつゝ

サウダッテ子私は岡田様のお孃様がお可愛そうですよ、お梅さんは半季まへからの御奉公なれば未だご存じあるまじけれどお孃様と若様とは、御幼少よりのお許婚にてお孃様は、ご容色もよし温和しくつてソシテ昨年の春東京の女學校を、御卒業遊ばしたので學問はもとより音樂も大層よくお出來遊ばすッて子旦那様も奥様も大層およろこび遊ばして毎日々々若様の御卒業なすッてお歸へり遊ばすのばかりを待てお居で遊ばしたのです、ソレニ若様が東京にお好きな方がおありなさるッて、ドウデモ

彼女を家に入れてくれ、とおッしやるのですけれど、ソレデは岡田樣にすみませぬ第一お孃樣がお可愛そうですワネ、ソレニ其の方はご素性がよろしくないとかで旦那樣も奥樣もお聞き入れ遊ばさんのです、若樣の方でもお從ひ遊ばさず、トウ〳〵御勘當のやうにお成りなすッて東京へお出でに成たので、それが岡田樣に聞へまして子お孃樣が大層ご心配遊ばして清夫樣のそれほどまでにお愛しになる方を私ゆへに御兩親樣のお拒み遊ばすのは誠にお痛はしければ、ドウカ清夫樣の御勘當をお許し遊ばされ其の方との御結婚をお聞き届け遊ばすやうとそれは〳〵おやさしいお言葉で、旦那樣も奥樣も猶更らお孃樣に御氣の毒だッてお聞き入れになりませぬのお孃樣はまた清夫樣の御身の上をお案じ遊ばして是れもつまり私のある爲めだからッてお居間で自殺をなさりかけたのです、旦那樣も奥樣もそのおやさしいお心に我をお折り遊ばして、トウ〳〵若樣の勘當をお許しに成たのです、私はこれほど無情い若樣をそれほどまでにお思ひ遊ばすお孃樣のお心の中をお察し申しますれば、モウ〳〵若樣がおうらめしくなりますよ、ソレニ子お母樣は早くお亡くなり遊ばして繼母がゝりで、いらッしやりますから猶更おいとしう御座りますよといひつゝ涙ぐみてさしうつむきぬ、お梅もいつしか頭うなだれて暫時言葉の打ち絕へし折柄小間遣のお濱の入り來りて「オヤお二人とも何を考へていらッしやるのといふ聲にはと驚きてさりげなく打ちほゝ笑みぬ

（中）

廣き庭の假山のほとりの櫻の木々の梢は白雲の棚引けるかと思はるゝばかりの花盛り、泉水のみぎはの柳の絲はふくとしもなき風のまに〳〵水の面に波紋を畫いてゐる、鶯は彼方の一むら竹の枝より玉をまろばす如き音をつたへて居る、八疊の小座敷の庭に對へる障子打ちひらきて文机にむかへるは青山清夫の許婚なりし岡田淑子なり齡は十九の春を迎へしばかり氣高き顔ばせいたくやつれ愛らしき黑みがちの眼は打ちくもりぬ髮は夜會むすびに束ねたるが鬢髮の青白き頰に亂れかゝりたるをかき上げむともせず、はと苦しげに吐息して讀みかけたる書より眼を轉じて庭の面を眺めつゝはしなく思ひ出でしは幼き時の現象なりける、アゝかの柳の絲の長く長くたれたる汀なりしよ清夫樣の魚つるとて絲たれ給ふに妾もすみれつみつゝ眺め居たるに暫して釣り上げ給ひしは大なる鯉なりき芝生のそこ、こゝ、はれまわる勢の猛なるにもてあまし下部の手をかりてやう〳〵籠に押し入れつ、その晩の膳部に上りたる濃汁にゆくりなく思ひ浮びて語りいで給ひ皆々打ち興じたるは、アゝかの櫻の木蔭なりしよ幼き二人のちりくる花をひろい蝶を追ひて長き日あしの傾むくも知らず遊びくらしたるは、あはれ其の時の樂しかりし花の木蔭は今はた悲しき心の忍ぶ草とぞなりし賤のおだまきくりかへし昔を今になすよしはなくともかゝる時母上のながらへ居給はば思ひ慰むふしもありなむにあはれいかなればかく悲しき事のみまつはる我身なるらん、あぢきなき世や、はかなき世や、過去に罪犯せしとも思はぬ我にいかなればか神はかくまでつらき情なきうきめ見せ給ふらんと思ひ來り思ひ亂れて續きし書の上にうつぶして聲を忍びて泣き入りぬ、あはれ淑子の罪なき胸は、張りさけなんばかり萬感交々わきくる淚はいつたゆべくも見へざりき、折りしも人のけはひに、はと驚きて淚打ちはらふ後の方に小間遣の花うや〳〵しく手をつきて父上樣よりお居間へお出で遊ばすやうにとの仰せで御座ります

* * * * * * *

奥まりたる十二疊の間の窓の下の文机にむかひて書讀むとにもなく頰に首傾くるは淑子の父岡田正義なり齡は五十路少し越へぬらん侵し難き威嚴を備へ美髯胸をおほへり、今しも入り來る淑子の高尙く美しかりし顔

ばせのいたうやつれし様にさすが子をおもふ親心に眼はくもりぬうやうやしく手をつきて旨を伺ふ淑子をあはれげに見て

ハ・ア、どこかわるいか子、ドオモ顔色が大そうよくないさ氣づかはしげなり淑子はせきくる涙をからうじてかみしめ強ひて笑みつくりて

イヽエ別にどこも……少し頭が痛みますから……

ソウカ子其の位のことならいゝが大層血色が惡いよ、醫者に診察せてはどうだ子

ハイ……

トキニ汝を呼んだのは外でもないが子青山もあゝいふ事に成たから汝はこれから、どういふやうな方針をとるつもりか子遠慮なしに言て見るがよい

淑子はいさうれしげに青ざめたる顔に微笑みつゝ

ハイ有り難うございます、申上るまでもございませぬが最早や嫁びふとは存じませぬ、誠に我儘な申條でございますが一生月雪花を友に文の道をわけたいと存じます



（下）

淑子の居間の襖を靜かに開きて入り來りしは繼母の瀧子なり今しも文机にむかひて書讀みつゝありし淑子は驚き立ちて袖うちしき座に請ずればいつに無き機嫌よきさまにて笑ましげに打ちむかひ

アノー淑子さん昨日小原が來て子汝を是非もらひたいッておつしやるさきがあるからお上げなすッては如何ですさ云ふて吳れましたの先き樣は大した御財産だッてソレニ子洋行までなさッていらつしやるさ申して居ましたよ、これなら不足もありますまい子淑子さん

ハイだん／＼有り難うございますけれども私の決心は先日父上に申上ました通りでございますから

＊　＊　＊　＊　＊　＊

ではどうしても他家へは嫁かぬさおいゝだ子

さヤヽ鋭き聲にいひたるは瀧子なり彼は其後日々音づれてひたすら彼の財産家に嫁げよさ說きすゝむるなりき淑子はおろ／＼顏見上げて聲は涙に打ちむせびつゝ

ハヽイ

さきッぱりいひはなちぬ瀧子の顏色はみる／＼かはりしが其の儘つさ立ちて言葉もなく出で去りぬ淑子は其のまゝ其處に伏しまろびて泣きに泣きけりあはれ戀しきはなき母上いまはそも如何なる所に何しつゝおはしますらん浮世の人の淡き情にわびはてたる身はなか／＼に天へ空こそ慕はしけれかしこには戀しき母上の姿を待ちてやおはさん、さくゆかばやさるにても人は一日もながゝれさいのる命をわれからちゞめてゆくてを急ぐ悲しさよ、あはれ許させ給へ父上さらばよ

窓よりもれし火影にはかに消へて

ウーム

さたゞならぬ一聲。

評、健筆可羨

# 秀逸　奧都城

和歌山縣海草郡滲村字青岸　夏野夕風

（一）

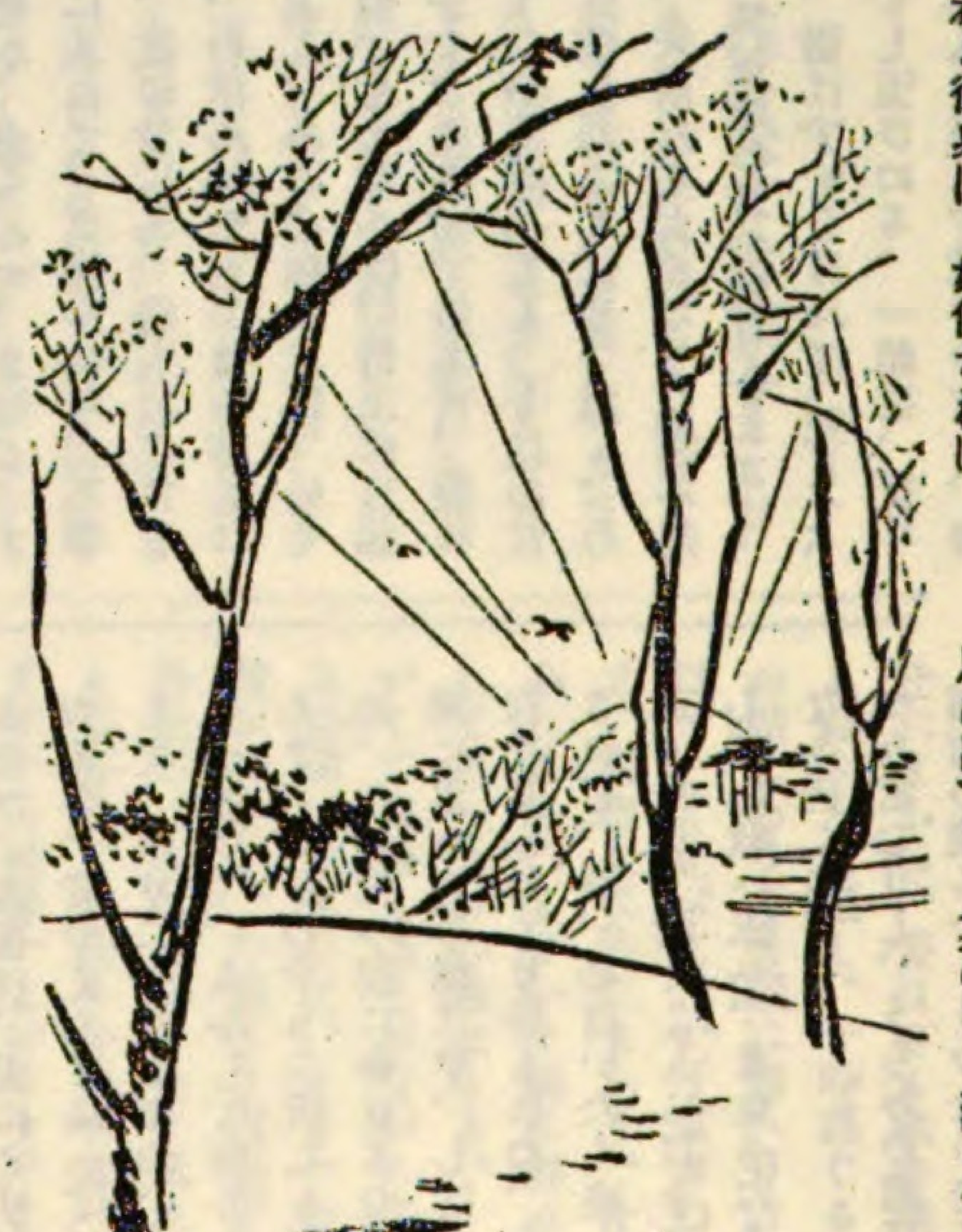
物のあはれを催すは秋さのみこそ思ひしに五月雨降る夜は又格別にて夏木立のいやが上におひ茂り晝なほ暗き奧都域に於てはまして今宵妾やむを得ず、此のものすごき、はたおそろしき墓場に夜更くる頃通りかゝりぬ。誰人もいまさじさ思ひしものを、人の聲の聞ゆるは、已が心の迷ひにやさうたがひつゝ、聲する方をすかし見れば、未だ二九にたらぬ少女子の、さまで古るからぬ奧都城に折ち向ひ、何事かつぶやき居るにぞ、妾惡しさ思ひつゝも、え行きやうで石碑の影にかくれつゝ、耳そばだてゝ聞き居れば、少女は聞く者なしさ思ひけん落つる涙をのごひつゝ、こゝを千年の住家さして靜にねむりましします我父母よ、御身、此の世にいませし時、重雄の君の學びの業の終りなば、妾さ二せのちぎりを結び、幾千世かけてつがの木のいやつぎ〳〵に榮えよさのたまひしみ言葉は、今倘耳底深く入り殘る、さるを母上には情なくも、日頃よりきらひきらひし行雄の君は、田舍にてはめづしらく才學兼れ備はり、財産も數多ありけた次男にて、深く汝れを思ひ玉ふ由なれば、克きゑにしなれば重雄の事は打ち捨てゝ行雄の君に從へば、妾も心安し、重雄の奴は今は如何にしつらん、學資の金も送られば、かたゐなざして居るらんいさふびんなる事なれど、後家の我なれば他人の世話はおろか、其の日〳〵のけむりさへ立ちかねたれば、一日も早く行雄の君に從へさ日々にせめらるれど、妾いかで從ふべし、父上の臨終の時にのたまひし事を、母上もきこし給ひしにはあらざるか、重雄の君もこゝふたゝびの春秋を送り給へば、業成りてかぐはしきみ名をにほはせつゝかへりたまふらんかし。

妾いかにせめらるゝさも、行雄の君には心なし、さいなめば母上腹立しく、親の言葉をきかざるか、年波も行かぬ娘にさへ侮らるゝかなしさよ、是も妾が他よりきし者なればなり、誠の子にてありしなば、かかる事は云はざるものとて、一月餘りも物いひ玉はれば、妾幾重にもわびつれさ、我言きかずば免さしさかたく云ひ玉ひぬ、母の心に從はんか行末夫さ呼び妻さ呼ばるゝ重雄の君に貞ならず、夫に貞をつくさんか、たゞ一人の母に不孝さならん、あゝまよへりまよへり、誠の母のいましなば、かゝる憂き目をみぬものを、さるにても重雄の君は如何にしたまふらん、妾の心づくしの文にも一度の返しのなきは妾を見すて玉ひしか、いな彼の君にししか樣の事はよもあらじ、さりさて今は如何にくらし給ふらん、學資の金を送り玉はれば、定めてこうしゐたまふらん、かくなる時の用意にさて父上の殘し玉ひし黃金白金も今は皆送りぬ。さるにても一とたびの答へのなきは、いかなる事といぶかりつゝ、一人の下女を呼びつけて知らぬさかくすをむりにきけば、あはれ母上に妾の文も金も御身の手におさめて送り玉はず重雄の君のたよりもしにはきかし玉はぬさか、重雄の君には定めて我れをうみたまふらん。

（二）

或る夜時計の短針は十一時の所を示す頃、母上にはいつになくほゝゑみつゝ、我がいまに入り來て花子よきのざくなれざ、叔父上まで此の品を今夜屆けてよ下女を使はさんさ思へざも、皆よくれ入りたれば汝れひさはしり行きてよさ一つの包みを殘しつゝ立ち出でたまひぬ、夜はいよゝふけ行きて犬の遠吠あはれにきこえ岩間を流る小川の水音、高くひくゝ

いさおそろしく、一生懸命に、歩り近も半ば過ぎたる頃、月はいつしか、黒雲に覆はれ、はら雨さつさ降り来り傘からんさ思へど、皆よくねむり玉ふしばし雨のはるゝ迄またんさて、軒場に立たずめば、一挺の車雨をおかしてかけ来り、妾の前にはおろしぬ、若し此の屋の主人ならば、傘からんものさ、傍に行けば、こはそも如何に、云ふもにくき行雄の君にてありき、行雄の君は我が手を握りつゝ、花子の君よ御身は、如何なれば、かく夜更けたるに、こゝには居玉ふ、我れ今こゝを通りかゝれば、御身によく似たるさ思ひて、車を停めぬ、いざ共に此の車にのり、御家敷迄送り申さん、さ妾のいなむも、きかて、いだき車にはのせられき、妾は、母上よりの、用事のすまれば一度おろし玉へさ云へば、いな如何なる事は知られざも、今夜は雨も降れば、明日になし玉へ、母上にはよき樣、わびん心ゆるして・歸られよと、まことしやかにいひぬ、車夫は、小川の聲、松吹く風のしらべに、車聲を合せつゝ、かけ出だしつ。行雄の君の、妾に云はるゝには、重雄の君には、世におそろしきらひ病とやらにかゝり、目も鼻も一所にあり、足は立たず、手はすりこぎの如く、みるけも、なくやせおさろへ、右や左の人々の、なさけに、世を渡りたまふに都には合ひしが、重雄の君も、はずかしく思はれけん、笠もて面をかすし玉ひしかば、我れも強いては、さはず歸りぬ、今の書生のはては皆此くの如く、御身迄の、なさけの露にうるほひつゝ、よからぬ遊びに夜を更し玉ひし罪にこそ、さるを御身は、操をたゞしく守り、此の世にありや、な



しや、わからぬ重雄の君を、思ひこがれ玉ふ由、御身も年頃なれば、彼の君の事は思ひ止まり、外によき婿を、求めて、一生をたのしく送り玉へ、さ云はれて、妾元より、つくりし事さは知りつゝも、余りの事に、打ち驚き、心も、たまも、身にそはで、其のまゝ行雄の君のひざの上には倒れしまゝ、夜のあくる迄何事も知らざりき、さぞろに其折の情を思ひ出でゝ、其のまゝ泣き伏しぬ、聞く妾も、えたえず、共に泣きぬ。

（三）

やゝありて、少女は、言葉をつぎ、妾それより、終日一間にさしこもり、三たびの食はおろか、一口だにも食しえで、日々あんじわずらひしが、行雄の君には、毎日、我が病を尋ね玉ふ、顔を見るたび、病は重る樣なり、妾はいきて此の世の憂ひを見るよりは、いつそ病におかされて、死せば心安しさ思ひしに、天は妾をめぐまぬにや、病はだん／＼におこたり、今は庭におりて花の散るを見ては、妾をもさもなひて、亡き母上の元につれよかしされぎし朝もあり、夕べにいづる月を見ては、父上のこさづてやきかん、西の國に行く月よ、妾を一度父上に、まみへさせくれよ、心あらば花月とたのみあかせし事もありき、さるに、今夜の月は如何にして、遲きやさ、待ちわぶる折しも、母上はこさらゝしく、ふすまをあけ、手には父上の、秘藏の短刀を持ち、母が云ふ事きかざれば、今夜こそは、一刀の、やひばの露と消えぬるぞ、がく云ふとも、行雄の

君に從はぬかと息をつぎつゝのたまふ樣は、げに昔がたりにきゝつる、安達ヶ原の鬼ばゝが今や、腹なる赤子をば、つかみ出さん勢ひにひきかへ、女はいともかなしくて、たのむ夫は、鬼ばゝの爲に、あざむかれ、山路に迷ひて、歸りたまはず、逃げんとすれば、追ひまはされ、毒婦の爲に我のみならず、最愛なる、腹の子迄、共にうらみを、世に殘しつゝ、安達ヶ原の露と消えぬとは昔しの語りと思ひしが、今は我身の上にはきたりぬ、あゝ我が一言に、貞を破らんか、此世を、去らんか、されど、されど、如何に思ふも從ひかれて妾も此の世に生れて、貞操を破り、不孝の罪を、負むよりは、母上の御手にかゝり、彼の世にて、待ちわひたまふ父母を音づれ、重雄の君にも、死して後、わびん早や〳〵首を落されよと、西に向ひて、手を合せ免したまへ父上よ、みことのまゝに、いそしまで、今夜、母上の、やひばにかゝりはつ、ことなへば、母上には如何に思召けん、妾の前に、うづくまり、花子よ、ゆるせ、ゆるせ、我れあしかり、家の爲、御身の爲に、よかれとて、かく計ひしも、今はあだとなれり、汝れがかたく守りし操をば、我は破らんことせり、あゝ、あやまてり、あやまてり、妾死したる後には、天清なる女となり、家を起し、名をあげ、人になあなどられたまふな、又重雄の君の歸りきまさば、夫婦となりて行く末長く、榮えよ妾父上に、面はずかしければ、死して、わびすとて持てる、刀にて、喉笛をつかんとし玉ひぬる、一節奈、折りしも、はやまり玉ふなと呼びつゝ行雄の君は入り來り、花子の君よ、御身は、いかで、母上の、み言のまゝになし玉はぬ、如何に夫に、貞たるも、母に不孝なれば、貞は誠の貞ならず、かく申すともきゝ玉はぬか、さらば、我れも生きたりとて何の樂しみかこれあらん、いざ諸共に死なんとて、雨はだ、押しぬぎ玉ひぬ、あまりの事に妾心もかきみだれ、さらば我れも共にと云へば、いな、御身我れら二人を殺し、後自害し玉へと云はれ、いかで古への、義朝の如く、父ならで母を殺し得べき、まして罪なきにたゞよき樣にはかり玉へと云へば、二人は前にひきかへて、花子よ、よく云ひしぞ、これでこそ此屋の娘なるぞ、さらば、善は急げとやら、早や、用意をせよと仰せのまゝに人々は、立ちさわぎぬ、妾はあまりの事に、打ち驚き、つら〳〵思へば、行雄の君とちぎりなば、早や貞は破れたり、されば、如何にもして、立ち出でんと思ひ、母上に打ち向ひ、此夜は、玉にとりては、いと、よろこばしき大事なり、されば、衣服を、着かえんと云へば、母上には、妾の心をさとり玉ひけん、下女をして、取りにやり玉ひぬ、こたびは、顏を洗ひに行かんと云へば、又もさへぎりて、人をして持ちきたらしめき、あはれ、如何にせば、よからんと、思ひわずらふ折しも、一人の下女は、母を伴ひて、臺所には行きぬ、こは天の妾に幸せるなりとて、我いまは出でたれど、人の多ければ、表に出つる事能はず、しばしのがれんとて、二階に昇れば、行雄の君には今身をつくり居られぬ、あゝ天は如何に、一度幸せるが又、罪しぬ、されど、我が心はかたく決しぬ、早速二階よりとびおり、人の見ぬを幸、裏より出で漸くこゝにはきぬ、父上母上、妾をして、孝とも貞ともならん事を教へ玉へ、と生きたる人に云ふが如く云ひ終りて、正體もなく、なき伏しぬ。

つみ重なりし、うらみの雲は、いつしか、はれて、十日餘りの月は、今西山の端にかゝり少女の姿は、父の石碑の前にうつりぬ、妾はいつしか、おとり出でゝ今は少女の後に、共に泣き伏しぬ、あはれ少女を、なぐさめんかと思へど少女も己が、秘密を、聞かれしと思はゞ、如何に口惜しく、思ふらん、されば、後がみひかるゝ樣なれど、長居しなば、少女に見つけられん、さていそぎ、身を起し、かたへの木に身をかくしつゝ思へば、夜もふけたれば、たちちれは、如何に、わびしく我を待ち玉ふらん

と思へば、心も心ならず、少女の事も、きにかゝれど、母上に心のひかれて、かへりみつゝ、我が家には、歸へりぬ、
あゝ彼のあはれなる少女は其後如何になりしか。

（をはり）

## 賞外佳作

### 嫁夜の感

秋田　佐々木布美子

彼のときのあゝ耻かしかりしよ、今思ひ出づるだに冷汗の腋にこぼるゝ忘れもやらぬ去月二十日、叔父樣のお宅で初めて彼の方にお目にかゝりたるときの姿が胸の中、春もまだ半ばのことゝて御庭の櫻は今をさかりと咲き亂れ、吹く風につれて一ひら二片ひら／＼と飛び散る長閑けき春の日も妾が胸は安からで、頭は始終うなだれ勝ちなるも、流石に彼方の御風釆如何にやと、そつと彼方を見し時に、はからずも彼の方の凉しき眸と出逢ひしときの　妾の目のやり塲、あゝ今思ひ出づるだに耻かしきや、かくして其のときも過ぎ、この時も行きて、さきの日に幾倍耻かしき日も過ごして早や今日とはなりぬ、昨夜もつゆまどろまで、行く先きのこと、さては今日のこと共思ひやりて、獨りほゝ笑むこともありしかど、耻かしき事さこそと思ふ心ばかりしげくて時を過しき、かくてはいつ果てなん何事も明日のこと、今宵は早やく寢れんものをとあせれど胸はます／＼あだなる空想を浮べ眼はいよ／＼澄みて、えもれられで過せしが、今日となりては、かれて思ひつき居たる事共大方忘れつくして唯耻かしと云ふ事ばかり胸にみつるもうたてや、朝より爲すこともなくうつら／＼と過ごして手洗ひ髮結ふことなども、母上や乳母にそゝのかされてなす術甲斐なさ、其の隙には居間にとぢ籠もりて、讀むとにもあらず、讀まぬとにもあらで、日頃嗜める文など繙きてのみつ閉ぢて見つ、又折々は半時間許りも庭の面を見つめ、これはと心付きてる猶昨日にひとしく、彼方に行きたけれどもうら耻かしく、思へば進まぬ氣の起らぬにはあられども、今日となりては、いかにともせん樣なし、如何せんものぞと知れたる事に思ひを焦がしことも多かりき、母上はいそ／＼と何事か仕たまふに、妾はさも氣の乘らぬふるまひも、日頃内氣の妾が事と見遁し給ふも有難し、十時過ぐる頃父上より御召しありて、一條のことどもお話しありて居間に歸へりけるに、母上再び來給ひて彼方に行きしならば、かくしべし、かうはせぬものぞと、つばらに過ぐる日教へ玉ひしこと、繰返してのたまふも、今日の妾にとりてはうれしきこと限りなし、あれよこれよと一々胸に刻めど暫したちては何事にてありしかと、茫としして忘れたる心地せらる、

かくて晝飯も進まぬながら箸とりてすましぬ、ひろげ終りて後ちは、母上居間に來玉ひて、くさぐの物語しつゝ、話しは又も婿君の噂に及ぶも聞きづらし、今鳴るは四時ぞ、も早や彼方に行くべき用意すべき時よと、母上の、のたまふと共に晴れ衣着け初めぬ、今日の妾の衣つくるが見んものをと、召仕う女共の來りて樣々にほめ詞するも、にくかられども、さすがに面耻かしかりき、とかくする間に、日も早や西に入りて彼方に行くべき時は來りぬ、玄關近く車つけさせて來りぬ、家の事共忘れたりとにもあられども、今日の妾の胸は、唯耻かしと云ふことのめ滿つて、外かのこと共思ふ力だになし、事に乘りしも夢の如くなりしに、召仕う者共に送らるゝ聲聞きては、何にとなら後髮引かるゝ心地せらる、門の外には近きあたりの女子供など集ひてかしましく、さゞめくは、妾の噂をやするならん、さる程に車は轔々として進めぬ、目は外面見る力なき

に、身はぼうらうに包まれたれば、妾の嫁ぐ樣、櫺子の內よりや見王ふらん、こゝは日頃學校に通ひたる道なれど、過ぎし日の思ひでと、今の心地とは全くかはれり、かゝること思ふ間は例の心も掻き消しやうなれど、思ひやすみては、又前のことゞも思ひつゞけて胸いたむるに、何處の誰れぞ、「アレ見玉へ、あすこを行くは嫁入りぞ」とわが心知らで面白げに云はるゝその度毎に、妾が胸は犇しとふさがるも幾度ぞ、あはれ今日ばかり苦勞なげなる道ゆく人の身になりたや。

かゝる程に車は五六丁も行きしなるべし、道しがら車の石につまづいたるに驚きては、はや彼方につきたるかと、今更に怯るむ心地せらる、かく夢路に夢路を辿るが如き中にも、車はすげなく進みて、はや彼方の門近くなりぬ、車の足も頓に鈍くなりぬ、その遲くなるにつれて妾が胸は早鐘を打つが如く、いとゞしく堪へ難く轟きぬ、さるに彼方の門にも亦人のつどひて、今宵嫁る妾の姿見んとにや、さゞめく聲の聞ゆるもうし、乳母や待女に手引かれて車を下りぬ、長しと云ふ程の道のりにはあられども、車の上にありたれば、脚もと萎えて歩み難きを强ひて玄關迄で至りぬ、今迄暗かりし眼に引換へて、電燈の光煌々として、眩ゆきに先奪はれて、渾身顫りにふるひ來て、心地さながら冷水をあびたるに似たり、これ迄では朧氣ながら知れど如何にして部屋に入りしかは全く知らず、心付けば身は新築のまばゆき居間の主となりぬ。

＊　＊　＊　＊

顧みれば十八歲の今迄でに、妾は此の世の中に、二人のいとしき君を持つし。

一人の君は今は亡き數に入りぬ、名をば善夫と呼びてお隣に住み王へるいとも凛々しき御方なりき、才も勝れていつも試驗には二番と下られし事なかりき、筒井筒の振分け髮の幼なき時より親しく交りて、はかなき遊びにも君なくてはと慕ひもし慕はれもしつゝ、年月をかさぬるにつれて、二人の間柄は一しほ濃やかになりぬ、花咲く朝、袖を連られて胡蝶を追ひしことも幾度なりしぞ、かくて年月を重ねし妾が十五の春を迎へし時なりき、彼の君は十八歲にて中學校の五年級に進まれたるとき、妾はつくづく人戀しうなりぬ、妾の胸は彼の君を見る度毎に、ありし昔にも似ぬ心地せられて、懷かしき君よ、花の晨、月の夕、君と打つれてあくがれなばさこそ樂しかるらんものをと思へど、うら若き男をみなの間故に、君が音づれ玉ふことも、幼なかりし昔しの如くならず、妾も亦君がり訪づれしことは稀なりき、されども居を思ふことは昔にも勝りて、逢瀨の待たるゝのみなりしを、あはれ無殘よ、君は烈しき流行病におかされて、遂に亡くなり玉ひぬ、其の時の妾が悲歎は如何なりし、身も世もあらぬ悲みに沈みぬ。

あはれ、雨瀟々と窓にそよぐ凄寥たる夜、夢破れては獨り影ほの暗らき紗燈の下に衾を濕したることも、幾度なりしぞ、なげきの內その春も逝き、夏も過ぎ秋去冬行きて其年も暮れ明くる年も亦行きぬ、かくて妾はかくも慕ひまゐらせし君をしも、學びの道の忙はしさに紛れて、忘れしとにもあられどさまでつれなしとは思はずなりぬ、人は云ふ、去るものは疎き世の習ひぞと、妾にもかゝる心ありけん、おゝさてもうし。

妾の慕ふ今一人の君とは誰れぞ、今我が夫と定まれる君なり、今年の一月元旦、妾は侍女つれて、諸先生がり訪れて、廻禮しつゝ、校長武田樣に參りて名刺差上げ歸らんとせしとき、門外に車のとまる音したり、如何なる方にやと思ふ程なく靴音靜かに入り來る殿御あり、顏見らるゝは恥かしと思ひて侍女にひたりと寄り添ひて、見られずとしたりしも、あまりにことの俄かなりしため、彼方の顏とはたと出遇ひぬ、恥かしさに瞭とは見えざりしかど、齡廿一二にもや、丈高く眉目淸らかなる御方な

り、美しき禮服着做し玉ひ、絹帽を戴き、厚き外套を抱へ玉ひて擧動いさ優美なりき、妾の顔を見るや、彼方は輕く會釋し玉ひぬ、美しき殿御かなさ妾は思へり、かくてそこをいで、殘りたる諸先生の宅へ行きて、の歸へりに、不思議にも又彼方に出遇ひぬ、憎はしき君よさ許り思ひしに、こたびは何にさなら遇ひまゐらすることのうれしき樣になりぬ、その後は絶えて彼の君の姿を見ることもなくて、何處のさなたにやと、獨胸を焦せしを、思ひも寄ちざりき、去月廿日、叔父樣のお内で、かの方にお目に懸らんさは、あゝ思はざりき、かくて今夜こゝに嫁ぐ身とならんとは。

乳母や侍女とさし向ひて座することこ二時間許り、乳母は小聲にて樣々の話しすれど、妾の胸はあらぬことのみ浮びて、始終なま返事なりき、さる程に媒人來りてこなたへお越し遊はせさ云ふにつれて、乳母は綿帽子をかぶらせぬ、銀燭幾臺、きら〳〵と輝けるが、きぬごしに見ゆるに、幾に落ちつきたる胸は、又もやいたくさゞろかされぬ　（完）

評　着眼新警

## 妾の友

神戸　三笠すゑ子

若葉の梢涼しげに茂りゆく程こそ世の哀れも人の戀しさもまさるさある時しもあゝ妾か友大前ます子の君は病の爲めに世を去り給ひぬあまたなき親しき友は已に此世にあらぬ人なりけりあはれ悲しきかも悼ましきかもあゝます子の君よます子の君はも今年漸く十八歳の花のつぼみなりあなはれ君は其たちさがしくその心ばせやさしくつれにいたふ學問を好ませられこたびの病も勉强の過ぎしよりさこそ聞くげに花の散るよりもはかなきものは命なりけりとは云ひながら悟り兼ぬるは友の死り給ひしこそぞかしそれ一樹のかげにやどり一河の流れを汲むもみな多少の元にしとかましてふりわけがみの其頃より一つ學びやにかよひそめて互に學の道をきそひまけじをさらじと年ごさにつむことの葉又春秋のたわむれにはいとも樂しく共にかたらひあまたの友垣のうちにも一しほむつまじく交はりてしに君は高等三學年よりして親和女學校へ轉校し給ふことゝはなりぬ其折よ互にうつしゑ取りかはしやよ君よ互に長く交はりし給ひてよ必す心なかへ給はそとちかひしときは近きほさりなりしかばいつにても逢見奉る事は安かるべしと思ひ折々に音ずれるの みにてこゝに四させの年月を過しぬさるにはかなくもあへなく身罷り給ふさ知りしなればば日々に千度も逢ふべかりし者を神ならぬ身の口惜しさよ悲しさよあゝ彼のふさ〳〵さしたる髮を「リボン」もてむすび給へるうつしゑも今はなかなかにかたみさこそはなりたれこの後は如何にせん見るもうし見ぬもうしいづれも涙の種ぞかしかくなげきの種にとてかへしにはあらじ互に老いての後にさり出でゝ昔はなしの種にやなさんまたかくも若き時もありしなどかたりては共に笑ひやせんさたのしみ大切になし居るを思ひきや涙の種にならんさはわれ宿世のえにしいかに拙かりけんかくも死別の涙に身をかなしむぞあゝ思ふまじ云ふまじ忘まほし



## 小說披露に就て

こたび懸賞小說募總數八十二種、內選みに上りしもの十二種、まづは第一回にくらべていみじき進境と覺ゆ、さりながら俊れて傑作とおけつらふべきほどのものなかりしは遺憾なり。又文章は比較的上出來なりしも意匠の稚さは從來と變りなし、將た材のえらび方槪ね千篇一律ならざるはなし、こは作家が槪ね妙齡婦女子なるをもて視察範圍のおのづから狹隘なるが故なるべし、いづれも一篇の抒情詩としては品俊れたれど小說としては何となく物足らぬ心地ぞさる、猶秋の卷には一層の奮發あらまはしけれ（撰者）

亡き友　（八十點）　みどり
乙女心　（六十點）　孤琴女
下れる世　（六十點）　伊藤うた
未亡人　（六十五點）　小幡德子
牡丹のつぼみ　（五十點）　松雪女史
切支丹　（七十五點）　氣賀澄子
しからみ　（六十點）　花園菫花
慘風恨雨　（四十五點）　登壽子

遺言　（四十五點）　無名氏
似而非物語　（四十點）　吳竹女史
風ごゝろ　（五十點）　音羽女史
病の床　（七十點）　堀谷藤衛
貰ひ泣　（七十五點）　無名氏
淚のゆくえ　（七十點）　耻らひ女
白桃の花　（二十五點）　小島春湖
義理　（五十點）　野百合
白藤　（四十五點）　佐々木藤子
婦人慈善會　（五十點）　まぼろし
水の泡　（五十點）　かた糸
あはれ尼　（四十五點）　村上しづ子
杜鵑　（四十點）　蜂屋みさを
浮世　（四十點）　一女
乙野　（三十五點）　みゆき
可憐の小女　（三十五點）　郁子
春の行衞　（三十點）　安田吊子
五月闇　（三十點）　武部みちよ
馬場芝居　（三十五點）　尾上一枝
可憐の小女　（三十點）　良子
（以下畧す）

# 國文

## 甲賞　亡き妹をおもふ　【賞品圖書切符金三圓】

和歌山　藤田いさを

よみさしたるよべの續きを、ひもとかんとて、例のごと文机にむかへど、今宵は、降りつゞくさみだれまだやまず、軒の玉水の音、間遠に通ひ來て、いとわびしきに、亡き妹のことゞも思ひ出で、戀しくなつかしき思ひは胸に湧き、手にせる書はいつしか閉ぢて、妹がうつしゑ入れたる手箱とり出でぬ。

ほゝゑみたてる妹が、罪なきすがた、まのあたり見るこゝちして、語らまほしうおもへど、もの云はぬこそ實に口惜しきゝはみなれ、長くたれたる髪は、うるしの如く黑かりき、ふくらかなる兩の頬は、手に持てるばらの花の如くうすくれなゐなりき、穿てる此の袴は、こき紫なりき、あはれ、亡き妹の俤は、まのあたりに現れさまよひて、我が耳そこ深くおぼろに殘れる、彼れが今はの言の葉、今又我れに語るが如く思はれてなむ。

春の歌誦しつゝ、妹と手をとりて、緑りなす野邊をさまよひぬ、柔らかにかすめる日光は、暖かに、二人のそびらを照らしつ。妹は、れんげの紅、すみれの紫など見ては、これや佐保姫が、春の衣を裁ちぬへる御手より、落したるまへる糸屑にやあらんなどゝ、興がりつゝ、摘み取り、春風かろき蝶の羽見ては、及ばぬ身をかこちつゝ追ひまはりて、餘念なかりき。果ては、かよはき足の疲れしまゝに、樹蔭の若草を、緑りの席と藉きかへて、諸共にやすらひぬ、妹に我が膝を枕として、春の夢まどかに眠りつ。かくして終日たのしくうれしく遊び暮して歸りし夕より、妹は重き病ひの床につきぬ。日ふるまゝに病ひいよゝつのり、玉のかいなは日毎にほそり、ゆたかなりし頬の色は日ごとにあせ行くは、すでにいたはしき限りなるに、梳らざる黑髪のふりかゝるを、かきあぐるもうるさげなる樣、一入のかなしみをそへて、我が胸をいためぬ。

あはれ、春ふくるにつけて、我が妹の病ひはます〳〵革まり行き、名あるくすしの見たても、其の甲斐なく、眞

心こめし我が心づかひも、あだにして、東の窓に風さはぐ夕暮れ、梢はなれし二ひら三ひらの櫻花、妹が枕を音づれしとき、我が妹の命も定まりぬ。彼れは無言に涙もらして、父上、母上、我れの顏をながめ入りつ、彼れは靑ざめし顏に、さびしき笑みをたゝへつゝ、姉樣さらばよと、只一言殘して、曉の星の消ゆるも待たで、靜かに逝きぬ。彼れの摘みたりしすみれは、紫の色あせて、莖さへいたく萎れたれど、妹の形見として、永く我が愛讀の詩集のしをりとなりて殘りぬ。

柳の糸にかゝれる月影、おぼろなる春の夜は、十あまり三つの糸の上に、ましろき指を走らせて、妹がゝなでしつま琴の、琴柱のほとり、袖のあたりに、散りしく花をさぶらはせつゝ、共に歌ひ、共に笑ひ、浮世のうさを思ひ忘れしたのしさも、見はてぬ夢ときえうせて、此處に殘るは、其の時の琴のみよ。さみだれの徒然に、共に語らん友なきまゝ、ありし主を待ちわび顏なる此の琴に、徒らに我が涙のさそはれてなん。

あはれ、すみれよ、心あらば、汝れが野に咲き誇りたりし時の、よろこびを語れ。あはれ、琴よ、心あらば、たのしかりし昔の夜の夢を語れかし。

春の神は、我が妹の魂魄を奪ひて、とこしへに去り、夏のいぶきは、早や我が世に通ひそめぬ。降りやまぬさみだれの空、くもりがちにて、晴るべうも覺えず、されど時めぐり來らば、やがてうるはしき空と晴れなん。されど、我が胸の曇り、袖の雨は、夏去り秋來り、秋去り冬來り、冬去りて、世はまたもや春にかへるとも、晴るゝ望みのなきぞかなしき。

あはれ、うつしゑの妹よ、我がせきあへぬ涙の雫、汝が上にそゝぐを許せ、されど、されど、妹よ、我れの心をくみて、ゆめ、世に降るさみだれの、冷たき雫とな思ひそ。

あはれ、亡き妹よ、汝は今、何れの處にさまよへるか、何れの處に眠れるか、再び我が世に歸り來るは何時なるぞ、長き眠りを覺め出でんは何時なるぞ。あゝ詮なし、我が妹は正しく死せしものなり、とこしへに此の世を去りし者なり、幾久しく待つとても、再び、見る能はざるなり、あゝ。

あはれ亡き妹よ、いざ此の上は、死出の海いや廣く、波風あらくとも、忍べよ、望むかなたの岸には、散らざる花はさき亂れ、百千鳥梢に歌ひつゝ、汝の來るを待てり行けよ妹よ、而して其の花影に、其の聲をきゝつゝ、靜かに眠れ。そこには、浮世の波も、風も、俗界の紛擾も、狂譟もなからん。成れ寧ろ塵の世を捨てし、汝の身の幸あ

るを羨まん、されど、されど、妹よ、父上、母上、姉上のいませる現世を、おもはざるか。あゝ。ふりまさる雨の、窓うつ音、玉水の音の、さえてきこゆるは、夜やふけぬらん。

評　小氣味よき程、筆よくまはり、而かも優にしてうるはしく、悲哀纏綿、惻々として人を動かす。何等の才情ぞ、何等の才筆ぞ。(桂月)

## 乙　賞　【賞品圖書切符金二圓】

# 小猫

野州宇陽　上田なつ子

それの日、學びやより歸りきて、書齋に入りけるに、次の間にて笑ひさゞめく聲きこゆ。何ぞと行きて見るに、何處より求めきたりけむ。愛らしき小猫の、妹の玩べる鞠に、戯れゐたるなりけり。まりよりもやゝ大きやかならんと思はるゝ體を、あるは躍らし、あるは轉がし、あるは跳ねまわすなど、胸に如何なる愁ひを抱ける人も、こを見て、ほゝゑまぬものはなからん。おのれも打興じて、名は何とつけたりしぞと聞けば、玉なりと云ふに、玉よ〳〵と呼べば、まりに片足をのせつゝ、訝しげに、おのが顔を打まもれり。頭も圓く眼もまどかに、毛に黒と白との斑にて、妹の結びけん、紅なる太き紐の、首にかゝれるに、いつぞやさる繪の會にて見たる繪猫のそれにもまして、美しくもまたらうたげなり。やがて書齋に入りて、文かきをりしに、いつか入りきて、机の上に飛びあがり、おのが走らす筆を、さも面白げに小首かたげて、眺め入れり。墨を含ますれば、硯に目をうつし、書けば、また筆を見まもるなど、しばしば、またゝきもせでありしが、遂にちひさき足にて、筆を叩きはじめぬ。おのれの驚くに、彼も驚きてやめしが、しばらくしてまた叩くなどなきに、覺えず笑ふを、妹は聞き咎めて入り來り、オ、玉はこゝにかと、奪ふやうにいだきていにぬ。



評　文簡なれども、形容神に入るの趣あり。小猫の痴態、少女の嬌容、紙表に躍動す。結末、突然筆を收めて、反て餘韻あり。蓋し感興の餘になれるのみ、巧を求めずして、自から巧なるもの也(桂月)

# 丙賞　ふる里

【賞品圖書切符金二圓】

伊豫宇和島　ふぢなみ

雨につけ、風につけ、先づ忍ばるゝはなつかしさかぎりなきふる里人の上なりけり、奥ふかき文の林に分け入らん爲め、叔母君に伴はれて、この都へ來てしより、早くも三とせの月日はへにけるよ。まだ其折は、やう〳〵拾五才の春を迎へしばかりなりしかば、初旅の身のうれしきが中にも、いとゞ心細く、戀しさやるかたもなき故山のふもとに、人々と露けき袖をわかちしより、春や秋やとゆきかひて、はや三度目の夏休みは近きぬ。一日まなび舎より歸り見れば、其なつかしきふる里人よりの音づれは、ふづくゑの上に打置れたり。胸とゞろかして封切れば、母君よりのと妹よりのと二つあり。先づ母君のより讀みまつれば、己が老ひしにつけても、なれの如何に大人びやしつる。見まほしうこそ。文まなびの爲には露の間だに惜しみていそしめる汝の心のうれしきものから、又三とせの間、一度も相見ざりし事の本意なくも思ふぞかし。こたびの休みには、枉げて歸り來よなど仰こま〴〵とかゝせ給ひたる。身にあまる御なさけの程、筆にこもりたり。妹よりは、われのかへらん其時を指をりつゝ待ちて在る事、此頃琴の稽古を初めたる事、さては、父君の御丹精にて、花壇の菊のことしはわきて見事に作られたる事などかきたる末に、戀しき都の姉上よ、早やく歸り來ませ、姉上の好み給へる茄子は、裏の畑にふか紫の色ゆかしとこそふとりて、君をまちかまへて在りとかきそへたり。われは、この音づれきゝしより、何事も手につかず、日毎まなびやには通へど、心はとく故里の空にさまよひき。やがて、一日は千代、二日は八千代の思ひにて、まちわびたりし其日も來りぬ。都にありし程はよろづ約まやかにせんとて、髮も手づかねの束髮にのみしつる身のまげに結ばんは、頭重くいと堪へがたき心地はすれど、束髮は母君の好み給はねば、今日は、いてふがへしに結ばせつ。支度殘る方なくとゝのひたれば、叔母君にしばしの別れを告げまゐらせ、都を後にしていで立つ。道中五日を費して、かねては夢にのみ見たりしふる里の地にかへりつきぬ。瀬船より下りて、こたびは又車にゆられて、二里の道をかへり行くなり。家には今日はかいるとて海に向へる高どのゝをばしまによりてまち結ふらん父君、久々にて

わがいとし子に馳走せんとて、はした女と共に臺所にたちはたらきつゝ、車の音に耳をすまし給ふらん母君さては里の小川の柳かげに立ちてむかへまゐらせんといひし妹の姿など胸にゑがきつ。つくる時なきふる里の想をのせて走りたり車は、今ぞわが門につきぬる。

わが最愛の犬ブランは何われを忘れずやありけん、眞先に其房々とした る尾を振り立てゝ、わが袖にとびつきぬ、われの歸り來りしを見とめたる妹の、體を斜にしてわがやの方へ走せ去りたりしは、かくと人々に告げん爲なるなるべし。門にははやなつかしの父君、母君は、いふも更なり、座敷の中に住へる老僕の庄作翁夫婦をはじめ、下男下女打そろひて、われを迎へたり。

別れまゐらせし折はさしも思はざりし父君の、びんひげの白ふなりまさり給へるに、まづ胸を打たれづ。母君はと仰げ見れば、これも同じ御事にて、唯共にかはらせ給はぬは、慈愛にみてる其御まなこなり、涙の露をいたうたゝへさせ給ひたる。こはうれしさの餘りなるべし、われは何ともわきがたき涙のせきくるを汗にまぎらしつ。



湯あみ終へて座しきにかへれば、見知らぬ男の兒の、いと愛らしくいさましげなるが、姉と共にむつまじげに語り合へり。誰の子にや、かゝる子持ちたる親は、いかに嬉しからんなど思ひつゝ、まだ弟はかへらずやと問へば、妹のはらひて、姉上の何のたまう。此子こそ弟なるにといふに、さてはとつく〴〵見れば、四歳の[illegible]のおもかげは、さすがにのこりたり。餘りのうれしさに、つと抱き上げて、この姉を知れりや。よもおぼえては居まじ。われは汝の姉なるよとさしのぞけば、其すゞやかなる眼をみはりて、いぶかしげにわが顔をながめ入りつ。この時妹の傍より、今も今とて姉上の歸らせ給ひし事を云ひきかしせに、内の姉上の外に、又他の姉上の在るはうそなるべしなどいひて、わが言葉を耳にもかけず。さらば、しばしまてやとて、姉上の入らせ

給ふをまちて在りしなりといふ。なれどまだ四つの時に別れしなれば、そも理りなり。されど、わが親しき弟よ、われはまさしく汝の姉ぞと、ときゝかすれば、心やとけつる。うなづきて、抱きし手よりつと脱けいでゝ、あなたこなたとびあるく樣、愛らしとも愛らし。

青葉しげれる夏木立の奧に嘩ましう鳴き立てし蟬の聲やう〳〵をさまりて、夕風涼しくそよぎ初めし頃より、一家こぞりて水うたせたる庭に椅子並べて物語りする程、短夜の月は、今山の端をはなれたり。かなたなる築山の松の葉ごしにながめたる風情、いふばかりなるをかしきに、やがて月かげは、前栽の木立を出でゝ、靜にやり水の面に、いくつ、ともなく影をうつしぬ。げにこの月よ、千里を隔てし旅ねの空にながめたらん時は、さながら腸も斷れん思ひなるに、今宵の月の面白さよ。大空淸らかに風薫るこの月、秋かと許り庭白妙に澄み渡れる月のながめの面白さよ。

妹と弟とはいつしか絹のするゝが如き柔なる呼吸をつぎてねむりぬ。われは眠らんとすれど、まなこはいよゝさえ〳〵たり。何をゆめむか、妹の其あいらしきくちびるをかすかにふるはして薔薇の如き頰に罪なき笑みを洩らしつ。あゝこのふる里の庭、なつかしきたらちね、親しき弟妹等とたちわかれ、文まなびする身の心苦しさよ。かぎりある休みの終りし其時は、又戀ひしたふなれらをのこして都へかへりゆく姉の心の苦しさを察してよ。

未來に希望の光りなかりせば、斯る思ひをすべきやは。

評　取りわけて人を動かす節もなけれど、情到り、筆隨ひ、ひさ通りは面白く讀まるゝ文也。（桂月）

## 秀逸

### 天惠園

山口縣長府村　石原庫子

世の中に樂しき事多かる中に、親子兄弟打揃ひて互にあふばかり樂しきはなく、この樂を知らぬ者ばかりあはれなるはなかるべし。さるを、世にはこのあはれなる者の多かるこそいと〳〵うたてけれ。こゝに、己が住む里に、天惠園としも名のりて、亞米利加の國より波路遙かに分けこの婦人の、二三の我邦婦人の助によりて、三十に余るこの哀れなる孤兒共をはごくみつゝあるなり。此の園開かれてより八度春秋をむかへぬ。其の間定まれる財源あるにもあらで、神の惠と大方の同情とによりて足らはぬこととなう、年々に榮え行くは、いとも

めでたき極みなり。常に同情をよせらるゝ人々どもに、現在の有様を知らせまほしければと、園守の君より案内せられければ、已もゆきたり。先づ其式場ともいふべき所は、常に敎へ草摘みはやす所にて、板敷に荒き席しきたるのみなるが、さすがに淸くしつらわれたり。己より先につどはれしまらうど誰彼すべて三十人許もありけん、室の周圍には、習字圖書なんぞ、千種の花の數々たちならびて、中には一際目立ちて見ゆるもあり。其他縫物、編物、さては足袋下駄の緒等に至るまで作り出せる品々、見るからいと哀なり。やがて、正面に据ゑ付られたる風琴の低きおもしろき調につれて入り來れるは、此園におぼしたてられたる敎へ子ともにして、年上なるは、未だはひもしえぬ幼きを助けて、設の席につき、一禮せる樣、いとあはれなり。式のはじめに、一同謹みて君が代をうたひ、夫より一番年上なる男兒立ちて、聖書中の男の務といふ條を朗讀し、つゞきて女兒また女の務といふをさはやかに讀み出でたり。次に兒女の讃美歌あり。之にて式は終り、客人より惠まれし菓子をおしいたゞきて、さも嬉しげに一禮して、もとの如く風琴のひゞきにつれて、立ち退きしが、そのふくらかなる頬、笑みさかえたるまなざし、淸らなる裝、見るにつけても、幸福にみち〳〵て、世にも情なき親はらからに捨てられし子等としも思ふべくもあらず。座ろに涙くまれにけり。さて後、園守の君達より、この園の沿革、現今養育の方法、經濟の大略等をねもごろに物語られけるが、今そを一々くりかへすの暇もなけれど、其の內尤も思の外なるは、孤兒としもいへば、親はらからに別れてよるべなき身の、たゞ哀にかなしきものにて、かゝる幸ある園には、歡喜の涙もて來べかめるを、この孤兒の多くは生れおつるより家といふ者に起臥せし事なく、器に盛りて飮食ひせし事もなく、多年汚穢の中にそだちて、朝起出でゝも顏洗ふことも知らず、いばり、つまみぐひ、ぬすみ、いつはり等は、いふも更なり、或は人知れず、塵溜に行きて、殘肴果皮をあさり、或は夜半人の寢ぬる隙をうかゞひて食堂に行き、飯櫃を傾くるなど、いふもけがらはしきことのかず〳〵、習慣殆と性となりて、中には淸き生活にえたへで、もとの泥中に沈まんとにくるもあり、之を矯むること第一の骨折なりしが、今は殆んどさるいまはしき事もなくなりぬとかや。あはれ、この泥中よりすくひ上げられて、今はほとんど其のことを忘るゝばかりに幸福にあらしめらるゝ孤兒等の幸やいかに。かゝる犬猫にもをさ〳〵違ふかたなきを

おほしたてゝ人の道を教へ獨立の生活をさへいとなみ得るまでになさんといそしまるゝその苦その勞、到底常人の想像し得べきにあらず。献身的ならでは、巨萬の財を積むとも、いかでかゝる大任を全うしえんや。しかも其財源はたゞ定りなき人の寄附にのみより、ことにその大半は泰西の國々の慈ある人よりの寄附にして、しかも貧しき人の辛若の汗の雫よりなれるをきゝては已等同じ國に生れあひたる者たゞに知らず顔してやはあるべき。古來我が國は仁義に厚しと人もゆるし、我もほこりながら、却て彼の利己に走るとて侮りさけしみし外國人に、多くの慈善事業をさきかけせらるゝとは、いかに慨はしき極みならずや。　近き頃は、我邦にも、慈善會、感化院などやうのもの、おひ／＼出て來て、貴きあたりにも、その方に御心そゝがせ玉ふは、いとも有り難き事なれど、はた慈善てふ事は、已れまづ富みたらひて後ならではしえぬものにはあらず。　その心だにあらば、たとひ富まずとて、そのほどにつけてしえらるゝものなり。古語にも、貧者の一燈は富者の萬燈にもまさるとかいへば、世の諸孃達よ、我が同胞中には、なほかゝる忌はしきものゝ多きを記し、かつかの國人は千里を遠しとせで、言語もかよはぬとつ國に來り、みを犧牲としてかゝる大任をおはるゝをおもひ、たゞに世の風潮にのみ心を奪はれず、己をつゝしみ、身を節して、情の露よせられんことを切に希ふになむ、

評　このやうの事かゝば、動もすれば、乾燥に陷るべきを、ひと通り趣味あるやうに書きこなしたる、作者の筆力を見るべし。後半の感慨はた切實、一種有益なる文字なり。（桂月）

秀逸

## 辨の内侍の事を記す

脇山わか

後醍醐帝の御代、かりこもの、亂れにみだれ、黒雲天が下にみち／＼て、天津日影も明らかならず。忠臣は皆葉末の露と消えて魂魄徒に中空にさまよひ、ぬば玉のあやめもわかず。主上には、雲ふかき吉野の奥にまよひ入らせ給ひ、黒木の宮、丸木の御所に、世をかこち給ふかたじけなさ、申さむもなか／＼に言葉たるまじうなむ。吉野の花は時をたがへず咲き匂へるを。多武の峯の月は折をたがへずみすまされるを。淺ましの世の霧はいつ晴れゆかむけしきも見えず。さるが中に色も香もゆかしき一本の名花馥郁と匂ひ出でぬ。されど、こもまた浮世のあらしに誘れて一生を薄命に過し、怨を南山の

雲に殘し丶ぞあはれなる。

あはれなる哉、蟬の内侍。父俊基朝臣は隱謀洩れて鎌倉山の夕露と消失えせ給ひ、母なる人は歎きのあまり、世をはかなみ、墨染の衣に身をやつして、行方も知れずまよひ出給ひぬ。かく父にはおくれ、母にはすてられて、よるべもなきみなし子となりにしを、叔父なる三位行氏卿いたうあはれがり、己が家に養ひしほどに、昨日とすぎ、今日とくらし流れて早き飛鳥川、早や幾とせをか夢の間に過しつ。そが才學世にたぐひなきこと、いつか九里の雲の上まで聞え、召されて官女とはなりぬ。或夜、吉野の行宮にて、主上近臣を召し、内宴せさせ給ひし折、いかゞしたりけむ、内侍かはらけを取り落し、二つばかりに破れければ、主上の御けしき惡しげに見えさせたまふ。内侍取あへず、

さかづきのわれてぞ出つる雲の上、

と口ずさみけるに、宗房卿、

ほしの位のひかりそへばや。



とつぎければ、主上いたう興がらせ給ひ、夜更くるまで御酒まゐらせ給ひきとかや。内侍の才智かくの如し。

内侍は、其才秀でしのみならず、其顔の美しさ、眉は春の遠山をすりなし、色は露を含める櫻花に似たり。その美容反て身の仇となり、敵將高師直に懸想せられ、奪ひとられて行く道ずがら、楠正行の爲に助けられて行宮に歸りしに、主上の御感斜ならず、正行なからましかばとて勅して内侍を正行に賜はらむとし給ひしに、正行、

とても世にながらふべくもあらぬ身の、かりの契をいかて結ばむ。

と一首の歌をよみて、いなみ申しけり。あはれ、このと、いとつれなう情けを知らぬに似たれど、其實は父正成の敎訓を奉じ、たゞ一死君に酬いむとする身の、一日の情けのため百とせの身をあやまつらすに忍びざればなり。げに、誠の武士とこそいふべけれ。其後正行は如意輪堂に、なき數に入る名をとゞめて、遂に四條畷の道のべの露と消え、長く橘の香しき名を後の世につたへたり。内侍はた

とひ契りは結ばずとも、君の御ゆるしありし夫なりとて、正行の死後、たけなす黒髪をおろして龍門のほとりにさゝやかなる庵を結ひ、先帝と正行の菩提を吊ひしとかや。あはれ、契も結ばぬ夫のため世を逃れ、其冥福を祈りし心のけ高さよ。あまたの夫を重ねて恥とせざる今の世の女子たち内侍の行を顧てはいかなる感かある。吉野の花いかに麗しといへども、内侍の心の麗しきにはいかでか及ばむ。吉野の雪いかに清しといへども、内侍の心の清きにはいかでか及ばむ。げに雪よりも花よりも猶清ううるはしき其心、谷川の流れのまに〳〵末の世に傳るぞ哀れなる。吉野の山風淋しう吹きて此薄命なる美人を吊ひけむ。あなあはれ。

評　いさうるはしき叙事文、辨の内侍にふさはしき筆づかひ也。（桂月）

秀逸

## 春の鵠沼

花枝

氷れる如き寒風に、世はやよひの春と名のみたてど、花の都の花いまだ咲かず、結ぼうれし身の病のとけがたきに、くすしのすゝめによりて此月はじめ鵠沼の宿へうつる。

さゝやかなれど、新らしくしつらへたる農家のはなれ坐敷、前は廣き庭をへだてゝ幾千本つゞくらむ松林、うしろは畑にとなりて箱根足柄の山々まのあたり見ゆ。門のほとり、只一株の老木の梅今をさかりとにほひみちたる、先づうれし。

笹垣に梅さく門をしるべにて
　たづねきませよ、鵠沼の宿。

げにあるじのほこるもうべなりけり。このあたり、去る頃までは、桃いと多くしたてゝ、其名も世に高かりしを、今はこがひの道盛になりて、皆桑に殖えかへられしときく。まこと畑の中道のほとり、桑の木あまた見えたり。

ことわざしげき身の、假にとるへき務なきまゝ、只夢の如く、あまたの日はくれゆきぬ。清き砂地、緑したゝる松林、はた白雪かゝる遠の山、かたくな人の眺めにはいと惜しきを、さりとも腰折れのひとつをたに得むと、そこゝゆきめぐりつゝ思ひわづらふ。

こゝにしてし歌ならずはいづこにてと
　とはるゝごとよ、松風のこゑ。

濱には地引とて、鰯漁るわざす。西風冴ゆるころ、まだ

あけやらぬ曉、旅寢の枕にその聲のきこゆるは、いひしらずをかしくも淋し。

名のみたつ彌生の空の風さえて、
寒けくもあるか、地引ひくこゑ。

西につらなる山々、たかきはまだ雪さへ見えたり

雪つもる山の名とへば里の子が
ゑみつゝ富士のみ山とぞいふ。

とはざらましかばといと面はゆきに、八重たちためし雲のはれゆくを見れば、神代ながらのみ姿ありくと見ゆ、うべよ西風のさむさ、朝だとの筧の氷。

彼岸すぎてより、やうく世は春らしう、冴えわたりしふじのねおろしも、長閑き東風となりぬれば、かすむ濱邊のそゝろありきに、世はなれし住家いよゝすてがたし。されど、さすがに雨つれくとふりくらす折なとは、都の空のしのばれて、淋しき旅の心ほそさ、言はむかたもあらず。

ゆるし得て思ひたちたる旅もなほ
うきにはもれぬものにぞ有ける。

江のしまに詣でし折、

江のしまや干潟に渡すかけはしの
板間あやうき世わたりの道。

いつしかくれかゝる彌生のそら、桃もさき、野邊も綠にかすみそめたれば、都の花のたよりも聞かまほしきに、身の病も、いまはほとくいえたれば、あすは都へとおもひたちし夜、ねられぬまゝにをかくなむ。

評、簡潔にして、詩趣なしとせず。(桂月)

秀逸

## 風の辭

麹町區飯田町三の二三角や方　伊東親子

風こそあやしきものにはありけれ。團扇にまねかるゝかと思へば柳の糸に姿をかくし、散る花にいとはるゝかと思へば尾花か袖にまねかる。九重の雲ふかく通ひしも、賤か軒端に吹きすさみ、藻鹽汲む海人が麻の袂になれしも、高殿の伊豫簾のひまより綾の袖に通ふ。うなゐ子のもてあそぶ紙鳶のおもしろきも、みどり子のよろこぶ車風のをかしきもみなげに風の力なりけり。靜かなる姿は一ひらの花にもたはむれ、おそろしき姿は天の八衢より吹きおろして木をも家をもたをさんばかりにすさびにすさびくるひにくるふ。夏の夕、軒端の風鈴に通ふ涼しき風は、冬の朝、雪にまぢはるふぶきを司

る風の神の同じ仕業としも見えず、春の朝花の匂ひを送るやさしき風け、秋の暮、瑞穂をあらす野分を司る風の神の同じたしなみとしも思はれじ。さばれ、この四季をり〳〵の風つゆもおもしろからず、つゆもをかしからじ。たゞ日の御旗をひるがへして、外國々の民草をなびきふせなん東の風こそおもしろく、旭に匂ふ山櫻花を吹きちらさなん西の風こそいとおそろしけれ、あはれ、風の神よ、汝は何處より吹き來りて、いづちをさして去るらん。あはれ、風の力よ、なれはいかにやさしく、いかにおそろしきか。まことや風ほどあやしきものはあらじかし。

評、後半は平凡也。殊に西風、東風云々は牽强に過ぎ面白からず。されど、前半、文才すてがきものあれば取りたる也。(桂月)

秀逸

## わが身

大坂　松木涙子

飛鳥川、昨日の淵は、今日の瀬と、變る憂世は、何事も覺めてはかなき夢の間ぞ樂しき。末の松山、千代迄とちぎりし君は、去年急性肺炎とか云へるおそろしき病にかゝり、一月とたゝぬ程、折しと秋の初、桐の一葉と諸共にあへなくならせたまひぬ。おのれ幸薄くて、父君の暖き惠を知らず、又母君さへ西東知らぬ頃、別れ參らせたる身なれば、人並に平かに世を渡ることを得ず、吳竹のうきふし茂き世に、父の遺產あるまゝに、黃金には目のくらむ人心、何のえにしとなき人までに、われも〳〵の後見、かゝる樣なれば、一雨ごとにみどり增すわか草の其ならで、のびんのびんとする幼時より、はや世の味氣なきを覺えて、如何なれば、母君につれなき憂世に、只ひとり己を捨てゝいに給ひしと、み墓の前にて涙にむせびしも、幾そ度なりけぬ。此家に嫁ぐことを得て、人を吾も腔なで下したりし時は、遺產もなかはゞ失せはてたりき。げに、人の世は誠なきものと知りては、賴みもせじ。恨みもせじ。されどさるにても添竹はなれし野菊に、吹く風の强きを如何にせむ。只忘れがたみの幼子の笑顏は、君に其儘、この子故に、わがくらき一生に、一點の光明ある心地せしにゆめ、にはかの病に、あと云ふ間もなく、朝の露と消えしはかなさ。とてもかくても何の樂しみありて世にながらへんと、獨り窓の下にあれば、隣の子の泣く聲す。共に遊びしものをと、胸いよいよせまり來ぬ。去年は君に別れ、せめてはと慰みし忘れがたみは、夕の嵐に誘はれて、後に殘されし我身よ。な

どかく斗り幸薄きか。神と佛といまさぬ世か。望も樂みも無き身なれば、何もたのまじ、憂世の外の山にも入りてと思へど、山にも憂き時はいつちゆくべき。身の置所なき樣に覺えて、あつき涙唯ほろ〳〵とこぼれてとゞめ難し。夜はいたく更けたりけん。あたりはしづかにともしびはかすかになりゆきぬ。夜寒をわぶる虫の音悲しげに、吹く夜風は無常を告ぐるこゝちす。文机の上、笑めるが如き君のうつしゑを眺め入れは、折しもひとしきり降りそゝぐ秋雨のまど打つ音淋し。

評、げに、あはれなる身の上、一讀、人なして魂消せしむ。（桂月）

## 賞外佳作

### 自棄をいましむ

下總　郡司文

凡そ世には愚かなるわざごとかず多かめれど、自棄ほど心得ぬものはあらじ。一身のほか身方なしとぞいふなる此の憂世に、自からすてゝいかで叶ふべきぞ。あるはおのが望みのとげぬをいらち、あるは他人の爲すわざに不滿を懷きて、後さ前きの考へもなく、狂ひ廻ろことのうたてさよ。望みのとげぬは、おのが力の足られはにこそ。されば退いて力を養ふことを努むるがことはりならめ。あだし人の爲すわざの意に滿たぬは、人々各々そのさが、その境遇にけじめあれば、まゝならぬ世の習ひと諦らめざるべからず。よし殊更に自からを陷れむとするものあるとも、狂人ならぬ限りは、よしなくかゝる行ひを爲す者もあらざめれば、お互ひに心の落ち合ふやう、滑かなる策をさるこそ宜しけれ。さるを人々さゝやかなるまがごと、あるは怒りの爲めに、一途に思ひなして、自暴自棄を起し、胸のほむらに身を焦がし、たち上ぼる黑けぶりに路をてらす心の光を晦ましつゝ、この常闇の、しかも險はしき岩角底ひも之知れぬ淵のみち〳〵たる、うき世の路を辿るさま、その心細さ又なくぞ思はる。おのが爲せし亂行に、いやます〳〵不平の駒を鞭撲ちて、猛けるがまに〳〵身を深みに陷れつ、果ては妻子をさへ路頭に迷はせ、人々には蔑みせられ、悶へくるしむ口もさよりは、死の神戀ひしさ喞つに至るも、げに淺間しくも亦愚かにてあんなれ。かゝれば古へよりたゝへらるゝ、聖賢はた英傑の君達は、いづれも跌く每に自がらの身を悼はりて、七まろび八起きしつゝも、なほ偉業を成しとげしにはあらじか。などひさりかゝるたぐひの者にか限らむ。世の常の人さいへども、まろぶ毎にいよゝ勵みたらましかば、つひには望みのとげぬことかはあるべき。自からを棄つるは、自がらのさちをすつるなり。あらず、自がらの生命を殺すなり。「天は自から助くる者を助く」とは、洵に味ふべきことになん。

筆致簡古にて、文に味ひあり　（記者）

### 故郷を思ふ

東京　河村若子

白雲に見えわかぬ故鄕の空、海に山にちかゝらぬ故里の地、かばかり戀しき處はあらず、かばかりおもしろき處はあらじ。神路の山またかゝられども飛鳥の山の眺めよきにもまさりて我をよろこばし、五十鈴の川は

ひろかられども隅田の川の流にもまさりておもしろし。故郷の地、故郷の地、見ましさ思へども浮雲白く、行かましさ思へども道遠し。慈悲ふかき親も此の地に我をまちつゝあり。いさしき妹はこの地に我を慕へり。彼のむかし我が妹とさもにもゆる若菜を摘みし野邊はいかに。栗拾はんとのぼりし山は如何に。思へば夏の暮鎭守の神の祭に父上の都より土産にさてもたらし給ひし扇をさりいでゝ、これこそ我よ、あれこそ汝よさ妹さもに爭ひて互に泣きしこさもありけるを。あたら月日に關守なく過ぎ去り過ぎ來りて我は都にのぼりてより三つの春秋もいつしか經めぐり來りて今は旅の空に故郷戀ひしく泣く身さはなりぬ。むかし馴染の誰彼みな他に嫁ぎ給ひて人の親になり給ひしさの母よりのしらせ、我のみなどて斯くも物學びのはかばかしからざるや。あはれ神路の山は動きなきこしへにさかふれど、五十鈴の川は流れたえせずむかしのまゝなれど、我はむかしの我にあらず、都の地にあり、故郷の地、故郷の地、げに我が祖父のねむれる處なり。げに我が祖母の葬むれる處なり。今我が親もいかにしつらん。我が妹もいかにしつらん。戀しきは故里なり。おもしろきも故里なり。天を仰ぎて故郷の空を見んさすれども浮雲白く、故郷の地をふまんさすれども道遠し。さきくあれ母上、つゝがなくあれ妹、我は學びの園の花を手折りて程なく故郷に歸へらんに。

文拙ならざれさ、修練足らず　（記者）

# 山家の住居

下野　永井キチ子

右より左へさ事の便すなる都人には、一日さて住ひせらるべうも思ひ給はぬべけれど、住みなれては中々に都にこそは、ひさひとて住居せん心はあらぬなり。げに此里は小高くて、家ある市は一眼の中に見渡さるゝ所にしあれど、さて其所まではうねうねと曲りくねりて、細道さらさらと谷間を流る小川には、怪しげなる丸木橋それも一つならず、二つ三つ又道のべには倒れかゝりし塔婆、苔むせし墓標、はては幾百させをか經たらんさ思ふ大木、晝も猶うすぐらき林の中、殊に山川の常さて降りつゞく大雨の折は、溢れ出づる水勢物すごく、石の流るゝ音、木を倒すひゞき、まして麁末なる土橋をや、一雨毎に流れ失せいさゞ不便の上にも、かゝる折には前よりくさくさと用意せでは、かゝるさまを目のあたりに見聞きなす市人は、我等の住居をば、げにも不便の所よ、おそろしの川よさ口々にいふなるを、まして都の人をや、かゝる田舍の佗しき家居も又あだし人には、はかり知るべうもあらぬ樂しみ、はた長閑さい拙なき筆にては中々に物すべくもこそ、もさ我父なる人の此所を開き玉はりし折、夜毎おそひくる狐狸にいたわり畜ふ鷄の夢を破られ、ひいなを傷はれ、はては米味噌をさへあさらるゝ事も度々ありきさか、今はさる事もあらずなりたれど、近きわたりの野邊には、時をりけたゝましき聲のすなるも、中々になれてはつゆをそろしさも覺えず、眞夜中にても市迄は往來もすめり、此頃のしめやかなる五月雨には、膚もいさう冷しう覺えたりしが、見渡す山々は、皆白砂の帽子目深に被りたる、さるからに時候も都よりは二月位は遲るゝなるべし、父人の朝な夕なにかなたよりは種を求め、こなたよりは苗木集めつゝ、殆んさ有りさ有らゆる草木をば、土かへ養ひ玉ひてし甲斐ありて、卯月の末ばかり、梅桃櫻こきまぜて、白き、赤き、濃き、淡き、ある〳〵の势にむくひ顔なる、又木の葉の芽萌えの美事なる中々は捨てがたき眺めぞかし、驚雲雀、はては名も知らぬ小鳥のふし面白う囀る聲いさいさやさし、今ははやさつきも半ば過ぎたれど、しめり勝ちなる五月雨に色はやゝあせぬれど、八重櫻右近櫻の霞さ

ばかり、山吹つゝじと相映じて中々にあかぬ眺めにぞある、前なる野邊にわらび、うど、ふき、うりう、はては芹、みつば、土筆、などあさりて小籠に充てんは時の間なるべし、今少し過ぎなば黄いちご取りに行きなんがな、かなたの山蔭にはいとも美事なるぞかしなど語り合ふ、いとも樂しや日も傾かば、前なる泉水の清き水面に舟浮べ、一家まとひの樂しみに、ひねもすのいとなみ事のつかれさへ忘れ果てゝは、こゝのみぞ浮世の塵も見のがしゝならめとぞ思ふ、はては波間に月影きらめくさま、清しとも清し、さるからに此池も舟も皆我父君の我等はらからの水游ぎ舟やるすべのすさみにもと、殊に調ぜさせ玉へしなりと聞きまつりては、今更ならぬ深きみめぐみのいとも深う覺えて、此頃の年老ひ玉へし御面影のいたく衰へ玉へしも、皆我等子等の爲めに、御心勞の多かりし故ならんといとも心苦しうなん

樂しき春の日櫻の木蔭にちら〳〵と散りしける花をしとねとしてさつきもなかばの十あまり七日の日にいさゝか思ふふしをかくなん

# たまづさ

關東　瀧かつ子

年たちかへる朝またき、若水さへ汲みはてぬに、門より言葉かけて投げ込みゆく年始の狀のかず〳〵、忙はしう取上げて、去年のまゝなる燈すこしかいたてゝ見る、まづうれしゝ。年々に漸く封ぜし文は少くなりゆきて、葉書といへるのみ多きも移りゆく世の樣とも見るべしや。そがなかに、奉書とやらいへる紙に墨の跡匂ふばかり麗はしう書きたる尊し。はがきも自らの筆もて、和歌あるは俳句を言葉に代へたるは優しきものから、活版にて何れも同じ文を刷りたるは、筆とる暇なきにやあらんずらんが何とやらあかぬ心地ぞせらるゝ。花紅葉よしと聞くものから、しずかに獨りこては興うすければ、誰そゝのかさんなど案ずる折、ゆくりなく友より誘ひの文おこせたる、なが〳〵にうれし。さるは、おのれさはりありてえ行かず、口惜しう覺ゆるとき、文にそのありさまをかいしるし、花の一輪二輪を封じ込みたるなどは、いひもしらずなむ。なべて、遠つ國々に旅寢せる折からは、たゞ古さとの、たらちねはらから、あるは友どちよりの文のみぞ待たるゝよ、そも恙なきどちは、さまで覺えざるが、かりそめにもいたつきの床につきて、右ひだり皆馴染のうすき他し人のみ、親しういひ慰むるものもなく、寢られぬ夜半のともしび小暗きさへあるに、折ふし窓をもれ入る野分の風の、誰か玉章をかけゆく雲井の雁の聲々を枕邊に傳へきしとき、宵につきし故郷よりの文誦するに、我が病をいたう案ずる旨につきて養生の法など詳しう書き示し、尙ほ末にこかれ其ほか用ばしあらばいひおこせよ、何なりとも叶へてんになるとありたる、忝なさに先つ涙のみこぼれて、其恩そのなさけ、世にある程は忘れえましやとぞおもほゆかし。親しきものゝ亡せしは、そのしらせを見るたに悲しさ堪へ難きを、其人の末世にありしうち、我に送らはやと認めたりし文の半ばにして筆の跡絶えけるを卷きこめたる、しばしは、只夢のことゝみに涙さへ出てさるが、打かへし〳〵讀みもてゆくうち、悲しさやるせなく堰きし涙のみつき出てゝ、あやめも分かずなりしまゝ其文かき抱きて泣きふせば、其人の姿、さてはありし事ども、あり〳〵と涙にうつりて共にきえうせぬべう願ふも誰か理りならずとせん。まして二世もと契りし人の遺髪を添へたるなどは、そもいかゞなるらん、かの人をして深省を發せしむといへるも、理りすぎてなか〳〵に哀れ深くてなむ。人の噂など喋々しく書きたるにくし。さるは久しく中絶えて住める所だにわかざりし幼き頃の友よりうつゐなど添えておこせたる

は喜ばしく生れてよりいまだ逢はざる弟妹のはや學びやへ通ふやうになりて、口傳へに覺束なくも假名もてしるしたるはなつかし。はや幾年か外國に遊び居る友の、彼の國語にて麗はしく書き綴りたる、愚かしき我身に引きくらべていと羨ましく、短くてあるべきを拙き文筆もて、只山鳥の尾の長々しう書き立てたるは、其人の心も押し計られて。淺まし。樂しきは春雨五月雨のつれ〴〵に、ふるき文とも探り出して打誦じ、其なりなりを偲ふ心にこそ。

# 田舍

伊豫　浦尾やすを子

開くる御世におくるゝ恨みはあれど、田舍のすまひこそ實に樂しきものなれ、いかめしきついひぢなど、設くるのわづらひもなく、門の柳、せどの梅などもて、仲垣にかへ、少し隔たりてすめるものすら、あけくれにゆきかひて、其まじらひのいと濃やかに、又まごゝろなる春は、野邊より庭の松が枝かけて霞棚引き、夏は凉しき風の居間に吹き通ひ、秋は紅葉冬は雪景色なぜを、居ながらに眺むるをかしさは、都人の夢にだもおもひおこさぬ事なめり、野邊なる千草の花を見ては、月日の移りゆくを知り、夕顔棚のひまなごより、月影をながめては、昔をしのぶもいとをかしかるに、髮かざり其外の調度おしなべてつゝまやかに、とりよそほひ、つゆきよらを競ふの心さてもなく、うるはしき青葉、汚れなき空氣、すめる泉など、みな田舍のたまものならぬはなし、實にたのしかるは田舍ずまひにこそ。

# 野あそび

東京　川口つね

梢に咲ける花も、吹きすさぶ嵐にたゑかれけん、いつのひまにか散りはてぬ。あたりの景色も、何となく見所なき心地せられて、天地の春のみか、人の世の春も老いやすく、昨日はさかゑをごりしも、今日は時をうしなひ世にわぶ、げに浮世の樣こそ常なけれなど、つく〴〵と思ひつゞけられぬ。絕間なかりし長雨のやう〳〵晴れぬるに、あはれ語らん人もがなと、待ちわぶる折しもあれ、つれより心へだてぬ友の音づれ來て、今日しもこよなく晴れわたりぬ、いで霞たなびく野邊にうちむれて、一日の遊びに、殘りの春を心ゆくばかりにくらさんなどすゝむるまゝに、もとより好める事なれば、いたう心いさみて、花かたみ手に取りつゝ、「かげらふのもゆる春野にうちむれて、そこともいはずすみれつみてむ」など口ずさみていでゆきぬ。

長雨晴れてのあしたなれば、日のけしきの何時よりもうらゝかなるに、田舍家だつ柴垣近う咲ける八重櫻の、あはれてふことをあまたにやらじとにや、外の花は皆散りぬるにうるはしき唇もて心地よげにほゝゑむも、いとなまめかし。野は見ゆる限り淸げなる芝生にて、所々にある松の木立も繪にかいたらん樣なり。ゆかりの色ふかきすみれの、はや開けるは蝶の舞へるが如く、まだつほめるはみどりの玉かと思ぼるゝ許りなるも、いとなつかし。あはれ朝かすみ夕霞を友として、淸き操たてつゝ、一とせの春ををくるいましの身こそ、心にくき限りなれ。すみれまじりに咲けるしどみの花の、すごやかなる田舍人の顔色に、さながらにほひなせるも、所からをかしきに、遠方よりなかむれば、毛氈をしきたらん樣なるも、いと興あり。たほ分けゆくまゝに、草花咲きみだれたる中を流るゝ

小川あり。さゞなみよする春風の吹くにつけて、岸うつ水音もいとさやかなり。つみこしすみれの花一ふさたむけぬれば、花は水のまに〳〵流れゆきて、はや片かげだに見えわかず、あはれ一ふさの花よ、いづれの瀬にかさまよふらん、いづこのふちにかたゞよふらん、里の子に拾はれやせん、見る人なしにしづみやしけん、行く末のしれぬぞ心もとなきや。此わたりの樣のなつかしきに、芝生に腰うちかけて見渡せば、心なげにとび來る胡蝶も、眞心から春の空をたのしめる如く、聲のみきこゆる雲雀も、うらゝかなる光りにあくらん樣なり。かくて互に春の野のけしきはげにうれしきものよ、まいて自然の美にゆかり遠き、都の中を住家なせる身には、いとおもしろけれ、嗚呼行く末の待人は、此のわたりに蝶ともろともにたわむれ居るならん、花もて、花束つくりつゝあそび居るならん、など語りあひぬ。かくて花つみ、わらび折りなど、心ゆくばかり遊びつゝ、時のゆくへも知らぬ間に日はやう〳〵端山の里近うなりてねぐらにかへる鳥の聲も、さびしくなりゆきぬればいそきつれだちて、をのが家へと歸り來ぬ。三日の月ははやみどりの黑髮かきやりたきつけの小櫛の形なして、庭の柳の絲にかゝれり。待ちうけたまひし兩親に今日のあそびの樣などかたらふに、傍に居りし妹のかたみ持ちいでゝ、物めづらしげに、すみれなど見せ奉るも、春の野をおのばせたまへとの心にやあらんとおぼへて、いとゆかしうなむ。

# 悲しき我

千葉　郡司ふみ

指かとなうれば早や三とせの昔となりぬ、我れ十五の夏のことなりき。友づれに眺望いと美はしき我郷の臺に陞りて、四もの風景を眺めあるは書物などあさりありぬ。臺の東北に當れる舘が淵となん呼ぶ處に、今しも鉛錘を垂るゝ大公望ありけり。我それを見まほしく思ひしまゝ、友を拉して臺を降り其處に到りぬ。見れば齡廿ばかり眉目俊秀なる少年が、數本の竿を操つるさまいと見事にまたゝく間に十數疋を上げたりぬ。かくて獲物多からめ、いで檢めんとて魚笊に手を觸れんとせし一刹那、岸崩れて呀ナヤと叫ぶもしぶきの中。――水は再び滑かに……？。

友は呆然としてたぢろきぬ。人家は遙かに距たれり。我が靈魂は長しへに幽瞑界を彷徨ふの止むを得ぬなりき。あゝ渠少年こそは實に我れを救へ奐れしなりにれ。渠は我命の親なり。温かき天使なりき。

我れは病みぬ。病癒えて臺に陞り、かの淵を瞰みて身を顫はしぬ。轉じて少年の家を見たりぬ。臺の北一里計り彼方に多古の町あり、町の端づれ禿崖の下に建てる一茅屋、――あゝ、いとしき渠の家なりき。

我れは何となう以前に增して、臺に陞るを喜びたりき。雨に風に、我家の裏庭に續ける臺の坂道を辿るを懈らざりき。しかしてかの淵を瞰みぬ、されど淵は只清漣の日光に輝くのみ、その後たへて渠の片影をだに認むる能はざりき。かの家をも見たりぬ、されど依然として美はしき禿崖の下にあるのみなりき。――あゝ、渠の身は奈何ならん。――渠は今何をか爲しつゝあるならん。

かくて夏も去りぬ。或日のこと、聲の通るとて人とかしましかりき。我れも見ばやと門を出でぬ。車は來りぬ。――あゝ、車上の人は渠なりき。
――聲とは實に渠なりき。

程經て或日の黃昏我れは獨り臺に陞りぬ。四もの風光を眺めんとにはあらざりき。學窓の欝を散ぜんとにもあらざりき。例の如くかの家をも瞰みぬ。

「渠はもうあの家には居なえかなあ」。と思ひし時、一道の惡寒身に滲み

亘りて、千仞の奈落の底に隕ちたらんやう感ぜられぬ。あゝ、我は今しも物の哀れを知り初めにしなりき。さなきだに物悲しき秋の夕暮れなるに、折しも耳朶を掠むる入夕の鐘、――あはれかれは諸行無情と響くあり、其音洵に凄陰。――我は宛がら何物にか五臓六腑を掠り取らるゝが如く、遂に堪へで堂と打ち僵れぬ。此瞬間、過去のまぼろしは火輪の如く眼前に畫かれぬ、――落水の事、――救はれし事、――聟、――病氣、渠の面影、――かの家。

＊　＊　＊　＊

あはれ、嵐の吹きすさばんず春のあした、月白き秋の夕、あるは過ぎ方行く末の思ひに耽る夜半の枕の、其折り／＼に、此の事の賤の小田卷くり返へしては偲ばるゝかな。

さはれ、我れはつゆ浮きたる穢れたる思ひのあるにあらず。我が心の清きこさは雪の如けむ。光風は玲々たり、明日は皎々たり、白雨過ぎ去りて軒の雫に月の閃めく。我れは心に疚しき所なし。只何とやらん心の奥に潜める、此一種幽妙なる哀情を抒べて、天下同感諸媛の一顧を得なば足らんのみ。其の他は人々の心に任すさかくなん。

## 夕立

福島　村田吉代子

明方よりみ空はれわたり、これと見えたる雲もなく、朝よりてりつゞきし日の光りに、金石も迸らむばかりに熱く、道行く駒の苦しげに、汗をしぼりつゝ行く旅人の、しばしの涼をさらむとて、松の下かげにたゝづみぬ。賤の男の鍬をもて野にゆき、をのが業の爲めにとて働き、わらはの二人三人河に向ひ、編笠をいたゞきて竿を手にする釣人、賤が家毎に干せる、赤き白き衣の、軟かき風に動ぐさまをかし、あまりの暑さに家ごもりして。讀など開かむと机によれども、身のいさゞゆるみて堪へがたければ、窓を高く上げたり。いつもに似ぬかゞしき風の、吹き入りたりと思ふまゝに、龍かはた怪物かと紛ふばかりの黒雲、俄かに空を掩ふやまもなく、電光閃々轟然と雷鳴し、大雨盆を倒にせしが如くに降り來たり、落つる軒水地を掘り、かれたる庭の池は忽ち水こえ、田に耕ぎる男の鍬をすてゝいそぎ、泳ぎし子等のあわてゝ、濕れたる衣をかゞへて走り、干物を入れむとしてならむ、里の少女子の亂れし髮を風に靡かして飛びゆくさまをかし、新樹に栖みし青蛙の、われうれしやと清き聲をはり上げてなき、しをれも庭の草も木も、俄かに立ちあがり、やり水水肥えて咲きたる花を倒し、塵に染まりし園の松色添へてゆかしく、龜裂したる青田の、俄に畔をこさむばかりの水を得、かへる釣舟の雨を侵かして漕ぎくるさまのをかしさ、まもなく空はれ行けば、日光初の如くてらせど、時ならぬ秋のかよへる心地せられたり、されど隣村には未だ雨みえておもしろし、満目皆新たに、この塵の世の外なる思ひせられてうれし。

## 忍ぶ草

大隅　柳元貞子

あはれわが友は逝きましぬ、我が美喜子の君は、逝きましぬ、思へば一昨年の暮、うせたまひしにぞありける。しかありしやうなだに、記しをきて、千代のかたみになしてんと、闇にくれたる心にも、思ひよりてはありつれど、手のわなゝきふるふに、涙さへ水莖になかれ添へは、えかきやらで、月日經にけり、此の頃は、この山里にこもりて、罪なき幼兒

のむれに、日を送れば、慰むさしもなけれど、おのづからうちまぎるゝこさのありて、まどふ心の、すこしのごまるやうなれば、折よしとさかしう思ひしづめて、書きもてゆくうせにし君は、我が身に四つの姉君にておはしき、やさしく、けだかくいますを我が慕ひまつれば、君は妹のごさく、めでいつくしみまして、明かし暮す程に、君はあづまへ旅たちませしが、親しかりしあはひの、いつさはなしに、遠ざかり行きしも、已かしゝ、さろわざのせわしきによりてさ、さがめもしたまはで、花に鳥に、月に雪に、たえず音づれたまひて、荒涼しげき浮世、迷ふ路多きこの世、身をいたむるな、迷ふなさ教へたまひしもやがて、遺訓さなりしこそ、いはんかたなく、かなしけれ、ながつきはじめより、何さなく心地すぐれずと、のたまひおこせらるゝ、玉章に心許なく、覺えて朝な夕な、さく愈えまさんこさを、祈る程、千草もかれ、霜白く野もせをかざりぬ、まひろごころは、このうるはしきが消ゆるに、友の上思ひくらべて、しづこゝろなく、やせし柳の下かげに、郵便の來るを待ちわびしこさ三日四日、五日へてさゞきしを見るに、あやし、たが筆ぞさ、推しきりて、よみもて行けば、我が友はうせませしとのしらせなりけり、あへなく、あさましく、何事も思ひわかれず、あけぬれご、心の闇にくれまごひ亂れおつる涙に、目も見えれば、人にまみえんも、はづかしく、いたつけるさまして、ふすまひきかつきて、ふし沈みぬ、

せめて、ちかきところなりせば、なきからたに、見送らん者を、山八重廿重へだゝれば、つばさなき身の、えゆきもやらず、つれなくかなしく、いはん方なし、この寫眞よ、ふくよかにふさりたまひて、やさしく、けだかくいますに、このみすがたは、又見るすべなきか、さりさも、あのうるはしきかきぶりの、玉章を又えざるにか、かなしさもかなし、うしさもうし、いふは愚ながら、つきせぬ者はなみだなりけり、手はこの庭に短册ひさひら、別れし後に、たまひしなりける、

君います西の空をはながめつゝ
　　かはくまもなきわかたもさかな

さ、力ある筆つきにて、書きたまへるも、亦なみたのたれなりけりつきせぬなげきにかくてはさ、筆をなげば、松のこすえかあらぬか、ほさゝきすの一聲二聲なのるが、きこゆ

## 蚊に苦む

豐前　柳雌女史

日中の暑を、束の間に、洗ひし夕立の、跡見事に、晴れて、樹々の梢に、置く露に、浴したらん如き、月の影、鮮にして、實ほしかりし、風靜に、燈火消やらぬ、程の吹き加減得も言はれず。肌さわりよき、浴衣輕らかに、手入さゞきし、庭の向ふ、書齋の椽に、座りたる、時の心地よさ、言はん方なし、いでや、これより、書ゝ怠を、返さばやさ、書物取り出だして、讀み初め、漸、其の身、書中に、入りたる、折柄、初めは一つ二つ、やがて、三つ四つ、ばては名のりかけて、むらがりよする、蚊のさま、心にくしさも、また、すさまし、初めは、手もて拂へ、はらへて居たりしが、遂には、團扇も及ばぬに、いぶせきも厭はで、蚊遣火を、ふすべなどするに、さしもの蟲も、之にやかなはずにや、稍立ちろぎぬさ、思ふに、しはしの程なれや、漸、烟の薄らぎゆけば、こたびは、前よりも一きは、鋭く攻め寄せぬ。手も足も、擇らばず、夜の上襟のひまより、食みに、はみ入るに、今はすべき樣もなく、折角佳境に入りし、女學世界、口惜しくも、さづて、神はなごてか、かゝる、蟲をば此の世の中に、作り出しけん、など、かこたれつゝ、門邊に出づれば、遙に、聞ゆる、少女子、雅子の、歌ふ、ほうたる、こつちへこいの歌。

## 女子の務

小石川　伊藤睦子

なべて、女子なるものは、心ばへなだらかに、いさゝかなる事わざにも注意して、さりまかなはむこそあらまほしけれ。西洋のことわざにも賢婦は家をつくるといへり。女子家にありては、父母に事へむのみらそつとめなれ、一たび嫁ぎては自ら其家を治むるこゝろがけなかるべからず。夫を助け、子女をばはぐみ教ふるは、天より稟けたる女子の任なり。されば主婦たるもの一人の心にて、其家の盛衰を左右し得べからむ。かの主をひたせる大海も、其源は一滴の水にて、雲にそびゆる高山ももとは一ひらの塵より成りけむ。古より今に至るまで、女にして間接に國家に力をいたしたるもの、はたすくなからず。たとへ干戈を執り鍬鋤をとることなし得べからずとも、子女の教育によりては、國の富をも、力をも、ますことを得へからむ。いまかく進みゆく御代にうまれて、まなびの庭にあらむほどの女子たちは、あしたに夕べにいそしみつとめて怠らざらむにけ賢母良妻と稱へられけむ古人に、うしろ指さゝるやうのとあらむやは。

## 夏夕

三重　龜井爲登子

春秋の何れはあれど夕暮のなかしきは夏にこそあれ。湯あみして、ひるの暑さを流しやり、白き衣うちかつき、庭のけしきをなかめんとて、そこはかとなくありく。木の下蔭に至れは、今水をうちけん、青葉にたく露いと淸く、茂りあふ夏木立の緣したゝるかとあやしまる。稍を吹きわ

たる夕風いみじう涼しく夏の外なる心地ぞせらる。築山のもとにしつらへたる、小池のもとにしばしたゝずみて、いと心地よげにうかべる金魚をながめ居たり、此池の上に枝さしかわす楓のみづ〳〵しき青葉の影うつるに、其ひまより、ほのかに匂ふ、夕月の影なつかしう此小さき水の中に、宿りたる、いはん方なくて。

月の上を泳きあそべる金魚の

心のうちやいかに樂しき

など口ずさむ。又我うゑし、朝顔を見ては、あすさかん、蕾の數をかぞへ、明日の朝を樂しむなど、得もいはれず。ましてゆくりなく、心あふ友にさはれ、納涼みにとてともにかろき袂を夕風になびかせ、近き川のほとりを、さまよふ、夕の樂しさをや。いかで〳〵つたなき筆にはいひ盡し難くなん

あはれ樂しきは夏の夕よ。實に此時のあればこそあら金もさけなんばかりの、晝の暑さも凌がるゝなれ



# 消息文



## 甲賞（別撰無賞）

### 菖蒲にそへて

わかやま　いさを女史

空もやう、いつ晴るべうも覺えず、軒の玉水、木草のつゆ、見るものごとにしめやかなる、今日このごろ、母君の御いたつき、如何渡らせられ給ふらむ、いさゝかは怠らせ給ひしか、先づ承らほしうてこそ。ふり續くさみだれのつれ〴〵に、語らふ友のほしくて、けふしも、同窓の友なる某の君を音づれ、罪なき話しもしめやかに、いと興多かりしも、親しき君のおはさゞりしは、いとあかぬ思ひして、かへす〴〵も口惜しき事よと、かこち侍りぬ。いとうるはしき花あやめ、見事に活けありければ、いづこより求められしと、問ひ參らするに、否とよ父上の丹精して作られしものなるが、ことしはわきていとめでたく咲き出でぬ、君も望み給ふならば與へなむとの給ふに、さらばとて數多乞ひうけたるまゝに、御許にも分ち參らす。あはれ、病みたまへる母君と共に、あけくれながめ給ひて、心なぐさみの一はしともなし給はらば、我れのうれしさのみかは、花もさぞや本意と思ふらむ。あなかしこ。

評　寥々たる短篇なれど、情にこまやか、文老熟、一字一句も增減し易からず。物さびしき天氣より、友の母の病に思ひ至り、物さびしきまゝに、他の友をさひ、花を乞ひ得て、之を其病める友の母に贈り、已れの喜びのみならず、花も本懷ならむと言ひ收めたる、心こまかにして、氣の利きたる筆づかひ、首尾呼應して、才氣掬すべし。

## 甲賞（賞品圖書切符金參圓）

### 海水浴中親しき友のもとに

三重縣松坂町本町百〇五　龜井爲登子

其後はたえて御伺も致さず候を皆々樣には暑さの御障りもあらせられず候や、當地は氣淸く風凉しうて朝夕海につかりては潮をあび夏をよそに暮し居申候されど始めのうちは恐ろしく覺えためらひてのみ候ひしが弟

にすゝめられて恐る／＼海に入り候ひしに二度三度となるゝにつけ今はなか／＼に心地よく波とあそび波とたはむるゝを此上なき樂しみと致し居候たゞ明くるより暮るゝまで遊ぶが業に侍ればつれ／＼なぐさめん爲にとて書物なども持參致したるに見るもの毎に珍しきあたりの樣に幼き妹の彼も見給へ此も見給へなど云ふに忙しうて心落居ず未だ一冊も得よみつくさず候あけくれ好き眺を目前に扣へ候なれば歌文の材料は濱の眞砂の數つきぬほどさふらへどもいふかしきは此れぞと思ふものも出來ず口惜しき限りに候就ては今しばらくは當所にて遊ぶつもりに候まゝ御許樣にも日頃御壯健の方にも入らせられず候へば海水浴は必ず御爲によろしからんと存じ候まゝ御避暑かた／＼御出掛け成されては如何砂白く松みどりに限なく打續く此濱邊を共に袖うちつらねて散步致しよせくる浪に向ひゝ唱歌などうたひて遊びなば如何ばかり樂しう候はんと存じ候何とぞ一日も早く思したゝせの程ひとへに祈り居參らせ候　かしこ

乙賞　（賞品圖書切符金貳圓）

## 洋行する友におくる文

山口縣長府村　石原くら

きのふは御事繁き中によくこそおとづれたまひしか何の御もてなしもえ仕らずいと／＼ほいなき極になん近きうちにわかぬ御別のあらんとはかねて心得つるものからいよ／＼明日出立たせたまふへきよし承り候ひてはこゝらの年月とひみとはれみしてへたてなきとちのわかれてはいかにしておくり申さんとたゞ涙のみさきだたれてなんさりとてたゞに止まんはいとゝあかぬ心地のし侍れば利心ふり起し落る涙を硯の海にせき入れて思ひ寄れるふし一つ二つ聞えわけまゐらすそは拙き妾が今更にいひ出んはいとなめけなれとこの國と彼の國とは氣候風土もさまかはり候へはたとひ御健やかにましますともわりなき御いそしみはゆめなし玉ひそ諺にも千里を行かんものは牛の步みのことくせよといふとの候へば常ゝ御からたのもとをやしなひたまひて御心のとかに學の海の奧かをあさりきはめたまひやかて事終へて歸り來まさん後は我が日の本の婦人社會

の明星と仰かれたまひてあまねく後進を照しみちひきたまはんことをしも願き奉るになん今君を遠き波路の外におくり參らするかなしみはやかて其折の喜にひきかへさんをせめてもの心なくさにまち侍らましをたとひ外國風に花はさくとも敷島の大和撫子もとの根さしをな忘れたまひそ荒涙たかく打寄すとも舵とる手をなあやまちたまひそ申さまほしき事濱の眞砂の盡もやらす候へと今は筆とる手も力なくて心にまかせすあはれさるかたにゆるさせたまひてよ契り置し醜き寫眞一葉と腰折二首は御徒然の御笑種にとてなんほかに此のふくさはいつか妾が櫻の花の一枝をうつし侍りしを君のめてたまひしことを思ひ出てゝこたび繡にものし侍りしを拙しとて棄て玉はすは此上なき喜になんいつれ明日はとく參上りて今一度對面たまはるへけれと先は文してかくなむあなかしこ

## 丙賞 （賞品圖書切符金壹圓）

### 愛兒を失ひし姉に遣す文

神田三崎町三ノ一、宮崎方　木村貞子

柳はみどり花はくれなゐに芝生のひばり心も空にあく

がるる折柄なるに御姉樣には御子をさきたゝせ給ひしより心地よき春風の通ふ窓さへ閉ちてむなしく月日をなけきおくらせたまふよしその御情のほどはさる事ながら御身こそ大事に候へもしそれが爲め病の床に就き給ふやうにてはいみじき大事ならむ幸ひ御姉樣の幼ななじみなる我が庭園の櫻の今年も御出でを待ち顔に咲き初めいつにかはらす麗はしうながめやられ候ふを明日にても御越し遊ばされて花の莚に日頃のうき胸の雲をはらし給はむにはいかばかりうれしからむと存じ候まゝかくは御そゝのかし申し上げ候御出での節は御手數ながら琴の爪御持參あらまほしく候なにも御目もじのをりにゆづらむ　かしこ

## 秀逸

### 夏日遊學せる妹の許に

薩摩谷山　大坪なみえ

時節柄とは申しながら此頃のあつさいかにしのぎ給ふらん山里近き住ひさへ今年はいとゞ堪へがたく候へば都の土地にて日々の御出校もさぞかし御大儀ならんと推し上候御手紙によればいつも御すこやかにて學びの

わざを御いそしみの由いと〳〵うれしう存じ上候當地御母上様をはじめまゐらせみな〳〵無事に暮し居候まゝ御安心なさるべく候さて今更あらためて申迄もなき事ながら我等不幸にして幼き折父上かくれさせ給ひしよりは母上の手一つにて育てられ親なき子なれば人に笑るゝ事のなき様にとて幼きより女の道何くれと敎へ導き給ひ殊に御身をはる〴〵と東のみやこへ學に出たゝせよろづ女のわざを學ばせ給ふ御いつくしみ何にたとへ申すべき海山は限りあれど親の恩は限りなしと申すことのはもなか〳〵に云ひたらぬ心地いたし候されど此限なき御恵の萬が一だにむくゆるは我々のいとも重きつとめと存じ朝夕及限りかしづき候へどもかひなき身の悲しさはよろづに至らぬ事のみに侍り御身も隨分勉强致され御地叔母上を母上と思ひ何も彼も御言葉を守り行ひを正し智を磨き女の道をふみたがへずまことの人となりて母上の御心をも御なぐさめ下され度かゝらば草葉のかげより見そなはす父上様にも如何ばかりよろこばせ給はんさりながら余りにこりて御身をあしくせらるゝ様の事ありては却りて不孝に候故よく〳〵御身御大事に御勉めなさるべく候生れつき雄々しき母君も世のあら波に捨てられ給て小舟の行末の

み心配り給ひし故か此頃はやう〳〵御年召されて御身なつかしみ給ふあまりにや雨のあした風の夕都の空のみ眺められてはよしなきくりごとなど仰せられ候故やがて色香も深くなりまさりてこの家庭の園にうるはしう咲き出でん春のにぎやかさも近き侍ればなどゝ色々御なぐさめ申しゝに此頃はかゝる事もなほせられず候妾の及ぶだけは母上様には仕へ侍るべければふるさとの事は決して〳〵御心をいため給ふまじく候又暑中の休みに相成候はゞ叔母上とも御相談申上御都合よろしくば御歸國なされて人々をよろこばせ下され度妹弟等も今よりよろこびをり候今年は時候ふそろひにや處々におしき病など起り候故御注意なさるべく筆末ながら叔母上様その他みな〳〵様へよろしく御つたへ下され度母上よりも左様申出られ候暑のみぎり長々しく綴り立御眠けのたねともなりぬべけれど例のくせと思し許し給ひてよまづは一筆御伺ひまでかしこ



秀逸

## 兩親の御許に

山梨縣甲府市　末木たね

をやみなくふる五月雨に市中にてすらさうざうしきを山家の御すまひいかにいぶせかるらんと推し上奉り候を御兩親樣には御機嫌よく過させ給へる由何よりも嬉しう存上候こなたも此頃はすこやかにていそしみ居候まゝかまへて〳〵御案じ下さるまじく候

さて先日はねもごろなる御手紙賜はりまた此度は早々と夏衣等御送下され忝く拜受仕り候何につけても唯々御めぐみの程有がたく朝な夕なに御寫眞を取り出して拜し上居り候のみ、こん夏やすみには久々にて歸國いたし御膝下につかへみ心安め奉りて厚きみめぐみのかたはしをも報い奉らんとそれのみたのしみ居り候

いつぞや差上候ころかき御口にかなひ候樣御申越遊ばされ候へばいと〳〵うれしうてこたびもと存候へどもあまりふるびたるも如何かと差控へ葡萄ジヤム之れも當地の名産に付差上候まゝ御笑味下されたく願上候

追々暑さも加はり候へば御身大切に折角御養生遊ばさるる樣祈り上候あなかしこ

秀逸

## 都に遊學する友に

野州宇陽　上田なつ子

同じ學びの窓に、雪ほたるを集めし頃より、よろづのこと他に優り給ひしは、卒業の式に榮ある賞を得させ玉ひしにても、明かに候。さればこたびは、又都なる女學校に入らせ玉ふとて、明日なむ立たせ給ふ由、御羨ましうなん、こなたにとりては、ふり分ひ髮の幼きむかしより、昨日今日はらからもたゞならずむつみあひて、たらはぬ妾を何くれとなく導き玉はりし嬉しさ誠に御許樣をのみ、杖とも柱とも頼み、行末なかくお教うけまつらんと、樂しみ居り候ひしを、いかに御物學びの爲とはいへ、御身を立てさせ玉ふよすがとは申せ、今御別れ參らする心の程たとふべくも候はず、交りのふかき程、別るゝ折は悲しとかや、さりながら、かゝる目出度をりに、少しの年月をいかでわび候ふべき、只此上は日頃のさかしき御氣性もて、いそしみ勵み玉ひて、とく實の山をあさらせ玉へ、不束なる妾の申すまでも候はねど、人は交る友に依りて、善きにあしきにうつるとか申せば、友はよく〳〵えらはせたまへ、又暑ささむさのみ

ぎり〳〵には、よく〳〵いとはせ玉ひて、只一すぢに志す方におもむき玉ひ、三とせの春秋つゝみなく、まなひをはりて、長閑けき風に錦の袖をひるがへし、かへりまさんことを、指をり數へて待居り申候。

たとへ、都の友の數しげくとも、深山の草木をうとみ玉はず、谷河のきよき底をくみとりて、折々は都のさまをももらし玉はゞ、こよなき幸になん。　かしこ

## 秀逸

### 清國にいます兄の許に

相模片瀬　秋元花子

梅雨の習ひと日ゝ降りつゝきいとつれ〳〵なる折柄なつかしき御文ありがたく例によりて一同打寄うれしく拜誦いたし候北海の常とは申ながら波濤おだやかならぬ爲日ゝ御困難遊ばさるゝ由さこそと御察し申上候さるにても御身に露ばかりの恙もあらせられず御勤務あそばさるゝ趣かきりなう目出度まことに安堵いたし候御留守中は御兩親樣を初まつり皆ゝ別けて攝生を守り居り候まゝいさゝか障りもなく日を送り居り候へばみ心安う思召し給はり度候すきし年の五月東洋の風雲靜ならざる爲居留人の保護として横須賀港を御かい纜遊はされてより早一年の昔と相成いつもなから流れ行く月日に驚き申候國家の爲とは申なから遠き異國に御務めさこそ御不自由の御事と存じ候御渡清のあとはかひなき我等のみ八重の海山へたてなからみこゝろをかけさせ給ふ事のみに侍りことに年老いたまへる御兩親樣の御事いかはかりしのはせ給ふらむあはれ御二方樣御年わかういらせられなば御務めにのみ心を委ねられ家事をうれへたまふことなどはなからんものを實に世はまゝならぬものと口をしう存せられ候去年の春御務めの餘か母君と共に御伴いたし江の島邊の海岸に波のよせたる貝などをひろひて連日の欝を散ぜし折の事など胸に浮びていと〳〵御なつかしう侍りぬ先頃よりいろ〳〵御心をわづらはしゝ一條も二三日の內上京某女學校へ入學いたす事と相成申候御兩親樣御旅行の義もいよ〳〵來月上旬と相定まり候間憚ながら御安神下され度候なほこの上ともみ心をゆるし給はで我が大君の爲御つくしあそばされ首局よう任滿ちて御歸國父母君はらからとたくをかこみて危險の位地にたゝせられし時の御話しなどうけ給はり度御待ち申居候不順の折柄折角御自愛の程伏して願ひ上候先は右御返し旁こなたの

潔子あら／＼申上候　あなかしこ

## 懸賞文を選みをへて

坂正臣評

假設の事ならば今すこし趣味あれかし實際の件ならば今すこし簡潔にかゝるべきをとおもはるゝ者多し又冒頭に種々の形容を施し餘りにしら／＼しく覺ゆるもすくなからずさるはいとうるさし數十が中にこれぞと見ゆるが無きこそうらみなれこの三四篇やあるがなかにはまづよろしからん作者たち幸にこの暴言をゆるされよ

## 賞外佳章

### ◉舊校の友に送る文　大阪　長野悦子

露おく袖を學の舍に分ち參らせしは昨日の如く思ひ侍りしにはや一年あまりの長きゆめとはなり侍りぬさるにても君には恙なくやおはしますらむいと心もとなくなむ花のあした月の夕べ君や如何にかの友はと心にうかばぬ日はなけれどもいかにせむ病のために久しうおとつれ侍らさりしつみはさる方に許させ給ひてよさてうけたまはり侍れば君には學の道も身の行も諸人に秀でさせ給ひしかばこたびの御進級も優等にやあらむといともいとも美しう侍りかく水莖のあとつたなき言のはもて記してもなほ口惜しきは我身にこそあれ去年の師走の初より他の學課に和歌をもまなびなりしにまたもやかの二月の花と共に發病致し今にては和歌のみにふけりをる身の淋しさ悲しさはほとんと五月雨の頃に宅こもりなしおるか如しおくても日毎にまなびやの事のみ思はれていとくやしく徒然の折などにはいともなさけふかき君のみをおもはれてなむ」あはれなつかしき君よあはれなさけあつき我友よいとまもおはさば例のあばらやなれとも散歩の折なとには立ちよらせられてよさらば君のいとも好み給へる遊戯をなして打ち興ぜむにまたはたさいつ年れがひおきし肖像畫はいかゝなり候ひけむ」學舍にては師の君を始め奉り友垣の君には如何おはしますらむ一同心もとなくこそ」御筆のあまりになりと記させ給はゝいかにうれしからまし尙々申上たき事ははまのまさこのかずつきれとも餘は後の便りに聞え上べし」先は御伺ひ迄とかくなむかしこ

### ◉梅雨の日消息おこせたる友の許へ　東京　秋山敬子

軒の玉水よりほかは音するものなきこの頃ほとゝぎすの初音にもましてうれしき御文賜はりことに御心こめさせ給へる御うたをさへ添へさせ給ひぬる御心さしのほど有難く拜受致候其後御許樣には御變りなくなり／＼むかしの友をしのばせ給ふとやこゝもとも同じう學窓にありし頃をのみこひつゝなつかしきピヤノの音たのしかりしテニスの運動いづれ思ひ出の種ならぬはなくいかで今一度むかしの如くにつどひ遊ばんよしもがなと存じ居り申候さてかれて花咲かばと御約束致し候ひしまがきのしろばらこのほどよりやう／＼ほころびそめ申候がちりにそまらぬ色香はさるものにて露にしほたれたるさまのまたいひしらずゆかしう侍れば御ちぎりのまゝ一枝手をりて御送り申上候朝夕よりなれ給ふ御机のほとり

にさしたて給はゞ花もいか計りめいぼくに覺え候はん別にそへまゐらする一巻は幼き心のまゝをよみし歌とともに候をいかで御暇の折御批評試みさせ賜はらずや切に願はまほしうこそ候へ余は御目にかゝり申さん折を待ちてこゝに筆とめ申候　かしこ

## ◉女學校へ入學を希望せしも父母に許されずしていたく失望せる友の許に

横濱　田中花葉

先つ頃御母上樣御出での節は何のおもてなしもせす失禮のみ申上候ことあなた樣より宜しく御取なし願上候左樣候へは其折御話しをうけたまはり候へ共貴女樣には高等女學校へ入學御希望の由誠に御殊勝なる御心掛けと存し候たとひ女子たりとも昔は兎もあれ今の世に學の道の必要なる事は妾も至極御同感に御座候されど兎角女子は男子と違ひ家事にかゝづらふ事多ければ夫等の爲に御兩親にも御許しなく切角の御希望も空しくなり玉ひし御心の中さこそと推し參らせあはれ其御熱心なる御志もて學の道を辿り玉はんには御成功の程も思ひ知られて候にかへす〳〵もあやなき事と只々殘念にのみ存し上まゐらせ候さは云へ又御兩親樣の御心中をもおしはかりまゐらすればなじよう其愛子が切なる望をば何事にまれ之を止めて本意とし玉ふ事なぞ決して有べき譯ならねど如何お子達多く御座し候ても女子と云へば貴女樣お一人の事にはあり殊にお年に似氣なう家事の事何くれとなく御心をつくし玉ふには妾なぞ年のみまさり候てもなか〳〵に及ばぬ事と日頃より感じ居り候まして御母上樣には如何ばかり御便りにおぼすらん去年あたりよりひたすら貴女樣の小學の業を卒へ玉ふをのみ待ちわびて居たまひし程なれば漸く御卒業遊されし今日又々他の學校に入られ候てはあなた樣のお望は叶ひても御兩親樣の御心に背き玉はゞ却て我儘ともなり只今までの御孝養も空しく相成べくかと存ぜられ候されば御落膽はさる事ながらたとえ學校に入り玉はずとも獨修の便も少からず殊に當神奈川縣は他府縣にくらべては小學校の學科程度も高き由まして卒業の折他の人々にすぐれ玉ひし御成績のありし事なれば其志しだに忘れ玉わずば如何樣にも修學の道は有之べくとおぼえ候かゝる事もとより愚なる妾の申までもなけれど御失望のあまりたれ籠めてのみ居玉ひて若し御身に恙あらせられ候ては猶々御兩親の御心痛を増すのみ妾もかげながら氣つかひ居り候まゝたゞ思ふふしを聞え上るまでにていづれ近き內御目もじ仕りいろ〳〵御物語致すべく候くれ〴〵もお氣をとり直し玉ひ御母上樣を扶けて家事に勉勵し玉はんには强ち書を讀むばかり學問にも候はねば入學せしにまさる學問も出來玉ふらんと存じまゐらせ候

## ◉同窓の友におくる文

伊豫　玉井きよ子

蝴蝶と共に花にあくがれしは時の間にて早くも青葉茂る頃とはなり侍りぬ御住居抔は嘸かし郭公の音づれ繁く夫れにつけては例のいみじき御歌共多く詠み出で給ふらんと羨しう思ひ侍るを雁の便りにほのめかし給へや妾は君とはうらうへにて世の營みに逐はれて文机も塵に埋もるゝ斗り御けしき伺ふ事さへ怠り勝なるを惡うな思し給ひそ御館には御兩親樣を始め奉りいづれも樣御恙もなう入らせられ候や承り度おひ〳〵暑さに向ひ候まゝ一入御用心のほど祈入參らせ候さて諸共に螢の光の唱歌を歌ひて袂を分ちし折にはたとひ如何なる事あり共年に一度は必ず一處に集ひて樂しきまとゐせんものと誓ひし心に詐はあられど浮世の海に漕ぎ出て

見ればよしあしまげき難波江のそれにはならねどさゝへらるゝ事のみ多くていつしか四年を過し侍りぬさるを此度いとよき機會の侍りて君を招き奉らんと思ひ給ふるは餘の儀にも侍らず先つ年より當地教育會の催しにて毎年夏期講習會てふを開かれ候に今年は彼の有名なる國學の大家某先生の此地に御ゆかりあらせられて避暑の爲來られんを幸に乞ひ奉りて國語の御講話を願ひ且女子の爲には體育會の教師某先生の最新なる遊戲法の御傳授あらせられん豫定にて既に講師の方々よりは御承諾の御確答あらせられし由に候國語は君の最好ませらるゝ科にして此の長教師を得又女子に遊戲の必要なる事は昨今頻りに世に唱ふる處に候へば君にも定めて御賛成あらせらるべしと推し參らせ候會期は八月三日より同廿八日迄に候まゝ一月の御暇を乞はせられて右講習に御思し立ち遊ばされましや尤かゝる田舍に候へば御案内申上候ても御供致すべき名所舊蹟にも乏しく又御もてなし致さん料とても侍らね共只海水浴に便なると鮮けき魚に飽かしめ奉らん事とはひそかに妾のほこる處におはしまし候且妾方の家族は御承知の通り婦人のみにて御遠慮遊ばさるべき者は一人もこれなく母も申候には婦人は他へ嫁しては尙更他出の難きものなれば此度は是非御招き申す樣と呉々も勸め候まゝ何卒〳〵御兩親の御許しを得させられ候て御出かけのほど偏に念じ參らせ候若し此の儀叶も候半には講習によりて智識を得給ふのみならず同じ學びの庭に起き臥して喜びを分ち憂を共にして睦みかはせし四年の昔を繰り返して短き一月の間には侍れど或は袖を連れて濱邊にそゞろあるきし或は軒端の月を見つゝ過ぎ越し方を語り行末を謀りなどせばいかに樂しき事ならんと返す〳〵も嬉しき御返りごと待ちかね參らするになむ　　かしこ

## ◉友の卒業を祝ふ文

紅溪女史

旭の影きら〳〵として晴れ空に千代よばふ鶴の一聲聞つけたらんはいかに珍しうめでたからましを其にまして嬉しきは今日の御祭になんげに姉君たちの清き流に足ふみ入れ給ひしも早や十年の昔と相成申候其年頃同じ學びの窓にありて春は芳はしき櫻の花をかざし秋の夕はもろともに袖つられて紅葉そめなす山に分け入り夏の夜は清き河邊に螢をかり冬のあしたは降りつもる雪に古人をしのび惡しきを戒しめ善きに導き給ひしを今更御別れ申すはいと悲しうはおぼえ申候へ共も姉君だちこの長の年月螢に雪にいそしみ給ひし甲斐あらわれ給ひ今日此の嚴なる式につらなり給ふ御事師の君を始め奉りたらちねの君も如何に喜ばしう坐しまさんと推し奉れば鳥の群さへ千代と囀るやう聞ひ候教への庭をさり給ひ己がじしたどり給ふ道は違ふとも師の君の御諭しをいつまでも身にしめて世の鏡となり誠の神信じつる我教への庭の名譽をいや高く世につたへ給はん事願はしく姉君たちの今日のほまれの嬉しさにいささか壽き奉るになん目出度　かしこ

## ◉轉地療養せる友の許に

それがし

御轉地後御宿痾いかゞ渡らせ給ふらん定めて藥湯神泉の靈地御叶ひ遊ばし追々御快氣の御事と遙か御祝ひ申上候都の内は昨日今日の暑さ誠に堪へ難く感じ侍り候へ共御あたりには梢を渡る風の音籬を廻る水の響にも浮世の夏のよどみ候はて御心地すが〳〵しく明かし暮し給らんされと異郷の御床に御療養なし給へる御身はいかばかり御心ほそう思召給らん

さても此頃の月の夜を幸ひ端居して隈なき月を一人さびしくながむるにつけてもいとゞ君のみしのばれてあはれ親しき友の今頃はいかにながめさせ給ふらん同じ學びの文の林をたどりつゝ月をめでしも今宵の如き夜なりしをとくさ〴〵の事ども心に浮び出くもりなき世も涙にくもり見へはかて一人心をいためつゝ淋しき月日を送り居候折柄かれて留學せる兄暑中休暇を幸ひ久々にて歸京致し候處立たすみし都には堪へがたくとて避暑かた〳〵寫眞機をたつさへ妾等も相伴はれて須磨明石にをもむきひれもす海濱をしよふよふし前日のあつさをも忘れはてすか〴〵しくおほえ侍りて夏は何處をさまよふにやとうたがふ程にかんじ候それにつけても數にもれたる人の事思出うたたか袖をうるをし候さて何か御土産のしるしにと名所の寫眞數葉御らんに入れ候まゝ御徒然の御なくさみにもなり候はゞいかばかりうれしかるべくなん次に御宅にてはら二方様初めいづれ樣にも御機嫌うるはしく御過し遊し候まゝ御心置なくゆる〳〵御保養の上一日も早く目出度御歸京の日をまち奉るになんなほをひ〳〵暑さいやまし候折柄一入御身御大切に御攝生肝要と祈上まゐらせ先は御病氣御見舞迄かくなんあなかしこ

## ◉戰死軍人の遺族に送る文

東京　木村花香

命を兎の毛よりも輕くおもひなしてみ軍に出でつかふる事は男子たるものゝ高きほまれとこそ聞き侍れ御あるじ君にはこたびの軍に加はりてもろこしに出で立たせ給ひしを遂にほまれある戰死を遂げ給ひたりとか聞き侍りぬ行きては生きてな歸りそと心雄々しく勵げまし給ひけむも流石にかくと聞き給ひし時はまこと夢とやおぼされ候らん香爐の煙ひやゝかなる所に形見の服を取り出で給ふ其のをりはいかに行へもわかぬ荒野の末に砲を枕としし霜夜の月を詠めましける折りもありしならん吹く風寒き夕まぐれ鳴き渡る雁のこゑを聞きては故郷の空なつかしくや思ひ給へりしならむなどさま〴〵おぼしみだれ給ふこともおはすべく候はんさはいへ君の爲め國のためとて天津に北京にあらはし給へる御いさをのほどはたゞみ國の内のみならで世界列强國にまでひゞき渡りぬさては御身こそ外つ國の荒野の露とはなり給ひにたれ御名は千代萬代までも消えさせ給ふことなからむそをしもせめては此の世の御慰めとはし給へかし數ならぬ妾にはあれどあたら御國の勇士を失ひつるを惜みまゐらすると共にかゝる名譽ある軍人の御家族たるを羨しうおもふあまり一ことかくなむあなかしこ

## ◉姉君の許へ遣す文

麴町　伊東親子

いつしか春さりてあつくなり候まゝ夏衣の用意になにかれといそがしく思ひながらも御無沙汰がちにうちすぎまゐらせ侍りし罪さる方にゆるし給ひてよ。姉上樣にはさぞかし緣付み給ひてより程へぬ事とてよろづ御不自由に侍り日頃の御たしなみの和歌さへ詠み給ふやうなるひまなく侍らんが月日かさならばいつかはまたをり〳〵のすさびにものさるゝひまも出來申さん事もあり侍らんに、妾の如き愚かなるものとはかはり、さかしきたちに候へば妹のとやかく申すも、とですぎたる業に侍れど舅御樣且那樣は申すに及ばす誰彼のわかちなく能く仕へ給へかし。姉君嫁ぎ給ひてより妾も腰折に筆加へ給ふ御方もなく、俄かにさびしくなりしやうなりなど母上と話し合ひ居り侍り候妾未だ知らなく候へ共定めて嫁の

の道てふものはむつかしきものに侍らん。一度御めもじ致したく侍れど何となう閾高く嫁ぎ給ひて程なき事とて妾のやうなるものまゐりてかへりて姉上樣の肩身のせまくならんをおそれ扣へ居り候。此の手紙御許へつきし頃は姉上樣にはいかにし給ふらんか。

乳母のお梅も姉上樣緣付き給ふ時はをりあしく他の用のありしとかのことにて、さる三日遠き道をもいとはずわざ〳〵侘びに來り一夜を家にあかして歸り侍り候。いづれまた乳母とともに御めもじにまゐることもや侍らん。御身わづらひなきやうやしなひ給ひてよ。かしこ。

## ◉故國のある友の許に

郡司文子

さいつ年よりお訣れ申せしは只きのふけふのやう覺え侍りしほどにいつしか秋を送り春を迎へてけふしもこゝに一週年のなつかしくも亦かなしき日には遇ひぬ御許君をはじめ皆々樣いかにおはしますやらんまづ伺ひまゐらするになん當地桑港は時のうつりかはりも宜しき所とて妾もかぞいろもほか館員の君逵もさゝかにの糸のいや細き恙もなきまゝお心安く遊ばされんことをせちにねぎたてまたてまつるいかに會者定離のさだめとは申せかくゝもやま遠く距てつればなほ更慕はしう雨に風に御許君を思はぬ日とてはなく暇とはいはずおうつしに語り侍りつ外に出づる折は埠頭に佇みつゝこひしき御國人のおもを拜み御旗かゝげて去る船のゆくゑをやかては消ゆる水やそらまで見送りつ朝夕つぐる日もす島島根を通ふいそな鳥はた入る日殘る月に思ひは通ふ故國のそらかなこの思ひ誰にか控さむ知らで思ふ雁がね遠きおばしまよりいづ方をや眺むらんその目の涙こそげにえほしけれ

この國のことども見るもの聞くもの新しくてかず〳〵あれどそは次の雁に譲りこゝには只乙女子のみについて申さんにまづかりそめのそゞろありきにさへあるは手藝につとめあるは書籍やスケッチブックなどを携へつゝその熱心のほどは狂ひもやせんと疑ふばかりつかの間もあだに過さじと云ふも愚か行く日のかげを追ひかけなん樣の心にくさよもしこの早苗にしてやがてこん秋のとりえのほどやいかゞならまし恐ろしとも恐しくなむこの國のいや榮え行くもげにさることぞかしついても心許なく思はるゝは故國のそらかな同じ日は輝くも同じ月は照らすなるも見るくにたみの心によりてかはればかはるものよ御國人は今に殘んのゆめのさめやらぬと覺しなどかひなきをんなの思ひには侍れども遠き潮路に距だてらるゝこと國にある身は只これのみ胸に通はれて我にもあらで聞え上ぐるになん

成瀬うしがいくとせにつもる心づくしの顯れにし日本女子大學校もこたび開校のむしろを濟ませしさかあゝ嬉しともうれしわが懷かしき御國もはや女子の爲めに道を開きくれしなるよ旭に匂ふ姫櫻やがて咲き出でん春をしぞ思ふあゝこのうれしさ何ともいへばえにぞかし御許君のかれての御たしなみこの學びの林に分け上ぼらんことは言はずもがなにあらんか入り給ひ分け給ひ錦の花を手折り給ひさやかくのゆゑをもてたゆさふ處にあらじ世は生存競爭こそ開けまいてわたつみ荒らきそが中に於ては學びの船にのらでは叶ふべしとも覺えずまだつら若き吳竹の末長き御身にしあれば後の爲めいやが上にもいよゝ勉められんことを遙々と祈りたてまつる

いづれこん年のお目もじの折はお互ひに人まへさなりて夫もありまな子もありなんなど思ひば何さもいひしらぬ心地の致され侍るよあはれ御許君ようすれ行く雲のゆくゑのこと國にゆめまざかならぬ旅寝の衣つゆの

みぞしげかるわびしき友を慰みて折々はなづかしきかりのたよりを給ひてよ

## ◉愛兒の死を弔はれしに答ふる文

信濃　清水佐久子

此程家なるおさなきが、はしなくも死去致し候に就て、御れもごろなる御文いたゞき手向の花さへたまはせたる御志、何とも難有う存上まゐらせ候。仰の如く末の露もとの雫、おくれ先き立つ浮世のさが、かゝる歎きを見候もの、われのみにもあらざるべけれど、こはあまりなる敢果なさに、今更のやうの心地致すにて候誠にかれは初子、殊に男にてさへ候上、先つ頃よりはや笑みもしおはなしの眞似もする斗りになり侍りつれば、土地不相應なる前途の望みも思ひ浮べて、手の中の玉とかしつき居り候へしに、かゝる始末とは相成り候、それも長くだに惱みてありて、充分看病をもつくしゝ後ならは、思ひきりもあるべきに、たゞ二日の程にてなくなりしに候へば、天狗などの來てかきさらひ行きし如く思はれし、家のうしろ、大路わたりに、稚兒の泣き聲聞ゆるあれば、忘れては子守女に負はし我子の歸りしにあらずやと迎らるゝなど、おろかしう取みだしたるさま、心はやみにあられども、御あはれみ被下度候。されはかう心よわきを、人に見えんは恥しと、大方はかきこもりてのみ居候へしが、返らぬことを今更の歎きは、佛へ對してもよからぬことゝの御いさめ、げにもと思ひかへし、今日ははや此御返事かく取まとめて認め得る迄に心たしかに相成候、誠に何もかもの御心添へ、淺からぬ御情、御禮は筆紙につくされず、いづれ御目もじの節にとて、かしこ

## ◉種子物を惠まれし友に

伊豫　浦尾やすを子

ふりはへての御使誠に忝くうるはしき御玉梓押し戴き拜しまゐらせ候先づ御たらちれ樣御はらから樣ともおしなべて御健勝にわたらせられ候との御便り何より御うれしき御事になむ存じ侍り候下りて手前方一同まめしうすぐし居候まゝ憚樣乍ら御心安う思召下さるべく候扨とよこたびは鶯菜と名づくる夏菜の種子壹袋御惠み下されいつもながら御友情のあつかるには感服仕り疏つて我行爲の上にやましき點を發見仕候春毎に籬の梅を音づれし鶯も今年は餘寒嚴しかりし爲かふつに來啼かず霞　そ立ちなびけ花こそ咲き匂へ庭の面のいと淋しく何となう春のたらはぬ心地して恨みつゝも行く春を送りてしにゆくりなくも夏に入りてかつて慕ひしかの鶯と名づくる菜をなむ給はりしは再び春にあひぬる思ひしてさきの恨みも頓に立ち消え御噂しく思ひ侍り候冬春の頃にこそ菜は多かれ夏は瓜におされて菜とよぶ人すらなきものをこの鶯菜のみは萠え出づるさへおかしきに其味殊に美しき由我祖母君は常に漬物を餘程賞翫致され候により大に悦びて召使に打向ひとく蒔附けよと命じ居られ申候何づれ明日は御近所へ參り候序もこれ有り候まゝ其節御拜もじの染々の御禮申上べく候先は取敢へずも御うけの印迄あら〳〵惶

尙〳〵筆末ながら御惣容樣へ吳々も宜敷御傳へ下されたうねぎ入まゐらせ候

## ◉故鄕の友に寄する文

姫路　かづ子

葉櫻の下葉吹く朝風身に涼しき頃とはなりぬ。君がゆかりの名にふさう

頃となりしよ、と君のみならず吾もうれしうこそ存じ侍れ。いかに健かにおはすらむ。一たびはたづれまさむ、一たびはとこそ、心がけ侍れ。學びの道の事多くて、それだに遲くれし、まこと懈怠の罪はゆるしませな。吾も神の御惠にや、何つゝがもなう學び舍に侍れば念のう發召し給へかし。己、戀しき故郷の三崎の地を離れし砌、遠きをも厭はせられで、村の端れの柳ある所まで見送ひ給ひて、そこに惜しき袂を別ちし折ふしの事ども思ひ起せば、そゞろに悲しうて涙に胸もつまる計りにてこそ。しばしは悲しさに顏も得上げで抱き合ひ、かたみに四つの袖をぞ絞り合ひける事も、目にある如くにて日每夜每君が事のみぞ思ひやられて、或時は暮れ行く西の空の雲を眺め、或時は二十日月をかすめて血になく不如歸の一聲二聲を聞きて、獨短夜を泣き明かせしよ。何よりうれしきは君が玉章にてこそ。脚夫が「郵便」の一聲も神の御言やと思はれ侍りて、情厚き御言葉を拜しまつる時は、親しく君に逢ひまつれる心地して、世の憂も苦みも忘れ侍りて、心にかゝる雲霧もなくてなん。

雨の旦、月の夕、心悲しき折ふし君が玉章抱きて、西の空を仰きあれば、御暇々には吾をあはれと覺召して、一人雁の玉章賜はれかしな。さてよ、君にはこたび神戸の高等女學校へ入學の試驗を受け給ひて、運あしくも不合格にませしとの御報せ、已れ如何ばかり悲しう侍りしよ。日頃學びの道に志篤く學び舍にありても才媛の譽れ高かりし君の、かゝらむとは思ひも侍らず、一時は我目をいぶかりし程になん。さはれ、何處とても入學試驗は極めて精細なられば、これに落第せしとてあながち淺學とは申されまじく、一つに惡しき運にてこそ侍れ。されば君とても決して不才とは申されまじく又淺學にも侍らず

すべて健固なる家を建てむには、强固なる礎をこそ造り侍れ。一歳學べば一歳强固なる礎を造るになん。されば一歳入學の遲ればとて、決して氣を落させ給ひそな。却りて他日によき實を結ばむに。唯これよりは氣を晴れやかにし、野にも遊び山にも分け入りて、ひたすらに身を養はれむ事こそ大切なれ。

申し述べたき事は山々侍れど、いづれ後の便に讓り侍る。追々夏の盛に向ひ侍れば、呉れ〴〵も御身大切に祈り侍る。御氣煩しう侍れど、在鄕の學びの友垣へも、よしなに口傳してよ。かしく。

## ◉東京なる兄におくる文

鹿兒島　島津時子

小金井に花見に行かせ給ひたるかたみなりとて、御玉章の中に封ぜさせられつる山櫻花の一とひらを覽、侍りて、めでつ、喜びつ、しつるとは、なほ、きのふの如き心地のし侍るに、はや、見わたすかぎり、野も山も、滴るばかりなる若綠となりかはりて、おのと木の下かけのしたはるゝ折りから、兄上君には、ちとの御さはりもあらせ給はで、日々、御學びの道にいそしみあそはされ、げにめでたきはみにこそ、こゝもと、かぞいろの君にも、いと平らかに、わたらせられ、つぎに妾にも事なう、くらし侍れば御心をたやまし給ひそ、さて、きこえあぐるも、げにかしこきとに侍れども兄上君には御學びのうちにも、つれに妾が爲に御意をかけさせ給ふよしにて、いくたびとなく、いともれころなる、御言の葉など拜しまつり、いぬる一月よりは、月ことに女學世界を惠ませられ、更に又、四月よりは婦女新聞を送り給ひ、ありかたしとも、かしこしとも、御禮のやうは、拙き筆みじかき言の葉には、なか〳〵のべつくされず、

たゞ朝な夕な、御教の、かず〳〵を座右の戒となし、みめぐみの雑誌新聞紙をこよなき友と存じまゐらせては、ひもときまつるごとに、御心、筑紫の海よりもいや深う、わたらせらるゝを感じつゝ涙に袖をしぼるをばかりなり、それにつけても何となく、をもぶせなき心地のし侍るは、よそことならで、世の進みゆくさまにつれて、われ〳〵をみなの社會も日にその面目を新にしつゝあるにも、かゝはらず、妾ばかりは、なほ稚なき心の、そのまゝなるをにして、おもへば、げに恥かしきことのみ増鏡、たかく、ふかき兄上君のみめぐみを報いまつるべき日とてはあらざるべけれども、駑馬も千里にいたりしためしあり、兎も龜におひこされたる話なきにあらねば、ふつゝかなりとて妾も、また、かゝるめでたき大御代に生れきたる上からは、今より、ます〳〵心の駒にむちうちて、いつかは目ざす向のかの岸につかまく欲りするなれば、心の程をあはれみて、すゑ永う、教へさせ給へてよ、

さても、亦、こぞの七月、夏の休みに、しばし歸らせ給ひ、あな嬉しやと喜び侍りし間もなく、八月の末には又もや、御旅立ちあらせられつることにしあれば、あとの淋しさは、いふばかりにて、暫しは、みな〳〵途方にくれはてつ、なすべきわざも手につかず、いつも噂のみし侍りりしが、昨日とすぎ、今日とくらしては流れて、はやき飛鳥川、ことしもはや、さみだれそゝぐ五月となりぬれば、夏の休みも、ほど遠からぬことゝて、懐かしさは一入ましてたゞ、夢の心地ぞし侍る、なべて、もろきは女の情なれど御母君には寄る年波のまさせらるゝと共に、ことさら物のあはれを感ぜさせられ、折にふれ、物にふれさせ給ふことに、常に兄上君の御噂のみせさせ給ひ、近ころになり侍りては、ともすれば指を折り數へ、妾に打ちむかはせられて「夏の休みまでは、マー幾日なれば、なつかしき、そなたの兄上にあひまつるも、近きうちぞよ、時子」と仰せられ、又珍らしき物などあれば「ヤヨ時子、これを都なるそなたの兄上にまゐらせんには、さぞや喜ばせ給ふべきに、海山とほくへだゝりては、せんやうもなし、せめこもの心やりには、誰れも手をつけぬ中に、先ッその中はをとて、御手づから皿にもらせられ、こはそなたの兄上に對する母が志ぞよ、いざ、われらは、その殘りをたうべてん」と、のたまはするを、たび〳〵にて、かゝる、慈悲ふかき仰せを拜しまつりては、せきくる涙、とゞめあえず、座にさへ得たへぬとぞ多かる、げに古の歌に人の親の心は晴てあられども、子をおもふ道に迷ひぬるかなと、よまれしも、ことわりなりかしと思ひあはするとのみなり、左れば兄上君よ、年一とたびの御かへりは、さぞや、うるさく、思召させ給ふべきも、御母君の切なる御おもひ、左こそとすゐせさせられて、なにとぞ御かへり給へかし、一と日も、はやく、うるはしき御顔を拜しまつりたく、夜に、ひるに、たゞ其の日をのみ待ちはべるになん、あなかしこ。

## ◉歌かるた會に同道せむとて友のもとへ

東京　岡田光子

きのふけふ、梅雨しぐれがちにて、とかく徒然なるまゝ、いかで心もさゝふ折りしに、或友よりをさをさの徒然を慰さめむとや、明日午后より歌かるた會を催ほさるゝよし申しこし候へば、こよなき幸ひとこそぞんじ、誰彼の君をうち集ひてよとの玉章に候まゝ、かゝる折なくてはと御都合うかゞひ率る儀に御座候、ふり分け髮の其上より、かれて妾との間柄親しき君にはべり候へは、御心置きなう、倶に御參會あらまほしく存じ候、御許樣には御都合のほどいかゞにわたらせ給ふべきや、御返へし文にまみえけらしな、若しも、うべなのいぶせき伏屋にまで、玉歩まげ

させらるゝべらなれば、申すもおこなることに侍れど、天下けぢめの觀さなるまゝ、かまへて醫師と藥甁とをば、忘るゝこそあらなくになむ、あら〳〵かしく、

## ◉妹の許へ

秋田 渡部花子

わがなつかしき妹よ、いざ文まゐらせん

梅一輪一りんづゝのあたゝかさとも申べき今日此頃、ふる郷のながめ又いかに長閑けかるらん、彼の池の片の枝垂れ梅には、もはや一つ二つの愛らしき蕾や綻びつらん、思へば去年のの此頃なりき、春日長閑けく吹く風に、鬢のほつれをなぶらせつゝ家の後なる彼の池のほとりに參りしは隣の房子樣と、御身と妾の三人にて侍りき、折りしも池にかゞめる南向なる梅が枝に、玉の如くやさしくもあはれなる花の二つ三つほゝ笑みけるをいとうれしう思ひて、かはる〴〵「キッス」を與へなどしたりしが、妾は二人に向ひて、あはれ此花をば何に譬ふべきやと尋ぬれば、房子樣は直ちに、彼のあはれにほのめく夕の星になぞらへ玉しに、御身は、おゝそれよ、ふれなば落ちん可愛き白露になんたそ與れける、妾はさり〳〵おかしう覺えらるゝものから、つれなきわざとは知りつゝも、二人がやさしき心にめでゝ、そが二枝手折りて與へましゝに、二人はことの外うれしう喜びて、直ぐにその枝をば己のが小さに髷にさし挿みたるこそ、いとも殊勝のことに思ひ侍りしか、あゝかゝる罪なきたはれ遊びも、一年の夢と消え果てゝ、今は一家の奧樣とあがめらるゝ身となりしこそはかなけれ。

あはれなつかしき妹よ、御身は妾が身の上を、ひたぶるにさちあるものゝやうに仰せ給へど、そはあまり苦々しき御思ひにこそ、妾も昔は御身が今の想像と同じ時しもありけんを、さて波風ひまなき浮世の海に水馴棹なれぬ浮身を浮べて見れば、何んの〳〵鷗の嘴とるひつがひ、ありし心の淺はかなりしをうち耻らひしも幾度なりけん、思ひ見給へ、たとへば身は金殿玉樓に侍りて、あまたの使ひ女等にかしづかれ、晨には床のはたなる琴を抱きて、空行く鳥と美音を爭ひ、夕には銀燭眩ゆく室を燈して、酌むや濃茶のをおもしろくあたら榮華に月日を送るを、世にはこよなき淡の快樂なるらんやうに、偏める心の人らあるめれど、あゝそはあまりに淺はかなる心にてはあらざるべきか、前に述べたることの如きは、樂は即ち一の樂にこそ侍らめど、そをして眞の樂しみとは申され得べきや、あるがらに金殿玉樓の中ならでは、樂を得ること難しといふにもあらざるべし、人影稀れなる山かげの落葉に埋るゝ草の屋とても、一度春の風吹かば、花はそこにも咲かましものを、況して榮華のはかなさは、淡き春の夜の夢にも比へらるゝに、吹くや夜半の嵐のいや強く、落花空しく泥土に埋もれなば、あゝよろづのこと皆こゝに止みなんかし、妾の參りしはかゝるやんごとなき大家にはあられども、常に「足れば宜し」と思ひ居る此の身にとりては、あまりあるやう考へらるれど、之れ又繫がる宿世の緣しとわづかに諦め居ることにこそ、かみの事ども幾重にも御拆察下さらば、少しは御心を安んせ給ふことも得べくになん

御玉章に對して心にうかぶよしなし事、書きつゞりて讀み返へせば、あゝさても筆のみだれつるかな

幸に御免し給はかし、今し淸らかなる月の影、窓に薄墨の梅を描きて、時計の針は早や十時をさしぬ　　かしこ

## ◉都なる友のもとに遣はす文

關東片田舍　瀧　か　つ　子

川ばたの柳はいと婀娜やかに、庭前の藤花も一層美しく咲きそめ、杜若一聲初夏報じ候折から、花の都は如何に候や、御伺ひ申上參らせ候。御許樣と御別れもきのふ今日と存居り候處、早や三月の先とは相成り申候。げに光陰に關守なしとは申候へども、月日の過ぎ去り候は、誠にゆめの樣に覺え申候。扨ては御許樣にはいよ〳〵御志願通り、大學校へ御入學遊ばし、日々御勉强入らせらる候よし、ます〳〵御上達の御事と推し上げ參らせ候。私事は豊田校退學ののちは、朝な夕な、母の炊事の手助などして立働き、晝は父に四書の素讀、國文の講義など、學び候へ共、それとても、家事に忙はしく、なか〳〵思ひに任せ申さず、うちかこち候時も度々に候。日々に目に見るものは、鋤とる翁草苅る童、聞くものとては山路を辿る樵夫が、幾世傳はる野歌のみにて、桃源めきたる田舍の一生を送はてつらんかと、相思ひ候ては殊更ら悲しく存じ候。かゝる開明の御世に生れ候甲斐には、女子といへども、教育てふことを得しらぬは、誠に〳〵うらはづかしき極みには候へ共、老いたる父母の心をいため、遊學など候ても、心くるしく候へば父母につかへ其の心を安め、時々獨學候をこよなき樂みと致し居り候。何卒〳〵妾が心中を御推もじ下され度候。それには引替へ、御許樣には何不足なき御身に候へは、ます〳〵御勉强なされ、御成業の後に天晴れ世に良妻賢母たるの、ほまれを得られ候やう、今よりひたすら念じ居り參らせ候。平常怜悧の御許樣のこと、申上げすものことながら、とかく善には遷りがたく、惡には染まり易きが、人情の慣に候へば、御注意なちれ、世に惡評のたてられざるやう、念じ上げ參らせ候。さはさりながら、身體健康ならざれば、總ての事業も成就せずとか承はり候へば、うつりかわり時節、せつかく御養生の上、御からだ大切になされ候樣、祈り上〻。御別れの時、共にうつし候、寫眞は大切にしまひ置き、時々御許樣の御すがたをも拜し、うき心を慰め申し居り候、其御地おもしろき事も、あり候はゞ、何卒〳〵お知らせ下せれたく、此方よりまた御伺ひ申上ぐべく候。先は御うかゞひかた〴〵、右申上まいらせ候、つれ〴〵御心易きに甘へ候まゝ、失禮のみ申上げ、幾重にも御ゆるし下されたく候、あなかしこ。

## ◉都なる友に送る文

姫路　も　と　子

世は若葉の風涼しき頃とはなりぬ。親しき君の東へ上り給ふ折ふし、別れの筵をはりしも去年の此頃なりけるよとそゞろ慕はしくてこそいかに健やかにおはすらむか。何のさゝはりもあらせられで一すじに學びの道にいそしみてますらむか。一度は一度はおとずれんとこそ存じ侍れ、家のわざ多き身のまこと怠勝なりし罪はゆるしませ。妾、神の惠かつゝがなう侍る程に心安う覺召させ給へかし。上野、淺草、いづれ若葉の朝風清う、いづれ若葉の夕づゝ涼しうなりまさる頃を、常々敷島の道に心掛け敦き君の折ふしは歌ひ出で給ふらむに、君が感興の一ふし二ふし示し給へかし。さてよ。君も知りませせるごと、親しき妹が友垣の若林しげ子の君が、去ぬる十一日と云ふに、はかな、青梅の落つるごと、冥き旅路に出でましゝ其朝より、あはれ、妹が心はむすぼれてとかむよしなくなりにけるよ。

「思ひまはせば一年の夏なりけるよ、葉隱れのぼる夕づゝの影の清さに、更くるを知らで庭の合歡花咲く其下に行末の事ども、こま〴〵語り合ひ、

互に幾千代かけて变絶じと誓ひし事のありしよ。月かげまどかなる夕、葡萄棚のその下をそゞろ歩りきして歌詠し合し事もありしよ。長き夜すから火桶かこみて、歯を許し合し冬の夜もありしよ。長閑げき蝴蝶の夢をあこがれて、壺の野邊に遊びまはりし春の朝もありしよ。されど樂かりしは昔の夢となりぬ。誓りし友は世を去りぬ。あはれ來む年月の四方の眺めも誰と共にか語りなむ。あはれ朝の花漠、夕の月影も何か樂しき事あらむ」とは片時も絶えぬ妹が述懐にこそ。

今宵も子規の三壁四壁血に鳴きけるを聞き侍りて「あはれの友よ。君がひたすら偶かまくほりせし時鳥は今宵もなのりぬ。されど、君は世にいまさず。あはれ、此不如歸誰と共にか聞き侍らむ、」とて友が寫し牆取出し文机に飾りて、あはれの友を慰めむと、小琴取り出して友が好みし千島の曲をぞ弾でける。

かくも切なる妹が心根のあはれいぢらしくて、こを親しく目にし耳にする身は身も世もあられぬ思にてこそ侍れ、かゝらむよりはせめて都のにぎはいを目にせしめて、心の憂をやらせむと存じ侍りしに、幸ひ伯母なる人のこたび都へのぼるを頼みて伴させ侍らむと存じ侍るまゝ、來む二十日に上らせ侍らむ程に、都なれざる身にし侍らば、よしなに妹を守り給へかし。無理なる願に侍れど、せちに此事頼みまいらすになむ。かしく。

## ◎古郷の母に贈る文

京都　東谷秋枝

一筆しめし上げまゐらせ候母上樣にはますく御すこやかに渡て御暮しあそばされ賀したてまつり候つぎに私も無事に勉勵いたし居り候まゝ憚りながら御心やすく思召し下されたく候。

この月の二十八日は父上樣の亡くなられしより早や四年目に相成り申候せめては一個月に一度位は御墓所へまゐり御恩がへしに花の一枝なりと手向けたくぞんじ候へども遠くへだたりたる身のかなしさそれさへ出來申さず候その代りとして朝夕はかならず東の方に向ひ御戒名を唱へて拜み居り候こん度の日曜日には妹や弟に中よくして父上樣の墓を私の代りに綺麗に掃除する樣御傳へ下されたく候。

弟哲太郎は四つのころより鄰子の學校へ通ふのを見て坊も七つになつたらば入學し先生に字を習ふなど申して待ち居りしことなれば喜んで通學いたすことゝ察したてまつり候されど學校迄は一里あまりこれあり候に付雨風のときは途中にて鼻緒が切れたりしてこまりはせぬかとそればかり心配いたし居り候まゝ西洋靴一足買ひ求め道のあしきとき下駄の代りにする樣なし下されたく願ひ上げまゐらせ候。

このごろは麥も八九分通り色づき候間遠からぬ内に刈り取りなさることゝぞんじ候仕事は少々後れ候てもよろしく候まゝ半分以上は雇人をたのみ母上樣は三日に一日程出る樣にして下さらば私も安心仕るべく候かしこ

## ◎都の姉上に寄する文

京都　四方つた子

一筆しめし上げまゐらせ候。姉上樣にはますく御壯健にて御勉强のよし何よりもうれしく存じ奉り候。當方もみなく無事ことに父上樣には兼ての持病も起り申あず日々家業に精出し下され候。母上樣も至つて御すこやかに入らせられ候まゝ御安心成さるべく候。

弟平治郎も去る五日に首尾よく尋常科へ入學いたし申候。これまでより

學校學校といふて待ち居りしことヽて朝はうすぐら時より眼をさましいつもむづかしく申せしものが母上よりも先きへ起きて自分に洗面いたす樣に相成り候。今朝は雨降りて平助が送くろと申せしにもかヽはらず五六日前に習ひし軍歌亞細亞に又なきこの島國に生れしものは幼きときより海にはなれてをさも愉快さうに歌ひつヽ出で行き申候。歸ろと學校にて習ひしことを一一話し曳れ時々得意氣にして大江山や桃太郎の功名ばなしあとさきまぜて家內を笑はせ候。

追々暑氣に相近づき候に付よく〳〵身體を大切にして猶一層御奮勵相成りたく祈り上げ參らせ候。かしこ

## ●避暑に友をまねく

本郷　はな枝

北風さむく浪の音あらき冬は思ひすてられし濱邊ものどけき春の汐干狩よりやう〳〵けしきたちて昨日今日の暑さにはやあまの子らのしほあみしつヽ打騷ぐ聲もきこえ候を御地皆々樣御かはりもあらせられす候哉、さても年々のならひながらことしはわきて暑さはげしきやう存ぜられ候をそも御あたりにはいかにくらさせ給ふらむこの地には御しろしめしの如く何もめつヽちしくたのしきことも候はねども、此四五日魚の漁ことの外有之殊に庭つヽきなる濱邊にて引く地引のあみ目みえてゐまで踊あトのかヽり候は見なれし目にも心地よく候へば御子樣方の御慰みとも相なるべくかつは御風邪後の御養生には濱邊は殊によろしき由に候まヽこの庭のいぶせさをだにいさはせられす候はヽ皆々樣御同伴まばらく此地に暑をさけ給ふまはいかヽに候哉、山海の珍味にあきたまふ御身はさりたての魚の手料理もかへりて御口にかなふこともやと一同御うはさ申くらしつヽまち上居り候

猶御かまひ申上ず候まヽ御心をきなく御兩親樣御始め御妹子樣も御つれ遊ばされたし田舍の淋しさをかこち居り候折から父も母もいかばかりかよろこび候はむと存じ候末ながら皆々樣へよしなに御とりなしねがひあげ候　かしこ

## ●紅葉に友を誘ふ文

島根　大達きし子

秋もいつしかくれつ方に相成龍田姬の錦日にそへて色深くなり侍らんといさゆかしう思ひやらるヽ折から姉の許より物わびしき山里には侍れど秋の錦に稍々けしきづき侍れば心あひたる君たちを誘ひまひらせとく山ふみせずやなど申おこせ侍れば去歲の樂さもしのばれて水にうつろ風情など靜かにもてはやし候はば如何ばかりか感ある事ならむと心のみはやり遂に母君にねぎ奉りて御許を得ぬいかで君にもろともに柴の戶おどろかし給ひてん姉もさこそは喜び侍らまし殊に日々遊びの園に物せさせ給ふ君には日頃のうさをはらし給はんよすがともなりぬべきを若し御同意下され候はば明日何時頃失禮ながら御順に侍れば私宅まで御出下さらばや先づは御誘までうれしき御かへりごと待ち奉るになむ　かしこ

## ●地久節に友を招かんとて

橫濱　戶倉能婦子

しろしめすごとけふはしも惡ぞ厚ききさいの宮のさしいで給ひたるいとも御目出度日に候を空しく過すもい

と本意なく存候折から庭の松が枝にかゝりて匂ふ藤波の花池の汀のにつゝしの今た盛りと咲き揃ひさながらけふの嘉節をことほぎ奉る樣おぼゆるを誰れとてめずるものもなくいとあはれに存じ候まゝ日頃親しきどち打集ひ音樂の合奏、相催度幸ひ御承知の叔母事兼て此道たどりて西の國より歸り候をも招きよせ御相手致すべく候まゝ午後一時より御車まげさせ給ふべき御返事下され候はゞげにほとゝぎすの初音にも增していと嬉しくさこそ花も一きは匂ふべしと御待ち申上參らせ候あなかしこや

## ◉轉居を報知する文

本鄕　篠田圓子

ゆかりの色深く咲き匂ひぬる池の藤浪も稍々うつろひそめし今日、頃日御館にては皆々樣いよゝさえ〴〵しう渡らせられ候御事はぎあげ奉り候

偖手前宅、兼て御案内の通り、彼所は角並、藝者屋にて街の子供等は自然と、それを善き事のやうに思ひ見倣ひ、つゝ日々、女の子は藝者の眞似をなし男の子は箱持の、ふりなどして、こよなき遊びと喜び又其親達も大方は女の子を持ちなば藝妓に、なさねば惜しきやうに思ひ居るあさましさ、斯かる有樣故心ある人は子供を教育致すには最も不適當の地と長くは止まり不申されど私方は大人揃ひそれに住みなれたる所を、はなるゝは餘りよき物には是なく候まゝ、あたりに關係せず最迄住居致し居り候へ共御承知の通り後月中嫁はな事分娩致し候に付此まゝ、こゝにありては小見追々智慧づくに隨ひ惡しき習慣に染まむ事の心苦しく、あまり氣早きやうに候へ共幸ひ何區何町に適當の家見あたり候故昨日それへ引移り候に付此段取敢ず御報知申上候

こたびの住居は從前に比すれば餘程不便に候へ共近邊は皆邸のみなれば子供を教育致すには至極好都合二つには極閑靜なる故老人の爲にも宜しく且火事の患等もまづ稀なるべく又黃鳥や郭公の初音も、まだき聞かるゝ事ならんとぞんじ候其れに又お宅へも是迄より！幾分か程近く相成候まゝ御都合よろしき節に是非々々ゆる〳〵と御入來下され度待ち上げまいらせ候余は御目もじ樣の折にゆづり先は是のみあら〳〵かしこ

## ◉友の怠惰を諫むる文

長門　草賀きくのこ

文して申上參らせ候。此ころは、何の音信も仕らず御不禮のほどは、いくへにも御許下され度候。日にまし御機嫌よく、御暮し被遊候御事と恠し上參らせ候。妾にも障りなふ、くらし居候まゝ。何卒御心やすく思召下されたく候。さて其後御許樣にも、いと御熱心に學事御勉强の御事と存じ居候處。いつぞや、御尊父樣、わらは方へ御出に相成候節。涙を揮ての御話にて承り候へば。御許樣は如何なる思召か。本年學期後より、ふつと學業御廢し被成。御兩親の御諫言も、更に御聞入れなく、卑猥の遊藝にのみ。心を沈め萬事氣儘に御振舞なされ、女子の德たる溫順謙讓の風を失はれ候由、誠に驚入候。申すもおろかに候得共。元來、女は一生の苦樂他人に寄ると迄も申す位にて。行末は大抵他家に嫁きて、內を齊へ、夫をして內顧の憂なからしめ。且つ家庭教育てふ一大天職を有するものに候得ば。今日世上一通りの學問は申すに及ばず。裁縫、料理、其他家事上一般の事を辨ずることそ。何よりの肝要かと存じ候。殊に溫順謙讓の氣質は。如何なる事ありても備へれば相成らぬものにて。益軒先生も。婦德、婦言、婦容、婦巧、の四行を女子たるものゝ盡すべき本分なりと

申され候事も有之候。さるに御兩親樣は。兼てより、御身をして學びの園に分け入らしめ。行末はあっぱれ、才德兼備の貞婦たらしめんと思召れ。御一身の御辛苦をも御忘れ被成候て。一途に御身の御出精のみを祈り居られ候ものを。御身が今迄進まれて學びの道をぷつと御斷しなされ。日夜遊惰に御耽り被遊候ては。御身の爲めは申すに及ばす。御尊父樣方の御なげき。さゝぞと推し參らせ。そゞろに暗涙に咽び申候。素より痢澄の御許樣の事に有之候へば。假令一時は御迷ひ被遊候とても。又々御改心相成らんかなれど。一時とても御兩親の御氣に。御悖りなされ候ては。よろしからざる事かと存じ候。殊に現今は我國外形の智識日にまし進歩致候得共。道德てふものは、日に衰へ行き居候へば。將來の國民養成の母たるわれ〳〵は、一層奮發して、國民養成の素要を養ひ置かざる事は。妾が今更申すまでもなく。御許樣兼ての御たよりに諭されたる。御言の葉に候はずや。されば目下御身が他に向はせられたる。御心をかへされ。此道の爲めに盡され候はゞ。獨り御身が御幸福のみならす。御兩親の御喜ひ。如何はかりかと愚考致候。さなくば。假令將來如何なるよき仕合を得られ候ても。不孝の名は辭し得られまじく。友誼上默しがたく。顏を冒して御諫申上候。斯の如き事は。萬々御了知とは存じ居候得共。御尊父樣方、今迄の御苦心も。將來の御計畫も。御許樣の御心一つより。水泡に歸するのみならす。行末いと望みある、御許樣の御才德を。失はせらるゝを憂ふるのあまり。御怒りに觸るゝをも顧みるに暇なく。一書を文して。御反省を仰き。御改心の上益々御勉學のほど。偏に念し上參らせ候。かしこ

## ◎暑中臺灣の友に

香川　黑川しつ

時節柄とは申なから金も流るゝあつけさ増て御地は如何渡らせれ候か朝夕御あんじ申居候次に內方皆々まめ〳〵しく過し居候まゝ御安心被下度候心には片時も忘るとにはあられとなにとなく世事に取紛れいつもなから本意ならぬ御無沙汰一偏に御免し被下度候扨せの君にはこ度よき位に御進みのよし新聞紙上にて承り陰なから內方一同御よろこひ申居候これも御許樣の少なからぬ御內助による事よと存爲參候和子樣は如何に愛らしく相ひ立ゐ給ふらん當地の御父君母上樣もいと〳〵御すこやかにて御兄上樣の和子もいと愛うしく過にし春より幼稚園に餘念なく遊び居らせられ候私事は不相變おぼつかなく教しへの道に心をよせ居候ものから昔同じ窓に學ひし例の親しき友も東京にゆきて物學ひにいそしむあれは遠き國に離れ行もありて今は幸なき此身たゞ一人憂を語らん友もなくたゞ〳〵此のたよりならよなき樂しみと致し居候身をあはれとおぼさは女の身のよろず見識せまくて光りあまねき大御代の惠みを受けて日に月に進みゆく御地の事なとは露程も知るによしなければ御ひまのをり〳〵御もらし給らは如何に嬉しき事やらん御前樣とかなしき御別れいたしてより早二年の月日を過しいと御なつかしく存候まゝ來ん年の花咲さ頃には此ふるさとにしばしかへり給ひてんや海山遠くはならやり給ふたらちねの御心もいかならんゆびをりてぞへまち侍るになん此皆我仇討の錦繪及び日本名所古跡の寫眞狀いとゞ粗末なから和子樣の御なくさみにもと今日小包にて御送り申候まゝ初はうすくとも心はかりの程納め給らは嬉しきかぎりにこそ何か申すも物分柄返す〳〵も御いとひ遊ばさるべく候のこりは後のたよりに申上くべく候先は甚暑の折柄御消息伺ひたくてあら〳〵かしこ

# 普通文

## 甲賞　（賞品圖書切手金三圓）

### 遊女文學者をおもふ

東京府飛鳥山麓元日暮らしの里天舟學園　岡田光子

遊女とし言へば、世の人の多くは、非情の動物なり、誠心なき妖魔なり、など、とり〳〵のそが惡名もて、罵るを休めよ、遊女なればとて、わけてさにはあらし、かの君こそ、却つて世の人の無情にして、誠心なきをば、口惜しうなげきつゝあるならむ、最とあはれなり、

我が女流文學界にとりて、いとも尠なからざりし貢ぎをぞ、呈しけらしぬる、遊女文學者の、そが業のいやしのそしりこそあれ、其志操のけだかく、其行狀のうるはしく、物讀み、手習ひ、活け花、茶の道、かず〳〵にわたらせらるゝは更なり、はた、そがお上品なりしさぶりはあはれ御所風の奥ゆかしさ女房たちとこそ思ひべらなりしを、今の古流文學者は、さらに言はずもがな、德川の流れ遠きその上に遡りて、全盛世に比ひなき吉原の月高き里、三浦屋の太夫高尾となむよび給へる遊女は、うら年わかき身にしあらむも、女德の全能全備を保持しまつりて、つゆ汚れぬ行ひぶりの、最も優しき貞女なるよ、今は何處の人ならむ、知るによすがもなし、あはれ貞操の氣高く、容姿の麗はしき、希有の美人なるに、將た、又威嚴をさへそなはりて、愛情のをもてに溢れにじを、殊に思想の高潔閑雅にして、文學的趣味いとゆたかに、遊女文學者中錚々れる大立物なりしよ、高尾、かつて鍾愛せられし東北の大藩主なる殿方に、よせられたる玉章こそ、善く此君のすぐれにしを表はすものかな、「今朝の御わかれなみの上の御歸路御やかたの御しゆびいかゞと御案し申し候わすれねはこそ思ひ出さす」との言ひざま、かきざま、實に一種異彩の光りを放ち給へて、奥床しう、あはれ天才のそこふかきいとなみとはいひなから、高尾の性行情操のいと秀美なりしことこそおもひやらるゝを、そが前後して現はれ出てにし瀨川は、松葉屋の遊女とそきゝ侍らむも、又これ尋常の婦女子にはあらざりし、此君も高尾にいづれ劣らぬ容顏優姿なりし美はしさ、先天的のものなるにや、文

學の道に巧妙をきはめさせ給へ、殊に易道には靈活幽玄なりしことこそ其意想外なるを、誰れか瀬川の歌にまれ文にまれ讀み侍りにし者は、いかに驚愕せしならむ、あはれ此才女にして、明治の今日女流文學界に生れいて給へしならむには、紫陵清女も三舍をさけての手腕を貫きまつるの奇觀を呈せしやも計らざりしなり、奥州が筆はひまなき信夫すりとぞ、詠ぜられにし一世の名妓奥州も、世の人の記ひに存しおるならむ、あはれ櫻花の艶美崇高なる春の如かりし渠れが文才も、いとめてたくおはすめり、殊に戀死なは我が塚で鳴げ子規とまて、絶叫せしのお手際は、實に凄婉高潔の情誦し去り誦し來りて限りなきの幽趣を深からしむ、あはれ奥州のいさきよく、將た、清きいまはの情死を演せしめたるいちらしう、いかにまゝならぬ浮世とはいひなから、などか協はぬ、あちきなき戀のために、あたら人生五十年なる短かき生命を、刄のさびと消えせしめたる、あなあはれ、あゝ戀よ、汝は何にゆへに自由なる天地を此世のより多き人にな與へ給はね、最ともあやしきは汝なり、如何なればはすけなに汝は、妙齢なる佳人秀美なる才子のいみしき生命をそあたら奪ふて、死てふ世界へは投しぬるを、嗚呼汝は陰府の悪鬼なり、汝は無情なり、汝は殺傷者なり、汝は慘酷なり、いかに汝は、靈光悠久の天地に活動しつゝある希望兒をして、死てふ世界へな投し去り、清操崇遠の宇宙に天使たらむ光明女をも、倶に死の國土へな奪ひ去らしめらるゝそ、嗚呼汝はあらゆる酷刑もて處罰せらるゝも、そが罪悪の、などか、あかなくに、あはれ天つみ神はこの罪悪かろからぬ戀てふ仇者を捕へ給へて處刑にな行ひ侍らぬこそ、あはれ心得ぬ、遊女奥州よ、などか幽界よりはそもじか敵しこの曲者をそ捉へ給はぬ、あなうたて、

あはれ遊女界の文豪もて目すべきものを求めなは、蓋し雲井と大橋とこそ覺えぬるを、此君たち共に年のけぢめはさら〱なくに、二十あとさきとぞ聞えしとは、實にとうとしとやたうとし、さはれ雲井の文は稍ゝ紫式部の體裁を手腕と思想とを具え得たり、殊は「たもとの枝をり」「さとのらく書」なとの筆つかひ優に、思想遠潔なりしは雲井の稍ゝ得意の筆ならむか、大橋の文は少しく活氣をおび給へて、而かもすなほに、そか概文は紫媛に摸せしところありしも、反つて清少納言の體裁と手腕を思想をそ具え給へり、唯憾むらくは、此君のものせし文の、あまりに世の人の知らさるものあるを、そは妾他日にいさゝか記しぬらむ、

歌川は凡情俗想を超脱し給へし理想界の俳神ともいはむか、此人の文はあまりに鄙醜なれは看るに足らし、さはあれど、其俳句の秘妙巧玄なる往々人をして天機の美妙に入らしめ、詩趣的神境の靈幽を感せしむ、ウォルズウォスの凄婉なる詩念、芭蕉翁か達識なりし俳詩を、相俟つて詩神界の三幅對とやいはまほしきものなり、あはれ歌川の如きは遊女界の大詩人をもてたゝえ給ふも、いさゝかあしきな思ひ給へそ、さはれ妾はそか詠句の一二を示して渠れか概念のいかゝを窺はしめむ、「ゆく水の一夜とまりや薄氷」「爪紅のしつくに咲くや秋海棠」「おく庭のしれぬ寒さや海の音」「たゝいても心の知れぬ西瓜かな」



こしかたより、烈女となむ多くの人にたゝえられし婦女子こそ、最と少なく、ましてや、遊女界のおこなると譏しらるゝ身にしあらむには、さるに、そか烈女の、乳母に下女に衣食に住居によろづ派手やかなりし、何御用に不自由のさら〳〵なき富貴上流の家庭に生ひ育ち給ふ令嬢の君には、などか少なくして、かへりて貧苦に生をうけし賤のものしらぬ、よろづに不自由かちなる素野の家庭に、朝たより夕へまで、おい使はるゝ可憐の婦女子に多しとは、蓋しその間の消息はいかに、知るよすかもなし、あはれ遊女界の烈女とぞ湛えられし君こそあれ、そは山口屋の白糸、谷本屋の瀧本となむ知られぬ、又近くは横濱巖龜樓の龜遊も、その名四方の諸人にまて噂殘りしとぞ思ひぬるを、あゝいかに威武たかき大丈夫すら、いざと危急存亡の秋に接し侍らむには、生命ほしや、おじけ給へて、義を忘れ、節をかゆるの、最と多きなる世のさがならむに、憐れうき川竹の淵瀨さだめぬそか中に、艸めきゐ給ふ賤しの一婦人にして、忠と孝との道を辨まへ、義と愛とのけぢめを分ち、一に道大切と守りて、生死をいさぎよくし給ならむ、雄々しき志の三軍師を奪ふともあはれ匹婦の志操奪ふへからさる烈女のあらむとは、最ともたうとし、なべて烈女となむ湛えられ給へし

婦女子の多くは、文學の道をさへさら〳〵知らずもがな、さるに白糸、瀧本、龜遊の君達のともに文學の道を奥ふかく辿り得させ給へて、殊に敷島の道にはいみしき達人とかや、妾この君達の國家的活動力のさかむなるを思ふ毎に、うたゝ其節義の深きに感せすむはあらし、白糸かつて鳥井となむよへる若人との中最と睦ましくおはして、二世三世かはらぬ約束のあはれ堅かりしかとも、帶には短かし襷には長しの世の譬へそら悲しく、殘路生のまゝならぬ、或る客白糸の容貌を愛て給へて、いぢらしう身受げせむするの約調らべらなりしに、嗚呼この時白糸か眞情なか〳〵に恐ろしく、將た哀れなりしことゝもなり、いかに鳥井の君に節操を全ふせむとすれは客には不情なり、客の君に恩情を温ためむとすれは鳥井には不貞なり、可憐なる白糸か運命もあはれ此に谷まれり、寧ろ死して此節恩をいさぎよくせむにはと、あたら是なむ芳原の名花をして、ついに隅田川の櫻とちり失せはしとは、あはれやんやとほめそやす諸聲につれて、そか名殘の香を後の世までも傳へ給へしそ最と淸し、瀧本は年未だ二八か二九からぬ、花の顏はせ月の眉のやんごとなき容貌ならむ、か弱き女子にも似もやらず、そが資性としいへは最と灑々快爽なる洒潤の氣宇に、一點動かす可らさるの志操をもてりしに、其頃世の中頓に騷擾しくなりて、百年の妹脊かはらぬ契を結ひ給へける、尊王攘夷黨の士竹内となむよへる君の、あはれ幕府の囚はれ人となり給へて、空しく苔むす草葉の露と消えさせぬ事をいと惜しかりて、哀泣慟哭し給へけむ、後に幕吏この可憐なる遊女をとらへ侍りて、あはれむごたらしう、見るだに身の毛のよだつなる栲問の苦みに責められ給へけりにしも、最後のきわに至るまて、ゆゝしき大事をひめ給へて敢て一言だもひらき侍らぬこそ、いと天晴れやんごとなし、あはれ迚も死ぬ賤の命は惜しまねと、心にかゝる國の行末となむ辭世歌を、此世のかたみに、潔よく烈女の臨終ならむとは、いかに賤のうかれ女とこそ侍れ、そか志の天晴れ女丈夫の操たかく、將た愛國心ゆたかに、節義に客ならす、あまつさへ、そか歌の一字一句血精の熱涙もて作られたらむこそ、又なくたれか驚嘆せさるものあらむや、あなあはれ、今の世に瀧本か如き眞骨なる憂國者いく人かある「龜遊また幼なくして父のために、身をあはれの苦境に沈められにしを、嘗て外つ國人の此君を愛てゝ遊ひけるなりしに、龜遊いたく愧らい給へて、神州女子の天眞爛熳なる美德を汚さるゝのほいな

く、かなしく、思ほされ、そか節義を全うし給へて、あはれ潔よき刃の鋒に自首を貫らぬきたる、いかに其貞操の氣高く、はた不抜の精神ゆたかならむとは、實に露をたに厭ふ大和の女郎花ふるアメリカに袖はぬらさしとなむ和魂的美徳を歌はれしこの歌もて、知り給ふべし、嗚呼今の世の多くの人は、節操の何たるを解せず、道徳の尊きをも知らず、世はますく利慾に赴むき、人情はいよく紙よりも薄く、朝たには不正の財貨を貪ほりて、都門街上二頭立の馬車を馳せ、貧民者輩の塗炭に苦しむをも顧み給はて、最も意氣揚々たり、夕へには烈女の正道に貞節を守りつゝある者をは、愚なりと罵り、狂なりと嘲けりて、看向きもせさる、あはれ渠等は根幹の堅固にして枝葉の繁茂するの眞旨を悟らす、妄りに外貌に齷齪して心根の尊きをも知らぬ、恰かも錦繡もて馬糞を包みし世のさまとなりたること、あはれ是非もなきことなり、一日一日に學校は悪徳の養成所と化しさり、一時一時に下宿は學生の魔窟とはなりはて、醜聞到る所に鼎の沸くか如かりしとは、あはれうたてや、嗚呼妾は此に叙へ來りたる遊女文學者の、今はすでに幽明ところを異にし給へしより、世は更に大つごもりの闇濟悲愁なる遊女界とはなりおへて、あはれむかしの面影だに失せ消へにし、世の不甲斐なき塵の浮世ならむとは、妾は今は此世を頼まし、此世を厭はし、たゝさらくと今の事は言はずもかな、そが汚れにしに、あたら清くはた潔よき筆を染ましめじとて、

評　遊女なりとて一概に棄て難し、むかしの遊女には、優れたる人少からず、さるを今の世には、遊女さいへば人らしきものなく、優れたる人物の絶えて見えぬは遺憾なりさて、暗に古を想ひ、今を慨くの情をも述べられたり、彼の「女流文學者をおもふ」の文を摸倣せるが如き痕あれど、文章老熟にして殆んど瑕疵なく、文意また明断なるは、才筆にあらずんば能はぬ也　(J、T、)

乙賞　(賞品圖書切符金二圓)

## 妹の墓

信州松本町東之丁　小岩井愛子

今日は亡き妹の命日なり。曇がちなりし空の夕ぐれよりして、遂に雨さへ降り初めぬ。桃の花も多くは泥にまみれんとす。

晝のうちは物に紛れて、左程にもあらざりしが、集ひし人の去りてよりは、淋しさ心細さ、又云はん方なし。

降り出でし雨の夜に入りて止み、月も朧ろにさし出でたれば、いで妹の墓に詣でばやと思ひ立ちて、ひとり家を出でぬ。

妹の墓は程遠からぬ清泉寺にあり。道すがら、ありし事ども思ひ出されて、おのづから足もはかどらず。漸くにして到り見れば、墓地は寂として人影もなく、只おぼろの月の物悲しげに、壘々たる墳墓を照すのみ。あはれ、吾が妹の奥都城も此處よと思へば、怪しく胸のせまるを覺えぬ。

われは懶き足を運ばせつゝ、壘々たる墓の間を通りぬけ行く程に、悲哀の充ちたる我胸は、悲しき光景にうたれぬ。

われは見るに堪えざりき。

墓標なほ新しき墓の前に、泣き沈める一人の少女あり。

われより外に人ありとも思はぬ此墓地に、泣き俯せる少女を見たるわが心よ、そも如何なりけん。あはれ、姿のみと思ひし此の朧夜に、なほ墓の前に泣く人のあらんとは思はざりしよ。墓の主は父か、母か、または妹か問かまほし。あはれ、世にはなほ不幸に泣く人もありけるものよ。

われの後にありとも彼女は知らず。何事をか口説くにや、涙と共に云ひ出でしが、墓の主の答はなかりき。彼女は遂に聲をあげて泣きぬ。

われは既に見るに忍びざりき。足を早めて妹の墓に辿りつきぬ。

一基の墓！あはれ、我妹はかくも一片の石と變り果てたるよ。俤さへ今は見るべくもあらず、思へばいかで熱き涙に咽ばざるを得べき。

げに悲しむべきは運命にして、哀むべきは死なるよ、人生慘なること多しと雖も死より甚しきはなし、死はそれ何人にありてか慘ならざらん、見んとして見るを得ず、語らんとしても語るを得ず、後に殘るは只一片の位牌と、一基の石牌とのみ、されど年老いて死するは、なほ新陳代謝の習ひ、少しは慰むべきも、年未だ幼くして死する、誰か涙なきを得ん、況してや、血肉を分ちたる姉妹に於てをや。

あはれ、我妹は逝けり、我妹は逝て長しへに歸らず。夢か、あらず、われは屢々その夢ならずやと疑ひ、又その夢ならんことを願ひたりき。されど遂にその夢ならざるを如何にせん。仰いで天に訴ふるも、九天蒼々として答へず、俯して地に哭するも、大地漠々として應ぜず

われは只、天と地とに向つて慟哭せんのみ。

あはれ、妹よ、千代子よ、いかなれば汝は、平素いつくしみ給ひし父上と、此姉とを捨てゝ、又いづちに行かんとはする。あはれ妹よ、冥途に何の樂みありて、かくは死出の旅路を急ぎし。

あはれ妹よ、千代子よ、此姉と倶に十二の星霜を共にせしを忘れざるべし。更に、幼にしては此姉の肩に負はれ、長じては此手に携られて學びの庭に通ひしを忘れざるべし。思へば、夏の初の頃なりしよ、われは汝を負ひて庭をそゞろあるきせし折、汝の眼にとまりしは軒の藤の花。汝は愛らしき手をあげて、そを乞ひぬ。われは殊にうるはしきを折りて、汝の手に持たしめし時、汝の愛らしき罪なき笑顔よ、あはれいづれの日にか忘れん。されど此姉のみ尙世にありて、負はれし汝、携へられし我妹は既にあらず。

汝がめでし藤の花は、捧げて汝が墓前にあり、汝は來つて姉が心を汲むや否や。

あはれ、思へば涙の種なるよ。汝が七才の春を迎ふるや、汝は姉と共に手を携へて學びの庭に通ひ初めぬ。あはれ、七才の少女の如何に無邪氣にして、又愛らしかりしよ。其の翌春の試驗に優等のほまれを得て、あまたの褒美を受けし時、父にも見せ姉にもほこりて、訪ひ來る人ごとに話して打喜びけん其をりの笑顔よ、あはれ、如何なりけん。それよりして、學びの業も年に進み、心ばせ至りて温順に、能く父に仕へ姉に親しみ、友と交りてまめやかなりければ、姉もひそかに望を屬し、いかでかして此の娘をばと、暇ある每に物敎へける甲斐ありしかば、ひたすら其生長をのみ待ちたりしに、あはれ、その樂の却りて悲の種となりけるぞ、返すがへすもうたてけれ。

あはれ、四月六日よ、そも此の日は如何なる惡日なりけん、天が汝の命を乳母の懷より、父の泣き給ふも、妾の悲しみ迷ふも顧みで、無慘にも奪ひ去りたる凶日なるよ。

はかばかしからぬ汝がいたつきの、今日はいたく重げに見ゆるに、われは、みづから醫師の許へ走らんとして汝が室を出でんとせし折、力なき口より漏れ出でたる『姉さん!』なる言葉は、あはれ、汝が姉を呼ぶの最後にして、又姉が汝に呼ばるゝの最終なりしよ。心も空に家に歸れば、醫師のはや來給へると云ふに、心先づ落つかた、何心なく病室に入りしに、あはれ、汝のかくまで迫れるとは思はざりしよ。

醫師は汝の手をとりしまゝ頭をあげず。父上と乳母と

は傍に泣き沈めり。われは餘りの事に涙もとくには出でず、只茫然として自失せり。

汝の好める物とて、われは途にて求めたりし羊羹を汝の口にあてぬ。されど口惜し、時や遅れたり、汝の口は既に知覺を失ひたるなり。あはれ、千折の羊羹も、又遂に汝の爲めに半文の價なし。われは亂るゝ心をおし鎮め、汝の名を二三度呼べば、汝は懶き眼を見開きて、力なく姉を見つめしが、眼の中には奇しき光のかゞやくを認めぬ。此世の名殘に何事をか云ふならん、唇の僅かに動くを見しが、されど聞きとるを得ざりき。あはれ、魂魄とほく去りて躰温既に休す。姉を見し眼は閉ぢて開かず、姉を呼びし口は〆つて動かず。雪の如き頬、玉の如きゑくぼ又寄するの時なく、眞珠の歯、紅色の唇又動くの時なし。死の影は既に全面を覆ひ了んぬ。

あはれ三尺の形骸、いたづらに青陵一坏の土を肥すのみ、標新らしき墳墓の前、線香の煙高く昇らずして消え只涙ある行人の心をひくのみ。

あはれ、父を捨て、姉を置き、魂は去つて何處に歸らんとする、泣けども去りしものは來らず、呼べもれ逝きしものは歸らず。

獨りうなだれて、ありし事ども思ひ浮ぶれば、胸は張り裂けんばかりにて、頬を傳ふ熱き涙は雨よりも繁し。折しも姉の聲してわれを呼ぶ如きに、驚きて頭をあぐれば、月は涙に曇りて見えわかず、散り後れたる墓畔の桃のはら〳〵と、風なきに散るのみ。

あはれ、墓の下に眠れる妹よ、今宵姉のこゝに來りて泣くを知るや否や。汝にして若し靈あらば、速に來つて姉が心を汲まずやは。

胸をつき出づる思の種の、いつ果つべしとも思はれねば、いで歸らんと立ちあぐれば、夜ははやいたく更けぬらん、あたり寂として音なく、只なまぬるき夜の風の、そよ〳〵と頬の後れ毛をなぶるのみ。

評　亡き妹の命日にあたりて、追想の情禁ずる能はず、朧なる月夜を便りに、悄然として墓畔を徘徊すれば、滿目の風物皆是れ悲の種ならざるなし、といふ詩的材料を描くに、美文を以てせんには作者の用意なるへし、さりながら、文詞稍ゝ未熟の蹟あり加之文中の事實も如何と思はるゝ節なきにあらざれど、兎に角人をして讀ましむる價値は見え居るものといふべし

（J、T、）



丙賞（賞品圖書切符金一圓）

# 鄙の春

神田區新銀町二八西浦蝶方
村上しづ子

春こそは、流石に花の都も、鄙にはよも越さじ、されば如何にしてと、都人はさぞな眉打ちしわめて、なじり給はむが、そば都の春もあながちにあしと言ふにはあらねども、余り艶に過ぎて味薄し。鄙の春はこれに引きかへて、櫻の花桃の花さては卯の花椿草花までも、自然からなる美妙を添えて、さながら天津み空に遊ぶ心地し、此身までも神の御子の如き思ひするこそ嬉れしけれ。

わが住み家とし云へるは、津の國の或る片山里なれで、家居には父もなく兄もなく、只母君と妾の二人暮しにて、羊飼ふを其日の生業とはするなり、今朝も例の如く早くより床をはなれて、今朝の仕度調へ母君は未だ夢結ばせ給ふに、驚かせじと此身のみしなゝめ終り、いざとて羊小屋へ行くに、頃日の長閑さに羊もいさみ立ちて、妾を見るよりも嬉れしさうに、馳せ來るも可愛ゆらしく、頭なでやりつゝ引き出して親羊を先きに放てば、十あまりの小羊皆後につき從ひて小金が原さしてたどりぬ。

其時、恰もよし、東天の薄紫色なせる雲の隙より、紅なる雲現はると見るまに、旭の光まばゆきまでに眼を射り、田の面の水は時ならぬ黄金のさゞ波立てゝ、床のひばりを呼び起すに、驚かされて空高く〳〵飛びあがりぬ、振りかへれば羊は早や裏の老いたる松並木を越えて、淸水の川の、夢見橋渡るに、妾も足早やに跡追ふて崩れ堤に出づれば、川添柳綠の糸を垂れて、そよ〳〵と吹く川風に、ゆらめき招くに蛙の狙ひ定めて飛びつくは、蟲のをるにかな、はた戯るゝにかな、

右手は、菜種麥の花、左手は遠く苗代田、中に挾まれる鄙のながちの一と本筋を過ぎて、いつしか村はづれの鎭守の森へさしかゝりけるに、一重に八重の桃櫻は、名殘るなく散りはてゝ、今は、椿山吹藤の花、赤黄紫こきまぜて五色を綾どれる、いづれとよしあしの差別もなし、妾は椿の花一技手折りて、かざしにと、何心なく立ち寄れば、花に宿りし小禽の驚きて、飛ぶ羽風にポトリと音して落ちけるを、小羊の走り來て、舐るもをかし。

折りから森の奥より、聲ほごらかに節面白く唄ふ鄙ぶ

りさへも長閑に、いと床しく聞ゆめり。早や此處よりは、程遠からぬ小金が原なれば、知らぬきに到り着きぬ。日ならべて見る此原なれど、妾が眼には其度毎珍らかに、見ゆるも嬉れしく、此時暖かき太陽は既に昇りて麗かに今迄露重げなりし、蒲公英蓮華草も、漸う〳〵頭をもたげて、笑ひ初めしが、彼の小羊等は心なげに踏みにじりて、驅け廻りぬ。

妾は暫しやすらひて、つれ〳〵なるまゝ彼方此方と逍遙ひつゝ、牧場のはづれへ到りけるに、其處にはさゝやかなる、清き瀧の岩淵ありて、永際に一と本の山躑躅咲き出でたり、淵の清水あふれて、いさゝ小川となり、緑の若草に小松の生ひ繁る間を縫ふて流れり、この流れこそ羊の渇えを濕ほさしめむとて、惠み給へる天ッ水にして、妾も一掬して自然の味をたゝへつ、流れに沿ふて下れば、一際高き芝生に紫菫咲き匂へるありて、醉ふてか美しき一羽の胡蝶の、休みては舞ひ、舞ひては休みするを、われを忘れて捕へんとすれば、胡蝶は春風にまかせて、何處ともなくフワリ〳〵と飛び行きしが再び慕ひて來るに、此度こそはと芝生に身を横へて、胡蝶の宿るを待ち受け居りしが、稍ありて妾が袖引くものあるに、不圖顔あぐれば羊なりけり、審かしと思ひ立ちあがりて、四方を見廻はせば、こは晝のつかれにや、いつしか夢地たどりしと見え、日は早や西の端山に沈み果てゝ、遙か東の森の方より暮れそめけるに、さては羊の妾を起しに來りしが、彼れの手前も面はゆしと、急ぎて羊を牧場の内より追ひ出せば、我れ先きにと歸路を急ぎ行く、妾も跡追て家居に着きにし時は既に遠方此方に燈火のはるかに輝き居りしが、母君は卯花垣の内より顔面差出し給ひて、オ、娘か何にとてかくはをそかりしぞ、安じたりと宣ふに明さまにも言ひ難ければ、遂ひをそくなりましたといらへせしが、床に入りても寐物語に頻りと問はせ給ひければ、かくし立てするも異なるものと、しか〳〵物語れば、さなりしか罪なきものよと、腹打ち抱へて笑ひ給ひけり。

かくも樂しき春は、塵に汚れし、都の野邊にては、夢にもよも見給はじかし。



評　田園の春、及び其生活が描き得て妙、加ふるに輕婉の文を以てし、人をして羨豔の情禁ずる能はざらしむ　（J、T、）

## 秀逸

# さみだれ記

和歌山市北田邊町三十九番地西村方　藤田いさを

梅よ櫻よと騒ぎたて、香に醉ひ、色にあくがれし人々の春を載せて、春の神は、遠き〳〵西の國さして、去りぬ。稍の花は青葉と代り、落花浮べし池の面には、荷葉の翠扇を開くもの三四、夏のいぶきは、早や我が世に通ひそめぬ。

花の噂も聞えずなりてより、さなきだに淋しき此の頃を哀れさそゆる五月雨の音、ひねもすよもすがら、絶ゆる時なきまゝに、つれ〴〵いとゞまさり行き、くさぐさの思ひ胸に湧きて、雨の袂のかはくひまぞなき。何時晴るべうも覺えぬ空模樣、ながむるも憂しと、我が書齋にのみ、たれこめ居るに、ふと目につく一つのつまごと、これぞ我が日頃つきせぬ涙の種の、一つなりける。



見よ、我がいとしくなつかしき、亡き妹の、形見なる此の琴を。つれ〴〵を共に語るべき友なきまゝに、主を待ち詫び顔なる此の琴を。

我れは見るに忍びず、あゝ。

眼を轉ずれば、又もや見ゆるうつしゑ一つ、見よ、ほほゑみたてる我が妹の、罪なきすがたを。

たれたる長き髪は、うるしの如く黒かりき、穿てる袴は、紫なりき、ふくらかなる兩頬は、手に持てるばらの如く、薄紅なりき。

あゝ我れは見るに忍びず、されど、見ざらんとするも、心の中にかすかにうつる妹の俤は、耳そこ深く殘りたる我れの言の葉を今又我れに語るやう。

心直して、我が日頃愛讀の詩集取り出せば、泣けと教ふる涙の種一つ！

見よ、紫の頁あせ、莖もいたく萎れたる、此のすみれを。

春の歌誦しつゝ、手を引き袖をつらねて、綠りなす春の野邊をさまよひしとき、さほ姫が、春の衣をたちぬへる御手より、落したまひし糸屑にやあらんなどゝ、興がり

つゝ、彼れは、ましろき手さしのべて、摘み取りたりしは、此の花よ。

心あらばすみれよ、汝れが野邊にありて、咲きほこりたりし頃の、たのしき夢を語れかし。

詩集いつしか閉ぢられぬ、あゝ如何にせん。

何も見じと、目を閉づれば、間遠にきこゆる軒の玉水の音、點々。

朝よゝ降り續きし雨の、こやみとなりしまゝに、我れは一本の花あやめ手に携へて、露しげき畔道を急ぎ行く、そは、亡き妹の奥都城に詣でんとてなり。

やをら墓前の塵うち拂ふ。

此の手、曾ては、妹のふさ〳〵としたる髪を、撫でし事ありしを。

眞の心に涙こめて、供ふる此の花を、あはれ妹よ、うけよ。

重ねて問ふ、汝れの再び此の世に出でゝ、我れと共に遊ばんは、何時。

寂として答ふるものなし。

あなせきあへぬ涙を手向けて、たゝずめば、又もや降り出す五月雨。

塒に歸るの晩鴉の一聲、續きて響く遠寺の鐘、一つ！

二つ!!　寺僧何を愁ふるか、暫し撞きやんで、黯然。又續く三つ!!!………

一犂の春雨に油然として萠芽したる新葉も、一陣の秋風に雜然として搖落す。非情の草木だに尙且つ然り、紅顏獨り幾年ぞ。美はしき少女も、たけきますらをも、やがては北邙一片の煙と化し去るは、天地消長の氣運に伴はれ行く人々の、免るべからざる事なり。

あゝ、逝ける妹は幸ひなるか、活ける我身は幸ひなるか實に解し難きは人生にこそ。

さはれ、我れは最早憂き世を飽きぬ。

あゝ、亡き我が妹よ、なつかしき妹よ、歸り來な。奥都城深く眠りて、覺めいづる事勿れ、螢火墓畔に亂れ、杜鵑夜半に音づるとも、五月雨しめやかに、そゝぐとも、夏去り秋來り、秋去り冬來り、冬去りて世はまたもやうたてき春にかへるとも。

評　作者は、紓情文に長ぜるの人、此種の文章を以てせば、本誌投書家中錚々たるもの也、而して作者の之に熱心なるや、毎回數篇を投じ來る、而かも各篇皆精練の作ならざるなく、原稿また投書規程を嚴守して美麗比なし、作者の如きは、文章に熱心にして、且つ老錬せる者といふべし　（J、T、）

## 秀逸

# 一とふしの歌

静岡市呉服町壹丁目　矢入その子

軍歌こそなかなかにいさましけれ、途すがら七つ八つの男の兒等が無邪氣のうちに聲はりあげうたひありくさまの、愛らしさおゝしさ、唱歌こそいとも尊けれ、まなび舍の唱歌室に多くの生徒聲うちそろえて、敎の君のヲルガンの調子に合せつ、うたうさまのゆかしさなつかしさ、あはれ歌といふ歌のかず多かるなかに、妾の忘れんとしてえ忘れやらぬ、舟あそびの一節、『風と波とにおくれて、夏ものこらぬ舟のうち、笑がほ凉しきまつしまは、はやわがまへに迎うなり』は、妾のためには一種いみじき感をぞ起さしむるになむ。

回顧するだも涙のたねなるは、先きつ年西の都に博覽會を物みせしおり、須磨の浦曲にともにあそびし、いとこ里子の君の身にこそありけれ、松の緑りの長へに、濱のまさごの數つきぬ、寄せては返えす波の彼方には、淡路島根の影きよく、ゆきかふ舟のま帆かた帆こぎゆく景色をおもしろうながめやりつ、舞子濱の一旅館に、かたみに相抱きてうたひ交せし時のいかに樂しかりしよ君が温きかんばせに喜びのいろあふれんばかりなる口もとより、うたひいでたる舟あそびの一とふし、聲はほからかに、調子はたくみに、自然がかなづる松風の曲もはぢらひたりしかとうたがはれしよ。

あはれ、松の色や、波の姿や、淡路しまねのたゞずまい、いまなほ當月にかはることなけんも、君が身はすでにこの土にあらず、その後いくほどもなく松風すさぶ秋の夜、しかも目雲にかくるの時、君はかりそめの病に遂にあとなくはなりたまひぬ、あゝかなしい哉。

まなことぢつ、心靜かにこしかたを思ひ起せば、當時のおもかげまのあたり見ゆる心地すなり、調子たからかに透きとうるがごとき聲もて、くり返えし〱いくたびとなくうたひたまひし、舟あそびの一とふしは、思へば〱げに君が最後の吟誦なりしよ、ほかにもさはなる歌のうちに、なにとて君はこの曲をのみ好みたまひしそ。

あはれ人生は草の葉に結ぶ露のごときか、妾が最も親しかりき里子の君は、うたかたの如く消え失せたまひしなり、人生れなば死するものとは知れども、なほうらめしきは早世死出の旅、年いまだいたらず、せの君の末

ださだまらざるに、はかなくも一片の位牌と化す、たれかはかなしと感ぜざらんや。あゝあぢきなの世かな。

君がみ魂は六道のちまたいづれの道をやもとめけん、よしやよみぢは闇くとも、君がこの世における温き心には地獄の神もきゝやしつらん、おもふに極樂淨土、蓮のうてなにあそび居たまふことゝ覺ゆ、さはれ須磨の浦曲の清遊を懷ひおこして、再びこの世にかへる心ありやなしや、ねがうらくは今ひとたびこの世にかへりきて、かの樂しげなる口もとより再び一曲の美音をもらしませ、月は缺くとてまた滿つるの時あり、花はちるとてまた咲くの時あれども、妾がこの希望はいかで容るゝことを得べき、死はげにかなしきものゝ極なりけり、生や、死や、おもへばくしきことにこそ、生いづこよりかきたり、死いづこにか去る、はたきたりしものは何ゆえにさらざるべからざるか、ねがうらくは不老不死の藥もてこの去らんとするものをとゞめよ、これもかたしか、あゝ世は情なの泉よ、たとへ泉はかるゝ時あるとも、里子の君は二度と此の世にはかへりきまさじ、こひしきもかなしきもあはれ舟あそびの一とふし。

評　幽婉の想、輕妙の筆、眞に誦するに足る　（記者）

---

秀逸

## 大西鄕感片

ふさ香取郡多古町島　郡司文子

身は回天の偉業、維新の主力者として上下の重望を負ひ、今やます〳〵大鵬翼を沖天に張りて、豐榮のぼる御代を謳はんとするに際し、ゆくりなくも征韓論の妖雲に翼を收めて、あへなく故山の朝露と消えにし、西鄕南洲其の人こそは、げにをしみてもなほ餘りあることならめ。

品性として、渠は幾多の偉人中優れしものなりき。汪洋たる胸間は、春の海のごとくいと長閑やかにして、凄險の忌むべきものなく、燃ゆるが如き熱誠は、穢れたる介在物を燬きつくして、おのが赤心を人の腹中に置き、磊落たる壯語の間笑ふも怒るも、克く他をして己れに命を致さしむ。此高潔はた熱誠こそは渠の六尺の軀幹を支配しぬれ。事を共にすれば、利害の故をもて去就するなく、おのが信ずるところに數くして、何ものも其の志を枉ぐること能はず。蔚勃たる英氣は大業の甘泉に渴するならむも、しかも手段をもて成功の犧牲に具

ふることを忍ばざるその淸き赤き胸間の一物は、轗軻不遇の境より渠を生かし、飜ては半宵夢まどかなる玉のうてなより渠を死地に導きたりぬ。之れあるかな往年西陬の地風浪騷ぎしもうべなりけらし。古來聖賢はた英傑のたぐひは、鄕人に疎まるゝが常とこそ聞け。さるに南洲その人に於ては奈何。ひとたび事を擧ぐるや、兄弟相携へ、父子相率ゐ、鄕地こぞりて渠が爲めに命を致す。孤軍苦鬪、敗れ敗るゝ軍旅に泣くこゝろは奈何。西鄕先生の爲めなり、死なば諸共と。しかして城山葉末の露と消えにし、まな子いとし夫の爲めに泪の雨を灑ぎし、幾何の父老寡婦はいさゝか渠を怨まぬのみか、却て之をもて榮となすに至りては、鄕地に信仰せらるゝの點に於て、わらず、しかなさしめたる渠の品性に於て、古今の聖賢はた英傑に比し、逈かに優れしといふも强ちならずかし。

世は尊攘開鎖の聲に耳も聾するばかり、薩南の一角に、纏れ〳〵て渦巻く妖雲を瞻めてわりし當時の吉之助、時の藩主島津公の意を躰して煮へたぎる血液を躍るしゝに收めつゝ、七寸のわらんずに天下をふみしだく當時、人々面を仰ぎ見えじとぞ云はれたる、藤田東湖を訪づれたるその折よ。肝膽相照す二雄の杯盤の間にもらせし慷慨壯語は云はずと知らん。渠が東湖の坐を起ちし間に、柱を削りて刀を試めせし肚の中よ。知らずいかなるものゝ蟠まるらんかを。見まくほしかりしはかへす〳〵もこの肚の中よ。これをしひむくつけき薩摩兒の蠻行と云はゞいふべし。青春客氣のゐひわざと見なば見るべし。思ふ維新の丕業は、此の肚の經綸によることと多きなるを。

渠は事を好む野心家にもわらねば、又血に慊らずとする虎狼の儕にもわらざりき。雄々しきそが裏面には、春風駘蕩たる同情の愛と泪とを湛えたりし。蓋し渠の籌策は、いはゆる戰はずして勝ち、拔かずして斬るにありとと覺ぼし。その江戶城征討の途次、揚言すらく、江戶燒くべし、將軍縛すべしと、さるに一と度江戶に到るや部下を制していふ、俟てよ、事は穩便こそ宜しけれ、ゆめ〳〵逸りて皇軍の體面を疵つけよと、右手は上げ左手は抑へるの手段、之れ事の圓滿を期するに於て、定しきを得たるものが、甚て魯國親王殿下の來遊しておはせし折り、在朝の貴顯みな御機嫌伺ひとして出でけるそが中に、渠は廟堂の要職をもて、孤り遇ふことをせざりしほどに、親王殿下も其の心事を計りかねてや、是非に遇ひたき旨通ぜしかど、いつかな動かず、之に答へ

ていふ、西郷は殿下に於て瑣の用事も見えねば、遇ひまつる必要もなし、されど戰爭は性來の好むところなれば、若しお望みとあるならば、いつたりともお相手致さんと、あゝ心行く計りの壯語ならずや。大器の發する音はまた從て大なり。戰はずして敵を挫くの政策。げに國家の干城たらん者は、かくこそありたけれ。當時征韓論こそは渠にとりてゆゝしき舞台なりけれ。當時の國力に於ては、或はその成功を期するに難かりしならむ。清の出兵もありしならむ。魯の容喙もほか列強の干渉もありつらむ。さはれ、事は必ずしも、成功の光りのみに導かるゝものにはあらじ。忍辱固守あしこにはあらねど、世は之れのみをもて成立せるものにあらず。おのが威信を保たんが爲めの示威もあらむ。百年の長計の爲めに、樹を植ゑ置くの必要もあらむ。遮莫失敗はいかなる場合にても棄ふ所にはあらねど、當時の我が國家に於て、よし成功に難しとするも、果して國躰を疵つけ、國運の伸長を妨げしか。蓋し英傑は多角的なり。大膽放心の反面には、小心翼々情緒纒綿たる婦人的の性質を畜ふぞ。社稷を以て己れとなす南州其人に於て、いかで無謀の所爲を學ばんや。便々たる肚の中をあばき見なば、言はで思ふ、いかなる策のありしかを。されど如何にせん、渠は冠を擲つの止むをえざるに至りぬ。疑ふらくは、渠の當時の心事なるよ。そが活蕩雄麗なる胸には、後年の風波を夢みつゝありしか、あらず、春の海こそはげにかれの心事なりけめ。野心こそ持たね、機あらず再廟堂に現はれて、幾多の倫生をはぐゝまんとするはその本意なりしならむも、戀ひしき都を後に見て故里に志しゝは、蓋しせでは叶はぬ事情のありしとは云ひ、いかに無念なりけむ。あゝその行くさきこそ後年の墳塋ならむとは、知るや、あらずや。

堂々たる敗者は幣然として故郷に皈りぬ。逸りに逸る薩摩隼人は、之れが爲めに眉昂り眦裂けて、いづこの空をや睨みけん。されど渠はこれをこそ心苦しく思ひつらめ。形影相慰むるのみなる山野の遊獵も、蓋し辛かりしならむ。上ぼる旭に、さし出づる月に、都の空らに通ふ心も滋かりしか。我なくて此の倫生をいかにかもせんの嗟きは、このわびしき明け暮れを、一しほ味氣なくなしつらん。天下の耳目は薩南の一隅に蒐まりて、私學校徒の激昂いまはた熾んなり、鹿島の風雲日に々々非なり、かくこそ知らぬ、雷霆は茲にまひ下りて、挍徒の彈藥强奪となりぬ。あ已んぬるかな。かれは固よ

り、かゝる暴動に關せざりしなるも、南洲たるもの何してか、おのが子弟の行動を知らずとや云はん、なんしてか、おのれ孤り責を免れんや、その胸間に燃ゆるが如き赤塊は、こゝに一轉して、儘子のこゑと共にかれを起たしめたりぬ。いふを止めよ、渠の心は淸し、其の情は赤し。徒らに冷腦もて論ふ事をせざれ、無名の干戈には非りしを思へ。

哀れは城山の朝な夕なよ。有繫に猛き薩摩隼人の健閔も、續かぬ孤軍の悲しさには、糧食彈藥も竭き果てゝ、たのむは只玉散る三尺の秋水のみなるに、これすら折れつ、刄こぼれつ。先に鹿島立ちにし一萬有餘の益荒雄今や殘り少なにうちななれ、右も左も手負に泣のみ。胸のほむうは逸るともかひなしや、武運の神はかれらの頭上にましまさず、轉戰また轉戰して、ひとだちは滅ぶべかりし日向永井村の圍みを、可愛や故郷の空らの戀ひしまゝに、衝き破りて、絶えて久しき妻子の住ひに還り見れば、あな無慘や、きゞすなくなる燒野の原となり果んぬ。水陸より犇々と攻め立てらるゝ、官兵の鋒さきにえ堪へて、今にこれまでなりと、據むや死出の草枕、露のあぞしげかる故鄕の山、この城山に、いかなる夢をや結びけん。頃しも秋はいと深う、寒さしり初むるけふこのごろ、憂服のまゝなるさへ哀れなるに、千切れ〱て、すさぶ凩に翻り、無常の白露滴りて玆にこれを需す。やるせなき感慨を痊やさんとて、心を照らす月影に、遙か彼處を見渡せば、十重廿重と取り圍む、天下のつはもの幾萬の銃劍寒く閃きて、洩れて聞ゆなる礎歌のこゑも心を扶ぐるばかり。萬里の靑山に骨を瘞むるは、蓋しその笑ぶところなるべきも、此れは叉昔のまゝなる山もあり、川もあるなる生れ故鄕の敗餘の墜墓、親子めをとの死訣れ、千情萬緖みだれもつれては、遉にたけき薩摩見も、あゝ只泣かんかな。

この哀れの中心となりにし南洲の心よ、そもいかなりけん。玆に一切の物累を擲却して、靜かに過ぎ方、身の果てのむす想ひを描く胸の中は、そもいかなりしぞ。身は夙に國事をもておのが双肩にかけ、東奔西馳の辛酸を嘗め、わびしき孤島の月にも語り、嘗ては死すべかりし入水も、運の手は之を捉へて、維新の舞台に跳らしめたりぬ。丕業こゝに一段落を告げて、今や滿腔の經論を施し、いざ大に成すあらんとしてある際、運の手は再び渠を拉して、望みなき鄕里に導き、延いては心にもあらで、雲濁の上に卷き込まれつ。事もしならば、おのが身にかゝる雲も晴れなんに、あゝかひなしや、武運

拙く、賊の汚名をさへ負ひて、死場を撰びし此の城山の明け暮れよ。内にはうら若きあたら少年の幾何、ひたすら死出を急ぐあり。外には江東父老幾何の涙の雨を降すあり。哀れは淸し、血に啼不如歸の胸も裂けなんず、そが悲哀の通ひ路はいかにしげかりけん。稀世の偉丈夫が、身に滿み〳〵たる赤鐵の泉を、今こそ涸れよと瀝ぎに瀝ぐ泪には、戎服の袖も赤く絞られつらむ。死を待つほかの詮すべも泣くのみなる泪も赤き血染めの紅葉一片、すさぶ風に誘はれて、天に向ひて失せにける、世にも哀れなる最後のほど、嗚呼思ひやらんも中々ぞかし。

問はずもがなの昔語りはつきじ、麑島市外の一小兵。いかに市人を泣かしむるよ。いかに行人をして低徊せしむるよ。あはれ、嵐の吹きすさばんず花のあした、霞棚びく月白きゆふべ、永く哀れを止むるかな。英魂ひとたび去りて、世はとことはに又渠を見ず。殘るは左の句のみ。

『建業唯期華盛頓　鬪爭獨冀拿破崙
半宵提劍望寒月　今古興亡兩眼中』

『孤軍奮鬪破圍還　一百里程絶壁間
我劍既摧吾馬斃　秋風埋骨故鄉山』

行きて弔ひ、淨光明寺岡の渠のおくつきを、幽香邊りを罩め烟り縷々の間に於て、爾等に其の昔を語るべし。行きて訪ひ、上野公園の渠のおもかげを、英風傍りを拂ひて、爾等に今を教ゆるところあらん。

あゝ國こと多くして英傑を思ふ。東洋の風雲日に〳〵噪ぐけふこのごろ、又往年の征韓論を唱ふるものやある。

評　此種の文章は、婦女子の作るに適せず、史的評論さして、新しき識見もなく、人をして陳腐と呼ばしむるものなくも、行文の流麗、稍々誦すべきあり（記者）

## 賞外佳作

### 筆のすさび

相模　瀬戸富美枝

世に賴もしきは兄弟にこそあれ、憂も悲しきも諸共に春は春の景、秋は限なき月の夕べ、出でゝは手を取りかはし、花を愛て月を賞し、入りては互に机を並べて、同じ燈に文讀み相語り、起居共にせざるはなく、よしや海山遠く隔つとも、暑さ寒さに付けては問ひもし、とはれもしつ文の便りの絶ゆる間もなしとか、如何に樂しく如何に嬉しき事ならん、實に兄弟は指の如く永く離るへからすと、聞くもなか〳〵に恨みにこそ、如何なれば吾が身はかく幸福薄きぞ、かしの實の只一人姉もなく弟もなければ、兄弟の愛情ものは夢にだに知る事なくてなん、哀れ何一とつ不

足はなけれども、子寶の少きはいと口惜し、せめて今一人にてもと、折節父母の仰せつけらるゝも理りなり、妾とても今一人はらからのありせば、かく迄に心細からましを、若しもこの身にことありなば、父母は如何に歎き給ふらん、風な引きそ暑になあたりそと、十餘り八年愛でいつくしみ給ひし父母の御心を思ひば、思ふほど心細きはいやましてつゝれの袖の乾くまでなき

早や育て愛子よ、母はそなたが一日も早く大きうなりて、隣りの花ちやんの樣に、お辨當さげて本買ふて學校に行くのを待つのみと、唆き唇もて頻に接吻し給ひし幼き折の事など考ふれば、今も尙は母樣と言ひて飛び縋りたき思ひぞせらる、實に子故に迷ふ親の心そが惠に比ふれば、富士の高根もいや低く、琵琶の湖もなか〳〵に淺かりけり、漫々たる太洋の水は干すこと得るとも、親の恩のみは返し難しと、去るを世の中に不孝の輩多きは如何にぞや、返々も口惜き事になん、さはされかく云ふ已は如何に哀れ罪深しや、此身も又不孝子とはなりぬ、

去りぬる頃より、かりそめならぬ病の床にとはつきぬ、物心覺えてより初めての事にしあれば、父母の驚き思ひやられてはなか〳〵に胸くるしく醫師よ藥よと眞心こめし、父母が看護よしなき事な思ひそ、心強く心たしかに一日も早く癒へよと、机邊近くの給ふ事は日に幾回ぞや、足や擦らん湯やほしからずや、何なりとも汝が心に任せよと、哀れこの情ふかく眞心からなるこの言の葉、誠の母ならずして誰か他にあらん

病は怠りぬ、醫師がすゝめのまゝにこの地に來りてより早や七日、湯坂山の麓よりたへず湧く溫泉に、身を浸してより心地いとゞ勝れ、今は常の如くなりぬれば、日頃好み給ひし江の島の一曲にても奏でゝ、母が御心慰め奉つらんと、琴かりよせて奏でし時の心地よそ、にこやかに笑せ給ひし母君の御顏には、ありし憂の雲も殘りなく晴れて、いと爽々しく見えしこそ、此上なく嬉しけり

今一曲何なりとももと、望まで給ふまに〳〵彈き行けば、今迄騷がしかりし下の座敷も、寂として噺く聲だに聞えぬぞいぶかし、夜はます〳〵更けていと靜に、そよとの風さへなければ、窓控ふ籬の竹も音なく、かしましかりし赤子の泣く聲さへ止みぬ、眠れるにや、かすかに聞ゆる谷川の流れは、恰も調べ合せるか如きに心とられて、又一回は終りぬ、その餘韻のなほ消えやらぬ折りしも、耳驚かす時鳥の聲あふ初音よと、瓜さへとらで窓押し開けば、影たに見へで隈なき月影もいと冴けし、

湯上りの心地をしばし橋の上にもと、老いにし母か手をとりて郊外に出れば、月はみ空にまく〳〵明かき照り渡り、野も山も草も木も皆一樣に色とられ、恰も大きなる油繪をひろげしか如く、身はこの中の人にして吹き來る風は肌寒からで、後れ毛拂ふ心地よさに、こゝかしこと徨ひ福住橋と來てみれば、涙々として流る早川の音は長しへに流泉の曲を操つかと、怪しまるゝも聞く人の心柄にや、見上ぐれん南も北もはた西も、山又山白き衣に裾かくされし二子山は、笑ふが如く、語るが如き塔の峯は濃く青く、呼べば答へんその樣の面白さに、吾にもあらず佇めば、月は心ありげに雲間にかくれぬ、哀れ花は散りぬ、まどかなりし蝶の夢また醒め、青葉世を經ぎて郭公時得顏なり、花は散れども月はくもれども又咲き又照る時やあらんを、ひとり人生のみ花月の如くならず、一度老ひ一度亡せなば、又生れ又若かへる時やなからん、思へば儚なき人の逝命、思へざ貴ふとき人の命、ましてや老いにし父母が杖とも柱とも賴み給ふこの身をや

評　情景描き得て妙（記者）

# 風姿と風情

本郷　原　涙子

五月雨霏々として、三日も霽れやらず、閑隠更に閑なるを覺ふ。興に乘じて机上の歌集を繙けば、興味おのづから濃かなり。先づ手に觸れしは眞淵の先輩たりし長風經の集なり。兩方聞郭公の題にて、

　ほとゝぎす八幡山崎なきかはす聲の中ゆく淀の川舟

其の風姿は誠に美にして、如何にも淀川舟にて伏見、八間屋の間を上下する時などに、五月雨のしぼ〳〵降り來て、蓬窓には煙横り、櫓聲靜かに耳に澄みて、何時しか睡氣催す折しもあれ、一聲高く杜鵑の雲間に響けば、山水皆動きて、眞に聲の中を行くの心地せらるべし。

斯くて千蔭の集に移りしに、又杜鵑の歌あり

　墨田川つゝみに立ちて舟まてば水上とほく鳴く杜鵑

其の風姿は前者の讓るところあれども、渡し場に來て舟待ちする時、おのづから待遠うき心地して、傘をば肩に傾け、向ふ河岸の風色など見るともなく見つゝ居れば、忽ち杜鵑の聲して、千壽あたりにやあらん、川霧うすく籠めて空濛たるが中を、二三聲洩らして行くや、舟待つ心も忘れて、何處にやと彼方を眺むる間に、早くも渡舟は岸に着きめる其狀、言はれども、餘情言外にありて、一段讀者の想像を深からしむ。前者は風姿艷麗なれども、後者の風情嫋々たるに及ばず。前者は繰返し讀まば何となく作爲あるが如く、興味おのづから索然たり。後者は些の修飾を須ひずして、只有りの儘の景を、有りの儘に讀みたれば、全く自然の作にて、殊に讀者の身を實際其境に置くの心地せしむ。

是に至りて又一聯を思ひ出せり

　都にはまだ青葉にて見しかども紅葉ちりしく白河の關

　都をば霞とともに立ちしかど秋風ぞ吹く白河の關

前者は賴政の歌にして青葉といひ、紅葉といひ、白河といふも、其姿調まことに美なれども、後の能因法師の歌の自然にして、風情限りなく、秋風吹き初むる頃、白河の關屋に着きて、さても遙けく來つるよと旅愁を湛へ、都の空を顧みるの情、三十一字外に飛揚するを見る。

されば風姿いかに群なりとも、風情高からざれば、人を感ぜしむる深からず。風姿は外を調和し、風情は内を調和す。外部の調和、固よりさることなれど、更に内部の調和の大切なるを思はざる可らず。秀麗、艷美、透徹、流暢、纖巧の外部的風姿の調和に必要なると共に、同時に幽玄、高渾、自然、壯大、迥遠の内部的風情の調和の更に必要なるを認めざる可らず。宛も人の容貌の美よりも、品藻の美を貴しとするが如く、書畫に其氣韻を貴むが如くとや云はん。

思ふて是に至りて興趣益深く夜の更くるを知らず、雨の雫の落つる音の冴ゆるなり。



# 和歌

（天賞）

夏夕　　麹町隼町中眞一方　中　春子

琴の音はしはしとだえて蚊やり火の
烟たちのほる夕かほの宿

（地賞）

夏季雜題　　岐阜縣大垣田町六十九高森方　藤浪むら子

里の子がとゝかぬ崖の草いちご
來てはついはむ山からすかな

（人賞）

薔薇　　石狩國札幌郡苗穂村官舍　稻葉幸子

ほゝゑみてはかなくなりし姉君の
奥都城所薔薇の花さく

# 秀逸

清水　　名古屋市正萬寺町一丁目千代重方　久野あぐり

けがれなき岩間ゆいでゝけかれたる
海にと急く岩清水かな

山時鳥　　名古屋澤井町百廿四番地　大原至玉

み山いでゝなく時鳥たがさとの
誰をか今宵おとろかすらむ

夏季雜題　　牛込若松町六十七番地　安田かず子

風かほる葉柳提緖傘日傘
足なみいそぐ渡塲のみち

若竹　　香川縣三豊郡觀音寺町　黒川志つ

今年生の園の若竹うきふしの
志げき世とも知らすやあるらん

夏の歌の中に　　岩城國安達郡杉田村　遠藤ゆき子

わか竹の露ちるおともすゝしきを
つきさへなひくまとのうちかな

夏夕　　甲斐國東八代郡北八代村　小川初野

大井川虹のそり橋かけ消えて
夕かほ志ろしわたし塲のやと

螢　　長野縣師範學校内　旗本英子

何となくうら悲しさに籠の中の

二つの螢放ちやる哉

蚊遣火　東京　氣味花

夕顔の垣根めぐりておとなへば
となりもしげき蚊遣火の影

夏季雜題　神田駿河臺　佐々木慶子

すゞみ舟くだりつくして人たえて
川きり白く夜はふけにけり

旅宿の梅雨　千葉縣　小川ため

梅雨にふりこめられて旅やかた
隣の人と今日も語りぬ

新樹　芝新堀町　杉浦信子

わか門の榎の梢へ茂りゆけば
そか舎り樹も若葉しにけり

夏遊戲　神戸中山手通　青木京子

朝風の涼しき程にテニスせむ
友もつどひぬテットはやはれ

五月雨　三河五保村　高須志ま子

降つゝく五月の雨に弟は
小屋なる馬に草やりて遊ぶ

夏季雜題　芝琴平町　吉澤清子

艦船三ッ四ッ沖に見へそめて
船歌近し濱の夕凪

夏季亂題　佐賀市柳町　中島秀子

草の上にわたし待つまを休らへば
船歌たかく葦きりのなく

薔薇　攝津三島郡大田村　石田あさ子

雨はれて夕日にゝほふ花いばら
こぼるゝ玉の美しき哉

梅雨　磐城角田町　岡崎榮子

舟よべは賤の男一人岸に立ちて
黒はたふれり梅雨の頃

田家の夏　小石川江戸川町　古谷東世子

少女子がまゆにる窓に枝たれて
うすくれなゐの合歡の花さく

夏の歌の中に　甲州北巨摩郡　早川せき子

夕立に池の蓮の旦ちりて
涼しさ寄る花瓣の舟

夏の夕　赤坂高樹町　青木しげ子

とぶ螢追いつゝゆけば追ひくるは
絶へて程へし友にぞありける

# 佳調

◉初夏　熊本　小松崎春子
春のゆめ若葉さゝめて薄衣の袂すゝしき夏の夕暮

◉時鳥　姫路　中村基子
師の墓に詫びして歸る旅づたひ利鎌の月に杜鵑なく

◉朝新樹　伊勢　今井くめ
朝日影にほふ若葉に風みえてつゆの玉ちるおさの冷しさ

◉夕杜鵑　伊勢　中村みゑ子
もらす音も幽かなりけり薄雲の迷ふ夕に鳴く杜鵑

◉雨後夏月　常陸　山本綺子
夕立のなごりすゞしく月冴へて夜のしのぶにおける白玉

◉首夏風　本郷　原なみ子
花ふりて都に歸るまれ人の袖ふき送る夏の朝風

◉納涼　伊賀　服部かつみ子
そよ〳〵さ小簾も、風の涼しさにふみよむ翁うまいしてけり

◉庭夏草　阿波　垣間花子
我やどの庭の夏艸しげりあいて窓さづるまで立のびにけり

◉夏季雜題　群馬　生方賢子
去年の夏みまかりし友を思ぶかなかはらぬ色の花あやめ見て

◉夏季雜詠　長野　紀波流子
涼しかるもりの根徑につなまなき牛追ふ童夢をみてあり

◉夏嵐山の下にて　群馬　鹽谷花子
嵐山若葉の梢ふく風は花をさそひしなごりなるらん

◉雨後　盛岡　金田一りう
涼みつゝ青葉のかげをさまよへば玉ぬく露に風わたるなり

◉川螢　伊勢　藏しげ子
少女子のたゝくうちはにもれぬらんかけをあかして螢さふなり

◉避暑旅行　下野　五月女春
海原やしほふく風の身にしみて夏なき年の心・そずれ

◉雨後月　千葉　石井滋子
雲の波いつしかなぎて中空に月の小舟は浮び出でけり

◉夏夜　備後　妹尾千代子
うたゝねの枕もかへす月ふけてむすふほさなまみしか夢の夜

◉田家夏月　備後　妹尾千代子
小山田の庵の燈かけきえて殘る夜照す月の涼しき

◉雨後夏月　水戸　菊地健子
夕立はあさなくはれて露ふかき葉末に宿る月ぞ涼しき

◉竹蔭夏月　茨城　關はま子
若竹の葉わけの風のふくたびに苫路の露を見する月哉

◉夏朝　山口　今藤欽子
窓ちかき竹の林の朝風にこぼれて涼し露の白玉

◉夕立　鳥取　尾崎なみ子
夕立のさく過ぎ行きて城の塀の半ばは濡れつ半ば乾きつ

◉梅雨　小石川　三田まき子
梅雨にとひもさはれもせられねは文のたよりのしげきころかな

◉曉郭公　石見　中原道子
尾張の月もいふさの山のはに一聲なのるやほさゝきす

◉夏の懷舊　赤間關　梶間きさ子

在し世をけふ思ひ出て忍ぶ身の袖にしぐるゝ日ぐらしの聲

◉夏季雜題　　群馬　品田露子
亡き妹がめでにしあやめ花咲きてかはらぬ影の水に映れる

◉雨後新樹　　北海　柳田秀子
散りはてし花のあささふ梅雨に若葉もかほる夏木立哉

◉水邊螢　　三重　山本うめ子
葦間より葦間をくゝる眞清水の流れを見せて螢飛なり

◉早苗　　出雲　中澤幸子
くるゝまてうたふ田歌の聲するやふし見ぬまにと早苗さるらむ

◉寢覺郭公　　北海　柳田壽子
郭公よ半のねさめにきゝしより心も空になりにける哉

◉夏風　　三重　上村てる子
夏ながら茂る木影の涼しきはまたき秋風しきて吹くらん

◉新樹　　常陸　菊池健子
見渡せばみ山はなべて青葉しぬ執が花の名殘なるらん

◉新樹風　　伊豫　田中賢子
露こほす若葉の上の朝風は涼しきものゝかきりなりけり

◉くひなの聲をきゝて　　群馬　松村直子
憂ある身には哀に聞ゆなりたゝくくひなの夕暮の聲

◉櫻井懷舊　　神戸　青木京子
子規雲井にのこす一聲はよゝにひゝきぬ櫻井の里

◉郭公何處　　橫濱　戸倉信子
ほとゝきす月の都か星の山か雲井のよそに聲ばかりして

◉夏季雜詠　　滋賀　手塚しう子
なりごころつくらまほしさ思ふかな岩間ながるゝ水のきよさに

◉夏の歌　　岩代　島はな子
すや〳〵さねむる子負ひ少女子の立つ軒端よりかやりのほれる

◉夏季雜題　　磐城　内山ふさ子
蘭をかく南の障子あぶ鳴きて日は午近く夏靜なり

◉帶　　小石川　近藤粗子
たけの子のかすのふゆにかたのしさにあかつきおさをせさる日もな

◉納涼　　長門　齋藤久米子
山里の村雨すきし夕暮は名こそ夏なれ秋はかよへる

◉仝　　大阪　石原さち子
夏木立いとゞすゞしき我庵にしたしき友さ文をしらべて

◉雨後夏月　　常陸　關蝶子
村雨のあつさ流して行く空に涼しく宿ゝ夏の夜の月

◉夏の歌　　大阪　西島きみ子
空近き桐の若葉に日影さして雀むれ啼く曉の空

◉田植　　能登　植田すへ
瑞穗の國つゐやふみ榮ゆ田植にはこ゛ための神も歌ひますらんには

◉夏日　　甲府　伊藤うた
小松三本江の島土産の貝七つ白雨晴れて白砂靑松

◉新樹　　神田　關屋鶴子
鶯の聲は殘れさ三芳野の高ねの若葉春すきにけり

◉夕水鷄　　本鄕　原なみ子
夕つゝの光りほのめく夏川をかゆきかくとき水鷄なくなり

◉夏の歌の中に　　神戸　水越秀子
涼しさのあかぬ端居に星の名も三つ四つ五つ覺えけるかな

◉暑中休暇　　伊豫　田中賢子

山青し行く水淸し風凉し夏の休暇をこゝに暮さん

◉名所螢　小石川　大木秀子

れふの咲く綾瀨の堤夜る行けば水の遠近螢飛ぶなり

◉夏淺　小石川　大木高子

人まれに衣がへして見たれどもあはせてひしき朝風ぞ吹く

◉月前水鷄　大阪　天野近尾子

月影にはる〴〵見ゆる里川のみなかみ遠くくひな鳴くなり

◉納凉　伊勢　岸田千枝子

河原まで行くには遠しさと中の林のかげに夕すゞみせん

◉蛙　小石川　高野淺子

我か門の水田にうつる月影の晴れ曇る夜を蛙なくなり

◉瞿麥露　日向　北鄕なつ子

朝露のおき出て見れば床夏の花のたもともそほぬれにけり

◉蓮　日向　北鄕なつ子

西に入る月影ながら山寺の池のはちす葉露そこほるゝ

◉夏夜　大阪　上田峰子

ゆふすゞみれやへもいらぬうたゝれのゆめをさましてあくるそらかな

◉時鳥一聲　北海　松田げん子

うたゝれにまづきゝそめし一聲は夢にかあらぬか山時鳥

◉夜新竹　佐世保　田中千枝子

若竹のなほき姿をなしへ兒の夜のをしへもなしてたのまん

◉夏季雜題　肥前　寺井ちく子

賤の男がひろまの勞れやすめつゝすのこのはしに夕凉せり

◉螢　小石川　鷹野靜子

草の原夜分け來れば埋れ行く水の音して螢さぶなり

---

◉雜詠　麻布　畔柳さし子

君がため學びの道をつらさんさ草の庵に身を焦すかな

◉蓮　茨城　西村ふく子

濁なき蓮の浮葉に朝な〳〵玉さみたれて露こぼるなり

◉夏　神戸　三笠すゑ子

いつしかも夏は來にけりきのふけふ端居すゝしき夕くれの宿

◉瀧邊納凉　群馬　宮下しげ子

岩たゝく谷間の音さになつさもわかぬ松の下かけ

◉五月雨　岩代　畑野りん子

御祓川水かさまさりて唐橋の擬寶珠ぬれたり五月雨の頃

◉納凉　盤城　鎌田きみ子

青葉山日かさを杖に分け入れば松風凉し日は西にして

◉新荷　甲府　末木たけ

池水のにごりはてたる世の中に淸く香へる新荷かな

◉新樹　越後　久艮石富し子

いつしかさ木々の青葉のしげりあひてむかひの山も見えずなりけり

◉籬撫子　横濱　飯田みつ子

おく露のこほれぬ程に風みえて籬床しくさける撫子

◉聞子規　横濱　飯田春子

なく里のあまたありてや時鳥只一聲をのこしてそゆく

◉夏季雜題　甲府　渡邊さみ子

春すきて夏や來にけん今朝みればかゞまずなりぬ四方の山の端

◉新竹　相模　松本やす

いさけなきすかたながらに若竹のすくなるふしはかくれさりけり

◉早苗　肥前　佐々木數子

早苗さる時は來にけり賤の女の菅笠白し小山田の里

⊙夕早苗　　大阪　井村春子

くれかゝる田面に賤かてふすなりけふうゑつくす早苗なるらむ

⊙夏の月　　近江　畠中隆子

流れ行く小川の水に涼しさのかけこそみゆれ夏の夜の月

⊙暑中休暇　　越後　鵜坂なみ子

たらちねの母はおはさず友うせぬいかにくらさんあはれこの夏

⊙卯の花　　大阪　緒方章代子

ゆひ置し垣根のう木咲きにけり庭白砂の雪と見るまで

⊙納涼　　常州　池田百合子

舟は只水にまかせて竿捨てん友の傍月ものれるを

⊙朝蓮　　伊豫　玉井きよ子

とく起きて見よさや池の花はちす吹く朝こちく香を送るらむ

⊙新樹　　大阪　長野悦子

わかはさす木々の梢を吹きわたる風もみとりのいろに染むらむ

⊙納涼　　筑前　田中登茂子

夕顔の花の垣根に立ちよりて月まつほとの風の涼しさ

⊙夕立　　三重　龜井志萬子

青空は彼方にみえて夕立の雨心地よくふりそゝくなり

⊙夏の題　　三重　龜井いさ子

鳴く蟬の聲もすゞしく神さびてしげれる木々に風渡るなり

⊙夏季雜題　　大阪　富子

面白く追ふてなひ子の袖もれて螢飛びかふ川づらの里

⊙偶成　　常陽　池田露子

羽根交しれふれるをうの動く見えて水の碎くる月の涼しさ

⊙花菖蒲　　上野　林とし子

ほりきりのあやめにまさる花あやめ言葉のはなの色をあつめて

⊙卯の花　　長崎　山崎千代子

卯の花の雪にまかひて散る里は夕月さむきこゝちこそすれ

⊙夏季雜題　　肥前　二本松右枝子

遠近に桑摘む歌の聲すなり今やかひこの盛りなるらん

⊙夏川　　奈良　龍岡せい子

行く水も繁れる草に埋もれて音のみ通ふ里の夏川

⊙更衣　　大阪　石田豊子

今朝よりは夏の衣に代ふれどもかはらぬものは我身なりけり

⊙海上波靜　　伊勢　今井すゑ

船のゆくあとのみ波はたちにけり動かぬけさの海面

⊙夏季雜題　　長崎　吉田ちか子

夕立の晴間を待たぬ幼兒かそら仰ぎつゝ走り行くなり

⊙水邊螢　　伊勢　岸田春子

さ苗さる田川のにごりすみかへり水の底にもとふ螢かな

⊙夏季雜題　　茨城　鵜飼竹子

水うちし夕べの庭をながむればひろの暑さも忘れられけり

⊙夕立　　芝區　金山雪枝

鳴神のおともの凄くさす傘もかひなかりけり夕立の雨

⊙蓮　　日向　北郷はぎ

池殿のすたれ動かん朝風にすゞしくかをる花はちすかな

⊙納涼　　赤間關　梶間比枝子

おぼしまに衣手かろく打掛て水にかげ見る池のたをやめ

⊙夏月涼　　滋賀　矢田部信枝

月かけのすみてうつれる河水は夏をもやよそになかすなるらん

◎夏の月　羽前　櫻花た子
夕風にゆらるゝ池のさざなみにうつりて涼し夏の夜の月

◎花あやめ　本郷　岡うめ子
花あやめ咲をまち得て床にいけて朝な夕なのわが友させん

◎夕顔　本郷　小林しづか
あばらやの軒もる月の影しろく一輪さけり夕がはの花

◎湖邊納涼　岡山　石北好
舟あらはうきれやせましさざれ波よする堅田の風を枕に

◎五月雨　大阪　高井しづ
さみたれのおさつれぬ日は中々に淋しかりけり山の下いほ

◎卯花　それがし
をちこちに咲ける山路の卯花による行く道もまよはざりけり

◎老鶯のこゑをきゝて　下野　春子
鶯のなく音たえせぬ山里はまだへ春くれぬ心地こそすれ

◎雨後夏月　小石川　淺井雅子
雨はれて端居する夜の涼しさにぬれても月のいてにけるかな

◎夏月　南多摩　稲城俊子
夕立のなごりの軒の玉水に涼しくやさる夏の夜の月

◎ほたる　丸山しげる
やよほたる來れ〳〵さをさなごは吾れをやわすれてなごりくるへり

◎山家の夏　長野　竹下たけ子
木下道世の夏しらぬ柴の戸に心涼しき蟬の聲かな

◎あやめ　東京　青山錦子
涼しさに一人まよひて道に出でず行けどつきせぬ青葉なりけり

◎早苗取　信州　帶刀よそく
五月雨の晴間を待ちて今日も又早苗を取るや田歌うたひて

◎扇　日向　北郷あき子
雪つもるふしの姿に似たれはや扇の風の涼しかるらん

◎夏獸　淺草　岡田柳子
ゆふかけのこまを汀に引はへてあらふもすゞし夏の河原に

◎松の下に淸水あり　小石川　伊藤睦子
まつしかげの苔の淸みづを結びつゝあきやかようと思ひけるかな

◎夏月　宮城　宮崎うめ子
茂り生ふ庭の青葉におく露を玉かさ見する夏の夜の月

◎薔薇　信州　松田千代
なき姉のめでにし薔薇の花さきてゆかりの色のなつかしきかな

◎夏月　小石川　伊藤睦子
池水にうつれる月の影みればやゝはだ寒し夏の夕くれ

◎舟遊　山口　山名よし
滿潮に葦間を分けてこぐ舟の水棹に碎く月の影かな

◎卯花　武藏　保谷てい子
わすれては雪かさ思ふ賤か家のかきねましろに咲ける卯花

◎雨後蓮　稲次みへ
なごりなく小雨ははれて蓮葉のつゆふきはらふ池の朝風

◎餘花　麴町　紀行せい子
若葉さす深山かくれのおそ櫻心ありてやひさり咲くらん

◎水邊新樹　越後　大島喜以子
さゝ波も綠しにけり舟つなく磯山さくら若葉さしそふ

◎ばら　備前　岩藤春

◉首夏水
露ながらをりてかざゝん紅の色なつかしき花の一枝　大阪　大野幸子

◉瞿麥
山かげの若葉かくれにおのづから夏めきさめし水の音かな　芝　市川富美子

◉坂上時鳥
過し春菫に一夜寐し跡か今も露けき床なつの花　備前　難波久㐂子

◉夏季雜題
ほとゝきす名のりてすぐる松浦かえもろこしてなきわたるらん　信州　小岩井愛子

◉川狩
故郷はたゞ荒れ果てゝ池のあたりあやめ花咲き燕とぶ　尾道　稲野波子

◉夏月
うなゐ子か蜻蛉の竿に糸はへて川に出たらはえや釣らん　日向　速見晴秋

◉夏夜
あふ子とふ影さへ見られて涼舟いよ〳〵すゝし夏の夜の月　尾張　伊東靜子

◉杜若
月のかげたえ〳〵もるゝ川そひの小暗き森に水鷄なくなり　名古屋　淺野梅子

◉夏夜水亭
砂白き小松が原をひとすぢの小川流れて杜若咲く　靜岡　大塚ます子

◉橋上納涼
欄干によるこそ夏はすゞしけれ月は川瀨に風は秋に　日本橋　芦野はる子

◉郭公
舟うたのこゑもきこゆる橋の上にふくるもしらで涼むよはかな　ふさ子

◉不知題
おく山の木の間をいてゝほとゝきす何この里になきわたるらん　秋田　渡部花子

里川の向ひの森に雨晴れて若葉の奥に赤鳥居見ゆ

---

## 竹柏漫言

佐々木信綱

花あやめの投稿千數百首をよみ終りぬ。よみ終りて秀逸を撰び出むとするに、いづれも兄たりがたく弟たりがたくして、特に天地人とぬき出べきもの、あらぬは、いと口をしき限なり。投稿せらるゝ諸孃よ、自ら詠み出ると共に、古人の秀吟をよみ味ひて、新らしき着想に心をとゞめられむ事を。次に掲ぐるは仙臺新韻會より發行すべき歌集の序なり。此頃の歌に對する我考を述べたれば、特にこゝにかゝぐる事となしつ。

我はしめて松島に赴きつるは、一昨年の秋なりき。さるは八月十五夜の月を、都の塵の外に見んとてなりけり。馬放島扇溪にのぼり、八百の島かげこゝかしこに漕ぎめぐりしかど、あやにく雨に興をそかれたる、其心なしにや、人のいふほどの所ならずと、心ひそかに思ひたりき。今年四月たま〳〵いとまを得て、再び春の松島を見たり。此度は松島にくはしき人にきゝて、海上遠き大高森に舟をよせぬ。空晴れて暖き日を、菫つみ蕨折りつゝ、島の頂にたどりつきつ。靜にすめる波の上に、神の手もておきならべたらんがごとき島島を見下しゝ時、日は漸くかたぶきて、遠きかなたの山の端に、名殘の光かゞやきわたりぬ。紅に紫に、はた黄金色に、色をつくして染たる雲と波とを天地にして、打ならぶ松あをき島のたゞずまい、何にかはたとへむ。日は全く沈みつゝ、猶しばしたゞよへる光、やう〳〵消えゆき、くれ

はてし空と海とのはて、遠き外海のはてより、月はのぼりぬ。いと清らなる影は、高くひろがりて、一たびかくれし島々のかげ、くろく又あらはれぬ。この空の下この海の上にたてるわれ、全く身も世もわすれて、そゞろに人の世はなれし心地せしと共に、初めて眞の松島を見たる喜び、たとふるに物なかりき。あはれ一たび見たるのみにして、二たび訪ひ來ざらましかは、わが心に殘らむ松島は、とこしへに眞の美を認めざりし一昨年の松島にやありけむ。ものは假初に見るべからず。はた假初に云ふべからぬものにこそありけれ。

さはれこは松島にのみ限ることにあらず。わが始めて仙臺に赴きしは、松島の歸さなりき。我は小倉氏等が神宮奉齋會に催されし歌會にのぞみ、仙臺の歌壇のおさろへたる、其歌の陳套なるを論じたりしに、わが歸京後いくばくもあらず、新韻會の組織なりて、月に日に進歩のあとを見るに至りぬ。是全く吉野君が、斯道の爲に力をつくし、吉岡君淸水君の心を合せられしによるものと云ふへし。今年春の松島と共に、再び仙臺を見、新韻會の歌會に於て、新韻會の諸君にまみえ、更に進歩のいちじるしきを見る喜び、何にかはたとへむ。其喜び始めて松島の美を認めし心にゆづらんや。

殊に喜ばしきは、新韻集の成りしなり。新派と稱して、何の會くれの會と世にたつもの多けれど、かく集の成りしは多からず。こはひとり仙臺の歌壇の爲のみにあらで、我國歌壇の爲に、光をそふるものと云ひつべし。

すべて物の改革は、先つ打崩す人いでて、さて後に打たつる人いでくるものなり。近世和歌變遷のあとを見るに、元祿時代に一の改革ありき。これより先、南北朝より足利の爭亂を經、德川氏に至るまで、他の文學と共に、全く闇の裡に葬られて、唯縉紳家の專有物となり、從て種々の弊害起り、歌道殆と他に落ちぬ。此時にあたりて、先づ改革の斧を打下したるものを、茂睡在滿とす。在滿は國歌八論を著し、茂睡は梨本集を著し、共にその弊害を攻擊して、論法實に痛快なり。次いで長流契沖あり。歌論の著書こそなけれ、其作に實行して、かの緊束を打破りぬ。されどいつれも打たつる人ならざりき。其改革は、眞淵いで、芦菴いで、景樹いでゝ、始めて全くなれり。かくて德川時代の歌は大成し、景樹の歌風一世を靡かして、今日に至りぬ。而も成功と殆ど同時に、打崩されむ運命は來りぬ。故いかにといふに、其想に於て、其調に於て、取るところ狹がりつれはなり。特に景樹は、調にのみ重きをおきたれば、進歩ははたと止りぬ。かくて進むべき餘地は殘されざりしなり。近年に至りて、其陳腐ます〱甚しくなりぬ。こゝに改革派は各所に起りぬ。新派これなり。急激なる革新論の勢力强くして舊派は殆と打くづされたり。されど打くづすことのみ急にして未だ打たつる人あらず。かくては歌道の將來をいかにせむ。新派と稱する人の責任亦重からずや。いかにせばこの改革は全かるべき。想を廣くせよ、深くせよといふに外なきなり。新派にも種々のわかちあり。あるは萬葉の古調古語を復活せしめむとするあり。或は只管に新らし

き語新らしき調を用ひて、新らしき歌と思へるあり。あるは表深げに裏淺き戀愛を專ら歌はむとするあり。あるは殊更に朦朧の躰をとりて自ら得たりとするあり。されど多くは形の改革に止まりて、想に重きをおけるを見ず。新派と稱する人、かく各其とる所狹きにより、ともすれは千篇一律、何の變化なきに至れり。かゝる改革者は、舊派が末路と同一の運命を自ら求むるものならずや。古きをたづねて其長所をとり、新らしきを求めて其弊を去らむには、多年研究の後、つひに其想や深かるべく、はた廣かるべし。

新韻集は成りぬ。異彩を放ちて成りぬ。されどなほ完全せるものとは云ひがたし。想に於て、形に於て、研究すべき所多し。改革成功の前途は遠し。今や新派諸子が大につとむべき時なり。一時の流行を追はずして、眞面目なる研究をつとむべき時なり。我は雨の松島を見、夕日の松島を見たり。三たび赴きて雪の松島を見む時は、第二新韻集の更に面目を改めて世にあらはれづへき頃ならむか。

明治三十四年五月仙臺よりの歸さ舟岡なる
飯淵氏の樓上に宿りゐて

佐々木信綱識

おしなべて夏は青葉の山さくら
花こそ色はまがはざりけり　家隆

夏山の青葉まぢりのおそさくら
初花よりもめづらしきかな　仲正

わか宿の垣根や春をへたつらん
夏來にけりと見ゆるうの花　順

卯の花の垣根なりけりさみだれに
雨さらしするぬのと見つるは　紅欧

山川の浪にまがへる卯の花を
たちかへりてやひとのをるらん　西行

みそのふに麥の秋風そよめきて
山ほとゝきすしのひなくなり　俊頼

# 新體詩

## 天賞

### 磯邊にて

（賞品圖書切符金三圓）

名古屋橫詰町一番戸中平方 淺野梅

たれかかへさむ遠海の、
歡樂のかけの天つ日に、
今沈みゆくひらめきの、
かすかにのこるさゝやきを、
織くたなびく彩雲に、
のこるは何の秘事ぞ、
おのゝく胸に沈む日を、
思ひ追うてぞ知るべきに、
白きにほこる少女子の、
頰紅に染めなして、

酌む盞のその中に、
たれゆくすゑの身を思ふ。
あゝ世の戀は燃えてこそ、
人のまことはさとらるれ、
たれ沈みめく天つ日の、
そのゆくさきをおもはむや。

たれおもはむや白銀の、
天のひらめき遠海に、
たれか知るべき酌む酒の。
ゑふにかはわきまぼろしを。

解きえぬ戀の幻影に、
醉へばぞ歌ふ人の世を、
窓の外をはふ遲き日に、
君ゆくすゑを説く勿れ、

さめては慕ふ幻影の、
その美しき彩色に、
ゑひて舞ひけむそのかみの、
倘高き夢の香はありや、

あゝ追懐の歌の子が、
さまよひの磯いつくれて、
遠路の浪にかゞやきし、
歡樂のかげは沈みけむ、
さ霧にせまる浪の音は、
芦の根かたをめぐるらむ、
やゝに暮れゆく海の面に、
今しうつらふ宵の明星、

評　海原遠く日影落ちて、夕づゝの光みそらにきらめきそむるころ渚の磯に立ちて、はてなき水の面を見わたさむには、誰れか無限のおもひなかるべき。君が歡樂といひ、戀といふ、その影しづみ、そのまぼろしは消ゆるとも、なに歎くべき、またのあしたの望みの光あるものを。（蝶二）

## 地賞（賞品圖書切符金二圓）

# 貧女歎

伊豆田方郡韮山村長崎　大塚ます子

あれたる賤が垣根にも、　花さき匂ひとり鳴かば、
みちゆく人も杖とめて、　哀とのみはめづらむを、
あゝ其内のあばらやに、　もゆるがごとき青春の、
若きいのちを憂に泣く、　少女子ありと誰かしる。
笠に負ひゆくあさの星、　柴にのせくる宵の月、
日毎野山にさまよふも、　辛き浮世のなりはひや、
はるゝ日畑に鍬とるも、　降る日窓べに機はるも、
わが身を飾る嫁いりの、　晴着のしろと人や見る。
まづしき家に生れたる、　薄きすくせは恨まねど、
家にやみますみ親あり、　藥を買ふもわれならで、
あゝ二八二九夢とすぎ、　み親も五十路越えぬれば、
かよわき胸は踊れども、　をみなの腕いかにせむ、
表に泣くと知らずして、　底のこゝろは鬼百合に、
そゞ〳〵涙のへしづく、　分たむ人の世にあらば、
よもぎが門のひめ小松、　めぐみのつゆに沾ひて、
あらき雨風すさぶとも、　行く末ながく榮えむを、

評　浮世はめぐる小車の、さだめなきは人の上なり。富めりといふも、貧しといふも、畢竟浮べる雲に似たらずや。貧しきとてなになげくべき、やがて花咲く春もあるべきを。（蝶二）

# 入賞 (賞品圖書切符金一圓)

## ゆふやみ

名古屋市曽戸町一丁目千代重様方 林千代

樹の間をめぐる一すぢの、白きは川かいくまがり、
森をめぐりて流れゆく、水の面より暮れそめぬ。

牛曳きかへる童べは、遠の畷にかすみつゝ、
静かにひゞく追分の、節ほのかなり霧の奧。

ゆくては遠き松ばらを、小走り急ぐ旅人よ、
しばしはいこへ路のべに、暮れゆく四方の色を見よ
背戸の木槿の破れ垣に、餌あさる雞は打むれて、
鳥屋の眠りに急ぐとや、羽ばたき繁し裏畑、

夕餉たくらん草の屋の、烟のすゑに星見えて、
野越え山越え迫り來る、夕べの色は滿ちみちな。
水は調べをあらためて、せゞらぎ遠し杜の奧、
野里は近し臼の音に、折々まじるひなうたや。
たれか暮れゆく夕闇を、静かにいぶく笛ならん。
やゝたゆたふ調べには、熱き情もこもれるに。

千町八千町うちつゞく、田の面は暮れて山里は、
ふかき夕べのみ帷に、たゞゑふがと眠れるがよ

評　都の塵にまじらひて、心まで汚れけむ人の子に、げに見せたきは、しづかなる里の夕暮にこそ、(蝶二)

# 秀逸

## ことしの夏

藤浪むら子

軒のすもゝも實りけり
畠なる瓜も熟しけり
家に父まし母いまし
學び屋卒へて錦着て
かへりきまさん兄もあり
よき緣得てよき家に

嫁き行きます姉もあり
李ひやして待たなんか
白うりむきて送らんか
ことしのなつのたのしさよ

## 秀逸

### 名なし草

名古屋澤井町百廿四番戸　大原屋玉

小庭に續く灌木の
生垣がくれ咲きいでし
花は名もなき花ながら
たゞ懐かしと見られけり

ゆかしと見てし朝より
朝風清く蹈みわけて
夕露深くなる迄も
眺めせぬ日は無かりけり

道行く人もなき野邊に
異草を知れる人も無し
ことに名もなき花なれば
獨り哀れとおもふのみ

しかはあれども何となく
優しくみゆる花ゆゑに
おのが生命も空ならず
おぼえ初めては歌をこそ歌へ

## 秀逸

### 亡弟を忍ひて

岩代國安達郡杉田村　遠藤雪子

またうらわかき菫ぐさ　さかぬあしたの花の露
蝶とかたらぬ戀のうち　さそふ嵐に笑まれつゝ
野邊に恨の名をとめて　惡魔のそてにかくれたり
あはれ一人のあとをとは
見るべくあらばその惡魔　我はうつべし汝か仇と
あはれ一人のおとをとよ　かへらぬ昔かぞへみて

戀になくときわか涙　そでにちりては恨あり
落ちて聲ありかなしみの

秀逸

## 君が御心

長野縣上田町　久保田翠子

たけにあまれる黒髪を　つげの小櫛に梳らせて
心もかろき夕まぐれ　君とさまよふ野邊の道。
かざしの花に露おきて　四つの袂もしめるなり
二人のたてる袖がきを　吹きな亂しぞ夜の風。
見よや優しき明星の　かりのちぎりは淺くとも
影はうつれる青淵の　深き情のなからずや。
君うつり行く塵の世の　戀の習ひを思へりや
君うつゝ世の塵の子の　思ひの程を悟れりや。
あはれ我が髪つやあせて　色なき面とかはるまで
あつき情をさゝげんに　長へなれや君が御心。

秀逸

## 都草

すゞしろ

朝に夕に學びやに　あが往き來する路の邊の
名もなき草に交らひて　送り迎ふるみやこ草。
朝は露と睦びつゝ　夕べは月と語らひつ
くちなし色のむれ〳〵は　樂しきなれば圓居かな。
散りしく花の木の下に　無情をかこつ頃ほひよ
眞金も熔けん今日までの　心盡しは忘れじな。
涼風立たばいざいかに　吾が假りの家の奧庭に
移りて共に籠らずや　待たずや共に來ん春を。
たのしく語る春の朝　をかしく笑ふ夏の夕
回りて又も來らなん　いざ移りてよ都草。

# 賞外佳作

## ◉山家

和歌山　藤田いさを

四方は峯巒そびえ立ち、
浮世の風をふせぎつゝ、
きよくしづけき別世界、
神住む里もとほからじ、

都はなれし山の奥、
繁華は更に知られども、
春雨ふれば花は咲き、
秋風吹けば紅葉散る。

まばらに立てる茅屋には、
今も昔の人住みて、
日毎のたつき安らけく、
生涯の夢まどかなり。

浮世の風のふき來れば、
いともやさしき其の胸は、
平和の神に抱かれて、
人の心に波立たず。

## ◉いさゝ川

鹿兒島　鬼塚あい子

岸の若草色ふかみ、
みどりの波の春たちて、
咲くもゆたけき花影を、
清くもゆくかいさゝ川。

かげろふ動く春の日や、
若菜つむ子も見ゆる也、
流るゝ水のまに／＼も、
もるゝもやさし子守歌。

あゝ幼かりつる我の世や、
岸べの柳なつかしみ、
一日くらしゝそのかみの、
樂しかりしも夢なりや。

かはるは人のならひにて、
かはらぬものはゆく水の、
とはに流れてよどみなき、
姿とこそは見るべけれ。

## ◎水のうた

麹町　伊東　親子

小川にかゝる水車、　海路をわたるいくさ船、
汝の力ぞおもしろき、
さかまく汝の音高く、　岩に碎けてあるゝ時、
汝の力ぞおそろしき。
かろく流るゝ花びらを、　心ありげに流す時
汝の力のたへなるよ。
かくおもしろきおそろしき、妙なる汝の力にて
浮世の淵瀬にしづみたる、　我身の上を救はずや。

## ◎墓　畔

東京　金山雪枝

日は早や西に影落ちて
夜の御神のみそらより
垂るゝや黒き幕に世は
とざされはてゝ明星の
きらめき出づるこの夕
友の眠れるおくつきに
花を手向けて弔らへば
もろき涙はつゆしぐれ
思へばあやし我が胸に
無限の思ひ湧き來たる

あゝ我が友よ君亡せて
我がしたしき友亡せぬ
生者必滅會者定離
なに常住のものならむ
憐れはかなき人の世や

君に手向くるこの花も
やがて苔むす墓のもと
我れに手向くる人あらん
何時か眠をさめ出でゝ
いつ歸り來むわが友よ

紅羅ひく子も益荒男も
みな塵埃となるものを
あゝ覺め給ふこと勿れ
あゝ歸り來ること勿れ
とはに〳〵覺めざれな

友のねむれる墓のもと
名殘り惜くも立ち上り
去らんとすればざわ〳〵と
卒塔婆吹きまく夜嵐の
陰府に誘ふおとすごし

## ◉幼稚園

鳥取　尾崎なみ子

のどかに通ふ春風の
芝生の上におりたちて
此世あまたのエンゼルの
打遊ぶなり已がちゞ。」
かしこに三人又一人
こゝに五人又四人
女神のそれと似通へる
面目に笑をたゝへつゝ。」
あるは繩飛鬼ごつこ
角力するあり只一人
胡蝶の行方したいつゝ
諸手を擧げて呌ぶかな。」
やがては空も打霞む
櫻のかげに集ひつゝ
師のひき給ふオルガンの
聲に合せて歌ふなり。」

## ◉納涼

弘前市　亘理かれ子

柳の枝をふく風に　衣のすそをなぶらせて
立つゝも涼しき川の邊　つゆちる夏の夕まぐれ
立ち去りがたき折りからに　やがてあなたの山の端に

花あやめ

さぎりをわりて出る月　次第次第に昇り來て
清き流れに映じ行く　金蛇の樣ぞおもしろや
はるかあなたに聞ゆるは　螢狩らんと乙女等が
打ち興ずる聲ならん　折々ひゞく笛の音は
涼しの神のなきなせる　自然をうたふ思あり
あはれいみじの北のけしき　しばしながゆん此のあたり
腰うちかけてながむれば　吹き來る風はそよそよと
顔のほとりを拂ひ行き　ひるの暑さもわすられて
實に心地よき夜半なれや　實に心地よの涼なれ

## ◉落ち行く月

信濃　清水作子

火影幽けく夜は更けて、　あたり靜かになれるとき、
小窓のもとに寄添へば、　今宵もきこゆ君がふえ。
月に冴え行く哀れの音、　双となりて胸させと、
泣くに泣かれぬわが心、　夫は眠りて居ませとも、
あはれと思せやよや君、　頬の血しほも蒼さめて、
つさふ涙の玉の緒は、　よわりぬ風に堪えぬ迄、
あゝ戀なくばか斗りに、　聞ゆる事もあるまじを、
神は何とてたわふれて、　我やわ胸に征矢は射る。
はかなき哉や人の春、　嵐すさびて雨ふりて、

心ならずも花のいろ、　うらぶれ果てし人妻や。

ゆるしませかしやよや君、　落ち行く月のひかりより、
薄さえにしさ思び斷ち、　泣きて明さん我世をば、

弱き姿か忍び音の、　聞へましてかあゝはやも、
歸り行そまてうしろ影、　笛の調べもたへ〳〵に。

◉青葉若葉

(遣り水)　東京　青柳春江

庭の遣り水ざら〳〵と　流るゝ音のまくら邊に
夜すがら通ふ嬉しさよ
あわれ遣り水この宿に　獨りかこちて獨りぬる
吾れに向ひて優しくも　汝はかたるか汝もまた
ほそき闇路をたゞ獨り　覺束なくもなかれつゝ

(胸の思ひ)

胸の思ひのまさるとき　涙にくれていかにせん
果敢なき戀の積るとき　心になきていかにせん
過にし事はゆめのごと　思ひし事はあわのごと
かくと思ひて花ゆきも　はらへばきよき袂かな。

◉雨

名古屋　龜山音羽子

降る雨繁く軒もせに、
我れは聞なり我が心、
いざや語らむ人訪はゞ、
雨だれの石眺めつゝ、
眞白き犬の脊に止まり、
動ぎに散りてはかなきは、
世の人の上の影として、
君知らずや此雨を。
四方の山々閉されて、
濛々として見ゆるなきは、
闇に馳す人迷ふ人、
遮ぎる雨を知らざるや。
彌生の空の定めなく、
婀娜花に添ひ寢して、
何夢見らむ人の身ぞ、
醒すべき雨君見すや。
朽ちたる擔に日のさして、
漏る雨幾雫洗ふさも、
喜びの聲絕もせず、
詩の胸雨の歌ぞ成る。

◉片うづら

伊豫　青石女史

深き妹背の中にしも、　ひくや小琴の調ひて、
春風家にみちわたり、　人の笑むばかりにも、

## ◉ほしや

（童謡）

大和國住む郷　聆らひ女

鐵砲かたげて劔つゝて
帽子かづいて靴はいて
日本國の番をする
兄様ほしや背の高い」

姉様ほしや能う肥えて
秀吉太閤も產みおとし
仕事もするし本よむし
お針も上手氣もよしの」

凧もあげるし角力とるし
勉强もするしよう寢るし
末は百姓で名をあげる
弟ほしやすばしこい」

妹ほしや器量よしの
神功皇后様のてがらたて
雛様棚にまつられて
よう泣きよう歌ひようしやべる」

友達ほしや一所に
學校へも行き毬もつき
カチ／＼山の話とき丶
菫もつんで遊ぶ友」

着物もほしいし下駄もほし
本も硯も傘もほし
ほしものだらけの世の中に
空（唐）の金箱も皆ほしや

## ◉二つの螢

山口　山石よし

紫金の雲に日は落ちて　烟はこめし浦づたひ
海士小舟の仕度して　よいのいざりに出ぜむ頃、
姿はにくもてかれども　葦間を分けてこぎいぜし
長八尺の小さき舟に　二人の影のみ中るかな
「あないざたまへ君さ共　もゆる思ひのくるしくば
この涼風にくつらげて　胸の炎をさけんかな、」

…………………………

これも思ひにこがれてか　岸の柳をはなれては
舟の彼方に涼むさて　螢の二つむれてさぶ

## ◉ばらの花

岡山　石北好

あな丶つかしのばらの花
汝はゑるらん我が心
朝日ににほふ日の本の

楽しき家庭つくられつ、　車をさもに花をめで、
船を一つに月を賞し、　よしや世の波荒くとも、
二人諧共濟ぎゆかむ、　よしや嵐集ひくも、
二人諧共拂はまし、　かくも誓ひをこらしつゝ、
楽しきふしも苦みも、　共に嘗めざる事ぞなき、
連理の竹と許せられ、　鴛鴦の番ひと羨まれ、
百とせかけて契りしを、　思ひかけずも背の君は、
わらはをあとに振り棄てゝ、　無常の風の誘ふまゝ、
夕べをつぐる鐘の音と、　共にあの世へ行きましぬ、
あゝ恨めしき御心よ、　あとに殘れるわらはをば、
君はあはれとおぼさぬか、　昔乍らに咲く花も、
今は涙の種子となり、　月は隈なく照らせども、
心の雲は晴れやらず、　淵にのぞみて沈まむと、
おもひし事も幾そたび、　はりを仰ぎてくびれむと、
はかりし事も多かれど、　君がみ種のやどれるを、
やみ／＼殺す事はしも、　實に仇なりと思へばや、
かくながらへてありつるぞ、　やがても月のみちぬれば、
君につかへむ赤心を、　子の養育に注がなむ、
今は幽明異なれど、　心やすくもみそなはせ、
天晴家をば興すまで、　心をこめてはぐまむ、
かくいひつゝもぬかづきて、　新奥都城のかたはらに、
前後も知らず打伏せる、　孀婦は胸も裂けぬべく、
いかに苦しく思ふらむ、　よその見る目も哀れなり。

## ◉あやめ草

東京　芦野はる子

いとうつくしくさきのはる
池の汀のあやめ草
水にうつろふ影見れは
悲しささそふこゝちして
袖の露こそしほらるゝ
まこゝろこめしかの君は
さけるあやめの花ならて
ちりゆきしより妾のみ
浮世にかくはなからえて
夏のあしたも冬の夜も
つらせしこともうたかたの
消えて昔となりにけり
花はあらしにちるとても
むら雲月をおほうとも
いつか晴れなばまたさかん
あはれはかなきがの君は
またこむ人となりにけり
やよなき君よいまいつこ
さけるあやめをかの君に
手向けはそれの花の上に
露か涙かいくしつく
こはれてこゝろみたれける

女子と產れし幸あれば
外國人のなす事の
などてか出來ぬ事やある
御國につくすまごころの
赤き心のひとひらを
なれの如くにいさぎよき
かほりと共に我れも亦
いつか花咲き人の世に
匂ひたゝへてうたはれむ

## ◉心の鬼

下總郡司　文

牙は捨たれど角なくも、　心の鬼の恐ろしや、
たえず影身につれそふて、　折こそあれと待ち潜む。

あつき地獄の夏のたび、　佛と掬すぶ岩清水、
影もさやかにうつる時、　心の鬼ぞあらはるゝ。

こゝのろも蝶花の宴、　よしなきたちの囁きに、
興の消えてし其跡に、　心の鬼ぞあらはるゝ。

しばしは揺らふ醉寬水、　はかなき夢の醒むる時、
あゝと洩らせし隙間より、　心の鬼ぞあらはるゝ。

あはれ人の子淺間しや、　名利と契りしこの片身、
戀ひしき死神こまさずば、　心の鬼は去らざるぞ。

## ◉愛兒を悼む

京都　名井幾久子

光り長閑けき春の日も　落なば峯の山嵐
咲けば心もあらなくに　庭の櫻の花ぞ散る
是れや此世の樣なりむ　御寺の鐘は誰が爲に
ひゞくか無常と告るなり

渡る間程なくまくら邊に　やよ母樣よ母樣よ
和子が手に持つ花車　何處のうばか贈りつ
早く見ませよ母樣と　云ふ間もあらで夢覺めて
見れど迹なく影もなし

嗚呼夢なるか夢なるか　夢にはあらじ夢ならじ
他出の衣をまとひつゝ　聲ありくと讀ゐ寄るを
呼止めざりし悲しさよ　我だに淋しき此夜半に
今や何處か迷ふらむ

願ひぞおづるいたつらに　彼子を叱りし其時に
泣きし聲なを耳にあり　そなたと早く生長て
御國の爲に此太刀を　振れよと與へし其折の
笑顏今猶眼にぞ見ゆ

彼れが遊ひの友達は　皆すこやかに面白く
已が儘なる戲れに　樂しく遊びてあるものを
彼の子計りは如何なれば　死出の山路の末遠き
つれなき旅におでしむな

## ◉夢

東京　齋藤保子

一、松のかひなにからむ藤、　ゆかりの色に咲き出でゝ、
こけの岩ほのそのかげに、　はづかしげにつゝとゑむ。
二、あな面白の春の日や、　菫たゝほゝれんげ草、
わが立ちもとに匂いで、　清きかほりは袖にみつ。
三、花の小枝に音も高く、　歌ふ小鳥のこゑきけば、
そゞろ心も浮き立ちて、　舞へば衣の袖かろし。
四、吹く春風にひらひらと、　こてふきそひさび行けば、
甘きかほりはおもうちて、　花はわれらをむかふなる。
五、夜寒むの風に目さむれば、　ありし花のかげなく、
鳥の調べの音もうせて、　れやのとひびかすかなり。

## ◉妹の思ひ

はなえ

うらやましきは友の君　錦の衣あやの帶
日毎にかはるめし物を　見るめまはゆきみ姿を
只の一日のひと時も　かの一つだに我もたば
　妹がれがひはそれなりき
學びの庭のそれられも　君には春の春柳の
われにはつらき秋の風　あゝ世はかもつれなきか
榮華にほこる身なりせば　父母います身なりせば
　妹がうれひはそれなりき
されども思へ世にはまた　家なき人もあるものを
うゑになく子もあるものを　寒さ暑さをしのぐべき
きぬの數々人なみに　敎へ草つむその幸を
　妹にかたりしあしたより
まなべよ學べたゆみなく　勉めよはげめ朝夕に
友のかざしゝ花ころも　それより猶も美はしき
錦の光身にそへて　世にいてん日の樂しさた
　妹にかたりし夕べより
　　かれが憂ひい消えさりて
　　かれがのぞみは輝きぬ

## ◉舟人の歌

神戸　青木京子

世の人皆のおもふさち
　山邊に野邊にあくがれて
花にうかるゝ春の日も
　朝日ににほふそれならで
とき〴〵にさく浪の花
　ひれ　つ我はながむなり
世の人皆のおのがどゝ
　涼しきところもとめつゝ
暑かさくるなつの日も
　おほふかげなき舟の上に
汗もしとゞになりながら
　ひねもす我はつとむなり

世の人皆の友どちと
　さやけき影をめではやし
歌よみかはす秋の夜も
　ふるさと人のしのばれて
長きなが夜を月見つゝ
　夜すがら我は物おもふ
世の人皆のはらからと
　火桶のあたりまとゐして
寒きをよその冬の夜も
　果てしも知らぬわたつみに
風と浪とにうちむかひ
　夜すがら我はいどむなり
塵のちまたをよそにして
　世をのがれすむすれ者に
心ともなく似かよひて
　とふ人もなきなみの上に
命もしらぬふなびさを
　あはれとも見よおきつ島

◉亡き父の墓にまふでゝ　　福岡　淺川松千代

すゞのさゝ船浮けついね
遊びし野べのさゝら川
さゝらぐ水掬くみとりて
つゆのやどりとなりかはてし
文のおくつきたつれれば
草さへふかく生繁り
たむけし花もかれはてゝ
にほふやのこる花菫
巳が心やくみにけん
あななつかしや菫草
今日は六月のすゑつ方
二十日あまりの六日なり
今日しも父の五回日
思へばはかなしづか身は
いまを去ること五年の
昔しのゆめおくりをへし
なみだ玉なす袖の上
しぼるにあまる袖のつゆ
うき世はとわに風あらく
ほすべきところなきゝのを
あはれこいしきたらちをの
植ゑ置かれたる夏菊の
花もさかりとなりにけり
いざ其花はたむけんと
こゝに手折りてこしものを
一目見たまへこのはなを
かくうるはしくさきつるを
ゆかしと一ことのたまへや

いへども さらにいたへなく
よべともさらにこゑもとし
いまわのきはに父上は
我身なしかとだきしめて
まわらぬしたをやうやくに
おさなくとても聞れかし
明け行く世にうまれこし
ながさち多く思へかし
なが見る如くこのいへに
たからといふはなきぞかし
されども まなべ文のみち
つとめはげみておこたるな
つゞれのきぬを身にまとひ
世の人皆に捨てられて
よるべきなき身とならむ日も
まことのみちをひとすぢに
學びの道をたどり行け
あらしまどうつ小夜中も
ゆき降りくらす冬の日も
こがれとげなむなつの日も
わするゝまさてなきものを
如何でわすれむそのことば
泉下にねむるたらちねの
父のいませしむかしには
まなびのみちをたどるとで

ゆびさす人もなりけり
あなゝつかしのたらちねの
ゆきたまひたるそのあさは
ゆきたまひたるそのあとに
わがはらからと母上は
よからぬ中のそが上に
亂れ〳〵て麻の糸
ほどかむすべもあらなみの
うき世の人のにくらゑさ
姉と我身の其中を
てきとみかたにさかむとて
心づくすぞおろかなる
母上道にさまよひて
みよりの者に説こゑば
我身に機をおらせよや
席うたせよとかくして
うき世をやすく送れかし
如何に父上聞きたまへ
はら立たしくはおわさずや
これをきゝたる母上は
おつるなみだをつゝみつゝ
あしたに夜半におやみなく
たつきもとめていそしめば
姉も心やとけぬらん
夕げの膳に打向ひ

浮世話に前後なく
ほゝと打えむこともあり
それより我はほどもなく
まなびのにはに送られて
あさ夕學ぶ千ゝの文
春のあしたや秋の夜半
さきにし花をながめては
波に碎くる月みては
いよゝむかしの忍ばれて
よみ行く文字の數よりも
しげきは袖の霜の玉
あはれ父君くみ玉へ
母子三人がこともなく
中よく暮すさまみては
またもさゝやく鬼の口
ふたかむすべもなきものか
情けも深きはらからの
まなびの爲めと我が爲めに
黄金送るとしたまへば
ゆめさることなしたまひそ
妹人となる其後は
おん身にさちはなきぞかし
夏のあしたや冬の夜
螢や雪はあつめれど
母と姉との其外に
我身にたよりなきものを
我身の辛苦なめ盡し
何たのしみに文よまむ
眞の道は何の爲め
心盡して學ばむや
其れもしらでおろかなる
心の底ぞあはれなる
さすがに姉はかしこくも
さる言の葉は他處にして
我をまことのいとし子の
なほはゝ木々のそれよりも
はぐゝみ玉ふ心根に
あはれと一ことのたまへや
一こと姉をほめ玉へ
日も早やくれぬいざゝらば
姉上さぞやまちわびて
心も空にましまさむ
さらばよさらばいざさらば
春と花さけはかの上に
秋は虫なけ其草に
あたりにひびく鐘の音も
諸行無常をつぐるなり
よのうき時雨うき嵐
父の墓處にかゝるなと
あとふりかへりながむれば

一日のつかれやすめむと
里人のうたあはれなり

## ◎題獅子墮子圖

木村欧島ふみ子

千里の藪もことゝせず
荒ぶる風もゝのとせず
一聲高くうそぶきて
百獸恐れふるふさき
猛きにほこる虎さへも
子を思ふてふ迷ひには
おぼれて弱くなるものを
獅子の心はさすがにも
百獸の王とあがむべき
我身にかへていとほしき
子をば千尋の壑そこに
すてゝ力をためしみる
親の心は如何ならん
哀れさいはんいさましさ
たゝへんものはげに獅子の
子を思ふてふ親心
百獸の王とせんために
身に代へがたき子を墮す
親の心にくらぶれば
千尋の壑もなほ淺し

## ◎月の歷史

千葉郡　司　文子

眞如の月よそもなれは、
盈れば缺くるがんばせに、
榮枯盛衰しめしつゝ、
世をひやゝかに寂むる。

平家の盛時乞ふさはん、
なれは何さか教へたる、
渠は教へを守りしか、
渠はなれをば何さ見し。

平家の末路乞ふさはん、
なれに喞てし泣音をば、
何さしるせしその歷史、
渠はなれをば何さ見し。

問ふ昭君の一ページ、
何さしるせしその哀れ、
渠は教へに背きしか
めぐる三世の因果にか。

我も記さんかゆるさじか、
我は教へを守らなん、
浮世のかゞみなれの面、

我の運命うつりしか。

## ◉題　水聲

大阪　中村富子

人も通はぬ谷口あひに、　音も淋しく聞ゆなり、
あるは突出し岩角に、　思ひ亂れて溢るらん、
流れ〳〵て淵と落ち、　又見さへ恐しき、
早瀬となりて流れつゝ。　いさゝ浮雲き巖の根を、
走るが如くめくるらん。　春は櫻の花陰を、
秋は紅葉の錦なす、　其美しき色うつす、
又は明暮淋しくも、　時面白く調べつる、
聲は自然の雫味あり、　松風寒くさえ渡り、
波打ち騒ぐ夜すがらも、　忘る日なし水の聲、
あゝ水音の勵むごと、　人も勵ます其榮も、
進みて富も得ならん、　あゝ衰なる水音よ、
殊に靜き谷あひに、　調ぶる歌は誰が爲に、
閑すなるらん我にのみ、　竊にかたれ水の聲

## ◉あはれ友よ

米子町　小阪はるの

春のあしたに君とわれ　互に手をばかいつられ
はてしも知らぬ廣き野の　たゞ中に咲くすみれ花
狩せし時ぞ夢のあと
秋の夕に君とわれ　月の御前にイめば
うつる二ッの影法師　互に踏まんふまれじと
あらそひけるはまぼろしぞ
今はわれのみながらへて　君は浮世の塵をさけ
かへらぬ旅にいて給ひ　すみれの花の咲きつるを
心ぼそくもわれ一人　摘みとりて來し一たばを
君の御墓に手向けてぞ　涙ながらにそのかみに
ありしことなど物語り　立ちさることを忘るまで
月のひかりの澄みけるを　御前に立てばわが影の
たゞ一つのみうつり居つ　やがては君もこのごとき
身たけにならんものなるに　空しく草の露と消え
又見ん術のなきぞ憂き

## ◉涙

むらさき

涙はあしきものなるか
はならるはしきものなるか
母のもり歌きゝながら
嬰見はかごの中になく
戀につかれしおさ女子の
袖かみしむる闇の中
いつれ涙のたれならぬ
されど涙のかなしきは
遠き都にのがれきて
月になく夜の涙かな

## ◉夕

伊豆　朝日てる子

空を染めたる夕日影、西の高嶺に落ち行きて、
入相つくるかねの音に、名殘空しく暮れんとす、
牛引きつれて犂おひて、家路にいそく賤男や、
ねくらにかへる夕鳥、群を離れてなき渡る、
軒端につさふゆふ烟、夕げのしなやたくならむ、
流れも靜けき里川の、水陰にたち眺むれば、
見よや天外星一つ、浮世の紳や宿すらむ、
のぼる夕月ほのくらく、中天の空に迷ふ身の、
たのしが如く悲しか如し、遠き大古の昔より、
今も變らぬゆかしさの、夕べの色の遍り來ぬ
野山も里も暮はてて、浮世の闇に葬りて
人を眠りに送る時、たゞふくろふの聲のして、

## ◉菜の花よ

米子町　近藤ひで子

あなうつくしやうつくしや
　一させむかしわが園を
黄なる色もて織りなせし
　汝また咲きぬ菜の花よ
汝に心はなくさても
　いさうるはしき胡蝶をば
まはしむほどの汝なごで
　さゝやくかれに答へざる
たゞなよ風の吹くごさに
　うなづくさてもかれ聞かじ
かくてはかれもつれなしさ
　あだし花にさ狂ふらん
なれよふたゝび去るかれを
　いともたのしくまはしめて
さゝやくかれに答へなば
　かれかならずやよろこばん
……………………………
あゝ花よなれ菜の花よ
　いまぞ胡蝶は去るなるぞ
はや呼びかへせ呼びかへせ
　かれ他の花に舞はぬ間に

## ◉旅情（押韻）

筑前　かい栄

兀山越ゆる日かへりは、にぎびにし家に貝草の、
思ひしなへし妹見人を、千重山なびく術もがな。
うす化粧せる細おもの、しゝ痩す姿夢見るに、
はひたもさほる綠兒の、朝夕なくさおもほふに。

噫ひたぶるにな怨みそ、 手枕よしやほそるとも、
唯ひたぶるにな歎きそ、 丸寢の蚊帳は廣くとも。
露に帶びく小牡鹿の、 角の東の間わはこふぞ、
月影廣きおばしまを、 雁鳴く迄にかへらんよ。
ますらをやかたこひせすとなげけども しこのますらをなほこひにけり

* * * * *

夫はさ人の問ふごとに、 想はざよふきみがゝた、
いを寢ぬ小夜は鴫すらに、 玉藻に獨りねぬもへば。
磯に蟹徊ふひもせがひ、 貝の二葉の合ふなみの、
ゆり泣く鬢の糸とけて、 まくらの紙も破るゝを。
とたへし夢の浮橋に、 寢くたれ髪と胸みだれ、
長まろ帶を手にもつに、 澄みゆく月も曇るなれ。
せめてと瀬に徘徊いて、 戀死れ貝とるひぐれ、
兀山越えし我が背夫の、 涙ぐまるゝ玉章を。
なげきつゝますらをのこのこふれこそ わがくろかみのひぢこぬれけれ。

## ◉山家梅雨　　深川ちどり

よそめさびしき此里に
あらしもなれて此頃は
うき世をそとに住暮す
四季折〳〵の草木をば
はかれさしてぞそだつなり
心ぞなどかたのしかる
過る月日も知らぬまに
遠近の山とうすくこく
みどりすゞしき夏はきぬ
木々のこずゑはしげり行き
まども木ぐらく成ゆきて
月ももらさず背くさ
木だちすゞしく成にけり
あれし垣根のうの花は
皆白たへと咲き出て
空さだめなく此頃は
こけむすのきに玉水の
たえせぬ時はなかりけり
いかにさつきのならいぞと
いへど心はいぶせくて
わたりと見えず長雨は
いつをまちてか晴るらん
清き流れもにごりつゝ
岩なみ高く成りにけり
八重かさなれる雲をのみ
うらめしさのみながめつゝ
のきの松風友として
さびしく暮すこの夕べ
しばの戸たゝく人もなし




# 女學士

片山廣子女史

あすの下しらべもなし終へぬ。下しらべといふもこと〴〵しや。女學校の姫君たちに、ドックは犬ブックは本の相手して、一日〴〵と過す身の、何の下調かはと思へども、猶あやしくもつとめといふ念は胸にきざまれて、毎夜一度は目を通すを例としぬ。今宵はいつよりも猶物うくて、何の詩集かれの文集と取いでん心もおこらず、女學士は一人机によりかゝりて、未だ閉さぬ窓の外を見いだしぬ。月はありとも見えずほのかなるに、むかひの垣の根方を白き物の通るは、何にかと思へば、猫の闇にまぎれて、つまにや逢ひに行く、隣のなく聲きこゆ。寒からぬ風折々に吹きて、散りがたの梅いづこともなく薫り來るも、何となく物なつかしき夜の樣なるに、しめやかなる思ひは胸にみちたるらし、女は思はずかるきため息つきて、猶あてもなく庭のおもてを見つめたり。ふけては寂しき此あたりも、まだ宵の程とて、そとは人通りたえず、青葉しげれると高調子にうたひつれゆく子等のあとよりは、何とかやぶしうなりくる職人もあり。勢よき車の音すと思ふまもなく、家の前はとほり過ぎて、響も遠く消えうせつ。追ひ越されたるか、書生のさつま下駄あとよりきこえて、口笛ふきならして行く。やゝとだえたりと思へば、あなたこなたに犬の聲きこえて、何時何分の滊車か、笛の音遠くひゞく。又いつの間にかなまめきたるせつたあづま下駄の音響きあひて、低けれど面白げなる聲に物いひあひて行く。あゝうらやまし、世の人はなべて思ふ事なげなる哉。さもたのしげなる哉。などて我のみかくてはあるらむ。世はおしなべて命あり望あり。今庭になけるあの猫までも、何か喜びありて、息はつなげるをなどて

我のみ斯くてはあるらむ。望もなく樂しみもなくて、心は絶えず過去をのみくりかへしつゝ、せめて春の夜の夢にだに、昔の世にかへらむと願ふ。あゝ我は老いたるよ。二十七は世の人の老いたりといふ齢にもあらねど、世の人の老いたりと見るわが母上は、猶御心に望あり。此愚かなる子が、いつか世になりいでむ日ありとゆめ見給ふ。我も亦さる夢を見し事もありき。夢はさめぬ。夢はさめぬ。さめたる後の世のつめたさ。末の暗さ。かゝれとても母君は、我をそだて給はざりしを。日毎〱學校に行きては、若き人々の樂しげなる顔を見る毎に、しひてゑがほつくり、面白げもなきつとめをくりかへす物うさ。十とせの昔は我もおなじやうなりき『あたゝかき心は望にみち、つやよき顔に笑をたゝへて、海老茶の袴のすそもかろく、本郷通りを行きかよひしけるよ。何となきリボンの色にも心をなやまし、少しにても人によく見られむと願ひ、肩かけのかけかたにまで思ひを費しゝ其折、かくならむとはいかで思ひかけむ。かくなれとて親はそだてざりき。かくならむとて物は學ばざりき。おろかしくも思ひたがへふみたがへける身や。とりかへさまほしきは五とせの昔の我あやまりと、思はず雙の手に顔を被ひし時、長きまつげに露ありき。かゝる時、いかにせしとたのもしき手に肩をたゝきてとふ君のある身にしもあらば、否あるべかりし身をと思ふに、胸はせまるやうにおぼへぬ。淋しき庭に月はさきよりも少しあかるくなりて、植込の椿の葉丁子の葉、ほのかなる光を見せぬ、あの植込の蔭を……此おぼろ月夜に……あゝ君とあゆまましかば。

＊　＊　＊　＊　＊

女子大學を出でたるは二十一の春よ。才女のほまれ美人のうはさは教師友人の間よりいつしか校外にももれて、卒業のあかつきには、われ此君を得むとつとめたるもあまたありき。されど女の心は高かりき。我は日本最高の女子教育を受けたる身ぞかし。美學の講義のかたはしをもきける身の、なぞや西片町邊の小さき家の家とじとなりて、八百屋肴屋の應對を自らすべきかは。さらずばまた高尚の趣味なき當世紳士の家に行きて、

女といふ名のもとに、心いやしき新橋邊の者どもとひとしなみの待遇をや受くべき。女なりとも望ある身ぞ。理想にあへる人の見あたるまではと、高くとまりて動かざりき。なき兄の友の中にても、兄の殊にしたしくしたりしは渡邊勇、今こそ某省の秘書官として、省中の事務をかきまはしをる當世才子、世の羽ぶりよき○○の婿君なれど、其頃はまだ大學を出でたるのみにて、あたゝかき心にあたゝかき思ひはもえたりき。二人の間はむかし〳〵兄も此人もまだ一高の帽子かぶりて、青木堂の菓子くひあらしゝ頃よりなりき。小づかひ大かたつかひ散らしゝはてに氣づきて、皿に殘せる三つ四つのボン〳〵、ノートブックの紙切にうや〳〵しくつゝみて、おみやげにせし其頃よりぞ、未來の學士は、此小さき友を二なきものと思ひ居ける。あなたの思ふばかりは此方よりも思ひて、二人の心はあたゝかなりき。されどやう〳〵ねび行くまゝに、女は物の本の上、はた世の中の事物の上より、かつてはゆめにもしらざりしあまたの敎をうけぬ。いかに人の心の變りやすく、戀のはかなきものなるか。はた貧のいかばかり苦しくて、富や名や權勢の、如何に得まほしきものなるかをも知りぬ。むねの底に絶えずさゝやく誠の聲は、猶物しらざりし少女時代のまよひの今も殘れるよと思ひなして、しひて抑へつ、つひに抑へはてつとひそかにほこりし時、はじめて此人との緣談をきゝぬ。おそかりき。心はすでに曇りての後なりき。けだかき風采、男らしき心は、誠になき兄の友として、我友として、はたこひ人としてふさはしき人なるべし。されど理想の夫としては、あまりに若く、あまりに位置なく、あまりに世なれぬにあらずや。此人と共にせむの一生は、極めて平和なるべし。されど叉極めてじみに、極めて平凡なるは、わが堪へがたき處と、まよひの聲はさゝやきぬ。折しも女子大學にては、あめりかの大學に留學生をおくらむとはかり居つ。撰次は此人の上におちぬ。辭さば辭すべかりしかど、嬉しき口實と女はよろこびて一言のもとに長きえにしの糸を切りぬ。されど終に横濱の港をいでし時、はじめて大平洋の波に身をまかせたる時、さては我國

の見納めと、夕ばえの空に映ずる富士を詠めし時、深くも我あやまちを思ひ知りぬ。ありがたかりし君がなさけよ。人の心の誠は、全能の神の御力もても、猶買ひ得がたき物なるを、などてか我は二つなきたまものを斥けけむ。捧げられたる保護の手も愛も同情もみな却けて、我と撰びしは如何なる道ぞや。友もなく望もなくて、一生を一人行かむ寂しさは如何ならむと、折から消え行く陸を見つゝ思ひき。

四とせはすぎぬ。苦學の四とせば過ぎて、女學士のいかめしき肩がき、しなやかなる肩にになひて、歸り來りしは、花ちりがたの二十六の春、むかしの人が、〇〇家の婿となりて三とせを經たる後なりき。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

とりかへされぬ過去は今更いはじ。せめていま一度相見る折を得ましかば、只のゝしられあざけられん爲なりとも、いま一度相まみえ相語る折を得ましかば。さちなき身や。さちなき君や。小川にて見し夫婦の寫眞の君が顔はにがかりき。君も今幸福ならじ。君もあやまり給へり。一生をあやまり給へり。よし我に見よとてなりとも、かゝる人を撰ばずば、斯かる生涯を撰ばずば、君が才もて、君が手もて、世はつひに心にかなふ世となりけむを。唯一時の思ひあやまりに、男子の獨立をすて、友の同情をうしなひ、買ひえたるは美はしき邸宅、けがれし妻世のいやしみ、あゝ君も亦あやまちて撰び給ひし哉と、思ひあまりて女のほのかなる月の影を仰ぎぬ。天にます神、などてか其折我心を照らし給はざりし。よしおぼろけになりとも。

遠き國なる友の許におくる文

年月つもれども、猶おなじ窓の許になれ參らせし、そのかみの事は、わするゝよもなく、こひしうのみ思ひやり參らするを、ひさしう御おとづれもうけたまはらぬかな。あはれいかに詠めおはします。くもらはしき空の色にも、なつかしきわか葉のかげにも、一とせの内もともあはれ深きは、春くれ方の只今の時となむ見給ふる。よそへいはむもやあしければ、君も我も亦人の世のたのしき春は過ぎて、やうやく夏に入らんとしつゝあり

とはおぼさずや。今にしてまみえまゐらせなば、かたみにかたりきこゆることと、いかに多からむ。あはれ只今御目にふればや。されどこはかひなき願ひならむ。人の心はあやしきものなれば、かへりては隔たりたるがたよからずやは。今の世の物がたりといふ大かたは、空の晴れくもり、人の上の評、衣のこのみ、はたそれらを貫きては、わが佛たふとしのみづからのたゝへごとぞ侍るめる。年を經て相逢ふ二人の物がたりも、もしそのやうにもあらば、心に思ふなかばもかたることかなはでぞやみ侍りぬべき。かくいひて、しひてみづからなぐさむるを、をかしとは見給はずや。さてもその御地には、よきかたりがたきやおはする。もしさもあらば君はまことに幸おはすなり。おのれはひねもすに只一人して、せまき庭を詠むるよりほかのこともなし。それも物ぐるほしきばかりすぐれたる想像の力あるにもあらばこそやう〳〵春のゆめさめて現實の境に入らむとしつゝある身には、風にそよぐ若葉は只わかばと見え、小草の花の露ながら朝日にゑめる、さてうるはしとは見ながら、いかなるやさしき物がたりを、わが胸にさゝやくとも思はれ侍らず。わが心ながら、あやしきまでかたく冷やかになりたるやうおぼえに侍り。君もさる心地し給ひしこともあらずや。かくて年月すぎなば、此夏はまた、過去をのみくりかへす老の時代とやならむ。あゝ情なや。われも亦老ゆくべきにか。髪もうすくなり、齒もやうやくぬけて、かたきものもたうべえず、ひたひの波には、おのづから色よき衣もはづかしうなりぬべきにか。あゝわれも又老ゆくべきかと、思ふごとに、いかなるたのしみのゆめも、なかばにさむるこゝちし侍り。かゝるおろかしき心のうち、君なればこそ、ゆるしてもきゝ給はめ。麻布あたりの君きゝ給はゞ、何とかのたまはむ。つまのハイカラぬしきゝ給はゞ、ア、日本の女子は度しがたし、とひげひねりてやなげき給はむ。すみ子君、遠き沖繩に教鞭とる身となられしは、風のつてにもきゝ給けむ。そのかみおなじ學校に、うらなく見なれし六たり、七たり世にいでゝはひと〴〵に行く道もかはれゝば、一かたにはいひかたけれど、まづかの君など

こそ、おのが誠の天職をさとりて、一つのめあてを望みつゝ進み給ふにあらずや。さるにてもいふかひなきは、此身一つになむ。何の定まれるめあてなく、つとめなくて、無學怠惰なる生活に安んずるまゝに、かしらはにぶり、身は只肥えにこえ行くのみになむ。遠くよりおしはかりてなわらひ給ひそ。さてもたのしき夜半のまとゐに、あるじの君との會讀には、此頃何をかはじめ給ひし。わがために教へとならむやうなる事あらば、洩し給はずや。おのれはまた例の古物がたりにのみ夜を更かしはべり。此頃ロモラとジエーンエールとをよみくらべ侍りしが。よべより又源氏にかへりて、いよ／＼わがおもとのすぐれたるをさとり侍り。式部と國を同じくし、言をおなじくし、式部が詠めけむおなじみどりの空を詠めて、さてうかぶは何の思ひぞとみづからとへば、今文明の御代にうまれしわれら女子の、あまりにすぐれたるに、思はずをかしうもなり侍るかな。されどまた式部のやうなる女のみならば、いまの世のとのたちや、何とのたまふべき。

まことやものうくて日々をすぐしつゝ、物語よまむ夜をのみまちわたり侍るほどに、あまりにさう／＼しきをり／＼は、ちかきわたりの野にあそび侍り。ゆふべには學生むれきて、玉なげ自轉車走らせなどすめれど、朝のほどはいといたう靜かにて、露しげき艸のみどりに、つばめの黒き羽打廣げて、朝日のかげに飛びかふさまなど、何とはなしにいつまでも詠められはべり。また日の光あまりにまばゆき折には、かたへの林の中に入りて、暗き一すぢみちを行き返りゆきかへりしはべるほどに、かのあはれなるヘテがこひ人まちけんも、かゝる處にや。今も人なきゆふべなど、さるあはれなる人の此あたりに立ちさまよふこともなからずやと、よしなきことも思ひめぐらされてなむ。暗き木の許などに、小さき菫のさきたる、何となく物あはれにて、おなじたぐひながらも、みどりなる大空の下に、みどりなるわか艸のかげにゑめるが多かるに、すくせ何のちぎりありてか、日の光まれなる此老木のもとにしも、やさしきにほひをこぼすらむと、つく／＼と詠められはべり。此頃五日六

日とくもりはしき空をわびて、たれこめてはべりしが、けふしもめづらしき日かげまちえて、まだき行きて見たるに、すでに二人三人の人かげ見えて、此廣き野の一隅に、誰の家をかつくるらむ。二人ばかりして青草の中に杭うちをり。そのさまたげになるとや、大きなるかへでの木を、老たる男は今切らむとしつゝあり。三つ四つ五つ枝はすでに地に落ちて、落ちても猶いのち絶えぬわか葉は、何もしらぬげに、朝風にそよぎをり。その時われは、此老人にくしと思ひ侍りき。みづからのよはひのほどをも思はず、此さかりの木のいのち絶たんとする、こはいみじき罪には侍らずや。此木有情ならずとたれかたしかめいふべき。よしまことに情なしとするも、われらとおなじくたふときいのちのいきは通へるを、心なきわざもするかなと、見つゝあれば、老人はしばらくも打つ手ゆるべず、木の頂きゆらるゝごとに、露の玉こぼれて、艸の蔭にかくれつ。となりのかしの木に、小さきとり一つ來て、さへづり初めたり。朝な夕な來つゝなれにし梢の、思はぬ終りをかなしむにやと見てゐたるに、ふと此春の始なくなりし弟のこと、思ひいで侍りぬ。かれは此木ばかりのさかりをも見ず。まだ學生のたのしき夢なかばなる二十といふとしにして、世をさり侍りき。わかくつよげなりし人の死ばかり、いたましきものや侍る。かゝることははや申すまじ。此頃の空には、人の心もくもり侍り。筆とめ侍らばや。あるじの君によろしくつたへさせ給へ。かくゆめのやうなるくりごと、かしこき御目には入れさせ給ふなとなん、例の事ながら願ひまゐらする。あなかしこや。

# 首夏山行

下田義天類

此はおのが廿ばかりの頃かき試みたる紀行文なり。今は三十とせばかりの昔になりにけり。まだものまなびに師の許にありける程のすさびなれば、歌の文もいとおさなくて素より人に見すべきやうのものにはあらず。されどいとけなかりし程のしわざのあさを見てはそのかみのひさへ心なりしことなどそゞろに思ひおこさるゝにこの心はわれも人もおなじなるべしとさへ思ひなりてしひてこたびの女學世界へこれしもとり出すことゝはなしたり。たゞさなりしほどのしわざといふなかごとにてなむ。

今日は土曜なり。あすの日曜かけて、丹澤山の山おくに遊び見むと、大山町のかりのやどりを=立ちいでたるは、廿一日の未すぐる頃にもやありけむ。はやくよりあひ契れるもの、これかれ多かりつれど、あるはなきほどなるあり、あるは葦分小舟なるもありてたゞ内海政雄ぬしのみなむ友なりける。年は明治のそれのとし、月は五月といふ月なりけり。ずさなどをもぐせで。よろづことそぎてめやすき程にぞしないたる。なかなかにそう〳〵しかりけむほども、あはれふかくや侍らむ。道のほどしのびてをなど、かたみにいふ。福永町のこなたより、道を左にとり、いむの澤といふ所にいる。まだ家ちかき所なれど、栗河澤のまろきばしをわたれば、よろづやうかはりたるこゝちして、やゝおかしさもそひきぬかし。とばかりゆくに、さゝやかなる畑所なり。誰か爲わざにかわらむ。新ばりしたるけはひなるに、牛はやあけがたになれり。そくよりおくにいれば、きこりなどのかよふらむ道もあらず。青々と立ち繁りたる木立のしたに、たゞ夏草のみぞしげりあひたる。かけほりのかさにすがりて、からうじてわけのぼれば、汗もしとゞになりぬ。やゝゆくほどに、木立もたえたり。草もいとみじかし。かたみにみかはしたるまゝ、ほと息突きたるもわれながらあやしのものずきやとさへ。このわたりよりは、やう〳〵あたりも見わたさる。まづひとくゆらしとて、まちなどとり出たすほどに、ねよげなる若草どもを、ふさやかにちぎり集へて、二人がしきものにかへたる=所から艶にみやびたり。くだわざまにこしうちかけて、をちこちをみめぐらせば、あゆかは、たかくらの村々里々、麥田、みづたにいりまじりまだらにゐならびたるが、足もとにつどつるみゝちして、いひしらずおかし。中を横ぎる相摸川、ほとりをめぐらす相摸の海、とり〳〵にふかきながめのくさはひなるに、ひだりにはあぶりの山高くそひゐ、みぎりには高麗山高取山など長く横たはりて、歌にも筆にもまねぶべくもあらずなむ。ひさごのひもとかまほしき所なれど、出で立むほどのあわたゞしさに、かたみにわすれにたればかひなし。いとせめてあらましかばと思ふに、たちびを食ひ

てぞ口をうるほす。つつじもさけり。あしびもにほへり。萠〻おくれたる蕨を折り、咲き殘りたるすみれを摘み、などして登るともなくたむけにいたりぬ。道を蓑毛にとりて、こゝよりぞくだる。此はこゝろざすかたにはあらねど、かしこの山かづにあないせさせて、明日のあけまだきに山には登らむ、などかねておきてたることなればありけり。ややくだるほどに、あふり山にさへぎられたりし富士の高ねもなごりなくあらはれぬ。されど猶なかばは雲にかくれたり。ふもとにつづく愛鷹山、又こなたなる關は八重山、伊豆の天城、小室の山々、又わた中なる大島、など霧のそらにほの〴〵みゆるは、いとほどらひなる遠山なるべし。はる嶽、丹澤、祖佛などいふ山々に、みのげの山のかさなりあひたる、すなはちこれ主山なり。それがなかには、斧壁たい、雲頭皴の、いはほあり。披麻皴。荷葉皴．の野山あり。繁り合ひたる木々のみづ枝は、しづくもしたゞりぬべくきやゝかなるに、寺めきたる屏風のうちより一筋のけぶり立ちのぼりて、所々にかゝりたる樣などは米翁の畫も遠く及ぶまじなど政雄ぬしはおもふらむかし。もののいはでなかめおはす。からうして義天類

　ゑにかゝむ筆なきのみか言の葉に
　　うつさむすべもなつの八重山

となむいへば政雄ぬし郭公も啼きいづべきころほひなりといふ。げにおそしとおもふらむさまなり。政雄ぬし。

　郭公いまやなかむをたのみにて
　　こゆる高嶺はやすくもある哉

となむうたひたる。われも實にしかこそといひ〳〵くだる。百合草のにひぼひこゝらたてり。花のさかりおもひやられてかゝる野中にさし置かむもいとあたゝく。根こぢにして家のあたりにうつし植ゑてむ。いざもろ共になど言ひきゝかさの先もてぞほる。いと奥づきてすさびありくほどにうばらに手かきておなうたてや。ゑうまじかりけりなどうちふくだみても猶みあたれば見捨てかねてのゝしる。あそびすごしにけむ。はやゆふぐれ近くなりにけり。いそがずばなどいふをりし

もいとあえかなる聲のおかしうもまたあはれにきゝつけられたるは即ほとゝぎすなりけり。この頃たえず待にしかどもさとにてはまだきかざりつるを所から珍らしさも交加はりておかしなど云はむも中々になむ。政雄ぬしたのみもしるかりけりとおもほしたるさまにて

一聲といひしは待しほどなるを
なきすてゝゆく山ほとゝぎす

また

今一重いまひと谷と越え來つる
山のかひありはつほとゝきす

などの玉はするにおのれも

わけ入りし深山のつとに時鳥
まづはつ聲を狩り得つるかな

また

郭公きゝそめてけりこのみそ
われはと人にまづほこるまし。

また

夏山のしげ樹かのとのゆふ影を
ひとりしめつゝ行く郭公

などかたみによろこぶ。などりをしさはいはむかたなきものからこゝにくらさむはさすかなればしひて思ひすてゝみのけのさとにぞくだりつきぬる。さとのこなたにきよらなるながれあり。きしの木立にはひまつはりたる藤こぼるゝばかりにさきをゝりたり。いそぐをりなればすぎむとせしが立ちどまりて義天類

行く路はよるもまたよし立ち歸れ
いざ是てゆかむはなのふち浪

などいひしがよるにもならざりけり。かめやといふにやどる。いとしのびたるありきにあひしれるあたりを訪はむは煩はしかりなむとてなりけり。夜にいるほど柏木實、相原藤男などきゝつけも來あひたり。あすのまうけなどいひのゝしるもわづらはしう

廿二日も天氣いとうるはし。朝まだきにやどりを出てたつ。二階堂亮作、柏木實、相原藤男、武藤春江、岡部喜見などきあひて諸共にとらふ。みれ阿夫利神社の下ぎかさなり。あないせきする山がつをこそたのみつれ。

はづらはしくうろさしとおもふほどなれど強ひてもとゝめがたくてあないをさす。ずさどもにひはりごなど荷はせまた釣棹などをも持たせたり。かゝる山奥に何を釣らむとにか有らむ。いといぶかしや。こなたよりの路は木草ふかくしげりあひたればゆきゝのほどあしかむめり。今日は路かへてなむなどかたりあふ。しらぬことなれば人々にまかせおきつ。田原路とかいふよりなむわけのぼる。やゝありて廣野にいでぬ。名もしらぬ千種の花ども咲きつゞけるいとうるはし。義天類

おしまれてあしの立てどもなかりけり
　千種花なくけふのやまふみ

よろづめなれぬさまなれば心のとまるふし〳〵もはたいとおほし。つばなぬくとて政雄

つとにするものならなくにぬくつはな
　これも野邊ゆく春さびなりけれ

義天類

うち群れておのかとり〳〵つはなぬく
　音にも千代の聲ぞこそする

郭公ひまなし。政雄

時鳥雲ゐにのみとおもひしを
　けふぞ聲ふむこゝちこそすれ

白雲にわれもましりてほとちかく
　聞くとはしらてなくほとゝきす

なとあるにおのれも

わけ來ればけふもひまなしふもとには
　はつねまつらむやまほとゝきす

人もこぬこの山おくに聲立てゝ
　たれに聞けとかなく賓とゝきす

この程の物がたりなどうるさくてみなもらしつ。をちこちに雲雀もなけり。義天類

はる夏を取り合せつゝうたへとか
　ひはりゐる野になくほとゝきす

またふりたる松の木所々にたてり。

もゝとりのさへづる野邊は松風の
　聲もあやあることゝちこそすれ

などいふほどに仙人の窟といふ所に來にけり。政雄ぬ

し
仙人の住みぬときけはやすらひて
　千代ふる術にあえまくもかな

おのれも
仙人のすみかときけはこと〻はむ
　みねの老まついく代をか經し

榛嶽をもふもとになしてのぼる。いとけはしき所なりけり。一足を、だにふみそこねたらむにはすゝろなるめをもみむとおもふにすこしはよわりぬかし。たむけにいたれるところもふとのかたに雲おわりぬ。高くも來にけるかなとおもふに
　くれゆかは星もとらへむそら中の
　　雲つくみねにわれは來にけり。
などいへは人々もおかしかりてわらふ。これよりやゝくだりざまなり。谷底に清き流れおりて山おくさしてぞなかれゆく。此の川は丹澤山のそともなるすゝがやといふさとに流れおつとそ。すゑは相模川にや落ちあふらむ。やゝゆけば左り右りについじしめぐらしたる所あり。これなむ心ぎすかたのいりくちなる。さゝやかなる谷川をいくつともなくわたる。政雄ぬし
　越えゆけはみえゆくまにま山おほみ
　　谷澤山と名におほせけ舞
などいふ。あやしのまろ木ばし有り。其の橋のほとりにておくれたる人々をみれば心のなしにやおるらむ。いまゝでさらぬもさまかへたるやうにみやびかなり。杖つきたるもあり。かゞふりしたるもあり。琴もちたるうなゐ子のあらぬは例にたかへるやうなりといへば政雄ぬしもおなしくやおほしけむ。あふこのさきにひわりこつけたるもゆかしうこそとのたまはす。げに賤のをとおもひの外にちいさきそてぼそき、もゝしきなども年頃政雄ぬしが心を盡せる南宗畫にありぬべくおほへたり。義天類
　谷川のくちたるはしもさまかへて
　　中〻けふはおやうけもなし
などいふ〳〵おくにいる。かやぶきのあづまやだつものこゝかしこにたてり。畑もつくりあらしたれど猶の

これる所も有けり。いにしへはこゝにすむもの八軒はかり有りきとなむ。いまはいづれもたえはてゝたゞ三軒のみそのこりたるなどあないせしものがいふ。山もひろし。土もけしうはあらず。あかいろおびたるすなぢなり。赤壌の入りまじりたる山つちなるへし。同じさがの黒きいろしたるもあり。其のはたりは茶などにかなひぬべくみえたり。桑はあれどうゑけむまゝ千世をも經にけむとおもふやうなり。この赤いろしたる所はよろづのものにこよなくやとみゆるものから芋大根大角豆なとの外はおもふやうにもあらすとかいふ。そはつくりざまによるものなめり。すべてはあたりの立木など惜しげもなくきりたふして炭にもやき板にもきりなどしたらむかたの向股にひぢ搔寄せてくるしまむよりまされるなるべし。まのあたりのくぼさにまよひてこそかくさまにはあらしならめ。いとあたらしうこそおぼえしか。やくまじがりけるものおもひやと人とはみとがめけむかし。そこよりなほおくにいけばきよらなる谷川をへたてゝすむ人あり。たが山ずみのいほりにあらむ。小柴垣かごとばかりゆひもとほしたる世にもめつらしくおもひやられてゆかし。これなむ新宮といふ所なりける。

もとほさる小柴籬も繪どころに
かゝせまほしき山かけの庵

こは其のかみをほやけの山もる宮人のすめりし所也とか。いまはあやしの山がつなむ住めりける。いとすみあらしたれどよろうどゐは猶むかしのおもかげをのこせり。ちりうちはらはせてこゝにいこふ。もて來つる釣さをは此のはたりにてやま米といふいをつらむ爲なりけり。はるの木の根につきたるむしをもて餌とするらむ。身しろくかしらくろき長く六きだばかりの虫なり。たちひのむしことによけれといまはおほきくなり過ぎてふさはしからずといふ。時のまにつりきつるはよろずよりめづらかにて家ぢをもわすれぬべくぞ覺ゆる。あそびしかたはたかへれと浦島の子おもひ出さる。政雄ぬし

越來つる峯に浮世やへだつらむ

　音さへ清き谷川の水

いたくゑひしれてうたもえよまず。この所に標杭あり。東京府下武藏國荏原郡大井村平林九兵衛新開地とぞかいたりける。其のかたへにいとくちたる建札あり。こは其の上うしはきいましゝ江川のとの、制札なり。文字は消えてさだかならねど椎茸山葵など植付けさせて冥加をもおほせおきたれは猥に入りたらむにはおもき掟にものしてむなどおろ〳〵よまれたり。天保のころのなるべし。此の山わつかばかりだに如此うちひらけたるは江川氏のこゝろもちゐふかゝりつるによりてなるべし。むかし公儀のものたりしところかのとのいつの天城のさまをうつしたるものなりとぞ。いまは平林某のこひおろしたる所となりて其の上のやうにもあらす。かく不用めきてもてつけたるは國の爲かへす〳〵あたらしき事なり。人々をばこゝにまたせて二人は倘おくふかくぞわけいる。阿夫利山のいたゞきにてみさぐればただにみ山にかさなれ合ひたるさまなれどこゝより見れはわふり山はいと遠くて其の間に木立もなき山々いくつともなくかさなり合ひ丹澤山のたむけとおもふ所は猶ほど遠きかなたなりけり。いよ〳〵いればいよ〳〵おかしくて白くされたるかれ木どものおのがさま〴〵にたをれあひたるあるはいはほの上にさながらすぐ〳〵と立がれたるえもいひしらずけうらかなり。しばしなかむるほどにいとおほきなる藤かづらどもこゝかしこにはひまつたり。所さきまで咲きみだれたるをみつけて義天類

　うちたへて來る人もなき山おくは
おのかまゝにや藤もさくら舞

山深く水清く所々に苔むしたるいはほ重り。年ふりたる樹立しげりなどしてゆけどもゆけどもはてしなければかへるべしともおもひたらず。然ばあれどみのけをいでゝよりはいまの道にして四里ばかりもや入れ來つらむ。かゝる山路にて日くれたらむにはおどろ〳〵しき事もこそとてなむ。かへさに又道かへてあふり神社の拜殿のかたへとたゞこゑにこゆ。みのけの人ともみなおくる。山づとはさま〴〵あれど猶藤つゝじなどみ

すてがたくてたをろ。わらびもまたをろ。

　春たけてやゝほけすぎしさわらびも
　　をりにあひてはゆかしかりけり

政雄ぬしも倘ありけむ。ゑひこゝちのさめやらぬにきゝもらしたればかひなし。この路はことにさかくて例のかたほりのみぞちからなる。やゝたむけにまいたれるこそよわそらのけしき今只いまの間にふりぬべくかきくらしたり。風もいてぬ。雲もおこりぬ。いそがずばなど人々はいへど二人は猶あかずつきせぬものにながめやる。峰のかなたより起れる雲のこなたの谷へ一まぞかれにまろひおちきてたちまちに谷々をうずめ谷々よりむら／＼とわきいずるが風のまに／＼ほびこりわたりて時のまに山々をかきけちあるはおもはぬ所より木立をあらはし、いはほをはきいて、あるは袖つらねたる人々をかくしてたゞ天地の間にわれひとりのみはらまれたらむおもひをおこさせなどして時の間にかはりゆく山々谷々のたゞずまひつたなき筆には其のかたはしをだにまねぶべくもあらず。たゞ峰々よりおちくる一村雲をみてはいかれる虎のかてり來るかとうたかひ谷々よりほひこりゆく八重雲をみてはわたかまれる龍の大空にのぞるにかとなむあやしまれける。

　風にとぶみどりの雲のひやゝかに　こゝちよげくも身にまとふ哉

などいひちらしてかへる。はるたけのたゞ中なりといふをよこぎりて瀧の澤といふ所にいでぬ。かきくもりたればあたりはみえず。道は木こりのゆきかふばかりあり。左にはいはほたてり。右には千尋の谷あり。たゞかけはしをゆくらむこゝちのみぞしける。中ほどより雨もふり來ぬ。さらぬたにをくらき所なりむを雲たゞめの前をたちきれり。なにとやらむむかへをに人の聲いとすみてきこゆ。何ものゝ聲にかなどおもふにおくれたる人々のものうちいひたるがこだまにひゞくなりけり。ものむずかしき所にもあるかな。かゝる深山には天狗おほかみなどけしからぬそのもすむとこそきけ。いとそう／＼しやなどおもひなりぬるほど青鳩でう／＼となきたるいと／＼ものすごし。もののいはで

いそぐ程にゆくりなく巖こえ山なるかとおもふばかりあたりをゆすりてすさまじきもの音したり。人々もおものさまかはりはてゝなにゝかあらむともえいはず。ひたはしりにはしる。とばかりゆくに木こり路のへにいこへり。人ざとの近付きたるをしりぬ。やゝ心落ゐてあたりをみるに、いまたふしたるばかりの大きなる木よこたはれり。これなりけるはとおもふにうたてくてはらもかゝへつべし。中ばかりに拜殿にいたりぬ。みのけの人々はわかれをつげてみなかへりぬ。こよひはこゝにやどりてものかたりなどおほし。廿三日巳すくるみそ大山町にはかへりぬ。かへさのこと共かゝまほしき事いとおほかれとわつらはしさにさまではとてな舞。

# 花の跡

文學士　鹽井雨江

久しくて歸り來にたる故郷の空、何んとなうそは/\とうかれたる心も、さすがに今日は落ち着きぬ。紅梅のかをり、昔のゆかりをとゞめたる南窓の下、ふるびたる机の塵うち掃ひてむかひつ。再び我が淋しき生路の友と思ひ定めたる古筆を取りいでつ。いざとて思ひの色を染めむとす。

悲しいかな、さらでもまづしき我が文筆を、志かも、此の三年、よそにのみ棄てがちに暮らしたり。いかにせむ、今日は殊更、筆は、心の水の行くにまかせずして、よどみによどみて、いと進みかねたり。文は、思ひの糸と共に亂れに亂れて、いと文もなし。

かくてはと思ふに、心はいよ/\狂ひ、文はいよ/\整へかねたり。筆をなげうつて、そゞろに立ち出でぬ。三年の昔、我が文筆に倦みたる心の折り/\、松風蘿月訪ねて我が胸襟を洗ひたるさる人の閑居を思ひいでたればなり。道灌山の端、日暮の里の奥なり。

軒の老松や、一入の古色を添へつらむ、庭の若梅や、さこそは色も香もまさる花の今日ならめ。あはれ、健やかに見えたる主の老女は、必ずや恙なくて、此の三年の

秋も送りてならめ。あはれ、蕾の花のゆかしげなりし少女は、さこそは薫り深く、此の三年の春に、たけのびてならめ。思ひがけなき今日の訪れ、いかばかりか驚かむなど、心の中に思ひ描きつゝ、たどり行きぬ。

道灌山近き里に出づれば、三年の日數は淺けれど、馴れの山光水色、變はれる跡の、いと深し。菫、蒲公英の自然の笑みをこぼすばかりを、春色にして、茅草の生ふるにまかせたりける山邊は、見まがふまでに掘り崩されつ、玉とかゞやく石の門、黄金とにほふ高殿、名利に誇る人々の榮華の宿と成りはてぬ。岸になびく野菊尾花の清き影を、秋色の友として、淋しき裾野を流れたる小川の水は、何時の間にか、其の流れを移されつ、いかめしき石垣、はでやかなる板塀のもとを流れたる。動かぬ山も、かくは動きぬ。變はらぬ流れも、かくは移りぬ。

あはれ、おぼつかなき其の人の閑居のあたりや、いかならむ。また思へば、人世は誠に朝露暮煙、まさしくありと見る姿も、たゞ風吹かぬ間の影のみ。三年の昔は、同じ此の里わの春風秋色を、幾度か連らぬる袖に分ちたる我が父も、まさしく今日は空しき天外の客と去り給ひて、殘るは唯我が心の中に忘られぬ面影のみ。近き去年の春までも、げに無常の風の誘ひ來たれる其朝までも、我が父はいと健やかにおはしたるなるを。あはれ、健やかなりとたのむ姿も、やがて迫り來たる無常の暮れをわけがたき凡下のはかなき眼にうつる幻のみ。木ずゑの花よりも、葉末の露よりも、たのまれぬは、人生かな。ありし閑居の人はいかに。ありし閑居の人の子はいかに。

見るに、思ふに、いとおぼつかなく思ひやらるれど、さはいへ、さばかり靜けき山べに、さばかり長閑にて暮らしたる宿、うき世の嵐には、自から遠からむになど、思ひたのみつ。やう／＼に近よる老女が山荘の裾。菫まじりの茅花はしたれど、見し垣根は未だ荒れもやらず。門に建てられたる一基の石ぶみはとうち見れば、いかにしけむ、もとの所には見えず。こはいかにと胸は先づ轟く。老女が山荘のしるしにとて建てられし石ぶみなればなり。其の石の見えねばなり。他處に移してか

と見まはせど、見しは無し、似たるも見えず。胸はとみにつぶれぬ。此の石ぶみの建ては間は、かはらぬ此の山荘、思ひいでらるゝ折り〳〵は訪ひたまへとちぎられし標の石なればなり。其の石の見えざればなり。其の石の表には、「澁茶めせ野べに山べに幾里のあはれを見るが此處の御馳走、碧山人」と刻まれたりき。もと、老女の伴れ合ひなりけるが、彼の碧山の仙居の心を慕ひて、都近き桃花流水の奥に卜められたる閑居にして、此の石ぶみを建てゝ、同好の士を待ち、塵外の別天地を語り樂みたまへるなり。我が初めて此の閑居を知りたるも、其の石ぶみの詞に招かれてなりき。翌日我が殊更に重ねて訪ひしも、其の老翁が世外の茶話をよろこびてなりき。それより、日曜日毎には必ず訪ひぬ、たのみて我が塵俗を洗ふ清淨の虚地の如くおぼえてなりき。我が文筆に苦しみたる折り〳〵は、必ず訪ひぬ。我が吟情を養ふ詩神の天上の如くおぼえてなりき。斯くて、三年ばかりを馴れて通ふ程に、一朝、老翁は飄然として、さらぬ人世の別れをとゞめて歸へらず。軒の孤松、頻りに落木の悲風にむせび、庭の若竹、ふりかゝるみ雪の下に、力なくしをれたる頃なりき。

靜に樂しかりし人の閑居は、俄に淋しく悲しき宿となりはてぬ。されど、我れは絶えずとひぬ。志かも一人しげく通ひぬ。いかなる心にひかれてなりけむ、自からも其の心を知らざりき。今もさとる能はざるなり。一日、老女は語りぬ、都の親族の招くも無きにあらざれども、我が身は此の淋しき宿を出づべき心に成りかねたりと。その心は言はれざりしかども、言はるゝにまされるあはれは覺られつ。我れはつげぬ、君が此の淋しき宿に住まずならば、なか〳〵に、我れは、慰むる方なき塵世に、いかに淋しき身と成りはつるならむと嘆きぬ。誠に、我れは、此の靜けき老女が山荘に、塵世の樂士を得、此の淋しく悲しき人々に、我が涙の伴れを得たる昨日今日なりければなり。老女が、門の石の動かぬ間はとちぎられしは、此の時なりき。ありし少女子も、老女があとにつぎて、我が身も此の閑居は去らじ。我が君も忘れず訪ひてよ。亡き父の臨終に、此の女なく

とも、此の宿にかくてあらば、世はいと心安かるべし。まめやかに母上をいたはりつゝ、此處にして安らかに汝が世を送れよ。此の閑居の外は、恐ろしき浮世ぞや。人の膏血を吸はむとする鬼が、にこやかなる人の笑顏して、汝れを招く所ぞや。人の肉をはまむとする鬼が、やさしき人の手つきして、汝れを誘ふ所ぞや。構へて此處をな出でそ。猥りに世の人にな近よりそと、くれ〴〵も遺したまひたればと語りぬ。さらば、我が身も其の恐ろしき世の人なるをと笑ひたるに、少女はいかにしけむ、とみにうつむきたるまゝ、詞なし。老女はうち笑ひて、我が君は其の世の人にはおはさず。此處の松風蘿月を愛して、ひまなく訪ひたまへば、共に住まねど、我が君は此の閑居の伴れなり。我が子よ、さならむと取りなされぬ。にこやかなる紅顏、一入深くたゝへたる色は、其の橫顏に、あざやかに見ゆれど、少女は、うつむきたる顏を、なほあげかねつ何のいらへもなかりき。何にを恥ぢてなりけむ、いかに思ひてなりけむ、されど、我れを其の鬼の世の人と思ひてにはあらじと見しは、我が自負の目のみにはあらざりけむ。老女も少女も、世の人の訪れを厭ひたまひしが、我が行くは、常になつかしげにて待ちよろこびたまひたればなり。我が障る事ありて日曜日の訪れを缺きたる時は、斯くて我が君に訪はれぬ宿になりはつるにあらずやと、馴れし閑居の起臥も、此の日ごろは、心さう〴〵しくて過ぎぬとさへ言はれたればなり。思へば、なつかしき昔よ。さばかりゆかしき閑居の人の、此處に在りしなり。思へば、悲しき今日よ。其の閑居のしるしの石の、此處に見えぬなり。

あはれ、其の閑居の標の石の無くなりたるは、果して、其の人の住まずなりたるしるしなるか。さはいへ、さばかり出でじと語られし山莊なり。さばかり世の人を厭ひたまひし母子なり。さては、よしなき人の訪れを避けむとて、そのしるしの石をも取りすてられしにはあらずや。若しはと思ひたのむ望の糸にひかれつ、力なき足を踏みしめて、山岸をのぼりぬ。見おぼえたる杉の門は、さながらに變はらず立てり。されど、されど、

とぶらひ來ませと我れを待たれし其の人の名札は、取り去られつ。あらぬ人の名の、知らぬかほに殘れるのみ。若しやとたのみし一縷の望みの糸は、全く我れを落膽の淵に沈めて去りぬ。

かき亂れたる心に、ものもおぼえず、づか〳〵と立ち入りたる庭の片隅の東屋、椽に腰うちかくれば、毎時も先づ我が眼を迎へて、陋巷の書齋にかゞまりたる身の、見るまゝに、やがて寛くものびやかにも覺えしめたる麓の千里の見わたしは、今日は雲煙の間に、遠く筑波山の漂渺たる影をさへ添へたり。されど、嬉れしげに待ちつけて茶を煑てすゝめられし老女の姿は、いかにせむ、また見えぬなり。椽にうち仆れて、肱を枕にすれば、毎時も先づ我が耳に入りて、難澁なる我が文筆に苦みたる心を、聞くまゝに、やがて陶然として樂しくもすゞしくもおぼえしめたる軒の老松の琴の音は、今日は、うらゝかなる春風に、一入ゆかしき節にさへ出でたり。されど、やすみたまふとならば、これまゐらせんとて、やはらかなる絹の小枕、いそ〳〵と取り出でゝすゝめたまへる少女の柔和しき聲は、いかにせむ、また聞えぬなり。

母屋の窓近く、今を昔の色ににほひいでたる一本の紅梅、忘るべきかは、忘るべきかは、また見る能はざる今日を知らずして、三年の昔、暫時ばかりとて別れをとゞめしは、此の紅梅の花、雨にやつれて散りがちに見る時なりき。その折り、我が遠く出雲の里の旅寐に出で立つとつげたるに、老女はいたくうち志をれつ。頼む我が世の伴れには離れたれど、我が君の斯くて訪ひたまふあるに、此の淋しき垣の露、さすがに消えなましとだには、我が身を覺えずして過ぎにたるをとて嘆げかれぬ。少女も涙になりぬ。花をも紅葉をも更に待つ心はあらぬ我が月日、唯、一つ、待たれたるは、我が君が日曜日毎の訪れのみ。それも、今よりはまたかなはぬ我が身にてかとて泣かれたるを、否とよ、おん身たちの悲みは、これを限りの別れと思ひたまへばなり、我が旅は僅に三年ばかり、假りそめの別れのみ、この紅梅の二度咲きて三度散らむ頃には必ず歸り來むものなるぞと慰

めければ、來む年をもたのむべき我が世ならばと、老女はなほ慰めがたく見えたるを、さすがに、少女は涙おしぬぐひて、此の花の三度散らん頃までか、さらば、必ずよ、指折りかぞへて待つべしと、三年ばかりと思ふに、やがてはと思ひたのみたる心は、人はいかに、我れは限りなき今日の恨みにこそ。

其の花は二度咲きて、やがて三度散らむ頃とならむとす。我が身一つは、もとの我が身にして、其の人はあらず、その宿は變はりぬ。花よ、花よ、三年の後の再會を樂みに、をしき名殘りをとゞめて立ち出でたる其の折りなりしよ、汝れが下枝の花の雫の、はら／＼と我が袖にかゝりたるが、何んとなう身にしみて覺えたりしは、思へば、花よ、汝れは、我が今日の悲みを知りたりしか。花よ、恨みそ。いかなれば、語らぬ色にのみにほひて、またあひがたき別れなりしを、何にしに、我れには知らせざりしぞ。花よ、恨みぞや恨みなるよ。

泣かぬばかりになりて、木の下にたゝずみてあれば、忽然と出で來て、我が袖をひく少女の姿。あな、おはしてか、懷かしかりき。さてぬいかなれば、門の石は取りすてたまへる。いかなれば、門の名札をさへ變へたまへる。いかにせむとて我が心さばかり徒らに物思せはたまへる。戲れも程こそあれ。さても嬉れしや。さても、嬉れしや、母君は何處にてか、恙なくてか、疊みかけてうち問へば、少女はいかにしけむ、たゞ驚きたるさまして、我が顏を見つめたり。あな、忘れたまへるか、我れなり、三年の昔、此の花の二度咲きて三度散らむ頃にはとちぎりて、出雲へ旅立ちたる我れなり。おぼえたまはずや、いかで、さは驚き給ふ。忘れたまひてか。忘れたまふとは情けなしと引かむとする袖をうち拂ひて、少女はいと恐れたるけしきにて、にげ出でぬ。母屋の方には、二人りばかりの女の聲にて、がや／＼と笑ふ聲す。

狂人にはあらずやなどさゝやく聲に、我にかへりつ。つく／＼と見れば、ありし少女と思ひしは、年の頃も似もやらぬ女の童なり。母屋の障子うち開きて、若やかなる女と、その母にもやあらむ老女とが、此方をなが

めてうち笑ふさまなり。げに、今は知らぬ人の住居なる庭に、我れは案内もなく入りたるなり。昔の人のなつかしさにあこがれて、案内もなく人の庭を踏みあらし居たるなり。我れながら、げに、狂人に似たりけり。主人の驚きもさることなれ。一言謝びではと、母屋の椽に立ちよれば、若やかなる女は、しとやかに膝つきて、よくおはしたまへると迎ふ。驚きたる様子も見えぬぞ、いとあやしき。老女は入りたるまゝ出で來ず。

許容も請はで御庭に立ち入りたる、いとみだりなりきとわぶれば、さてもあらたまりたるお言葉よ、戯ればかりのたまひそといひつゝ、茶よ菓子よと持ち出でゝもてなしがほなるは、いよ〳〵怪し。しかも、女はいと馴れ〳〵しげにて、客人は、彼の紅梅に、よく〳〵深きゆかりのおはすに似たるを、いとねたしや、少しは妾にも分けたまひてといひて、ほゝと笑ふ。狐狸などのたはかり戯るゝにあらずやとも覺えつ。つく〴〵とうちまもれば、さな見つめたまひそ、年はとりたれど、いと恥かしとて、また、から〳〵と笑ふさまはいとなまめきたりや。

此の女、はたして何者ぞ。あやしき事限りなけれど、ありし昔の人の行方も聞かまほしければ、否とよ、さる深きゆかりのあるにあらず、三年の昔の程、親しく通ひたる宿なりければといへば、げに〳〵、美しき娘子の老いたる母君と此處に住みておはしたりとか、妾も聞きぬ。詳しき事は知らねど、聟君を迎へたまへるが、其の人の營みの都合とかにて、此處を去りたまひきときゝぬ。何處とも其の行方は知らず。さても、ねたましや、願ふは、客人、其の昔の紅梅の宿とおぼしめして、今よりはまた此方に通ひたまひてよ。それも、此の姥櫻を見そなはせとにはあらず。麓には汽車も通ひてぞ、何處よりも、お目にとまりたる若木の美しきあらば、お望みのまゝに迎へまゐらせんも、いと容易なればとは、何んたるたはれたる詞ぞや。今初めて見たるばかりの人に對つて、何んたる浮ける女子ぞや。狂人ならずば、白痴なるべし。

兎にも角にも、なつかしき昔の人には似も似ぬ者の宿

となりはてしなり。再び我が訪ふべき宿にはあらずなれるなり。よき程に茶菓の禮をもまたゝめて、急ぎて出づ。女は女の童と共に送り出でゝ、さても急ぎてのお歸へりよまた重ねてゆる〱のお遊びをこそ待ちまゐらすなれ、必ずよ、今春あたりのおんゆかりをも、田舍見物かた〱伴れたまひて、待ち奉るよとは、飽くまでもなまめきたる女かな。聞くも胸惡き心地して、急ぎて門を出づれば、思ひきや〱、來し時は心づかざりき、山ぎはに高く建てられたる御待合の札。志ばしは我が目をも信じかねたりや。

あはれ、變はるをならひの世とはいへ、斯くまでにとは。何處まで變はり行く世ならむ。あはれ、碧山の仙居を慕ひたる人の淸き宿は、遊妓痴郎を待つ汚き俗界と下りはてたるなり。何處まで下り行く此の世ならむ。思へば、限りなくおぼつかなく恐ろしき此の世かな。人は何處ぞ、ありし閑居の人は何處ぞ。いかならむ宿に、いかならむ世や送りたまふ。迎へたりといふ聟の君は、花染めのうつろひやすき世に、いかならん心の人ならむ。來ん年をもたのみがたしとて心細げに見えたる老女は、此の春を何處の空にかながめたまふ。柔和しき少女の手に、恙なくてかしづかれてやおはす。おぼつかなき浮世かな。なつかしき人々よ。

見わたす幾むらの人里、をりから、忙しげに立ちのぼる夕げの煙りの末に、日暮の里の火葬場の煙筒の靜に空しき空にほの見え、何處ともなく風にたぐへ來る入相の鐘數聲、花を肩にせる醉客の袖を送りて、遠く薄暗き野路の末に消えゆく。

## わかれ

大塚楠緒女史

風の通はむ隙間もなく堅くとざしたる部屋の内には、あたゝかく煖爐たきこめたれば、窓の外の氷りたる道の上の寒さを知らず。中に据ゑたる小さき卓には、罌粟の花縫ひ出せる美しき卓掛の上に、二つ三つ咲きたる菫の香の、をり〱に鉢のほとり遠くはなれては、

眼に見えて戯むるゝ天童などの肩に乗りてかのやうに、部屋のうちにそこはかとなく匂ふ。雪の如く白き鳩の翅にブリメルの造花添へて飾られける帽子脱き捨てたる衣裳箪子の上には、ゑび色繻子の針指に、留針いくつか、優しき此部屋のあるじが襟よりや、其ブロンドの髪毛よりや取りおろされけむ。たゞさへ慣ひなる此國の空のくもり勝なるに、廣からぬかゝる町には日の影の入るよしもなくて、緑色の窓掛の常はいさゝか胸のくもりをもうち晴らし顔に長く垂るれど、けふそれさへ甲斐なく、窓の玻璃をさら／＼と撫でゆく風は、雨をも伴なへるにや、まして長椅子に並びて腰かけたる二人は、二人が生涯にまたとはあるまじき初戀の迷の雲に閉ぢられたれば、今はかたみに若き行末の望などをもうち忘れて、たゞまのあたりの悲しみに埋もるゝなりき。盲になれる二人を、黄金の矢もてるエロスなどの。幻のやうにつきまとひ歡びて誘ひ彼方こなたへ手をひきて弄びゐけむを、俄に別れの聲の耳近くのゝしり出でたれば、けふをこれ限りの逢瀬にて、あすは理の光見るべくまなこ明けて、定まれる宿世の縁の敎ふるがまにまに、二人は再びとは逢ふよしも覺束なき別れといふものゝ中の、最ものぞみなき悲しき別れせずばならぬなりき。

男は日本より留學に來ける、名は某とか呼びし。東と西と其血の流れの異なると共に、皮膚の色こそひとつならね、眉目麗しく秀でて才は友どもの噂に著るく、品高く勝れたる生れざまは、いかばかり愛らしき異國の此少女の胸ふるはせけむ、清らなると美しきと此の二人のなからひのあまりにあらまほしうふさはしきに、さまでは人も後ゆび指さで、正しき系統の家に生れて、惡しき、群などに入る少女にてもあらざりければ、男の友どちはなか／＼にかばひて、逢はする事をさへ爲しけり。

泣きてやゐたりし、少女はぬれたる睫しばたゝきて、堪へがたく頭の痛きことやと額おさゆれば、男は立上りて、カミンよりのぼる惡しき氣にやうたれつらむ。窓すこし明けばやといへど、少女は制して、否今更に

二人が中に冷たき風など入れたまふな、我が頭痛きはカミンの罪にはあらで、よべ夜すがら泣き明しつる故にこそ。けふは瞼重くて人にも顔あはせず、とのぼせてか、耳の根まで赤うなりて、唇のいたく震ふを男は見つ。

こたびは延ばし給ふさゝはりも出で來ず。いよ〳〵ホーヘンツオルレン號にてか。さるにても、暇も在さぬ中より、よくこそ音づれ給ひつれ。今はよく〳〵思ひ斷らめはべりつれば、別れし後病などの床に臥すこともあらじと思へば、心易う在せかし。とさびしけに洩らしたるほゝ笑みは、涙よりも痛々しく可憐なるに、男はものも得いはで、艶ある褐色の髮のこぼれかゝれる肩を抱き緊めつ。

思へばゆくりなき事より慕ひまゐらせて、君がみ國人のあまた指さす中に、君が名と譽れを傷くることをも、必ず來るべき悲しきかゝる日のあることをも、全く忘れ果てゝたゞ眼のあたりの樂しさにあくがれゐはべりしが、今こそ夢なりしその夢の醒むるにはべれ、似氣な

く嬉しき夢なりしかば、たゞさめがたの惜く苦しきのみ。然思ひ斷めんよりは術もなからむ。此長椅子に君の倚りたまふこともけふを限りなるを。あすよりは如何に歸らぬ昔を戀ひて、われ獨さびしく坐りはべらむ。過ぎし逢瀨の彼の時このとき、金も位も欲しといはゞ人に遣りてむ汝れのみは、といひ給ひしも此處なりしを、別れといふものゝ世にあらずばと我がいひしを、さる忌はしき言葉口に出すなとわれを叱りたまひしも此處にては待らざりしや。胸にしみて殘る御ことぐさもひとつ二つにてはあらぬを、さては別れじ離れともなしと思ふ念のうち募りては、乘り給ふべき船のたゞ今の間に碎けて消えされとばかり、まさなき幼な心さへ出ではべり、と涙のほろ〳〵と落つるを、まぎらはさむとにや鉢の菫の花摘みとりてさしうつぶく。

男はいふ。友どもの中にも勸むるがあり。斯ばかりに思ひ思はるゝ交なるを、色にのみ溺れたるなどの類にてもあらねば、我國へ迎へとりて正しき結婚の披露してむと、幾度も故郷へ文遣りつれど、さきつ日もいひし

如、未だ頑なる昔固氣うせぬ母兄をはじめて、親族などのうべなひげにもあらず、これのみは許し給へと押して請ひやれば それのみは思ひ止まれと押し返し來るのみ。このうへは歸國してのち、くちづから請はゞやとひとり胸に疊みてあれば、さな力落し果てそ。少女け、否、否、と首をふりて、さる泡々しき果敢なごとは的にはしはべらじ、もし其時其願の叶はざらむには、また如何なる重なるなげきせずはならざらむ、否、いな、われはよく斷らめ居はべり。捨てられて別るゝにはあらねば。さなるべし、捨てられて別るゝにはあらねば、とさしよせたる額に、男は情にもえたる唇を觸れつゝ、さならずして如何にせむ、二人の戀はとこしへに契りたるものなるを、隔てむとする海山の知る事かはといふを、少女は嬉しげにうなづきて聽きつ。

君もし妻君を迎へ給ひなば、御文にそへて必ずその御寫眞給はれ。我愛する君に添ひたまふ日本の美しき優して君よと、わけくれわが邊に置きはべるべし。いな、ひと言をそへずば、思ひ誤りやしたまふらむ、ゆめ卑しき妬みごゝろよりにてははべらず。君の妻むかへたまひしとて、あながちに我戀をはづかしめ給ふものとは思はねば、船の着かむ日、日本の港には君が母君はらからの君、君が師君が友、輪をなして君をとりまき喜び壽ほぎまさん中に、ひそかに君を人よりも深く待ちゐたまひし美しき姫たちの幾人か無くてやは。やがてそのうちのひとりの君と、新婚の旅のはじめての夕べ、生涯を誓ひたまふ眞心あかしあひ給ひての次には、四千里のよその空に、斯かる少女も住ひけり、と我ことをも語りたまへ。それ聽きて君を責め君を怨み給ふ妻君にてはよも在さじを、君を思ひて君に逢ひ給ひし君ならでは、君に逢ひて君に別れしわが悲しさを推することは得し給はじ。君と御中の睦しきにつけて、わが斷念の清らさをほめあはれみたまはむが、せめてもの、と辭を切りて、あな見たまへ、膝の上の菫の花びらを、いつのまにあれはむしりすてけむとまさなぐる時、入口の戶をこと〳〵と敲くものあり。誰ぞと少女の明けにゆきて顏さし出せば、客人の御宿より御便の來りて、此の狀

渡したまへとて歸りはべりと、家婢の告げに來しなりき。男は受け取りて、こは日本の公使館よりのなり。至急の用事あれば直ちに來よとあるを、今より往かずばなるまじ、往かば何くれと用事のひき續きて起るべく、此處へはまた來るいとまはあらじ、さらば別れずばならじよ、と少女の顏見つむれば、憎き鬼などの追ひ立つるやうなる別かな、未だいふ事も聽くことも多かるを、はや往き給ふかといふ〳〵、唇嚙みしめて堪へむとすれど泪のとゞまらぬを、苦しげにうしろむきて壁にすがりつゝ顏を隱しつ。船に乘りたまふ處まで、われも御見送りにゆきはべれど、よそながらものに立ち隱れて、かならず御側へはよりはべらじ、あまたの人の中にて思はず不覺なるはづかしき別もせば、君の爲めにもうしろめたからむ、そを許したまへ、さらばよわが愛する君、恙なくませ、且とこしへに〳〵われを忘れますな、と其儘たふれもやすらむと危ふまるゝばかり、壁に支へたる身の震へぬ。男は氣遣はしげに添ひて、強ひて我方へ對はせ、ことばにも似ず今更にさばかり心弱くては、別れし後の氣遣はしさよ、斷らめたるといひしにはあらずや、別るとも文といふものあり。折よくばたゞちに迎へ人や送らむ、健かにてあれ、其涙ぬぐはずや、さな泣きそ、と別の脈のうちせまるが中に、二人は離れがたなげなる悲しき悲しき接吻ながくしつ。

はてしもなくては、君のさまたげとやならむ。さらばと少女は男の腕を拂ひて、うしろより外套を着せかけ帽子を渡しつ。ことばは無くて戸口に立ちて二人は顏見交はしゝが、階段の下には人やあらむ、さらば此處にて此儘に別れまゐらす、今ひと度と終りの接吻をと少女のさし出したる頸を抱きしめて、男も女も涙のなかにある程の情此處に盡しゝかとばかり。

立ち別れしや否や、男は覺束なき足元の苦しげに、振向もせで楷子を下りゆくを、少女も強ひて身を退きて、戸を閉しぬ。窓をも明けむとはせざりき。町には往く人のいそがしげなる中に、戀人ひとり殘して日本へ歸る男の、亦其窓仰がむともせで、風は吹きて雨は降りに降りけり、ベンドレル町のくれがた。

# をさながたり

佐々木雪子

## みい坊の手紙

お年よられたお祖母様は ふく／＼してお座布團の上に、お父様と向ひあはせにおすはりなされて、御汁をかへておゐる間 お膝のそばにおもちやを取ちらして、しきりと腕白をいふてをる小さい弟の、頭や手などを撫でさすつて、さも嬉しそうににこ／＼と笑ふてお出になる。折々は御自分もまたをかしい昔がたりに、たれも／＼面白がらせて、それ／＼働かねばならぬ毎日の仕事をも、心よく進んでとるやうに、お仰います。一躰お祖母様はおやさしいかはりには、又お行儀なんとはむつかしく、小さい弟はよくお小言をきゝます。『大分今朝はおとなしかつた故、姉さんや、何ぞやつて』とお祖母様から、おねだりが出ましたので、何よりも好なかすていらを、紙へのせてやりました。お菓子皿をしまひながら、見るともなしに壁の暦を讀みまして、『お母様、もういよ／＼入梅で御座いますよ。どうか致すものだけは、仕舞いたう御座いますね、』と云へば、『左様さ、おまへ昨日といたものを、よく見わけて、加代に間違はぬやうにいひつけて』『はいお母様、まことにいそがしいものゝ、此比は裏庭の方も青葉が繁つて、鳥は歌つてきかせますし、何だか氣持がよう御座いますと、』折から『お嬢様お手紙が』と差出すのを取上げながら、『そう／＼お祖母様、加代が着てゐます袷は、此間加代が縫ひましたので』『お嬢様およし遊ばせそんなことを御風聽遊ばさいでも』『よいよ』『おゝ／＼、袖口もよく出來てゐる』と、お祖母様がおほめ遊ばす時、『大分うまく縫へたやうだな』と、今まで新聞をのみ讀んでおいでなされたお父様の、不意におほめなされたので、皆思はず吹出せば、『ほんとうにおく様、お屋敷へまゐりましたおかげで、どうやらかうやら、少しは針がうごくやうになりまして、その上毎晩手習をさして頂きまして、國のお袋がどのやうにか喜びますことで』と、獨で嬉しそうに云うて、部屋の方へ行きました。手に持たまゝ

の手紙を押開けば、『まあ〳〵みいちやんの手紙で』と云ふを聞きつけて、やつぱり孫にあたるみい坊は、同じく可愛いゝといふやうに、『どれ〳〵お見せ、ほんにあれが書いたことは。このまあゑらい字の讀にくいこと、姉さんでなければ判じもつかぬ』お母様はそばより『やう〳〵八つですのに、感心ですね。何と書いてあるのだへ』『まつて下さいませ、大分字を讀入れてゆかねばなりませぬので、やつとわかりました』

『一筆申上候。お祖母樣御機嫌能く候や。みい坊は變りなく候。扨みい坊の家の前を、朝から晩まで、雨が少し位降る日でも、お母さん〳〵と云て、時々は臺所へ立つて何かおくれと云ひ候。皆に馬鹿と云はれ、泣かされて、いつでも塀にくつついて泣て居候。みい坊よりは餘程〳〵大きい子にて候。お母さんが違つてゐてかわいそうにて候。此間家のお母様と、おばあ様の御家へ出かけます時、被布をきて車にのらふとしてゐましたに、向から來て、水たまりにすべつて泥をはねかし、菊の摸樣をまつくろにして仕舞ひ候。其時みい坊が馬鹿と云ひ候へば、大變お母様に叱られ候。そうしてその子が、またみい坊を馬鹿と云ひ候。お母様が人の事を馬鹿と云ふ子は、自分が馬鹿の子なのだと仰り候。これからおとなしく利口になり度、お母様によくおわびをして、その子にも大事の繪艸紙をわけておやまり度候。姉様も何かきれいなものをやつて下され度願上候。かしく。』

まあ可愛い感心だことゝ、手から手へその手紙を取かはしてほめるのを、何と思ふたのか小さい弟は、萬歳〳〵プップクプップップクプとラッパを吹きならして、止めても〳〵なか〳〵止めませぬ。

## お隣の猫

湯本細工の針箱に緋縮緬の針さし、五色の房の附いた鋏、糸巻も三つ五つ、皆お嫁に入らしつた姉様のお土産の品、是非ものさしが入用とて、小姉様の學校用のをもつひにゆづりうけて、いづれも〳〵雛嫁さまのお道具とも申さんものばかり、落ちなく取そろへて、順よくお

きならべられまする。扨そのお嫁さまは、やつと七つの濱ちやんと申すお子です。折々下の引出しから、お手玉なんどを出して、いたづらをして居ますのを、傍に居る乳母は、針を止めるあいま〳〵に見ては、『孃ちやま又おいたで御座いますか。今日こそは縫あげて、母樣にお目にかけ遊はせと申しましたものを、丁度お坊ちやまのお幟の立ちましたわくる日からで、もう明日は月がかはりますのに、乳母やが恥しう御座います』と叱られて、しぶ〳〵ながら手を動かし初めます樣子をながめて、それでもまあ、自分の申すことはおとなしくよく聞てと思へば、主人とはいへ、とう思ふても人の產しお子とは思へぬ程、可愛ければ、今も今まづ愛らしさが先になつて、『ね孃ちやま、もう一遍赤い糸でお縫ひあそばせ。さあ〳〵ぢきで御座いますよ。母樣がどんなにお喜び遊ばして、御褒賞は何で御座いましようね』『乳母やあてゝ御覽』『いづれ孃ちやまのお好なもの、お人形か、お簪か、どうもむづかしい』と、いろ〳〵になぐさめはげまして居りました。『ね乳母や、わたしや、おとなりの猫の子ほしいのよ、もらつて來ておくれ、ね乳母や』『またそんな事を仰しやいます。昨日も伺ひましたけれど、もう一つほか殘つて居りませんから、又ぢきに出來ますから、其時にきつと差上げますとお斷りで御座いました。御無理を仰しやつてはいけませぬ』『でもわたしほしいんだものを』と、しきりとだゝをこねてゐますけれど、一向に聞入れぬのを見て、『この鈴をつけて、此切れで首玉をこしらへてやりたいんだけれど』と、小さいながら愚痴をこぼしてゐますのを、なほそしらぬさまで、たて褄のあたりをくけて居りました。果はかんしやくをおこして、何かきりこまざく鋏の音ばかり高くさせてゐましたが、何時の間にか椽側の所に立て、『あら小さいおねずが、又あつちへいつた。お出で〳〵こつちへお出で、來た〳〵』、乳母や何かおやりよ』と、けたゝましい聲に驚きながら、今まで氣をとられて居た仕事をすてゝ見にまゐりますと、見るからに涼しい梅の木の下を、まだほんに小さい鼠かちよろ〳〵とかけて、直ぐそばのつゝじの木のかげ

にはいつては又出て來る樣子が、何ともいへぬをかしさに、乳母はお米を持て來て、そつと蒔てやりました。けれど氣味わるそうにおとすさりをして、何か考へでもするかの風に見えるのを、しきりと笑ひ興じてゐます折から、あ、さても〳〵何たることか、孃ちやまはゑんの板をふみならして、じだんだふんでくやしがり、『乳母やぶちが〳〵』と泣聲なるをもてあます乳母も、共に腹立たしげに見やるかなたには、大きな猫が、おそろしい顏つきして、うなりながら、やがて飛びかゝつて、まだちう〳〵と苦しがるのを、其まゝくわへて、しかもゆう〳〵と垣を添うてゆきましたが、やがてお隣の家では、『あらぶちが〳〵』と云ふ聲がしきりと聞えました。泣きじやくりをしながら『ね乳母、あの小さいぶちも、今に大きな猫になるのかね』『え、孃ちやま、又おもしろいことを。それは何でも、小さいからだん〳〵大きくなつてまゐるので御座いますが、猫も餘り大きく、裏の家のあのしつぽの長いのゝやうになりますと、氣味のわるいもので御座います。じやれたりなんか致しまして、小さいうちがどんなに可愛う御座いましよう』『いゝえ、わたしはあんなぶちみたいなのは嫌いだハ』『オヤなぜで御座います』『え、でもあんなかわいそうな鼠なんかを、切角遊んでゐるものを捕まへたりなんかして、憎らしいことよ。あたしはいたづらな、意地の惡い猫はきらいよ。今にもつと〳〵いゝのを、伯母樣のとこから頂いて來るからいゝ。ぶちになんか、首玉なんかもう〳〵やりはしない。この鈴も、ね、乳母や、ね、乳母や。』

## 安房の浦づと

印東昌綱

### 船のうち

ぬめやかなる春雨のうちに、夜はいつしか明け渡りて、一聲の滊笛と共に大川を出てゆくは、東海丸の一號なり。

特別室の片隅に、メルトンの半外套をまとひ、焦茶色の

中折をかぶりて、一人默しをれるは、今しも艀のもと迄一少女に送られし若者なりき。

己れの汽船會社に至りし折は、時いまだ早かりしを、かの少女は既にありき。我より少し後れて若者は來りぬ。始めより送るべくはた送らるべく契ありつるなるべし。男も女もいと親しげに、待合所の腰掛に時久しう何事か語りつゝけゐたりき。

女は廿才程と覺えぬ。銘仙中縞の小袖に、紫繻子の帶、藤色縮緬の半襟色とり善く、華美ならぬ扮装のさのみ目にはたゝねど、そか着附の上手なると、銀杏返しの意氣に結ひなされしとは、思ふに葭町近く住居する商人などの娘なるべし。

やう〳〵入りくる人數に待合所も犇めき渡りて、二人の話も果はと絶えたりしが、やかて鳴り響く鈴の音につれて、無言の間に別を惜みたりしけはひは、人の上なれど何となうあはれに覺えて、棧橋のほとりに立ちしかの少女の顏色の今も面影にぞ立ちぬる。

百人餘りの乗客の中に、唯一人しかも故ありげなる少女に送られし若者は、今や此船の中なる大方の胸の中に、くさ〳〵の想像を引きおこさしめつゝありぬべし。

常には人の多かる甲板の上も雨ふるまゝにいと靜にて、此室の内も乗組の數の十人を越えねば、今日こそは特別室の名も實にふさはしかるべけれ。

疑問の中に圍まれたる男は、容貌みにくからざる廿四五の色白にて、かのコートの紐鈕をはづして時計を探るまゝに、龜甲形の大島小袖と、鐵御納戸博多の羽織とは見えぬ。持てこし前の荷物は合札とせしなるべく、此所には手頃の鞄一つのみなり。それに隣れる三十近き男は、二三の新聞を前におきて、やゝ暑けなる襟巻を更にまき直しつゝあり、赤銅の近眼鏡をかけ、いさゝか髯をのばしたるが、頬のきはだちてこけしは、轉地療養などに赴くにや。

それと斜に座して、折鞄の中より書類らしきをとり出せるは、北條なる汽船取扱所の某なり、館山に歸るといふ三十五六の丸髷とは、知れる中と見えて折々言葉を交しつ。

黒の山高をかぶり、二重廻を着し五十ばかりなる、早くもわりでとうでてたうへ始めたるは、遠くより車急かしゝ人なめり。

室の眞中にクットゥ敷きし三人つれあり一人は背廣の肥え太りたる、一人はやゝ瘦ぎすの頭少し禿げて、古風の道行を着たるが、衣服の裾を端折たるまゝすはれをれば、肉色の瓦斯股引をはきたるとは云へ、膝頭の志は〳〵道行をもれくるもをかし。こは銘うちてもよき商人なり。今一人は十八九の自轉車出だち、白無地フラン子ルの折襟襯衣に、淺黃色の子ックタイを結びたる、これやさきに見し車の持主なるべし。我と並びて腰かけたるは、安房なる郡書記某なり。千葉に物したる歸りなりとぞ

是等を今日の役者として、此狹き一室の中に、人皆打寛ろぎつゝ、誰よりともなく話の湧きたつ程に、芝浦もいつしか過ぎてやう〳〵速力も早まりゆくめり。

役者の中にも、那古に行くと云ふかの三人つれは、まづ何事か打合せたりき。役場に赴く事、調印の事、時間の、あるまじき事など我耳には入りつゝ。思ふに年若き男は父の代理となり、他の二人は助手とも云ふべき位置に立ちて、かの地にむかふなるべし。さては隣の君の職掌柄とて、心をよするけなるも我には志るくて。

店頭は人々の方にと轉じぬ。かの二重廻も折鞄も相應じて盛に語り出しつ。金融のつまりたる事、某は幾箱の穴を明けたりし事、某銀行内に僞造手形の近くありし事、何株は何圓方引下りたる事、何株の新株拂込も近づきし事、五錢白銅に贋の多く生じたる事、某は新橋にて金時計をすられたりしが、探偵の方よりかの社會の棟梁へ、即刻交渉のなりて、若干の手數料にて手に戻りたりし事、さては狂犬の話、汐干狩の事など打しめりたる外の方に引かへ、室の内のいよ〳〵賑はしうなりてし頃、ボーイは茶と菓子とを持て來ぬ。など今日は赤帽をかぶらざるかと問ふに、雨の降るに濡らすがわびしくてと答ふ。洋服のみを着て赤帽のなからんには、汝もお客とまちかへられんと云へはいかで〳〵と笑ひつゝ出てゆく濱言葉のをかしきに、催されて人々も笑ふ。

茶をすゝり菓子をたうへて、猶語りつゞけんとする背廣、巻烟草とり出てマッチつくる高帽、もてこし菓物にナイフかくる近眼鏡、人々のけしきを見るともなく見ぬともなきかの中折など八人は八人とす、かたみにかはれる趣をあらはすなりけり。

今日は今に歌のいでこず。こは大きからぬ我目をあまりにおしあけて、人々の上をのぞけはなるべしと、しひて目を閉ぢんとするは金天狗、ヒーローさてはのぼりもやらぬ雲井などの、低き天井のうちを我は顔にゆき通ひぬる、煙草嗜まぬ身にはいと、堪へかたう、小さなる窓あけぬれどやがて、出づべくもあらねば、折柄の雨やみを我は一人甲板にと立いでぬ。

遠方の雨をもれて薄墨色に見渡さるゝは、鶴見神奈川あたりの松並木なるべし、かしこを過きゆくらん汽車の窓よ驛々の上り下りを、鋭き觀察の筆に寫しゆかんには、如何に面白くはた如何に奇異なる圖案の多かるべく、いかで今日の靈岸島の類ならんやは。

今は世になき友の某と二人、一とせ箱根に遊ぶべく新橋を發しぬ。横濱にて乘りたる紳士某は、亡友の親しき友にて、其當時某商會に入りつゝ敏腕の聲高かりし人なりき。我は初對面の事とて萬に心用ひたりしを口輕き某には我身もいつかのせられて、車中思はぬ僥倖を得つ。さて停車場の數も打過きて大磯に至りぬ。折しも夏の暑き盛とて、かしこの雜沓は一際烈しかりしが、新たに我等が車室にと乘込たるは、夫人令孃などの七八人つれなりき、夜會島田銀杏返の樣々なりし中に、衆に秀たる容色のいと若き丸髷の君ありき。我は何の心もなく彼方を見てありしに、かの夫人は席定まると同時にこなたを見いでたる一刹那、あやしうも見る〳〵色は動きつゝ、髮さへ震ひたりしが、遂にえ堪へずやありけん、向ひにありし供なる女の間にと座をかへて、しかも猶恐怖の色を著はしたりき。我は彼の夫人が觸れし視線をそとこなたにかへしたれは、不審はいよ〳〵我胸をさしにけり。そは今の今迄も快活に物語り居し横濱よりの某、のこれはた唯ならぬけしきにて憤然窓のもとに顏をよせつゝ、一人暑き日影をうけゐ

たり。さては云ふ可からざることの此間に蟠れるならんと友にさへ問ふべき場合にあらねば、我も默するが中に、ほうむられつゝも、此結果の如何になりゆくかを深くあやふみて、とやかくやなと不安の念のもえゆかんとするほど、嬉しうも國府津には着にけり。沼津と迄といひしかの新しき友を一人殘して車をおるれは、丸髷の一むれもいそき我あとにつゝきたりき。あゝかの友は一人其身の外に、如何なる思ひをかのせて沼津には向ひたりけむ。かくて湯本に至りし其夜は、かの一刹那の疑問をたゞすべく與へられたる夜なりけり。

あはれ五年のかたき契も、一朝黄金の光にまとひ入りたりと聞く其人其家よ、まとはせ入れたりといふ其家其人よ、これや吾人の性なるべきか、世は皆かゝるか、愛の望、黄金の望、これ皆大なりかつ深遠なり、されは天の指定せる其極に達するも猶已をしらず世を省みす、益進めは益遠く、我希望にはよし人をおとすとも達せしめんとする、其希望達すれは其心いよ〳〵冷やかに其情いよ〳〵淡し。あゝ我世はとこしへに、愛を黄金とを伴なはしめさるにか。我は堪へかたし胸いたし、我は又例の苦しきやくなき思に引き入れられんとするにか、忘れん〳〵と急き内に入れは、室の中の樂しけなるに只一人、我思ひ煩ふが如く、物思はしけなるは、かの若き人なりき。己が心にのみしか映するならんか、否さにはあらし。

郡書記は例の笑ひ交りの物語に、さのみをかしからぬ事柄も榮あるやうなり。語れるは房州の地勢より其産物に及び、はては風俗舊跡など船の安房近うなりゆくまゝに、手馴れたる、説明はいよ〳〵其境に入るなめり。

とかくして船は金谷に着きぬ。此處にておるゝ人多し。今日のごと靜かなる日にも猶ゑひたるにや、艀にうつるやがて額押へぬる女あり。花見歸りらしき赤ゲットウの五六人もあり。背おひたる油紙の包にこそ、孫への土産は入れるなるべけれ。

道行と背廣の二人は、此處彼處の景色をしきりに、稱へぬるゆかしき、心ありげにてをかし。

鋸山に石切るらむ男らよ、いつこの岩陰にか我此船を見つゝあるらん、波打よする浮島の老松、去年登りにし富山の頂、三とせ前遊ひし高崎の温泉宿、さてはさゝれ貝拾ひたりし豊岡の濱もやう／＼過ぎて大房岬にとかゝりぬ。

ボーイは入り來りて人々より切符うけとるに我も渡しつ。いつも艀のおそきは船形なり。那古寺は目の前と爲りぬ。かの三人も此處に別れを告けて出てゆくあとより、我心もちひたりし主人公も立出てぬ。彼は此六時間の長きを只一人一言をもましへずして、今ぞ出ゆくなる。我は遂にさぐるべき機會を見いてさりき。

折わるうも降りきぬる雨に、人々も袖ぬらさしと騷くあり。見るが中にちひさくなりぬる艀舟よ、を暗き空のいづこをあふぎ、を暗き波のいつくを見渡して、彼は今何をか思ふらむ、知らず彼の少女が上かあらぬか。

ふな着き、

一番の艀船いづる頃、陸には數多の車夫、番鬮を引きはじめたり。今日も濱近き友のもとを訪ひて歌がたりに時をうつし、今しも晝食ををへつ。此宿の主人は汽船會社にいでて、晝のほどは、五つになる娘と若き妻とあるのみ、二階のすべては夏毎に我が友の借るべく定まれるなり。

今日は鯛のかゝりしやうなりと。友は双眼鏡を手にして、後ろの窓にたち、沖の方をみやりぬ。玩弄の帆前船を赤き絹糸もてつゞりゐし弟の君、八犬傳を手にしたる姉の君も一つ窓によれり。この姉弟は友の愛子、また吾ための幼き友なり。

お孃樣と可愛ゆき聲して下よりあがりこしは、彼の五歳の子なり。見せてやらんとて共に窓によれば、和田通ひの馬車、喇叭したゝかに吹きならし、茶屋／＼の腰掛には、煙草盆とりかへなどす。

廣からぬ窓に集りたる顔には、一つの双眼鏡此方彼方とめぐれり。外の方よりここを見ん人の何とか思ふらむ。我等もし外にありて、見られん位置にたゝば、映きものにあらぬを、二階のめがねなど、筆はやき人の葉書集にいださんもしれず、心し給へといへは、否何かあら

んとて友は笑ひつゝ猶見る。

艀船やう〱近づくまゝに、渚につどふ人多くなりぬ。海水浴の男も女も此濱にては用ふる編笠の、僅かの紐にもなほ、赤、白、桃色、紫と白とより合せたるなど、大かたは人々の心々をもあらはしつ。

待ちわびし人の影を見つけて、打笑もあるべく、迎へたる友の美くしく化粧したるに妬ましう、とく黒くさせてんと心ひそかにはかれる少女もあるべし。三々五々、迎ふる人、迎へらるゝ人、數もしらず。こゝの濱邊も十年前までは、藁葺の茶屋二三と、切符賣る家とのみなりしを、今は一つの海岸町となりて、年と共に北條浦の名世に知られゆきぬ。

襤衣一枚の赤黒き男、例の紐つきたる竹を砂にたてめぐらし、はしけ賃をと呼ふめり。

鞄片手に財布とり出す五十あまりの紺絣、つゞいて在方者一人、千倉あたりのあやしき料理茶屋にゆくやうなる女二人、それの葛籠を肩にせる男、思ふにかの社會の口入なるべし。羽織きたる人、きざる人、濃き一重、はでなるゆかた、第一の艀船は辛うじて數多の人々を、やけたる砂路にうつしぬ。

第二の艀船の着く頃は、表通りの窓下とみにさわがしう、車引くどちが、熊、吉のよび聲たえまなし。我等もかの双眼鏡を裏窓におきて、更に視線をこなたの窓にうつしぬ。

ヘルメットに色どりよき脊廣の紳士は、左手に花形の小鞄、右手に何かの瓶二本さげつゝ、折つれし十歳ばかりの子に果物入れたる籠と杖とをもたせたり。

幼き兄姉をさきに品よき夫人の、從へし女も一人ならず、つきそふ書生のもてる鞄とつゝみとを請取て、頻にぬかづきをるは、某旅館の半被きたる男なり。

氣のきゝたる商人體の四人づれ、身のまはりも金目ものらしく、船にて傾けししるしの猶醒めやらず、威勢よく車つらねゆく、さしづめ今宵は御神燈への使たちぬべし。

都にては海老茶袴はくべき同じ年頃の少女二人、目にたゝぬつくり奥ゆかしう、四十あまりの柔和なる伯母

らしきと、茶店にいこひゐたるが、合机の荷物を持てこし車夫の、そをつむ間に、塵多き一杯づゝの茶は、銀貨とかへられたるべく、車をあとに從へてむつまじげにわりきゆへ。

富士詣でのかくさ十二三人、かゝる人の大方は一種のたへがたき匂あれば、船の中にてさこそいとはれしなるべし。

いつの間にか來けん、向ひの茶屋より後り毛かきあげつゝ車にのらんとする女、中肉の色すき通るほど白う、はたちの歳三つをはいでじ、銀鼠のあかしに、御納戸に絽の打合せ、長襦袢の墨繪はひつつめのいてうがへしと意氣をきほふべく、いづれは浮川行のあだもの、ゆき〱て末ははかなきさすらひの身よ。一たびはゑめるが如き水の流に、清くうつくしき姿にやどしゝ春もありけんを、浮世の罪か親の罪か、みづからさそひしあやまちかなど、思ひおよぼすもいらぬたのみなるべし。さてはたのまれぬ世に猶たのみある何とかいふ匣の、今日にもあとをおひて漕ぎつくなるべし。櫂棒をあげし時果報者と口たゝけるはあふれし車夫の一人なりしや。

禮々しく路中に挨拶のぶる女と女、せわしげにかけぬけゆく中學生、バナマのあとに、とかくの品さだめ高き夏外套も車つらねゆく。其あとより大きなる犬も走りゆきぬ。

是來り彼さりて濱邊もやう〱靜まりゆけば、身には暑さにはげしうおぼえつ。

罪深き此關所を越えにし幾多の人よ。今はたいづこに何をかなせる。糊こわきゆかたに風呂場案内さするもあるべく、とり敢ず電報かくるもあるべく、風入よき二階にビールのむ人、西日さす下座敷の暑さにわぶる人、ふしあはせなるは宿とりそごねて、日中を車に挽き廻さるゝもあるべし。思へば旅の世の旅の宿りよ、暑きも寒きもしばしがひまの宿世、あはれうたゝねの一時にも安き夢は多からぬをなど、あらぬ方へ思ひのはせゆかんとするほど、かの帆前船はうるはしうできあがりて、弟の君は裏の川へと行くに、かんちやんもと幼なき

子のいふを、姉なる君のいざと負ひて梯子おるゝに、我も友もさそはれて、暑き濱邊にいでぬ。

さびしき夕べ

まちわぶる都のたよりは、今日もつひにあらず。あまりにさびしき夕べなるを、旅宿の窓のもと、語らむ友もなし。ふと取り出でたるは、人々の寫眞なり。常は心にとめざりしさへ、あはれなる心地す。

白の組襟に白無垢の二枚下着、上には黒を重ね、髪を夜會に結びたる手札形の半身こは都なる藥師なにがしの夫人なり。交際上手にて、二人の愛子をさへ持ち給へるものから、折ふしの歌文の上に、厭世觀の多くみゆるはいかゞ。此程の文にも、さいつ日より又例の頭重うて、樂しき思は更にいでこず。浮世の芝居にはほと／＼なやみ侍るを、海山の境こそなつかしけれ、などありき。さま〴〵考へゐたまふにや、夏はとく姉弟の子たち從がへて渡らせ給へや。去年のごと涼しき樓上に、面白き御物語承らまほし。

海軍少尉の服つけたるは、高雄艦に職を奉じつゝある友人なり。此友と相しりたるは、君が肋膜の病にかゝりて此處に轉地せし時よりなり。かの快活なる軍事談は今も思ひ浮ばれて。

六年前の正月に、兄君と二人、江木にて寫したるがあり。兄君のかけゐ給ふ近眼鏡よ、今もたえず、或は棚の上に、或は本箱の中に見失ひて、探し求むと騷ぎますなるべし、さては例の鼻の中ほどにかけ、指もて上に押しやり給ふ癖も、やみまさずやなど、をかしうも浮びきつ。此處には我も同じく袴つけて腰かけてあり。その袴のつけざま、又肩のあたりなど、今にも高砂やと舞ひいづるやうなりと、此寫眞を贈りやりたる時かへしにわる口かきて來りしは、我をさなき時かの道に入りしをしれる其の刀自なりき。

垣根見え、飛石見え、木立見ゆる庭に、今年廿歲になれる姉なる人を頭に、四人の妹らの並びたる、こはこの北條なる病院長の愛子たちなり。

手札形七分にうつれる揃ひの衣つけし姉妹二人の君あり。姉の君は萬にあどけなきけはひにて、しかも愛ら

しき醫の、年よりは下に見ゆるに、妹の君は落付たる性なれば、大方はとりたがへられつ。二人共に年頃わが那木の門立ならされしが、姉の君はすでに某法學士の妻君となりつ。妹の君は今もたえずいそしみゐて、才のほども人々に立まされしとぞ。惜むらくは其父君の、早く世を去りまし丶事なり。

嘗て病を赤十字社に養はれし頃、おくられし、年若き某伯爵の、禮服すがたあり。君は政事經濟の學を究めゐられしが、今はいかにかちはする。世才に長したまへる君よ。やがては某院の椅子にたちて、あげつらひたまふなるべし。

姉君の幼き時リオンにて寫したまへるあり。裾短かなる服をつけ、椅子によりかゝりたるさまの、田舍人の目にはことやうなるに、誰も〱西洋人ならんといふもをかし。

今は北海道にある友の、三とせ前の秋、暫し兄君の家にありけるが、をりしも九月十三夜の日なり。同じ窓に机ならべし我と從弟の某と今一人と四人、玄鹿館にてものしたるあり。かつて兄君のよみたまひし、雪ふかき北の海べに一卷のバイブルもちてゆきし人はも、とは則此友の上なり。降りにふりしく雪の中を、君はしも、道の爲教の爲に、いや進みに進みゆくらんか。

ピアノに秀たる君の、銀杏返しにゆひ、薔薇の花を手にして、例の笑をふくみたるあり。其家とは我父母の、故郷にいまし丶頃よりの中らひなりき。されば己れも幼き時より知れり。何町の角にて、犬におはれ泣きゐたまひしことなど、昔話のいでゝはよく笑はるゝ事もあり。君は古くより小さなる人形をいたく好みて集めゐ給ひしが、今もかはらでおはすらんか。見たきは手箱のうちなりけり。

埼玉なる親しき友と二人寫したる、プラチナのカピ子あり。此友は今年三つになりし、種子と云ふ愛子あり。そが寫眞を必ず我方に送りくべく契りあるに、今に其儘なり。かつ折々いだす文の返しだにもなし。筆とるに物うきさがとはしるものから、我旅窓の徒然なるに、さりとて葉書の一ひら、などさはかたかるべきや。

# 花嫁のゆくへ

コナン、ドイル作
左川散人譯

シモン卿の結婚、其奇異なる終局に及んだことに就て上流社會の取沙汰も已に打絶えて久しくなつた、風評の材料は新に出來、更に痛ましい話説に氣を惹かれて、此四年前の活劇のことは善惡なき人の口にも上らなくなつてしまつた、されど此事件の眞相はまだ世間へも知られない筈であるし、且は余が親友なるホルムス(私業探偵家)が事實の探索に與つて大功があつたのだから、此奇らしい事件に就て何か少し書かなくてはホルムスの傳紀が完備しないのである。

余が結婚する二三週前の事で、まだベーカー街でホルムスと同屋に棲居して居た時の事であつたが、或日午後の散歩から渠が歸つた時卓子の上に渠への手紙が來て居た、天氣が俄かに雨氣を催し甚く風立つて、アフガン從軍の紀念として余が脚部に存留つて居る彈傷がしつこく痛みだしたから余は終日閉籠つて居た、一つの安樂椅子に軀を置いて一つのへ脚を投げ出し周圍へ新聞紙を雲のやうに取散して居たが、到頭新聞にも厭き果てゝ投げ遣つてしまひ、卓子の上の手紙の封筒の大きな兜飾と花押とを見遣りながら我友へ此手紙を寄越したはさても如何なる高貴の人だらうかと思つて居た。渠が室に入るや否や

『玆へ大變上品な手紙が來て居る、今朝來た手紙は慥か魚屋と稅關吏とのだつたなア』

ホルムスは笑ひながら『さうだ、僕へ來る手紙は實に異種異樣といふ處が面白い、身分の低いの程概して面白味のあることだ、此手紙は例の有難くない案内だらう、迷惑を耐へるか、噓をついて辭るかより外仕方のない奴だらう』と封を切つて文面を眺め『オヤ君、これア結局面白いことになるかも知れないよ』

『それでは只交際上の手紙ではないかね』

『イヤ、正に職掌上の事だ』

『して依托者は高貴の人かね』

『しかも英國で最上流の一人だ』

『オイ君、萬歳だね』

『ワトソン君、實の處依托者の身分の高下といふことは事件の趣味の如何に比べれば何でもないことだが、此一件には其趣味も隨分無いではなさゝうな、……君は今迄新聞を熟讀して居たね？』

『御覧の通りだ、……外に仕方がなかつたんだもの』と余は隅の方の新聞の堆積を指さした。

『それは丁度妙だ、では君に聞けば判るだらう、僕は罪囚の報告と慘事欄の外何にも讀まなかつた、慘事欄は益になる事が多い、しかるに君は綿密に近來の出來事を調べたんだからシモン卿の結婚の一條を讀んだ筈だ』

『勿論、非常の熱心で讀んだ』

『それは好都合だ、僕が茲に持つて居る手紙は其シモン卿からのだ、讀んで聞かさう、其代り君は新聞を引くり返して事件の成行を僕に知らさないといけないぜ、手紙の文句はこれだ

「拜啓、貴兄の裁斷智畧には最も信を置き得べき由バックワード卿より傳承致し候故、拙者婚儀に關して出來せし椿事に就き、終に貴兄を訪問して御相談致さんと存候、スコットランド、ヤードなる探偵吏レストレド氏已に此事件に關し盡力致し居り候へど、貴兄と協力いたし候事更に苦しからざるのみならず却つて何かの援助に相成るべき由申出候、午後四時に御訪問致すべく候、這は最大切の事件につき若し御用務ありとも御繰合せを乞ひ度候、

シモン

ホルムス君

グロスノベルから出したもので鵞ペンで書いてある、そしてシモン卿は右の小指の片側へ過つてインキをつけて居たものだ』とホルムスは手紙を疊みながら云つた。

『四時に來るとあるが今三時だから一時間内には見えるだらう』

『それでは丁度君に幇助て貰つて夫迄に事件の眞相を

明かにするだけの猶豫がある、其新聞を繰返して日時の順に要點の所を揃へてくれ給へ、其間に僕がシモン卿の身上を調べるから』と渠は爐縁なる書物の一列の中から赤表紙の本を抽出して膝の上に展げながら『ア茲に在る、ロバート、ベア、シモン卿……バルモラル侯の次男と、フム……千八百四十六年生れと、四十一歳になるネ、結婚には後れた方だ……、前政府では殖民地の副書記官、父の侯は一度外務の秘書官であつたと、血統はこれ〳〵か、可し、これには格別益になりさうな事もないネ、……ワトソン君、君の方から何かもつと強固したことを聞かねばならない』

『何でも必要の事は探すは譯はない、全たく新らしい事だし事柄は非常に面白いと來て居るから、併し僕が君に云ふのを恐れるのは、君は今已に一つ事件の探究中であるから外の事を云ひ込んでは惡からうと思つて……』

『それはあのグロスベノル街の荷車の小さな一件かネ、それならモウ判つて了まつた……實際初から知れ切つて居たサ、さア新聞から集めた要點を話してくれ給へ』

『これがマア僕の見た所では眞最初の記事だ、「朝報新聞」の人事欄に出て居る、ソラ二三週間前のだ、斯うある「結婚の準備は整ひたり、風評に據ればバルモラル侯の次男ロバート、シモン卿と米國合衆國カリホルニヤ、桑港なるアロイシス、ドラン氏の一人娘なるハッチー孃との間に近々の中に擧行せらるべしと」これだけだ』

『よし、それから主眼の處は?』とホルムスは其瘠長の脚を火の方へ投げ出しながら云つた』

『茲に同週の社會新聞紙の中に此事を悉しう書いた一項がある、これだ〳〵「程も無く結婚市場に於て保護を要求する呼聲を聞くに至るべし、何となれば現時の自由貿易主義は我國の生產物に對して著しき影響を及ぼしつゝあるが如くなればなり、大英國の貴族家の管理權は逐一大西洋を隔てたる美しき吾人の從姉妹の手中に歸しつゝあり、是等の艶麗なる入寇者が奪掠し去りたる分捕物の目錄中に先週間に於て重要なる附加は爲

されたり、是迄二十年の間獨身生活を守りたるシモン卿は、カリホルニヤの一富豪の女なる艶麗なるハッチー孃と近々華燭の典を擧ぐる由を公表せり、孃の艶容嬌態はウエストビューリー館の饗宴に於て頗ぶる人目を惹きたる所にして猶小兒と呼ぶべき年紀なり、孃の持參金は六十萬弗を超え猶將來にも希望を有せる由一般に傳へらる、バルモラル侯は近年來其秘藏の畫幅を賣らざるを得ざる境遇に至りしは已に公然の秘密となり、シモシ卿はバルチモアなる些少の地面の外何等の所屬物を有せざれば、カリホルニヤの嫡女は此結婚に依りて單に共和國の一貴婦人より容易に英國貴族婦人と一轉するの機會を得たるのみに止まらざるは明かなり』

『其外に何かあるかチ』とホルムスは欠伸しながら云つた。

『あるサ澤山に、そこで「朝報新聞」に別に一項あつて、それに此婚禮は全く靜穩に行はるゝ事、ハノバー街の聖ジョージ寺院で擧げらるゝと云ふ事、唯五六人の知音の人々が招待さるゝと、それから一同は孃の父アロイシス、ドラン氏が構へて居るランカスター門の家へ行くの手筈だといふとがある、それから二日後のに：：即ち去る水曜日だ：：：其婚禮のあつた事、新婚旅行はピータースヒルドに近きバックチーター卿の處で過さるゝと云ふ畧報が出て居る、先づ是迄が花嫁が紛失する前に出て居る記事だ』

『何の前に？』とホルムスは驚いた風で

『花嫁が踪跡不明になる前にサ』

『それでは何時嫁さんは居なくなつたチ？』

『婚禮の朝餐前に』

『ヘエ！ヤ這奴は想つたよりも面白いチ、至たく演劇的だ』

『さうだ、僕も少し常例はづれの一件だと思つた』

『花嫁が婚禮の式より前に居なくなるはよくある事又偶には新婚旅行の時に踪跡が判らなくなるといふことはあるが、斯ういふ場合に唐突に居なくなるのは今迄あまり知らないとだチ、詳しい次第を聞かしてくれ給

へ」

『どうもそれが頗ぶる不充分だて』

『聞けばわかるかもしれない』

『昨日の朝の新聞に一項だけ出て居る、讀んでみよう、「風流なる婚禮の椿事」といふ標題だ、「ロバート、シモン卿の一族は、卿の婚禮に關聯して起れる痛ましき椿事の爲めに非常に驚駭せり、儀式は昨紙略報せし如く昨朝擧行せられたるが、奇異なる浮説の更に罷まざるより、實地に就き事の眞僞を確め得たるは只今の事なり、卿の知音は事を穩密にせんと盡力したるに拘らず、世上の注意は深く之に惹かれて今は殆んど一般の談柄となり、人をして之を信ぜざらしむる術策なきに至れり、婚禮はハノバー街なる聖ジョージ寺院に於て擧行せられ、儀式は頗ぶる靜穩にして、新婦の父アロイシス、ドラン氏、バルモラル侯爵夫人、バックオーター卿、フステース卿、クラ、夫人、セント、シモン(婿君の令弟及令妹)アリシア、ホヰシトン夫人の外何人も列席せざりき、式畢りて後一同はランカスター門なるアロイシス氏の家に進み、茲に朝餐は準備せられたり、此時一人の婦人、其名は聞漏したるが、一同の跡より、シモン卿に對し何か要求すべき權利ありと稱し屋内に侵入せんとせしより多少の騷擾を起し、暫らくの間痛ましき活劇を演せし後、給仕人と從僕の爲めに追拂はれたり、新婦は幸にも此不快なる妨害に先ち屋内に入るを得、他の人々と共に朝餐の席に着き居たるが突然氣分惡しとて我室に退きたる儘久しく經ちても出で來らざるより人々怪しみ問ふに至りければ、父は娘の室に赴きしに、孃の姿は茲に見えず、侍女に問へば、孃は唯瞬時室に來り長外套と帽子とを取りて出で行きしと云ひ、又從僕の一人は斯かる裝したる婦人の家を出で行く姿は見たれど、孃は一同と共に座敷に在りと信じ居たればよもそれにてはあらざらんと思ひし由を云ひ、斯くて孃の蹤跡不明の事確實となりしかば、アロイシス氏はシモン卿と共に直ちに警察に交涉し今や嚴密なる探索は爲されつゝあれば、此椿事は程もなく判明するとゝなるべし、されど昨夜最終の時間迄には貴婦人の所在に關し

て何等の通知にも接せざりき、或は此事は醜怪なる欺騙に出でたりとの風説もありて、其筋にては前記騒擾を起せし一婦人が嫉妬又は他の情意より花嫁の失踪に關係せるならんとし其婦人を引致せしめたりと云ふ』

『それッきりかネ?』

『も一つ別の朝新聞に一寸した記事がある、しかしこれは便りになりさうだよ』

『そしてそれは?』

『騷動を起した婦人はフロラ、ミラー孃と云つて、現に引致されたといふこと、此婦人は前に「アレグロ座」の舞妓であつて、此花婿とは多年知りあつて居たといふとだ、外には何も格別の事はない、新聞に出て居る所ではこれで事件全般を話してしまつた譯だ』

『さてこれはとんでもない面白い事件だ、斯ういふのは何んなことでも見遁したくないと思ふネ、…オヤ鈴が鳴るそれに時計は四時少し過ぎて居るからシモン卿が來たに相違あるまい…イヤ、ワトソン君避さなくつたつて可いよ、どうで自分の記憶の便になるだけでも側に證人があるが好いから』

『ロバート、シモン卿がお來訪でした』と小間使が戸を開けると共に紳士が這入つて來た、相貌は爽かで鼻は高く色は青白く、口邊には何となく急性らしい所があつて、目つきは彼の何事も其命の儘に行はれるといふ身分に生れ得た人の常としてすわつて開きゝつて居る、動作は快活で總體の外見は年を取つて居るのが爭はれないで、體が少しうつむいて、歩く時脚が少し屈むのが知れる、其邊の曲つた帽を取つた時頭髮も廻りが灰色になつて頂邊が粗くなつて居た、衣服は非常の贅澤で、高襟に黑のフロックコートに白の胴着、黃色の手套に專賣革の靴、薄色の脚袢をつけて居る、頭を左右に向けながら右の手には其金縁眼鏡の紐をふらつかせて徐々と室內へ歩んで來た。

『ア、これはシモン卿でございますか』とホルムスは起つて禮をしなから』サア何うか其編み椅子へ…これは私の親しい同輩で醫師のワトソンといふ人です、

どうか もつと火の側へ、ゆつくり彼の事件を御談合しませう』

『ホルムスさん御推察も下さる丶だらう通り、僕には何うも耐られぬ事件でひどく弱らせられた、あなたは斯んな事件に關係したとがあるでせうナ、勿論吾々貴族社會よりは外に這んな事件で相談を[illegible]けられたとは無からうけれど』

『いゝえ、まだづんと上流からありました』

『それは失敬』

『此前私が斯ういふ事件で引受けたのは國王さんでした』

『エ、! 實際? それは知らなかつたナ、して何國の王です』

『スカンヂナビアの王さん』

『オヤ! 其王の妃が居なくなつたナ?』

『それはあなたの事件で秘密を守るのと同じで、他の依托者の事も内密は口外出來ない筈でせう』

『勿論だ、左樣々々これは實に失敬であつた、僕の事件に就ては貴君が見込みを立てるに參考になりさうなとは何でもお話し申さう、』

『ありがたうございます、今迄に知つて居るとは新聞にあつたとだけで外は更に知りません、嫁樣の行跡不明の事に就いて、例へば……此一節の記事は事實と見て可いでせう?』

シモン卿は一瞥しながら『さうです、それはもう一切其通りです』

『けれども一應の鑑定といふものを言ひ出す迄には隨分色々附加した條件を知らねばなりませんが、片端からあなたにお問ひ申した方が一番手早からうと思ひます』

『何うかさうなさい』

『貴卿がハッチー孃に始めてお逢ひなさつたは何時です』

『桑港で一年前に』

『貴卿は合衆國を方々旅行しておいでなさつたか』

『ハイ』

『其時孃とは許嫁しておいでなさつたか』
『いゝえ』
『では只親交といふだけの關係でしたか』
『僕は孃の家で歡迎せられて、僕の方でも歡んで居ることを孃は知つて居たでせう』
『其阿父さんは餘程のお財産家ですかネ』
『それはモウ大西洋の沿岸では第一の富豪ださうです』
『何うして財産を作られたのです』
『鑛山事業で……數年前迄は無一物であつたが、フト金鑛を發見してそれから俄かに資産が出來たのです』
『あなたは其孃の……令夫人の御氣質は何んなだとお思ひなさる？』
紳士は稍急に眼鏡を振り動かし、火の方を凝視めながら『ホルムスさん、荊妻は其父が財産家になる前に廿歳になつて居たです、其時分には鑛山の野營で氣儘に遊び、野山を歩き廻つて居たのですから、教育といふものは學校でといふよりはマア天然から受けた方で、氣丈で氣隨な方で世の傳説などは何とも思はないマア「蓮葉」と云ふのでせう、烈しい所があつた、決斷をするのは早くまた思ひ立つたことは何でも臆する所なく遣り通すと云ふ方です、しかし僕も……』と一寸威風のある咳嗽をして『渠が精神に於て一廉の婦人と思はないものなら夫人たる地位へは上げなかつた筈で、事に臨んでは人の爲めに竭すといふ義氣はあり、又何でも不名譽の事を厭ふだけの心はある者だといふことは信ずるです』
『その方の寫眞をお持ちなさるか』
『之を持つて來ました』と卿は小さな匣を開けていとも愛らしい婦人の全面部を見せた、寫眞ではなくて象牙製の小さな肖像であるが、艶やかな黒髪、大きな黒い眼眸、緊つた口元などの工合餘程巧く彫んである、ホルムスは稍霎時熱心に凝視て後匣を閉ぢてシモン卿に返しながら
『では此貴婦人が倫敦へ來て、貴卿は舊交を温ためなさつた譯ですネ』

『左様、倫敦の此最終の賑ひの季節に父に伴れられて來たです、僕は幾度も遇うて後許嫁して、それから今結婚した譯なんです』
『澤山の持參金がありますのですネー』
『可なりの持參金、僕の一門で普通にするのよりは勝ることは無いです』
『そして其持參金といふものは婚禮の式が濟んだ以上は貴卿に屬する筈ですネ』
『其邊の事は何ともまだ詮索しないですがネ』
『それは御尤です、貴卿は婚禮の前日ハッチー孃にお逢なつたですか』
『ハイ』
『孃は機嫌が好かつたですか』
『此上無しであつて、吾々兩個は將來のことを話しあつて居たです』
『ヘエ！それはどうも妙ですネ、そして婚禮の朝は？』
『其時も大變爽快でありました……儀式の濟む跡迄は……』

『そしてそこで何か孃の身に變つた處があつたのですか』
『エ、實を云へア其時始めて氣が着きましたが、今迄になく孃の氣が劇しくなつて居るです、けれど出來事はモウ話すにも足らない程の小さな事で、云つた所が此事件に益するとは無いです』
『どうかマア何もかも話して見て下さい』
『それはホンの小供じみた事、兩個が化粧室へと行く場合に孃が花毬を落ことしたです、丁度禮拜堂の坐席の前を通つて居たが、花毬を其坐席のあちらへ落ことしたです、一寸躊躇する中坐席に居た一人の紳士が拾ひ上げて孃に渡しました、落ちて何にも惡くなつた所は無かつたが、それでも此事を話した時孃は倉卒しい返事をして、そして車で家へ歸る途々も這んなつまらん事を大變氣にかけて居たです』
『ハ、ア、貴卿は坐席に紳士が居たと仰有るがそれでは公衆も多少來て居たですネ』
『ハイ、寺院の門が閉ぢてあるではなし、何うも全く人

を入れない譯には行かなかつたです』
『其紳士は令夫人の知音ですか』
『イヽエ／＼僕は唯禮義上紳士とは云つたもの丶其れは外見は唯尋常の人で、其處に居るといふこともさして氣が着かなかつた位です、しかしこれは要點から話があまり外れ過ぎませう』
『それでは令夫人は婚禮から歸りには往きがけの時よりは氣が浮いて居られなかつたです、それから其阿爺さんの家へ這入つてから令夫人は何うなさつたです』
『侍女と話をして居るのを見受けました』
『侍女は誰といひます？』
『アリスといふです、米國の者で、カリホルニヤから嬢と一緒に來ました』
『お昵近の侍女ですか』
『信じられ過ぎて居る位で、實際嬢とあまり自儘にさし過ぎて居るやうに思つたです、勿論米國では此地とはそんな風習は違ひはしますが』

『何れ程の時間アリス――と話をなすつた？』
『ホンの四五分間です、僕は外の事を考がへて居ました』
『何んなことをお話しなすつたか、少しはお聞きになりましたか』
『嬢は「權利跳び」とかいふとで何か云つて居ました、そんな符牒詞を用ひるが癖です、何ういふ意味であつたか更に知りません』
『米國の符牒詞は何うかすると極露骨なのがあるですネ、そして其話が濟んでから令夫人は何うなすつた？』
『朝餐の室へ行つたです』
『貴卿に手を引かれて？』
『イヽ獨りで、さういふ風な些細な事は頗ぶる自儘にやる方です、それから十分間も一緒に席に居て後、何かぶつ／＼いひわけを云つて席をはづし、それから歸つて來なかつたです』
『然るに其アリス――と云ふ侍女は、令夫人が自分の室へ行つて花嫁の衣裳の上に長外套と帽子とを着て外部へ

出かけられたと云ふ事を證言しますテ』
『全たく左樣、それから孃は其後フロス、ミラー即ち其頃アロイシス氏の家で騷動を起して、今は拘禁せられて居る女と並んで公園を歩いて居るのを見かけたです』
『そして其婦人の身の上又貴卿と其人との關係のとを少しばかり承りたうござります』
シモン卿は肩をゆすり眉を昂げながら『僕と其女とは數年の間友達といふ關係であつたです…眞に親しい友達といふ關係ですよ、渠は「アレグロ」座に能く出て居たです、僕は何も不親切な待遇をしたとは無いから、あの女が僕に對して不平を訴たへる原因は無いです、けれども女といふものはテー、ホルムスさん、フロラは愛らしい奴であつたが非常に急性の方で、僕の事は深く思つて居たです、今回の結婚の事を傳へ聞いて恐ろしい手紙を寄越しました、それで僕が穩密に式を擧げたのは、實を云へば寺院で騷動でも起りはせまいかと懸念したからで、丁度式が畢つた時其女がアロイシス君の家の戸口迄來て、荊妻の事を酷く惡し樣に罵しつて嚇し文句を並べ、無理に内へ這入らうとしたです、豫て這んなとにもならうかと思つて平服の巡査を二人喚んであつたから直ぐに追拂つたです、女はもう亂暴れても迚も駄目だと諦らめて靜まつてしまひました』
『令夫人は此騷ぎをお聞きなすたか』
『いゝえありがたい事には一切知らなかつたです』
『そして令夫人は其女と一緒に歩きなさる所を見られたと云ふですテ?』
『ハイ、レストレード君はこれが最着目すべき所だと云つて居るですがテ、フロラが荊妻を欺罔して何か惡計の係蹄に掛けたといふ考へです』
『成程それも無いとも云へない鑑定ですテ』
『あなたも然う思ふですか』
『それだらうとも云ひませんが、しかし貴卿はさもあらうとお思ひなされますか』
『僕はフロラは蠅一つ殺さない女だと思ひます』
『けれど嫉妬は不思議に人の性質を變へるものですか

ちナ、先づ此成行に就いて貴卿のお見込は何うでせうか』

『實は自分に見込を言ふよりは先づ聞かうと思つて來たです、事實は皆あなたに話した譯だが、けれど問はれて見れば云つて見ませうが、孃が是程俄かに好い身分に跳び上つて過度の歡喜が神經を何うかしたのでもあらうかと思ふです』

『マア早く云へば孃が俄かに狂亂せられたといふのですナ？』

『左樣、荊妻が逃げて行つたといふ點を思ふと僕の方の事を云へないやうですがナ、けれども此身分になりたいと望んでようならないで失望した者が澤山ある、其者等の事を思ふとです…何うも外に思ひ到るとがないです』

『成程それも亦隨分ありさうな御推測ですナ』

とホルムスは笑ひながら『時に私はモウ手掛りになるとは殆んど殘らず得と思ひます、貴卿方は朝餐の席で、窓の外が見られるやうに腰を掛ておいでなされましたか伺ひませう』

『路も公園も片側見えるやうになつて居ました』

『アヽ左樣、それではもうこれで貴卿をお留め申す必要はあるまいと思ひます、手紙で申し上げるとにしませう』

シモン卿は起上りながら『あなたはうまく此問題を説き明されませうか』

『モウ解りました』

『エヽ？何ういふとでせう』

『解りましたですよ』

『それでは荊妻は何處に居りませう？』

『それは私がこれから直ぐに調べ出す條件なんです』

シモン卿は頭を振り搖かしながら『僕やあなたの頭ではチトわかり惡いかもしれない』斯う云つて嚴そかに昔風の辭儀をしながら出て行つてしまつた。

ホルムスは笑ひながら『シモン卿が僕の頭を自分と一つ並に思つてくれたのは忝ないナ、這んな對決をやつた跡ではウヰスキー、ソーダと烟草一本吸はなくちや

ア、…僕はあの人がまだ玆へ來ない中にモウ判斷して居た』

『エ、』

『豫ても云つた通り之を同じやうな事件には幾らも邂逅つた、尤此一件程急には無かつたけれど…今の審問で果して始めの推察の通りと云ふとが判つた、偶然に出る證據は時に依ると非常に有益の場合がある、彼のトーレルの一件で牛乳の中に魚斑石を發見したやうに』

『けれど君が今聞いた事は悉皆僕も聞いたのだが……』

『だつて君は前例を知らないから…僕はそれがあるから非常の助けになる、數年前にアバーヂンで丁度之と一對の例があつた、それから普佛戰爭の翌年にミユニヒで餘程之に類似の一件があつた、這度のも其一例だ…アツ、おや、レアトレド君が來たよ、ヤ、レスツレド君今日は、其架に酒がある、其處の箱に烟草が在る』

探偵吏レストレドは短表衣の頸巾を着け、全く海軍的の風采で手には黒い帆布の袋を提げて居る、輕く挨拶して席に着き、差し出された烟草を點けた、ホルムスは瞬きしながら

『何うしたです君は不滿らしい顏色が見えるが』

『實際不滿であるです、外ではないシモン卿の結婚の一條だがチ、どうも見當がつかなくて手のつけやうがない』

『へーエ、それは〳〵』

『這んな混亂かつた事件は聞いた人があるまい、確とした手係は捕まつたと思へば外れてしもう今日は終日働らいて居た』

『其爲めか君は酷く濡れて居ますチ』とホルムスは渠が表衣の腕の處へ手を遣りながら云つた。

『ハイ、サーペンチン池の中を渫つて居るです』

『一體それは何の爲めに?』

『シモン夫人の身體を搜索する爲めに』

ホルムスは椅子にのけぞりながら心から可笑しさうに笑ひ出した、『君はトラファルガー街の噴泉の池も渫ひ

ましたか』

『何故、何ういふとです』

『だつて君はサーペンチン池を渫ふ位なら、外の池だつて夫人を發見するかもしれないでせう』

レストレドは腹立たしげに對手の顏を一瞥して『では君は此一件は何にも判つて居ると見えるネ』

『左樣です、今事實を聞いたばかりだが、チヤンと自分には判斷して居るです』

『ヘーエ！それではサーペンチンの池は一切此事件に關係はないと思ふですネ』

『先づ似寄らないとだと思ひますネ』

『それでは何うか僕が其池で之を發見した理由を承りたいネ』といひ〳〵嚢を開いて床の上へさらけ出したものは、濡れた絹の婚禮衣裝、白繻子の靴、花嫁の花圈に被衣、孰れも水が浸んで色が褪めて居る、其堆積の頂上へ婚禮の指輪を置いて、『サア難題だ 解いて見たまへ、ホルムス先生』

『オ、成程』と我友は青色の指輪を空に投げあげながら『君は其池から這んな物を搜し出しましたネ』

『イエ公園の園ひに沿うて池の端の所に浮いて居たです、夫人の衣服だといふとは確かめられたので、衣服が其處に在る以上は身體もそれからあまり離れては居ない譯だ』

『其立派な論理法でゆくと、人間の身體は皆衣服架の近傍に在る道理だ、そして此衣服から何う道がつくだらうと思ひなさる？』

『夫人の失踪に就てフロラ、ミラーが關係して居るといふ何か證據の得らるゝだらうと思ふ』

『何うもむつかしいでせうよ』

レストレドは苦々しげに『君には六かしいと見えるかネ、ホルムス君、君の推論は實地に脊きはすまいかと思ふ、此衣服は現にフロラ、ミラーとの關係を證據立てるのだ』

『それは何うして？』

『衣服に隱しがあつて、隱しに名刺入れがある、其中に一寸した書き付けがある。これが其書き付けだ』

と前なる卓子の上に投げ出しながら『聽き給へよ、其文句は「準備よき時直ちに來れ。F.M.」と斯うある、さて僕の鑑定は始めから全くシモン夫人はフロラ、ミラーの爲めに惡計の係蹄に陷されたもので、夫人の失踪に關してはフロラは其連累と共に責を負ふべき者だといふに在るです、此書き付けにフロラ、ミラー(Flora. Miller.)といふ姓名の頭字F.M.と記してあるで知れる、これを屹度戸口でそつと夫人に渡して我側へおびき出したものだ』

『成程々々、貴君は實際巧いですナ、どれ見せ給へ』

とホルムスは笑ひながら平氣で件の紙片を取りあげたが、やがて屹と凝視めて後ハタと膝を打ち『これは實に大切なものだ』

『ハヽ、君にもさう見えるかナ』

『全たく、君が爲めに萬歲を唱へる』

レストレドは得意然と起ちあがつて、手紙の方へ覗き込みながら『オヤ〳〵君は惡い側を見て居らア』

『何うして〳〵、此方側が善い方です』

『善い方だ？君は本氣かナ、其あちら側に鉛筆で文句が書いてあるよ』

『そして此方側に宿仕切の端があるやうだ、これが實に僕の注意を惹くです』

『其處には何にも無い、僕は前にそれを見た、只「十月四日、室八志、朝餐二志六片、鷄尾一志、午餐二志六片、セリー酒一杯八片」とあるだけだ何にもならない』

『中々さうでない、これが實に重要です、手紙の文句イヤ名の頭字だけはこれも大切です、重ねて君の萬歲を唱へる』

『さて隨分時間を徒費した』とレストレドは起上りながら『何でも實地に働らかねばいけない、唯うまい理窟を考がへて火の側に坐つて居たつて駄目だ、ホルムス君、左樣なら、君と僕と何方が先に事實を明かにするか試つて見やう、』と云ひつゝ衣服などを搔集めて囊へ投げ入れながら歸りかけた、戸口を出きらぬ中ホルムスは『一寸君に注意して置くとがあるです』と悧げの聲で『事件の眞相を云つて見ませうか』シモン夫人は全く

僞物だ、始めから斯ういふ人は無かつたものです』
レストレードは悲しげに我友の方を視て後余の方を眺め三度額を叩きながら嚴めしく頭を振り動かして忙たゝしく出かけてしまつた。跡の戸口が締るや否ホルムスは起上つて外套を引かけながら『あの男が外部で働らくと云つたのは一理あるとだ、だからワトソン君、暫時獨りで新聞を見て居てくれ給へ』
ホルムスが出掛けたは五時後であつたが、余は淋しいと思ふ間は無かつた、一時間も經たないに糖菓店の男が大きな平ばつた箱を持つて來て、伴れて來た小僧に幇助はして之を開くと、サア驚いた、中には頗ぶる贅澤な晩餐が準備してあつて、それを此我々の粗末な寓舍の卓子の上へ陳列べ出した、鴫や雉子や鶉の料理其外種々の珍味に副へて昔風の細長い德利が五六本あつた、這んな贅澤な食物を配列して置いて兩個の男は、只代價は已に請取つたと、斯うして置けとの命令であつたと云ふとより外には何にも云はないで彼のアラビヤ、ナイト物語の神怪のやうに其場に居なくなつてしまつた、
丁度九時前にホルムスは急足に室内へ這入つて來た、擧動は至つて沈重であるが、渠が豫想ははづれなかつたものだといふとは眼色に見えて居た、渠は手を擦りながら
『では晩餐を持つて來たな』
『君は客を待ち受けると見える子、五人前構へて行つたよ』
『左樣、二三人客來があるとになるだらうと思ふ、シモン卿がまだ來て居ないは驚いた子、ハ！二階段に其跫音が聞えるやうだ』
今や忙はしげに上つて來たは誠に今朝の來訪者シモン卿其人で、前よりも更に勢よく眼鏡を振りつゝ、其貴族的の相貌に頗周章して居るやうな所がある。
『私の手紙が着きましたか』とホルムスが問ふと
『着きました、文面には實にどうも驚き入りました子、あなたの云ふ所は確證が有つての事ですか』
『此上もない確證があります』

——シモン卿は倒れるやうに椅子へ腰をかけて額へ手をあてながら『家族の一人が這んな汚辱を受けるとになつたとを父の侯が聞かれたら何と云はるゝ事であらう』と獨語のやうに云つた。

『これは唯純粋な偶然の出來事で、何も汚辱とは云はれまいと思ひます』

『あなたは別の立場から此事件を見て居る』

『私は何うも誰をと云つて責むべき人を知らないです、夫人も何うもあの場合にあゝするより外に仕方はないと思ひますね、成程遣り方があまり唐突であつたゞけは悲むべしですけれど、母親とてはなし、這んな切迫の場合に誰にといつて相談相手は無し……』

『侮辱です、公然と侮辱したといふものでさァ』と卿は卓子を指で叩きながら云つた。

『斯ういふ前例のない境遇に臨んだ可憫さうな孃の上を寛大に見て遣らねばいけませぬよ』

『寛大に見るといふ譯には行かない、僕は實に腹が立つて居る、實に踏みつけられたのだ』

『今鈴がなつたやうだ、アッ上り段に跫音が聞える……——シモン卿、此事で寛大な御了簡に願ふやうに私の力で出來ないなら、私は茲へもつと巧手な代理人を伴れて來ました』と云ひながら室の戸を開くと這入つて來たは一貴婦人と一紳士である『シモン卿。フランシス、モールトン氏夫婦を御紹介致します、夫人の方は豫ねてお遇ひなすつたとがあるでせう』

新來の客の姿を見ると、シモン卿は席から跳び上つて眞直に突立ち、眼は下を見て、隻手はフロックコートの胸に突込み、怒氣を帶びたる威嚴の態度を示した、新來客の貴婦人は實にハッチー孃其人であつた、此時貴婦人はツカ〳〵と進み出でゝ卿の前に手を差出したが、卿は猶目をあげなかつた、實はあげない方が可かつたであらう、若し孃の哀願の情を含んだ顔を見たならば到底抵抗ふに忍びなかつたであらうから。

『御立腹ですか、ロバート様、それはもう御立腹は一々御有理でござります』

『辯解は無用になさい』と卿は苦々しげに。

『誠に貴郎にはすまないことをしました、出で行く前に申し上げて置いたら好かつたと思ひますが、妾は淺慮者で、あの時此フランシスさんを見た時から、何をして居るやら云つて居るやら覺えなかつた程で、あの時祭壇の前で氣絶して倒れなかつたが不思議だと思ふ位でございます』

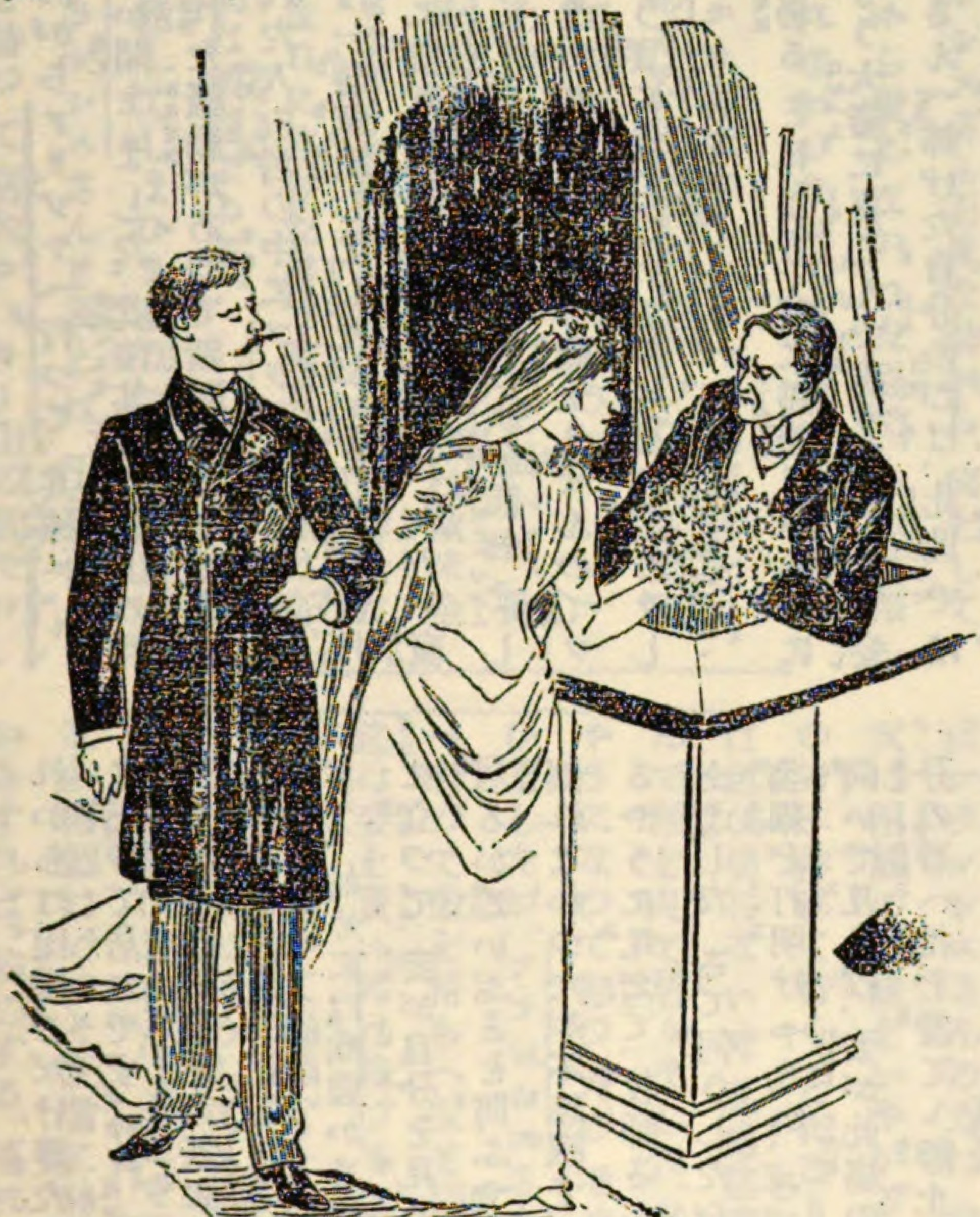
『モールトン夫人、あなたが此事をお話しなさる間私共兩個は室をはづして居る方が好いでせう』

新來の紳士は此時口を出して『私の考へを云へば、此事に就ては已に今迄十分秘密にした、私は今は歐米全國へでも知られてしまふことを望む方です、』件の紳士は小作りて鋼線のやうな日に焦けた男で其尖つた顏は奇麗に剃つて居て、擧動は敏捷である。

『それでは何もかも話してしまひませう』と貴婦人は物語を始めた、『此フランシスさんと妾とは、千八百八十四年に、父が鑛區を持つて居たロッキー山の近でマクワイルの野營で遇ひ初めまして、兩個は許嫁して居ましたが、其後父は金坑に掘り當つて俄かに金が出來ることになつたのに、フランシスさんは運が惡くて掘り當らず無駄骨になりまして、父の方は益金持になればフランシスさんの方は益貧乏になりましたから、父は兩個の許嫁をいやがるやうになつて妾をフリスコの方へ伴れて行くことになりましたが、フランシスさんは思ひ切らないで其處迄妾を追驅けて來て、父には忍んで顏を見て居りました、若し父が知つたなら狂氣のやうになつて怒つたのでせう、だから兩個は相談しあひましたが、フランシスさんの云ふには、自分も何處かへ行つて金を拵らへ父と同じ程に富有の身の上になる迄は妾を貰いには歸つて來ないとの事ですから、妾は何時迄も待つて居やうといふ約束をして、此方が生きて居る間には何うしても外の人とは結婚しないといふことを誓ひました、そこで又フランシスさんは「それなら兩個はいつそ正當に結婚して置くが可いではないかさすれば、安心する、それでないと歸つて來る迄卿の夫といふ權利がない」といひ出しまして、色々其事で話しあつた上此方は整然と其準備をして牧師さんの立會

で兩人は式を擧げまして、それからフランシスさんは鑛山で身代を拵らへに餘所へ旅行し妾は父の許へ歸りました、其後フランシスさんはモンタナに居るといふことであつて、それからアリゾナへ行つて、其後ニュー、メキシコから音信が聞えました、其後其處の鑛山の野營が印度人に襲はれた騷動があつて新聞へ長々と出ましたが、其時殺された人の名の中にフランシスさんのもありました、妾は一時氣絶しましたが、それから幾月もの間ひつたり床に就きました、父は妾がだん／＼衰弱するのを見てフリスコ中の醫者には大半診せましたそれから一年あまりも何の便りも聞えませんのでフランシスさんはもう實に世に亡いものと思ひ定めました、それから此シモン卿がフリスコへ御來遊なされ、妾共は倫敦の方へ參るとになり、終に婚禮といふとになりまして、父はもう大變に喜こんで居りましたが、妾は一旦フランシスさんへ捧げた自分の心は、此世ではどうしても外の人へは捧げられないと絶えず思つて居ました、それでもシモン卿と結婚します以上は勿論人の妻たる者の義務は盡す積でした、戀の情ばかりは何と思つたつて仕方のないものですけれど行爲だけは何うとも出來ます、妾はあの日祭壇の前へ行く時にはこれからは出來るだけ妻たる勤めを能く盡して上げやうと思つて居たです、けれども祭壇の柵迄來てフト顧眄つた時一番の坐席の所にフランシスさんが立つて妾を凝視めて居るのを見た時、妾の驚愕はマア何うでしたらう、始めには幽靈かと思ひましたが、依然靜止と其處に立つて、妾が自分を見るのを喜んで居るか悲しんで居るかといふとを問ふやうな眼つきでした、妾は其時倒れなかつたが不思議で、何もかもぐる／＼廻つて居るやうに見えて、牧師さんの聲は虻の鳴聲のやうに聞えました、さて何うしたら可からう、式を停めて寺院で委細を打明けやうか、そこで又フランシスさんの方を向いて見れば、妾が此場の心を推量して居るやうで、自分の唇へ指を當てゝ靜止として居よといふとを知らせました、それから紙片へ何か書いて居てそれは妾へ送る爲めであらうと思ひました、坐席の前へ通りかゝつ

た時妾はフランシスさんの方へ故意と花毬を落すと、それを拾ひ上げて返す時そつと手紙を妾の手へ渡しました、其文句はたつた、一行で合圖をした時に自分の方へ來てくれとのとが書いてありました、此間際に妾は自分の第一の義務はフランシスさんの方へ盡さねばならないといふとを更々疑ひませんから合圖があり次第直ぐに側へ行かうと心を定めました、それから家へ歸つた時、豫てカリホルニヤに居た時からフランシスさを能く知つて居る待女に委細を明しまして、確く口止をして、少しばかりの必要品を包みへ入れそれと長外套とを出して準備させて置きました、シモン卿に云つて置くが道だとは思ひましたが、どうも其阿母さんや外に數々の立派なお客の中でそれを云ふとは何うしても出來なかつたです、それで一旦此場を落ちのびた跡から云つてあげやうと心を定め、それから卓子で席に着いて十分も經たぬ中路の片側の窓の外へフランシスさんの姿が見えて、妾を手招きして置いて公園の方へ歩き出しました、妾はそつと席をはづして準備し品を持つて跡を追駈けまし



た、其行く途に誰だか女の人が妾の側へ來てシモン卿の事を何やかと話しかけました、悉しい事も聞きませぬが、其時其女の話で見ると、シモン卿も亦今度の結婚の前に何か少し内密事があつたらしかつたです‥‥けれども妾は其女と離れるやうにして、それから直ぐにフランシスさんに追付きました、一緒の馬車に乘つて、ゴルドン街の某旅館へ行きましたが、これがあれ程長年の間待つて後の眞の婚禮でありました、フランシスさんは印度人に囚虜にせられて久しく居た後、やつと逃げ出てフリスコへ來て見れば、妾は自分を死んで亡き者と思つて今は英國へ來て居るといふことを知り、直ぐに跡を追うて此地へ來て、到頭妾が二度目の婚禮の丁度其朝妾の側へ來ました譯です』

『私は新聞で結婚の事を知りましたが、それには只人の名と寺院とが書いてあるばかりで孃が何處に居るのやら更に判らなかつたです』と米國の紳士は横から云つた。

『それから何うしやうかと互ひに評議しましたが、フランシスさんは何も後暗いとはないやうに思つていらしたけれど、妾はもう耻かしくて、皆樣には再たび顏をあはさないやうに、父には唯妾が生きて居るといふとを知らすだけの手紙を遺して置いて此儘姿を消してしまひたいやうに思ひました、朝餐の卓子を取卷いて皆樣が妾の歸るのを待つておいでなさるだらうかと思ふと實に堪へられなかつたです、そこでフランシスさんは妾の婚禮衣裳や何かをからげて、踪跡が判らぬやうに何處か人の目にかゝらぬやうな處へ捨てました、妾共は多分明日になつたら巴里の方へ行つたのでせうが、ホルムスさんと云ふ此お方が、マア何うして判つたかは知りませぬが、今方妾共の宿へ來て下されて、妾が惡いと、フランシスさんは有理であるといふと、そしてそんなに隱して居たなら却て身の爲めにならないといふとを、親切に能く解るやうに忠告して下され、それから他人の居ない處でシモン卿に對談の出來るやうにしてやらうと云つて下さつたもんですから、それで妾共は直ぐに追驅けて玆迄來ました、さア、ロバード樣、殘

らずお耳に入りましたでせう、若し貴卿に御迷惑を掛けましたなら妾は實に本意無うござります、どうぞあんまりお輕蔑下されぬやうお願申ます』

シモン卿は始終其嚴しい顔色は和げず、眉を顰め口を引締めて此長々しい物語を聽いた、

『失敬、しかし僕は斯ういふ風に人前で自分の極内密にすべき事柄を彼是れいはうといふとは覺えもないとで……』

『それでは恕しては下されませぬか、お別れする前に打ち解けて手を握りあつては下されませぬか』

『それが好ければ易いとです』と卿は手を出して、孃がさゝげた手を冷やかに握つた。

ホルムスは此時詞を入れて『皆樣御一緒に打ち釋けて晩餐の席に列つていたゞかれないでせうか』

それだけには御免下さい今の成行にさへ強いて心を順はせた譯だが、どうも此事を戯談半分にしてしまふと云ふ迄の心にはなれない、御免を蒙つて皆樣にお告別をすることにしやう、』とシモン卿は我々一同へ一度に挨拶をして室外へツカ／＼と歩み出た。

『それではせめてあなた方お二人は私共と晩餐を共にして下さい、米人と見ればお懐かしい、元來私は昔の帝王の罪惡や大臣等の失策は、後來は英米兩國徽章も聯合して一つになつた國旗の下に我々の子孫が同じ廣やかな國の人民となつて中睦しくしてゆくのに何も妨げになることはなからうと信じて居る連中なので……』

＊　＊　＊　＊　＊

客の去つた跡でホルムスは『此一件は實に面白いのであつた、始めにわ到底譯が解らないやうに見えながら、頗ぶる簡單に解らすとが出來たから、あの貴婦人の話で聞く通りで出來事の行きがゝりは此上もない自然のとであるが、結果ばかりを聞いて一寸考がへると頗ぶる不思議なやうに思はれる、例へばレストレド君の鑑定見たやうに……』

『では君の鑑定は始めから間違はなかつたかね?』

『僕には始めから二つの事實が頗ぶる明瞭に解つて居た、一つはあの貴婦人が婚禮の式へ臨む迄は全く滿足

して居た事、又一つは家へ歸る數分間前になつて俄かに婚禮を悔むやうになつたといふ事だ、して見れば朝の間に其心變りがする原因が何かあつた譯だといふとは解る、さてそれは何であらう、婿さんと伴れ立つて居るから外部へ行つて居る時に誰か外の人と話をするといふとは無い筈だし、さすれば誰かの姿を見たのか、若し見たとすればそれは米國の人でなくてはかなはぬ、嫁さんは此國へ來てまだ間もないとであるから、唯其人を見たばかりでそれ程迄に全く心を變へてしまふ程に深い感化力を及ぼす知音が出來て居やう筈がないから、さア斯う判斷して見ると誰か米國人を見たに相違ないといふ推量がきまるだらう、そこで此米國人は何ういふ人であらう、何故孃にそれ程大きな感化を與へるであらう、戀人か又は夫かであらうと思はれる、孃は小供の時から深窓の中で温順しく育つた人でないといふとは其時から僕には見えて居た、シモン卿に話を聞かぬ中にこれ迄は自分に鑑定をつけて居た、そこで寺院で座席の處に男の居たと、嫁さんの擧動の變つたと、花毬を落すとに假托けて手紙を受取るといふ判りきつた作略のと、腹心の侍女に相談したと、「權利跳び」といふ符牒詞を使用つたと、‥‥此詞は鑛山業者の間で用ひらるゝ符牒で、他人が已に採鑛權を有つて居るのを横取りするとを云ふので‥‥斯ういふ事を寄せて考がへると總べての事が歴然と判つて來た、孃は必らず男と一緒に逃げたものであるが、其男は情人であらうか又前の夫であらうか、多分前の夫であらうと鑑定した、』

『そして一體マア何うして其所在が判つた子？』

『それが難題であつたが、レストレドが、當人はそれと氣が着かないが、頗ぶる重要な手掛りを持つて居た、彼の姓名の頭字は無論重要のものであるが、それよりもまだ値のあるものは、あの書き付けの主は一週間内に何所か倫敦最上等の旅館で宿仕切を拂つたものだといふとが知れたとだ、』

『何うして上等の旅館といふとが知れた子？』

『勘定の高いとで‥‥‥室が八志、セリー酒の一杯が八片といふは最贅澤な旅館だといふとが判る、これ

程高い勘定を取る旅館は倫敦中でも澤山はない、そこでノーサンバーランド街で二度目に尋ねた旅館で宿帳を見た所が、フランシス、モールトン（Francis. Maulton.）と云つて、姓名の頭字がF.M.になつて居る米國の紳士がたつた一日前に此家を出たといふとが知れて、其仕切書を見れば即ち彼の書き付の裏に書いてあつたのと全く同一であつた、若し手紙が來たならゴルドン街の二百二十六番地へ廻せと書いてあつたから、そこへ行つて見た所が果せる哉兩人は内に居た、そこで僕は遠慮なく親の云ふやうな注意をして、寧そ世間へ、殊にシモン卿の方へ事を明かすやうにした方が何かにつけて爲めにならうと勸めて、茲でシモン卿に逢はすやうに伴れて來てお見受の通り其役前を果させた譯だ』

『併しあまり好結果は無かつた子、あの男の行爲は實のところあまり温厚とは云はれない』

ホルムスは笑ひながら『だつてワトソン君、久しく戀慕つた末に結婚迄して後にさ、妻と財産とを得やうと云ふ場合に、俄かに人に奪られるといふやうな境遇に臨んだら君だつてもあまり温厚でもないかもしれまいよ、シモン卿の氣の毒はそれは十分に思ひ遣るさ、有難いことには我々はマア斯ういふ運命には邂逅す事は無からう、サア此方へ寄つて其バイオリンを取つてくれ玉へ、これからは只此淋しい秋の夕を何うして過さうかといふとが唯一の問題だ』（完）



## 湘煙女史の永眠

湘南王城山のほとり、首夏の新樹翠したゝる處、瀟洒なる別荘あり、こはこれ故の伊太利公使中島信行男の未亡人、俊子、湘煙女史が徐ろに痾を養ひ居たる處にぞある。一時爛熳のさかりを競ひし春の百花は概ね紅銷しぬ、今や牡丹枯れ、藤枯れ、芍薬枯れ、薔薇もまた萎れぬ。巾幗社會の才人として夙に聲名を江湖に馳せたる女史は溘焉としてこゝに永眠しぬ。

女史本姓は岸田氏、父は但馬豊岡藩士、女史は其の長女たり、幼少の頃より書を能くし、十二三歳の頃既に才名を堂上貴紳の間に知られ屢々招請を受けし事あり、十九歳にして宮中に召されて文事御用を務む、幾くもなくし之を辭し、爾來民權自由男女同權の説を唱導して普ねく海内各地に遊説せしが明治十五六年の頃當時自由黨の副總理中島信行氏女史の才を愛し容れて其夫人となしぬ。嫁後淑德の譽高く内助の力尠からず、嘗て横濱某女學校に監督たりし時、英人に就て英學を修め後、中島男の伊太利公使として又專ら語學を研究せりといふ、歸朝後湘南波穏かなる地に居をトし、松風蘿月を友として徐ろに痾を養ひ居たりしが、去月廿四日より病俄かに革り廿五日午後一時可惜才名を殘して逝きぬ享年三十九超へて五月三十日午後二時大磯太原寺に佛式を以て葬る、法名葆光院殿月洲湘煙大姉。

女史人と爲り聰慧にして多藝、詩文は其の最も好む所、又辯舌に長じ座談巧みにして奇警の言屢々人の意表に出でしといふ、又家事經濟に長じ蓄財家の稱あり交友廣く交を訂する者多くは當世の賢媛知名の士たり。

女史にして倘其健康に遺憾なからんか、我邦婦人社會に貢献する所蓋し少からざりしならんに惜むべき哉。

### ◎臨終の模樣

女史は伊太利駐劄中に病を得、歸朝後保養に專らなりしが、長城居士の逝いてより形影相吊すとこゝに數年、其の間病勢或は急、或は寛、身體は年月を逐ふて次第に衰弱せしも精神氣力は頗る確かにして、常に筆を採つて書するに墨痕淋漓、精氣紙幅に溢る、又好む所の詩作を事として居常吟咏に耽り、後年釋宗演師に參禪して

精神の修養に努めたりしが積年の病軀いよ〱衰へ僅に乳母車に乗りて亡夫の墓に詣でつゝありし、當時女史は訪客に語りて曰く「この頃はあの乳母車で長城の墓に行く顔だけは變りもないが、腰から下はまるで無いやうだ、人間は何處まで細るか知れないね」と三月廿五日長城居士の法會を營みし翌日病勢俄かに重なりしが、其後少しく寛うなりしと聞きぬ。

されど多年潜みたりし病勢はそれより漸く重くして遂に再び立つ能はざりしぞ遺憾なれ、女史の母君は齢七旬に餘れど日頃の覺悟ありしことゝていと雄々しく臨終の模樣など細々と語られき『此の頃は餘程ようなッて廿二日にも例もの車で長生館に行つて半日も遊んで來た位でした、その前も毎朝起きてうづに行つて本座敷に出ては物を認めたり書を讀んだりして居たので晝は病室で食事をする事もありまたむかふで食事して二時頃から臥せつたりして居ましたが廿三日に熱が出て廿四日の恰度今頃（午後三時頃）「おばあさん何う思ひなさる」と云ふから「ようなつたら大振舞をしやうぞ」と云ふたら私の覺悟を滿足に思ふたか微笑ふて「今夜ぢやろう」と云ひながら認めたものを取寄せて是は卷物に彼は何う彼うと指圖を仕舞つた時豆の御飯が出來たと云ふから私が小さな握飯にしてすゝめると筆を取つて「立がけに母の給はるむすびかな」其所に女中が入つて來て夫人さん床の間の芍藥が開きましたと云つたものだから「芍藥の蕾開いてわれ逝けり」また「牡丹みて芍藥を見てわれ逝矣」けれどもその夜は無事でしたが翌日廿五日朝から合掌して念珠をかけて枕元には私と息子と醫者と女中二人が附いて居ました晝の十二時が打つた時「十二時か」と云ふて醫者に「まだ間がありますか」「廿分位でせうお苦しいでせうが」と云はれた時は額のあたりが汗ばんで居たから拭いてやつて少し障子をあけると「風すぎる」と云ふからまたしめましたそうして皆と握手をして「左樣なら」と云ふて靜かに目を瞑つてそれが臨終でありました。（卷頭の寫眞版は女史が伊太利公使夫人たりし時の撮影なり）

藪入や一寸そこまで獨り旅

こは女史が臨終の際にものされし辭世にして又實に其の絶筆なりしなり。

## 今後の女學世界

# 誌面改良

## (記事增設)

我が女學世界は創刊未だ日の淺きに拘らず、一方に於ては清新にして健全なる家庭の讀物となり、一方に於ては妙齡諸媛が學窓に於ける勉學の栞となり、以て日に增し江湖の歡迎を受くるに至りしは記者の感謝し措かざる處なり。而して今や女子敎育の必要は一般社會の確認する處となり、本邦に於ける女子の敎育は是より將さに其の成熟期に入らんとするに際し、一家の主婦として女子に必要缺ぐべからざるは家政實務の習得にあり、是に於てか、各所に家政學校、家事講習會等の設立を見、從來の各女學校も又進んで家政科、家事專習に重きを置かんとするに至れり。本誌又玆に見る處あり、次號誌上より新たに家政實務の欄を增設し理論に於ては「禮法」「算術」「家政簿記」「衞生大意」「室內裝飾」「菓樹栽培」の各部に別ち、實務に於ては、「交際の法」「看護の法」「厨房の整理」「飮食の調理」「衣服の調製」「洗濯」「燃料及燈油に關する經濟」、等の細事に及び、それ〲專門の大家、知名の賢媛に寄稿を求め、斯くして理論に基き實際を離れず、出ては社交の務を盡し、入つては家庭を整理し、高尙の心を以て卑事に多能ならしめ、以て良妻賢母の務を完成せしめんと期す、此の外、猶圖案、音樂の二科を增設し、一は女子工藝上の意匠に資し一は交際上に必要なる美術文學の嗜好を進め高尙にして閑雅なる婦人の特性を涵養せしめんとす。其他從來の各記事は、いづれも其の材料を精撰し、虛飾に流れず、浮華に陷らず、有益にして且つ趣味深きものを蒐め名實共に女學の栞、家庭の重寶たらしめんとす。

## 次號記事要目




**每月一回五日發行**

**定價表**

一冊（紙數二百八頁）‥金二十錢
四冊（三ヶ月分）……前金七十五錢
八冊（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢
十六冊（一ヶ年分）……前金二圓八十錢
内｛定刊數……………………十二冊
　｛增刊四回‥三、六、九、十一月價格同一

郵税　一冊　二錢

**廣告料**

| 二十四字詰 | 一行 | 半頁廿二行 | 一頁六十四行 |
|---|---|---|---|
| 特等 | …… | …… | 割引三十三圓 |
| 一等 | 四十三錢 | 十三圓七十六錢 | 割引二十七圓 |
| 二等 | 三十五錢 | 十一圓二十錢 | 割引二十二圓 |
| 三等 | 三十錢 | 九圓六十錢 | 割引十八圓 |

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

**注文略規**

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず。
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す。
●郵券代用は一割增にて五厘一錢の分に限る。
●總目錄御入用の方は二錢券相添へ申込あれ。





明治卅四年六月十五日發行　第一卷第八號

編輯人　松原岩五郎
發行人　大橋新太郎
印刷人　石川金太郎
印刷所　株式會社秀英舍　東京市京橋區西紺屋町二十六七番地

發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　三百三番　千十八番　二千六百二十番

(第九版)

大和田建樹君編

# 日本大辭典

全壹冊洋裝總皮本綴金文字入紙數二千頁正價金貳圓貳拾五錢小包量目四百匁

本書の特色は、組織の新案に在り、解釋の適切に在り、引證の博多に在り、挿圖の緻密に在り、發音の明示に在り、索引の簡便に在り。故に學生用として、教師用として、專門用として、何れの社會にも利せざる處なかるべし。辭書の著世に多しと雖も、通俗雅馴兩つながら兼ね得らるべきは、抑も本書の右に出づるものなからん

▲東京日々新聞評　大和田建樹氏は國文學に於て、最も秀出する人、今其淵博の識を提て、才を字典に試む。引用の書萬卷。勞する十年。彪然たる大册をなす。俗に從て言へばいろは字典の類なりと雖も、雅俗を折衷して極めて躰を得たり。卷頭付するに文法大要を以てし、又此字典運用の方法を説明し、古文字及梵字等を付す。索引極て便。語類十數萬、之を物集高見氏の日本大字林、大槻文彦氏の言海、山田美妙氏の辭書に比する、決して遜色なし。近日の大出版と云ふべし。

大和田建樹君編

# 日本小辭典

(第五版)

全壹冊洋裝袖珍總クロース金文字入美本紙數千八百四十頁
正價金壹圓郵稅八錢

本書の特色は、解說の簡約なるに在り、雅俗中を得たるに在り、搜索其宜しきに適するに在り、携帶に至便なるに在り、紙質善美にして、印刷の鮮明なるに在り、著者は嘗て日本辭典を編して大好評を博したる大和田健樹先生なるを以て其文學社會に、敎育社會に、專門社會に、普通社會に、如何に歡迎せらるゝ良書なるを知るに足らん。

發兌元

## 博文館

(後付の一)

# 日本文學全書

第一高等學校教授 落合直文君
同 小中村義象君
同 萩野由之君
校註

正價（全部廿四冊◎一冊廿五錢十二冊貳圓六拾錢廿四冊五圓〇郵稅一冊三錢宛）

**第一編**

竹取物語
伊勢物語
住吉物語
徒然草
紫式部日記

**第二編**

土佐日記
枕草紙
更科日記
方丈記

**第三編**

十六夜日記
落窪物語
辨内侍日記

**第四編**

とりかへばや物語
堤中納言物語
四季物語

**第五編**

中務内侍日記
蜻蛉日記
讃岐典侍日記
和泉式部日記

**第六編**

濱松中納言物語
大和物語
唐物語

**第七編**

宇治拾遺物語
多武峯少將物語

源氏物語 ●第八編 一
源氏物語 ●第九編 二
源氏物語 ●第十編 三
源氏物語 ●第十一編 四
源氏物語 ●第十二編 五
榮花物語 ●第十三編 上
榮花物語 ●第十四編 中
榮花物語 ●第十五編 下
太平記 ●第十六編 上
太平記 ●第十七編 中

太平記 ●第十八編 下
●第十九編
保元物語
平治物語
秋夜長物語
鴉鷺合戰物語
●第二十編
平家物語
●第廿一編
古今著聞集
●第廿二編
十訓抄
公事根源
●第廿三編
水鏡
大鏡
●第廿四編
増鏡

發兌元
東京日本橋區本町三丁目
博文館

# 續日本歌學全書

佐々木信綱大人校註
全部十二冊
正價 一冊金參拾五錢 六冊金壹圓九拾錢
　　 十二冊金參圓七拾錢 郵稅一冊八錢

## 第壹編　加茂眞淵翁全集（上）

自撰晩花集　歌意考　國歌八論評
自撰漫吟集　にひまなび　同斥非
春葉集　十二番歌合　同餘言
加茂翁家集　國歌八論　同餘言拾遺

## 第貳編　加茂眞淵翁全集（下）

さき草　贈太平書　山のさち
うけらが花　答春海書　筑波子家集
答眞幸書　再贈太平書　縣居門人錄
答勝義書　魚彥家集　家集正誤
琴後集　靜屋家集

## 第參編　本居宣長翁全集

自撰歌　稻葉集　詠歌大概評
石上私淑言　歌のしるべ　海士の囀
後鈴屋集　詩歌論

## 第四編　香川景樹翁全集（上）

桂園一枝　桂園遺文　うす水
同拾遺　中空日記　大ぬさ
新學異見　またぬ青葉　歌學提要
古今正義總論　六十四番歌合

## 第五編　香川景樹翁全集（下）

隨所師說　古今正義總論補註
かるかや集　古今正義總論補註論
景恒翁歌集　古今正義總論補註論辨
須磨日記　古今正義序註追考
桂の下枝　浦のしを貝　初稿

## 第六編　小澤蘆庵翁全集

六帖詠草　或問　垂雲和歌集
同拾遺　振分髮　孝宅和歌集
蘆かび　つゝら草子　杉のしつ枝
塵ひぢ　閑田百首

## 第七編 近世名家々集（上）

千々酒舍集　三草集　柿園詠草
和漢草　常侍集　同拾遺
日枝山百首　あづま歌　亮々遺稿
天降言

## 第八編 近世名家々集（下）

常山詠草　季吟子歌　葎園家集
岡屋家集　松屋歌集　苔清水
古道家集　五家園家集　櫃園歌集
春郷家集　柳園詠草　草徑集
魚彦雑集　五十槻搔葉集　泊洦舍集
佐喜草

## 第九編 近世長歌今様集

近葉菅根集　寛居長歌集　稲舍長歌集
藤垣內集　山齋長歌集　櫻園長歌集
ふでの舍集　ゆらむろ集　今様歌集

## 第十編 桂園門下家集

しのぶ竹　六帖顯歌和　桂かけ
稲の峰　船路のゆきき　調の説
浦の汐貝拾遺　殘の夢　桂芳院遺草
桂帖翁自歌合　嚴島日記　桂の下枝續編
斐雄歌集　箭園歌集　船路日記
天満宮影前百首

## 第十一編 明治名家歌集（上）

野雁集　月舍翁歌集　樅の下枝
眞爾園翁歌集　寄居百集　自撰歌集
調鶴集　ゆら室集拾遺　海人の苅藻
なつ衣　わすれ具　麥の舍集
長恨歌句題和歌　和歌禪語

## 第十二編 明治名家歌集（下）

梨のかた枝　黒水餘滴　御垣の下艸
岩倉贈大政大臣集　柳の露
釋敬百首　あさぎぬ　竹柏園歌集
落葉集　花仙堂家集　進講筆記
花仙堂家集拾遺

本館曩に萬葉以下の古集を校して歌學全書第拾貳編を發行して頗る斯道に貢獻する所あり今亦江戸時代歌道中興以後の家集を編錄して以て完璧となすもの歌學者座右の珍寶たり

發兌元　博文館

（後付の五）

（第八版）

正三位子爵福羽美靜君講述

# 人事百話

全壹冊正價金廿錢郵稅四錢

本書は人々處世の要道一百條を、學德共に高き子爵か、丁寧懇切に講述せられたるを筆記したるものにして、何人を問はず必す一本を座右に備へざるべからず

本書目次



法科大學井上敏夫君編（第三版）

國語 漢語 類語

# 作文錦嚢

全一冊洋裝
正價卅五錢
郵稅六錢

本書は文章を作るものゝ爲に散文、韻文凡ての文體に應する材料を蒐めたるものなり。其體裁、文章の題目を極めて嚴密に分類し、各題の下に國語、漢語、類語の欄を分ちて、其題目に最も適用多き婉麗なる句詞を蒐めたり。殊に類語欄に於ては詞句を廣く古今有名なる和歌、和文、漢詩、漢文、物語文、草紙、日記、隨筆、謠曲、小說等、あらゆる文學書中より摘拔し、且つ其出處をも附記したれば、獨り之によりて古今の佳句綺章を獲るのみならず、併せて東洋文學の一斑をも知ることを得ん。

醫科大學藥學得業士金澤巖君編（再版）

# 通俗治療救急法

全一冊洋裝
正價廿五錢
郵稅六錢

本書には衣食住婚姻育兒防疫等の一般衛生法より諸病治療法看病法及び藥品調製法急病頓死過傷等の救護法温泉海水浴轉地療養其他常に心得べき百般の衛生醫藥に關する事項を細大漏す所なく詳細に記載し且つ文章平易挿繪逐順以て通俗を旨としたれば何人と雖ども常に一本を座右に備へば救急の術自ら得べし

發兌元 博文館

五版

文學博士男爵加藤弘之君著

# 天則百話

全壹冊洋裝菊判本 正價金二拾錢 郵稅六錢

▲日本人評　近世百話の出たること何ぞ其衆きや、曰く「福翁百話」曰く「人事百話」曰く「妖怪百話」曰く「某百物語」と、而して今ま又た「天則百話」を見る、蓋し天則博士か廿九年八月以來「貧叟百話」と題して太陽紙上に連載せる所を纂輯したるなり。元來一百に滿つるの談話を集めたるものなれば、話題自ら多岐に亘り、道德宗教教育文學より其他社會百般の事物に至るまで此に對する博士の意見見るべきもの多し。

▲中央公論評　即ち加藤博士か福翁百話に倣ふて「貧叟百話」と題して太陽紙上に連載したるもの、然し福翁百話の如く情あり熱あり讀んで無量の趣味津々として生するものに比しては極めて不足の感なしと云はすと雖も、流石に大學派の長たる加藤博士也、或は宗教に或は政事に或は社會風俗に平生の持論たる進化主義を發揮して餘蘊なし、就中第七十七話の「左利」の說の如き尤も耳新しく覺へたり。

傳家寶典

# 明治節用大全

博文館編輯局編纂

口繪　彩色本版三部風景風俗畵著名畵工筆　御宮城二重橋寫眞版及萬國地圖入

此節用には皇室古今御歷代の系統、武家の系圖和漢洋古今有名人物の傳記を始とし、衣服の裁縫、飮食の料理、各種の製造法、家屋の構造、室內の裝飾、庭苑の排置等は勿論、男女禮式、家政整理、女子手藝の方法、香、花、茶湯、音曲、等の諸藝、農、工、商業、水產、養蠶、製茶生產業の方法、男女日用公私用文例若くは歷史、地理文學、理化學、事物起元、神社佛閣、名所舊蹟の由來、詩、歌、連俳、文章の作法、和漢洋宗敎の由來、開基者の傳記等總べて人間の處世上知るを要する事は、一として備らざるなく、眞に今古來唯一の大節用なり

全壹冊洋裝大判背皮金文字入千四百餘頁
正價金壹圓六拾錢　目方六百目

# 作文熟語字典

文學博士井上哲次郎君序文
百束持中君編纂

全壹冊美本金字入上製　紙數九百餘頁　四版發行

幾萬の熟語を「いろは」別に集拾して訓解考證極めて明確なり、文章か綴り熟語を覓めんとするもの、此一本を机上に置かば師ありて側より指導するが如く、自在に雄篇傑作を得らるべし、眞に是れ初學者の寶函にして又作文家の要典なり。

正價金壹圓郵稅拾四錢

發兌元　博文館

(後付の七)

陸軍中將子爵曾我祐準君題辭
故香川恕經君序文

東京女學館講師 西田敬止君編

第拾版

# 益軒十訓

全壹冊背皮金文字入美本
正價金壹圓郵税拾八錢

概目

◉五常訓◉大和俗訓◉初學訓◉武訓◉君子訓◉家道訓◉文訓◉童子訓◉樂訓◉養生訓

本書は、本邦教育家の泰斗たる、益軒貝原先生の通俗訓蒙書類十種を編次して、丁寧に校訂を加へ、詳密に標註を施したるものにして忠孝慈倫の大義より、應對進退起居動作の末節に至るまで、凡そ人たるの道敎へて詳悉せざるはなし。之に加ふるに道義的敎育に、最も熱心にして、且つ經驗ある西田君の手によつて校訂標註せられたるものなれば、恰も楚山の寶璞が玉人の彫琢を經たるに異ならず。其光輝豈啻十五城を照らすのみならんや、將に以て普天率土に赫燦たらんとす。天下の人一たび此書を繙かば忽ち其明德を明らかにして、直ちに聖賢の室に入らんこと、昭々乎として火を觀るが如し。且つ其行文の平易流暢なるは、實に以て普通國文の軌範と爲すに足る、世の教育に從事する諸君は勿論滿天下の父兄たり、子弟たる人は、早く一本を座右に備へ王へ、修身書の完璧天下また此の書の右に出づるものあらんや。

中村秋香君撰

# 新體詩歌自在

全壹冊洋裝總クロース金文字入
頗美本正價金壹圓郵税金拾貳錢

著者の歌文に深き、既に江湖の熟知する所、而して新體詩に於て特得の文藻と、滿腹の意見とを有せらるるは、その斯學を以て御歌所に奉仕せらるゝを以て知るべし、本書は我邦歌詩の起原より、以て新體詩の發達に論及し、廣く類題を設け作例を示し、殊に多くの新事物を題としたるが如きは、他に其比を見ざる所、眞に書名に負かさる良典といふべし

(第三版)

# 新體詩學

全壹冊洋裝袖珍正價拾五錢郵税四錢

大和田建樹君著

歐米文學の空氣一たび進入せしより新體詩の流行日に月に隆盛を極め雜誌に新聞に其作を見る事殆んど虚日なきが如し然れども之か方針を示したる書の出でさるは遺憾なり、此に於て先生の此著あり書中説く處開題に起り次に新體詩の沿革より、句格、段格、用語、意匠、裝詞、文法違例、等數章を經て書式讀法、作例、新案に終る其文解し易く其趣向實に面白し苟も文學に志あるの諸君子貴孃興味と實益とを併せ得らるゝは盖し此書に在らん

發兌 元博文館

# 新刊豫告

文學士高山林次郎君著

## 文藝評論

（六月中旬發行）

全壹冊洋裝袖珍美本 正價三拾錢 郵税六錢

文學美術を評論品隲するに於て、著者別に炯眼を具せるは、江湖の既に知悉する所たり。本書は著者が多年研鑽攻究の餘に成れる、論文を集めたるものにして、滔々數萬言に涉れる雄篇あり、寸鐵人を殺す底の小品あり、或は文を談じ詩を說き、或は史を論じ畫を品す。或は紆餘淡蕩を以て勝り、或は把羅剔抉を以て妙を見る。春風の溫なるが如く、秋霜の嚴なるに似たり。而して之を行るに明快通暢の筆を以てす。讀者一たび繙かば、必ずや手の舞ひ足の踏む所を知らざるものあらんとす。

大町文學士著 **大紘小紘** 全壹冊洋裝袖珍美本 正價金參拾錢郵稅金六錢

内田不知菴君著 **文藝小品** 全壹冊洋裝袖珍美本 正價金卅五錢郵稅金六錢

高山文學士著 **時代管見** 全壹冊洋裝袖珍美本 正價金參拾錢郵稅金六錢

笹川臨風君著 **雨絲風片** 全壹冊洋裝袖珍美本 正價金廿五錢郵稅金四錢

國府犀東君著 **龍吹鶴語** 全壹冊洋裝袖珍美本 正價金廿五錢郵稅金四錢

發兌元 東京 博文館

監修
小山静子　KOYAMA Shizuko
京都大学大学院教授

女学世界（じょがくせかい） 明治期復刻版④
明治34年6月（第1巻第7号、第8号）

2005年12月10日　第1刷発行　　定価（本体20,000円+税）

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14（〒113-0021）
電話　03-3947-8251［営業］03-3947-8254［編集］
印　刷　ジャパン リアルティ スーパービジョン株式会社
製　本　有限会社青木製本

ISBN4-7601-2838-7　C3321